

在日中国人留学生のソーシャル・ネットワークとその 関連要因：グローバル・キャンパスの構築に向けて

呉, 暁良

<https://doi.org/10.15017/1931983>

出版情報：九州大学, 2017, 博士（学術）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

在日中国人留学生のソーシャル・
ネットワークとその関連要因
—グローバル・キャンパスの構築に向けて—

九州大学大学院地球社会統合科学府

呉 暁良

目 次

第一章 序論.....	1
第一節 研究背景と問題の所在.....	1
第二節 本研究の目的と意義.....	5
第三節 本論文の構成.....	7
第二章 先行研究の概観と本研究の理論的枠組み.....	10
第一節 ソーシャル・ネットワークとは.....	10
1-1 ソーシャル・ネットワークの定義.....	10
1-2 ソーシャル・ネットワークの種類.....	11
1-3 つながりの近接性と同類性.....	13
第二節 留学生の友人機能モデル.....	14
第三節 留学生のソーシャル・ネットワーク.....	16
1-1 ソーシャル・ネットワークの構成.....	16
1-2 要素別ソーシャル・ネットワークの検討.....	18
第四節 ソーシャル・ネットワーク構築の影響要因.....	23
1-1 影響要因に関する量的研究.....	23
1-2 影響要因に関する質的研究.....	26
第五節 ソーシャル・ネットワークの構築過程.....	26
第六節 先行研究の考察.....	28
第七節 本研究の理論的枠組み.....	29
第三章 研究方法.....	33
第一節 研究課題.....	33
第二節 用語の定義.....	34
1-1 在日中国人留学生.....	35
1-2 ソーシャル・ネットワーク.....	35
1-3 グローバル・キャンパス.....	37
第三節 調査概要.....	39
1-1 ソーシャル・ネットワーク調査法.....	39
1-2 質問紙の構成.....	40

1-3	調査対象大学	43
1-4	調査時期及び調査方法	44
第四章	在日中国人留学生のソーシャル・ネットワーク構築における影響要因	46
第一節	調査の目的及び内容	46
第二節	調査結果	47
第三節	まとめ	50
第四節	阻害要因の質問項目検討	51
第五章	在日中国人留学生のソーシャル・ネットワークとその関連要因	56
第一節	分析方法	56
第二節	九州大学在学生の事例分析と結果	57
1-1	調査対象者の基本属性	57
1-2	友人関係	58
1-3	友人関係構築の阻害要因	65
第三節	考察	75
1-1	友人関係に対する考察	75
1-2	友人関係構築の阻害要因に対する考察	78
第六章	在日中国人留学生のソーシャル・ネットワーク再考	82
第一節	分析方法	82
1-1	友人関係の分析	82
1-2	友人関係構築の阻害要因の分析	83
第二節	中小規模大学在学生の事例分析と結果	84
1-1	調査対象者の基本属性	84
1-2	友人関係	85
1-3	友人関係構築の阻害要因	97
第三節	考察	103
1-1	友人関係に対する考察	103
1-2	友人関係構築の阻害要因に対する考察	106
1-3	今後の課題	109
第七章	在日中国人留学生のソーシャル・ネットワークの大学間比較検討	111
第一節	分析方法	112

1－1	大学規模による分析	112
1－2	留学生の割合による分析	113
第二節	分析結果	114
1－1	大学規模による分析結果	114
1－2	留学生の割合による分析結果	123
第三節	考察	125
第八章	結論	130
第一節	本研究のまとめ	130
1－1	課題Ⅰ	130
1－2	課題Ⅱ	132
1－3	課題Ⅲ	133
1－4	課題Ⅳ	134
第二節	グローバル・キャンパスのあり方	135
第三節	今後の課題	138
参考文献	140
参考 URL	148
図表一覧	151
添付資料	154
謝 辞	202

第一章 序論

第一節 研究背景と問題の所在

本研究の背景は、日本における高等教育の国際化が進む中の留学生の受け入れによる「内なる国際化」¹の実現、グローバル・キャンパスの構築という日本政府及び大学の国際化戦略と深く関連している。

日本学生支援機構の『外国人留学生在籍状況調査結果』によると、2016年5月現在、日本で学んでいる留学生は23万9,287人となっており、2015年の20万8,379人より14%以上増加している。また、留学生数の増加とともに、出身国も多様化している。中国人留学生の構成比が、2011年の63.4% (87,533人) から2016年の41.2% (98,483人) に低下した一方、ベトナムとネパールからの留学生はそれぞれ2011年の2.9% (4,033人) と1.5% (2,016人) から2016年の22.5% (53,807人) と8.1% (19,471人) に上昇している。また、欧米からの留学生も増加していることが日本学生支援機構のデータからわかる。欧州からの留学生は、2011年は3,722人であったが、2016年には7,986人と倍増しており、北米からの留学生は2011年は1,742人であったのが2016年は3,009人に増えている。

日本における留学生数が増加する一方、OECDなどによる統計によると、日本人学生の海外留学数は2004年ピーク時の82,945人から2014年には53,197人まで減少している²。その原因の一つとしては日本人学生の「内向き志向」³であると指摘されている(太田2014、朴2016など)。この現状に対して、グローバル時代に相応しい「グローバル人材」⁴を育成するために、日本政府は日本人学生の海外留学の後押しをするとともに海外からの外国人留学生の受け入れも促進し、戦略的な留学生交流を進めている。日本人学生の「内向き志向」による国際経験の欠如を解決するために、日本は数多くの留学生の受け入れることに

¹ 海外留学の代替経験としての正課内外の異文化交流、Internationalization at Home とも言う。末松(2017)より

² 文部科学省「外国人留学生在籍状況調査」及び「日本人の海外留学者数」等について 2017年3月31日 http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1345878.htm (2017年12月19日最終アクセス)

³ 海外への興味が薄れてきていること。

⁴ 日本のみで通用する造語で、「グローバル人材育成推進会議中間まとめ」によると、グローバル人材は主に3つの要素が含まれる。要素1: 語学力・コミュニケーション能力; 要素2: 主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感; 要素3: 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ。

よって、大学における「内なる国際化」の実現を目指している⁵。

このような戦略が打ち出されたことから、「グローバル・キャンパス」の構築が多くの大学のスローガンとして打ち出されている。「スーパーグローバル大学創成支援」事業⁶に選ばれた東京大学は「東京大学グローバルキャンパスモデルの構築」の主旨に基づき、2024年までの期間で非英語圏における研究型総合大学のモデルとなるようなグローバル・キャンパスの実現を目指している。その中では、世界最高・最先端の研究、グローバル時代に相応しい教育システム、英語や多言語の使用、高度な専門職員などが強調されている。Brustein (2017) はグローバル・キャンパスを構築するための十要素を指摘している。その中でも、「カリキュラムの国際化 (internationalizing the curriculum)」、「外国語能力の熟達 (requiring foreign language proficiency)」、「教職員の国際化 (internationalizing faculty searches)」など共通するものが見られる。

上記のようにグローバル・キャンパスに関するマクロの視点が見られるとともに、キャンパス内の環境整備、学生交流に注目するといったグローバル・キャンパスを構築するミクロの視点も見られる。たとえば、麗澤大学のグローバル化ビジョンでは、「学内の国際化」を実現する施策として、「外国語のみによる授業科目数の拡大」、「国際寮における寮教育プログラムの充実」、「学生対応の多言語化の促進」、「外国人留学生によるキャンパス内での積極的活動の促進」を定め、言語、学生寮、留学生のキャンパス内での活動に注目している。長崎外国語大学の「キャンパスのグローバル化推進」でも、グローバル人材育成に当たっては、キャンパス・コミュニケーションの多言語化を図り、また多国籍の学生が出会い、共に学び合えるキャンパス空間の整備が重要であると言及している。山梨大学の「グローバル化に関する方針」でもキャンパスのグローバル化⁷について言及しており、「海外から多くの人材が集い、文化や言語、宗教の違いをこえて交流や協働ができ、国際的な体験ができるキャンパス、並びに地域社会の実現を目指す」という解釈がされている⁸。

上記のグローバル・キャンパスに関する視点は、いずれも多国籍学生の出会い、交流活動、コミュニケーションの促進をグローバル・キャンパスを構築するための重要な構成要

⁵ 「グローバル人材育成推進会議中間まとめ」より 2012年6月4日

⁶ 国外の大学との連携などを通じて、徹底した国際化を進めて、世界レベルの教育研究を行うグローバル大学を重点支援するために2014年に文部科学省が創設した事業である。

⁷ 本研究で用いる「キャンパスのグローバル化」は「グローバル・キャンパス」と同義であり、主に大学における学生間の異文化交流ができる空間を指す。詳細は用語の定義で後述する。

⁸ 上記の大学事例の出自は「参考URL」を参照されたい。

素として取り扱っている。留学生と日本人学生との出会い、交流活動、コミュニケーションを促進するためには、留学生と日本人学生とのソーシャル・ネットワーク⁹構築、すなわち、学生間のつながりの形成が不可欠である。ソーシャル・ネットワークの構築は日本人学生にとっても、留学生にとっても有益なものである。キャンパスの多様性の拡大や異文化接触経験は、多数派、つまり日本人学生に教育的価値をもたらし、日本国内での留学生との接触経験は日本人学生のグローバル人材育成に結び付けられる（大西 2017）。留学生にとっても同国人、日本人学生や他国の留学生と様々なソーシャル・ネットワークを構築することは留学生の異文化適応の促進、学習成績の向上、退学数の減少、幸福感の向上など重要な役割を果たしている（田中 1998、松下 1999、Blake et al. 2011、Bart and Eimear-Marie 2014）。また、大学における学生間のつながりを深めることは、キャンパスにおける学生間の活発なコミュニケーションの実現へとつながり、さらに今後のグローバル・キャンパスの構築にも貢献できる。

日本人学生と留学生の出会い、接触経験を増やし、また学生間のつながりを深めさせるためには、学生側のソーシャル・ネットワーク構築の重要性に対する気づきが必要であるとともに、大学における留学生の受け入れ環境の整備、学生に対するサポートの充実も必要である。これについて、大西（2017）でも、留学生が異文化環境に適応していくことができるように働きかけを行うと同時に、大学の組織としての対応や、ホスト学生側の異文化との交流に対する態度、多様性にかかれたキャンパス風土づくりなど、大学コミュニティの諸次元に働きかける必要性を指摘している。

これまでに、諸大学においては、学生間の相互理解とつながりを深めるために、様々な試みが行われてきた。留学生と日本人学生が交流できる環境を整備することを目的とした「混住寮」の設置や、留学生と日本人学生の交流を促進するための「教育プログラムの設計」、「留学生と日本人学生との合同授業」などの教育的介入（原沢 2012、根本他 2013 など）がその例である。さらに、各大学において研修旅行や様々なイベント、スポーツ活動の推進も挙げられる。

しかし、大学側から様々な施策が出されてはいるものの、留学生と日本人学生がコミュニケーションを順調に図れず、留學生活に支障をきたしている現状が未だにある。2014年に福岡市が福岡都市圏の留学生 1,132 人に対して調査を行った結果、留学生の日常生活の悩みとして、「日本人学生とのコミュニケーションがうまくできない」（24.7%）が、「物価

⁹ 「人々」の間のつながりに関することである。詳細は用語の定義で後述する。

が高い」(38.4%)、「奨学金がもらえない」(26.1%)、「言葉が通じない」(25.7%)に次いで上位4位に入っている。このことから、日本人学生とのコミュニケーションの問題が留学生を悩ます大きな課題の一つとなっていることがわかる。また、2015年に日本学生支援機構が実施した私費外国人留学生生活実態調査では、留学するに当たり不安に感じていたことについて、「周囲の人と良好な関係を築き、うまくコミュニケーションをとること」と回答した留学生が51.5%にも達しており、不安に感じたことの3位となっている結果が報告されている。さらに、留学後の苦勞で克服できなかったことについては、「学校内で日本人学生と交流できないこと」(19.6%) (2013年度14.4%)が「物価が高い」(50.2%)、「英語の習得」(21.5%)、「日常生活における母国の習慣との違い」(19.9%)に次いで4位となっている。

上記のデータが示したように、留学生と日本人学生の交流がスムーズに行われていないということは、留学生を数多く受け入れても、日本人学生がその意図に沿って必ずしも留学生と積極的にコミュニケーションを行うわけではないということである。これは日本政府が掲げた「内なる国際化」の実現によって「グローバル人材」を育成するという目標と乖離した現状である。その原因については、ホスト国学生のみならず、留学生の異文化交流に対する態度と気づきが不十分であること、大学の留学生受け入れ環境整備が不足していること、環境整備とサポート体制が実際に学生の求めるものとは一致していないことなどが考えられる。そのため、グローバル・キャンパスを実現するために、また学生間のつながりを深めるために、環境整備とサポートを実施するに当たっては、まず学生のソーシャル・ネットワークの現状を把握した上で、学生間のソーシャル・ネットワーク構築に影響する要因を明らかにする必要がある。

特に留学生は住み慣れた環境を離れ、異文化社会において、言語、経済、勉学、健康、就職、友人など様々な問題を抱えている(久野 2001)。留学生が異文化環境でゼロから新しいソーシャル・ネットワークを構築する過程では、日本人学生と比べさらに多くの困難に直面していると考えられる。そのため、グローバル・キャンパスを構築するために大学からどのような環境整備とサポートを行うべきかという点について議論するために、留学生のソーシャル・ネットワークの現状とその影響要因について明らかにする必要がある。また、留学生のソーシャル・ネットワークの現状とその影響要因を明らかにすることは、日本人学生の留学生との異文化接触の促進へも示唆を与えられると考えられる。

第二節 本研究の目的と意義

本研究の目的は、在日中国人留学生のソーシャル・ネットワーク及びその阻害要因を明らかにし、留学生のソーシャル・ネットワーク構築という観点から日本におけるグローバル・キャンパスを構築するためには何が必要であるかについて議論することである。具体的には、在日中国人留学生を研究対象に、在日中国人留学生の同国人留学生、日本人学生、中国以外の国・地域からの留学生（他国の留学生と略す、以下同）とのソーシャル・ネットワークに注目し、それぞれのグループのソーシャル・ネットワーク構築の実態とその阻害要因を分析することによって、キャンパスのグローバル化を実現するためには、大学側からどのようなサポートを提供すべきか、現在大学が実施している施策は留学生の現状とどのようなギャップがあるのか、どのような改善が求められるか、また、学生側はどのような問題を解決しなければならないのかなどの課題について提案する。

本研究では、在日中国人留学生に焦点を当てている。その理由は、以下の通りである。第一には、留学生のソーシャル・ネットワークを研究する際に、国別に検討する必要があるためである。留学生の出身国ごとの検討の必要性について、田中（1990a : 78）は「同じ留学生であってもさまざまな宗教的、文化的や社会的な背景を有しているので、日本における適応状況も異なる。留学生の出身国を考慮せず、一概にまとめて取り扱うことは多くの問題があるため、できるだけ母集団の特徴を正確に捉える必要性が指摘できる」と述べ、湯（2004 : 294）でも「留学生の文化背景、生育環境、受けてきた教育などによって、彼らの要求や日本の生活で遭遇する問題が異なることが十分予想できる。研究対象をある特定の文化圏あるいは出身国地域の留学生集団に限定することが必要とされている」と指摘している。第二には、日本における中国人留学生数の多さである。ベトナムやネパールなどの国からの留学生の増加に伴い、中国人留学生の割合は 41.2%に減少したが、依然として留学生の中では、その数が最も多い。そこで、留学生全体の 4 割以上を占める中国人留学生を対象にして研究を行う必要があると考えられる。第三には、日本における中国人留学生の割合は最も高いものの、依然として中国人留学生のソーシャル・ネットワークについての研究は少ないためである。

白土・田中（2016 : 70）では、1990 年代の後半からは、対象を絞った研究が増えているが、最大の集団である中国人の調査が多いと指摘している。しかし、中国人留学生を対象にした研究は加賀美（1994）、木村・中込（2003）、戦（2007）、石原（2011）、佐々木他（2012）、

小松（2013）にとどまっている。留学生全体の4割以上を占める中国人留学生のソーシャル・ネットワーク及びその関連要因を明らかにすることによって、留学生と日本人学生、または留学生同士の間で円滑に交流を行わせるために必要な点を検討する際の重要な示唆が与えられる。また、研究結果はその他の留学生にも応用可能であり、キャンパスのグローバル化の向上にもつながる。

また、留学生のソーシャル・ネットワーク構築の影響要因には阻害要因と促進要因の両方があるが、これまで留学生のソーシャル・ネットワーク構築の影響要因に関する研究は主に阻害要因に集中しており、その理由は、阻害要因を突き止めれば、留学生と日本人学生、または留学生同士の間にもたがる壁をなくすことができ、より有効な対応策が講じられるためであると考えられる。これらの阻害要因は、留学生のソーシャル・ネットワーク構築の壁の一つであり、日本の大学のグローバル化にとって避けて通れない問題でもある。そのため、本研究も先行研究の知見を参考に、大学の教育現場に対応する新たな知見を提示するために、阻害要因に焦点を当てることとした。

本研究の意義について、以下の3点が考えられる。

一つ目は、本研究は従来の留学生のパーソナルネットワーク¹⁰を検討する研究と異なり、キャンパスという枠内で留学生のソーシャル・ネットワークを検討するという点である。留学生のパーソナルネットワークの検討は、留学生個人を中心として留学生と関わっているすべての人々との関係を検討するため、キャンパスというコミュニティにおける留学生のソーシャル・ネットワークの現状が見えてこない。グローバル・キャンパスを構築するに当たっては、キャンパスにおける学生間のつながりを把握する必要があり、そのために、キャンパスというコミュニティに注目して留学生のソーシャル・ネットワークを検討する必要がある。これによって、留学生のソーシャル・ネットワーク研究に新たな視点を提供できる。

二つ目は、本研究では、留学生同士のソーシャル・ネットワークを検討するという点である。従来の研究では、留学生を一つのグループとして扱い、留学生と日本人学生のソーシャル・ネットワークのみを分析するケースが多い。しかし、日本に留学している外国人学生の出身国は多様化の傾向が強まり、留学生同士のソーシャル・ネットワークについても検討する必要がある。キャンパスのグローバル化を求めるには、留学生と日本人学生の関係に注目するのみならず、留学生同士の関係にも注目することが不可欠である。留学生

¹⁰ ある個人が他者と取り結んでいる関係すべてを指す（平松他 2010）。

同士の関係にも注目することで、日本における留学生研究に新たな動向を与えることができる。

三つ目は、本研究の教育的意義である。本研究は留学生のソーシャル・ネットワークを分析することによって、大学現場に留学生の現状に相応しい提言ができる。特に、インフォーマルなカリキュラム¹¹の構築に向けて、これまで大学において実施されてきた様々な施策の改善や、留学生に対するサポートのあり方、グローバル・キャンパスのあり方について議論し、日本における留学生教育及び教育現場に大きな示唆を与えると考えられる。

第三節 本論文の構成

本論文は八章から構成される。

第一章では、本研究の背景、問題の所在、研究目的と意義について論じた。

第二章では、まず、社会学におけるソーシャル・ネットワークの定義について解説を行った。ネットワークとは関係の集合性であり、個人レベルから集団レベル、国レベルまで広い範囲における人や集団のつながりを指すということを示した上で、日本における留学生のソーシャル・ネットワーク研究について概観し、先行研究の問題点を明らかにした。すなわち、留学生の友人機能モデルから、留学生のソーシャル・ネットワークに関する研究、ソーシャル・ネットワークの影響要因に関する研究について考察し、分析の枠組み、要素別に検討する課題、研究方法の問題、出身国別に検討する必要性などの面から先行研究の課題を論じた。最後に、本研究の枠組みと位置づけを示した。

第三章では、研究課題、用語の定義と研究方法について論じた。まず、第二章で行った先行研究の考察を踏まえ、在日中国人留学生のソーシャル・ネットワーク研究に関する四つの課題を提起した。次に、本研究で使われる「在日中国人留学生」、「キャンパスのグローバル化」、「ソーシャル・ネットワーク」などの用語について定義した。最後に、四つの課題を解決するために、本研究で用いる研究方法について紹介した。具体的には、先行研究での研究方法について論じた上で、本研究で用いる研究方法を示した。

第四章では、本調査で用いる質問紙の阻害要因の質問項目を収集するために、実施した

¹¹ Leask, B. (2009)は、インフォーマルなカリキュラムをキャンパスにおいて行われている多様な課外活動と定義している。これに基づき、本稿では、キャンパス及び地域において行われている多様な課外活動という意味で使用する。

予備調査の内容と結果について紹介した。調査内容を分析した結果、友人関係構築の阻害要因に関して、中国人留学生同士、中国人留学生と日本人学生、中国人留学生と他国の留学生 3 グループの共通要因、中国人留学生と日本人学生、中国人留学生と他国の留学生両グループの共通要因、3 グループそれぞれの独自の要因を抽出した。また、上記の結果を踏まえ、本調査で用いる阻害要因の質問項目について検討を行った。

第五章では、大規模大学の事例として、留学生の規模が 2,000 人以上であり、学生全体では 20,000 人近くにのぼる九州大学で行った調査の結果について紹介した。第五章の内容は本研究における本調査一と位置付けられる。調査結果から、友人の国籍によって在日中国人留学生の友人付き合い方が異なることが明らかになった。また、外国語能力、居住形態などの関連要因が中国人留学生のソーシャル・ネットワークに与える影響について議論を行った。続いて、阻害要因について因子分析を行い、中国人留学生同士の間は 3 因子、中国人留学生と日本人学生の間は 5 因子、中国人留学生と他国の留学生の間は 4 因子が抽出されたという点についても述べた。本章の分析結果に基づき、在日中国人留学生のソーシャル・ネットワーク構成実態の問題点を指摘した上で、大学側へは場の提供、学生に多言語を学ぶ機会やソーシャル・スキルのトレーニングを行わせる必要があること、学生側へは先入観をなくし、自己開示¹²する必要があることなどの改善策を論じた。

第六章では、大規模大学である九州大学の結果と比較するために、福岡都市圏にある学生数 10,000 人以下、留学生数 500 以下の中小規模六大学で実施した調査の結果について紹介した。調査結果に基づき、中国人留学生のソーシャル・ネットワークは大学の規模と関係なく、同国人、日本人学生、他国の留学生のそれぞれに対して、異なる機能に集中していることや、専攻、部活・サークルの参加状況、中国学友会・留学生会の加入状況、日本語能力、在学身分、居住形態、外国語能力などの関連要因が中国人留学生のソーシャル・ネットワークに与える影響について論じた。また、ソーシャル・ネットワーク構築の阻害要因について、3 グループがそれぞれ異なる特徴を持っていることについて解説を行った。本章の分析結果に基づき、サポート制度の改善、異文化理解を切口に交流を深める必要性、部活・サークルの役割、インフォーマルなカリキュラムを構築する必要性などの面から学生の交流を促進させるための改善策を論じた。また、中国人留学生と日本人学生のソーシャル・ネットワーク構築の阻害要因の影響を弱めるためには、中国人留学生と日本人学生

¹² 自己開示とは、自分自身に関する情報を、何の意図もなく、言語を介してありのままに伝えることを指して言う。『人材マネジメント用語集』より

両方の先入観などの主観的要因に注目する必要があるという点について論じた。

第七章では、大学の学生数及び留学生数の規模、大学における留学生の割合によって、在日中国人留学生のソーシャル・ネットワークに差異が見られるかどうかを明らかにするため、本調査一と本調査二のデータを用い、比較検討を行った結果について紹介した。具体的には、大学の学生数及び留学生数の規模による違いを検討するために、「中・中」、「中・日」、「中・他」3 グループのソーシャル・ネットワーク構築及びその阻害要因において、九州大学と福岡都市圏六大学間の相違点について議論を行った。大学における留学生の割合による違いを検討するために、研究対象としての7大学を留学生の割合によって3グループに分け、その相違点について議論を行った。最後に、留学生の割合が高いことは必ずしも留学生と日本人学生との友人付き合いを深めることはできるとは言えないという結果から、キャンパスのグローバル化を求めるためには、留学生と日本人学生のバランスを重視した上で、大学の内部の改善が必要であるという結論を出した。

第八章では、本研究のまとめを行い、留学生のソーシャル・ネットワークからみるグローバル・キャンパスのあり方を論じた。最後に、本研究の限界と今後の課題について述べた。

第二章 先行研究の概観と本研究の理論的枠組み

本章では、まず、ソーシャル・ネットワークの社会学における定義を解説し、ソーシャル・ネットワークに関する関連用語を説明する。また、留学生のソーシャル・ネットワークに関する研究を概観した上で、在日留学生のソーシャル・ネットワーク研究の課題と問題点を指摘する。最後に、本研究における留学生のソーシャル・ネットワーク研究の枠組みについて概説する。

第一節 ソーシャル・ネットワークとは

1-1 ソーシャル・ネットワークの定義

ネットワークは「関係性の集合」であり、また、社会ネットワーク理論は、小集団から世界規模のシステム全体に至るまで、様々なレベルの分析に適用可能な数少ない社会科学の理論である。言い換えると、ネットワークはオブジェクト¹³の集合を含み、オブジェクトもしくはノード間の関係をマッピング、あるいは記述したものである。また、関係のリンクは多様であり、単純な関係、方向性のある関係、総合的な関係、媒介的な関係が挙げられ、これらの関係をどの視点から解釈するのかによって、その意味は異なってくる（五十嵐 2015）。

社会的ネットワークについて、五十嵐（2015）は、「人々」の間につながりに関することであるが、社会的ネットワークの概念は、集団間や組織間、国家間のネットワークにも適用可能であると述べている。ほかには、平松他（2010）の社会ネットワークに関する定義においても、五十嵐（2015）と共通する部分が見られる。平松他（2010：1）では、「個人には個人の、組織には組織の、国には国の、それぞれの『つながりの地図』がある」と社会ネットワークの範囲を言及している。山川（2014：36）は平松他（2010）の社会ネットワークの定義を以下のようにまとめている。

個人レベルでは、家族関係、恋愛関係、職場関係、取引関係、師弟関係、サークルやクラブでの友人関係などあらゆる人間関係を含んでいる。組織レベルでは、会社や大学、

¹³ 数学的にはノード (node) である。線と線の結び目を表す言葉で、ネットワークの接点、分岐点や中継点などを意味する。『ASCII.jp デジタル用語辞典』より

ボランティア団体や国際機関などの関係がある。国レベルでは、国と国の利害関係などが含まれる。こうした関係の束を総称して「ソーシャル・ネットワーク」と呼ぶ。

上記のソーシャル・ネットワークの定義によると、ソーシャル・ネットワークは様々なレベルから分析可能であることがわかる。なぜネットワークを分析するかについて、五十嵐（2015：2-3）では、ネットワーク分析を用いることで、われわれは自分たちを直接取り巻く人々の輪を超えて、ネットワーク全体を見渡すことができるためだと解釈している。

ネットワーク研究は元々社会学の分野で発達してきたが、国際教育分野や留学生研究においてもソーシャル・ネットワークの理論を応用し、留学生の友人関係などを分析する研究が見られる。たとえば、Bart & Eimear-Marie（2014）の縦断的なソーシャル・ネットワーク分析を通して、留学生（485名）とホスト国学生（107名）の友人及び学習関係を明らかにした研究が挙げられる。このような留学生に対する分析を通して、留学生のソーシャル・ネットワークを全体的に見ることが可能になり、可視化できた留学生の社会的ネットワークを活用することは、留学生の異文化適応や人間関係の課題を解決することに有益であると考えられる。特に高等教育の国際化が進んでいる日本においては、近年留学生の数が著しく増加しており、留学生が日本でどのようなソーシャル・ネットワークを構築しているかを明らかにすることはグローバル・キャンパスの構築に極めて重要である。

1-2 ソーシャル・ネットワークの種類

五十嵐（2015）はこれまで社会科学者が検討してきたネットワークを3種類にまとめている。すなわち、エゴセントリック（egocentric）、ソシオセントリック（sociocentric）とオープンシステムのネットワークである。一方、平松他（2010）ではネットワークをパーソナルネットワークとホールネットワークに分類している。用語はそれぞれ異なるが、エゴセントリック・ネットワークはパーソナルネットワークのことであり、ソシオセントリックネットワークはホールネットワークのことである。

エゴセントリック・ネットワーク（パーソナルネットワーク）は、単一のノードや個人とのつながりをもつネットワークである（五十嵐 2015）。平松他（2010）はパーソナルネットワークはある個人が他者と取り結んでいる関係すべてを指すと述べている。すなわち、距離的、社会的な領域を超えたネットワークである。たとえば、図 2-1 に示すように、都市、国の範囲に関わらず、取引関係があるすべての会社は A 社のエゴセントリック・ネッ

トワークである。平松他（2010）は、個人間の関係について概念化、操作化して分析するのがパーソナルネットワーク研究であると述べ、また、パーソナルネットワークとは、人々が繋がっている関係構造の俯瞰的な全体像ではなく、個人を中心として広がっている個々の人間関係の有り様に注目した概念であるとも述べている。

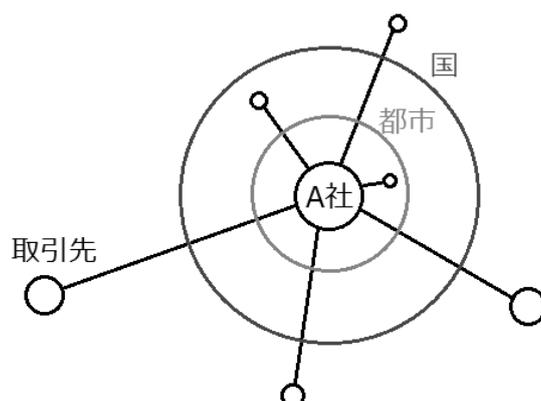


図 2-1 エゴセントリック・ネットワーク（平松他（2010）より筆者作成）

ソシオセントリック・ネットワーク（ホールネットワーク）は、「箱」の中のネットワークである。クラス内の子どもたちのつながりや、組織における重役間のつながりはソシオセントリック・ネットワークである（五十嵐 2015）。平松他（2010：67）はホールネットワークについて、ある社会的領域（例えば、学生サークル、語学クラス、会社の部課、コミュニティなど）内でのすべての個人（個体）間の関係からなるネットワークで、その集団の構造（サブサークルの存在、サブグループ間の関係、密度など）を記述したり、そうした集団間の関係、その比較などを行うと説明している。また、ホールネットワークの考察対象は、限られた枠内での全体構造、サブ構造、さらには個人の集団内での位置づけについてのみ考察の対象とするが、分析の対象は必ずしも人に限らない（平松他 2010）。すなわち、人や人の集まり（集団、組織、コミュニティ、国など）がすべて分析の対象となる。エゴセントリック・ネットワークとの違いは、ソシオセントリック・ネットワークは必ずある範囲の中、すなわち限られた枠内でのネットワークである。図 2-2 に示すように、A クラスという範囲の中で、すべての学生のネットワーク関係はソシオセントリック・ネットワークである。

オープンシステム・ネットワークは、境界が明確である必要はなく、箱の中のネットワークではない。ある決定がもたらす影響の連鎖、あるいは新しい試みを実践する人々の間

のつながりなどが挙げられる。また、知り合い関係を芋づる式にたどっていけば比較的簡単に世界中の誰にでも行き着くというスモール・ワールド現象¹⁴もオープンシステム・ネットワークの一例である。

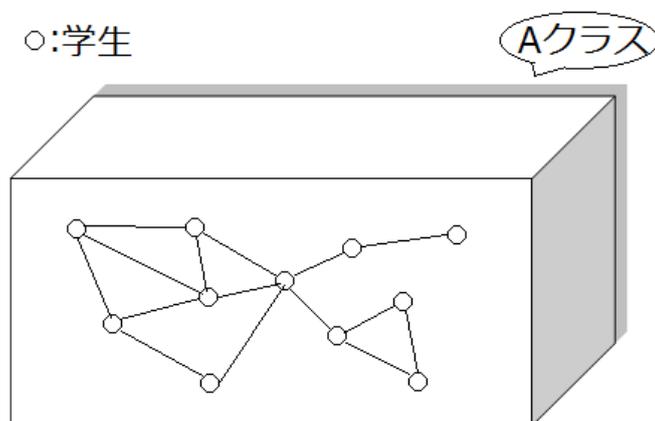


図 2-2 ソシオセントリック・ネットワーク（平松他（2010）より筆者作成）

留学生のネットワークを考えると、上記と同様にエゴセントリック・ネットワーク（パーソナルネットワーク）とソシオセントリック・ネットワーク（ホールネットワーク）の二つが存在する。留学生のエゴセントリック・ネットワーク（パーソナルネットワーク）を考察する場合、学校、地域、国の範囲がなく、留学生個人と関係のあるすべての人が考察の範囲となる。すなわち、大学における留学生の担当教員、友人や、地域の住民、バイト先の友人、母国にいる親友などのすべてが考察の対象となる。一方、ソシオセントリック・ネットワーク（ホールネットワーク）になると、必ず限られた枠内のネットワークを考察しなければならない。また、ソシオセントリック・ネットワークは個人を中心とするのではなく、枠内にあるすべての人（または集団）の関係が考察対象となる。たとえば、あるサークルの中のすべての学生の関係や、大学におけるホスト国学生と留学生、留学生同士の間などすべての関係がこれに該当する。

1-3 つながりの近接性と同類性

人間や組織、国家といったノード間のつながりを生み出す社会的状況について、五十嵐

¹⁴ 知り合い関係を芋づる式にたどっていけば比較的簡単に世界中の誰にでも行き着くという仮説である。社会心理学者スタンレー・ミルグラムが1967年に行ったスモールワールド実験（small world experiment）で検証された。

(2015) は近接性と同類性という概念を用いて解釈している。

近接性は、広い意味で同じ時に同じ場所にいることと定義される。地理的に近くにあるノードは、他の条件がすべて等しいと仮定した場合、相互につながりを持ちやすくなる。地理的に近くにいる個人は、お互いに友人になりやすい (五十嵐 2015)。

留学生のソーシャル・ネットワークも同様であり、地理的に近い人と友人になりやすい。居住場所の距離のみならず、大学で一緒に活動する時間、接触機会の多さなどがすべて留学生のソーシャル・ネットワークに影響する要因と考えられる。

同類性とは、2 人、または二つの集団が何らかの共通の特徴を持つことである。個人レベルでは、人々は共通の属性をもつ相手とつながりを持ち、友人関係を形成し、団結する傾向がある。共通の規範は共通の属性から生まれるが、共通の属性もまた、同じ場所とともに「いる」ことや、共通の体験をもつことで生まれるつながりや友人関係に由来する (五十嵐 2015)。

留学生の友人関係構築を同類性から考えると、多くの項目が挙げられる。同じ研究室に属することや、同じ専攻であることは同類性であり、年が近いこと、共通の趣味や話題があること、性格が合うことなどもまた同類性である。

近接性と同類性という二つの条件を満たすと、留学生のソーシャル・ネットワークは構築しやすくなるはずであるが、これ以外にも留学生の主観的要因や外国語能力など多くの影響要因がある。これらを明らかにするためには、留学生のソーシャル・ネットワーク構築の客観的要因と主観的要因の両方を考える必要がある。

第二節 留学生の友人機能モデル

留学生のソーシャル・ネットワークに関する研究は 1970 年代から欧米が主導的に研究してきた。遡ると、Bochner et al. (1977) の留学生の友人機能モデル研究から発展してきたと言える。

ハワイ大学のアジア系寮生を対象に調査を行った Bochner et al. (1977) では、友人の国籍によって三つのタイプのネットワーク (mono-cultural networks、bi-cultural networks、multi-cultural networks) があり、それぞれが異なる機能を持つことを明らかにし、留学生の友人機能モデルを打ち出した。“mono-cultural networks” (単文化ネットワーク) は、同じ国から留学している者との間に形成され自文化の価値観を共有する機能

を持つ。“bi-cultural networks”（二文化ネットワーク）は受け入れ国の者との間に形成され、勉強や留学に必要な諸手続きをスムーズに遂行する機能を持つ。“multi-cultural networks”（多文化ネットワーク）は他国からの留学生との間に形成されるものでレクリエーションの場を提供する機能を持つ。同研究では留学生の多くは、ホスト側の学生との交流が少なく、同国人とのつながりが深いことも明らかにしている。

また、Furnham et al. (1982) は英国内の留学生 400 人を対象に調査し、英国人の友人を持つ者はわずか 18% で、同国人でかつ同言語の友人 39% や、同国人・英国人以外の外国人の友人 38% に比べて低いという結果を報告し、機能モデルを支持した。Furnham et al. (1985) は Bochner et al. (1977) の研究をさらに発展させ、“mono-cultural networks”（単文化ネットワーク）の範囲を同じ出身国から同文化圏、宗教、言葉、地区など同じ特徴を持っている学生を co-national（同文化）と取扱い、ロンドン大学及びその他の高等教育機関で学ぶ留学生 165 名に対して調査を行い、その結果により Bochner et al. (1977) の機能モデルを支持した。

Bochner et al. (1977) の機能モデルに対して、工藤 (2003a) はこのモデルが留学生の友人関係の類型化に成功し、異文化適応との関連で留学生とホストとの接触を重視する研究者が多いなかで、留学生の文化的アイデンティティの維持とそれによる精神的安定を理由に同国出身者の友人の重要性を実証的に示したという二つの成果を評価するとともに、以下の問題点を指摘した。一つ目は、留学生とホストの関係の機能について説明ができないことである。ホストとの関係について、工藤 (2003a : 97) は「留学生はホストとの関係を望んでいるにもかかわらず困難を抱えているのか、あるいは、留学生はホストとの親しい友人関係を期待していないのかが分かりにくい」と指摘している。二つ目の問題点は、Bochner et al. (1977) の研究が「留学生の文化的アイデンティティは固定的で同文化出身者との友人関係によって形成され維持されるという前提である」ことである。そこで、工藤は「多文化アイデンティティ」(multicultural identity) と「異文化アイデンティティ」(intercultural identity) を獲得する人の存在を示し、「文化的アイデンティティの調節は固定的ではなく、動的で可変的な過程であるという認識に立って留学生の異文化体験が調査されるべきである」と提言した。

上記の問題点を踏まえ、Bochner et al. (1977) の機能モデルを再評価するため、工藤 (2003a) はオーストラリアの大学で学ぶ日本人留学生 6 人に半構造的個人面接による事例研究を実施し、①社会的欲求の充足機能、②支援機能、③異文化学習機能、④文化的アイ

デンティティの調節機能という四機能を抽出した。①～③は Bochner et al. (1977) の機能モデルと一致しているが、④は留学生が異文化での生活によって不安定になりやすい文化的アイデンティティを友人との交流を通して調節する機能で、工藤によって新しく提案されたものである。

以上、これまでの留学生の友人機能モデル研究を概観してきた。上記の研究結果を通して、留学生のソーシャル・ネットワークは類型化されているが、研究地域や研究対象が異なるため、その機能モデルがどの国においても共通するとは考えにくい。留学生の出身国や留学先の状況によって、留学生のソーシャル・ネットワークの機能にも違いがあると考えられる。

第三節 留学生のソーシャル・ネットワーク

1-1 ソーシャル・ネットワークの構成

日本において、留学生のソーシャル・ネットワークの研究が始まったのは、1990年代の田中と横田の諸研究からと言える。

田中他 (1990a) では在日外国人留学生 450 名を対象にソーシャル・ネットワーク成員の比率について調べた。具体的には、日本で調査対象者にとって「大切な関わりのある人」を最大 10 人までリストアップさせ、集計を行った。その結果、全体の構成比から、ネットワーク成員の比率は、日本人 (60.3%)、同国人 (33.9%)、他の外国人 (5.8%) の順に多く、またこの傾向は、北米、欧州、オセアニア地域を除くすべての出身地の留学生に共通していることが示された。

また、田中他 (1990b) では、18 名の新渡日留学生の一学期間 (3 か月) における友人関係ネットワークについて調査した結果、国籍別では、日本人が 52.9%、次いで同国人が 31.4%、他の外国人が 15.7% であり、田中他 (1990a) と一致する結果が示されている。友人から期待できる援助の内容では、日本に関することや情報は日本人から、物・お金などの物的支援については同国人から援助される傾向があることを明らかにした。しかし、機能モデルで言及した他国の留学生とレクリエーションの場を提供する機能は以上の研究結果から見られなかった。

さらに田中他 (1991a) は留学生のソーシャル・ネットワーク形成について縦断的に研究するため、半年が経過した時点で田中他 (1990b) での研究対象者に対して、調査を行った。

調査の結果、国籍別では、日本人が 50.3%、同国人が 33.6%、他の外国人が 16.1%であり、田中他 (1990a)、田中他 (1990b) の結果と一致している。友人から期待できる援助の内容について、日本語、日本文化、情報、勉強においては日本人が援助の提供者となっている。一方、楽しみ、物・お金の面においては同国人の、相談においては同国人と日本人の援助が多い傾向があるとの結果である。また、半年が経過した時点の結果も機能モデルで言及した他国の留学生の機能は見られなかった。

以上、田中他 (1990a, 1990b, 1990c) によって日本で行った 3 件の研究は、いずれも留学生のソーシャル・ネットワークの構成対象が日本人、同国人、他の外国人の順に多く、Bochner et al. (1977) の機能モデルで示されている同国人、ホスト国の者、他の外国人の順とは異なる結果を報告している。また、友人機能についても、特に他の外国人の機能は明らかに Bochner et al. (1977) の機能モデルと異なっていることがわかった。このことから、Bochner らがイギリスとハワイで行った調査によって明らかにされた留学生の友人機能モデルは日本では適用しない可能性があると言える。両研究の結果の違いを踏まえると、留学先の状況や留学生の構成などが国によって異なり、地域別に留学生のソーシャル・ネットワークや友人機能について検討をする必要がある。

上記の田中の 3 件の研究では、留学生のソーシャル・ネットワークの構成対象がいずれも日本人、同国人、他の外国人の順に多いという結果が得られているが、横田 (1991a)、横田 (1991b) では異なった結果が報告されている。

横田 (1991a) は留学生と日本人学生の親密化および人間関係について、日本人学生 242 名、留学生 162 名を対象にアンケート調査を実施した結果、留学生同士と比べて、日本人との友人関係が明らかに少なく、留学生と日本人学生の間での親密化は、留学生同士あるいは日本人学生同士のそれに比べて、より難しくなっているとしている。

また、横田 (1991b) は日本人学生 238 名、アジア系留学生 128 名に対して質問紙調査を行った結果、日本人学生は、留学生よりもむしろ自己閉鎖的にみえるが、親密な友人を少なくとも一人は持っている者が多く、その関係の中ではかなり深い自己開示がなされている。それに対して、留学生では、日本人学生よりもはっきりと意見を述べようとする傾向があるが、日本での学生間友人関係では、充分に開示できるような関係ができていないことが指摘されている。また、留学生は留学生に、日本人学生は日本人学生により深く開示しているという友人構成がみられ、留学生でも日本人でも同国人との友人付き合いが深いとされている。

横田・田中（1992）は居住形態が留学生の友人形成にどう影響しているかを調べるために、外国人留学生 273 名に対して質問紙調査を実施した結果、Bochner et al.（1977）の機能モデルが自文化の共有など部分的に確認されたが、同時にいくつか独自の特徴も見られた。その違いは、学問遂行を円滑にする機能に関して Bochner et al.（1977）の研究ではホスト国の者が同国の 3 倍あるいはそれ以上であったのに対し、横田・田中（1992）の調査ではほぼ同数であり、レクリエーション機能に関して同国人の占める率（46%）が Bochner et al.（1977）の結果より高いことが示されている。

以上の横田の研究から、留学生は同国人との友人関係が深く、また自己開示についても日本人学生より、同国人に深く開示していることがわかる。また横田・田中（1992）の結果から調査地域によって機能モデルは異なっていることと思われる。上述の研究で異なった結果が得られた原因は、調査方法や調査対象者、調査時期の違いだと考えられる。留学生の出身国は多様であり、異なる文化背景を持つ留学生の構築しているソーシャル・ネットワークも一様ではない。「留学生の文化背景、生育環境、受けてきた教育などによって、彼らの要求や日本の生活で遭遇する問題が異なることが十分予想できる。研究対象をある特定の文化圏あるいは出身国地域の留学生集団に限定することが必要とされている」（湯 2004：294）とあるように、留学生のソーシャル・ネットワークを検討する際は、留学生の出身国を考慮に入れる必要がある。

1-2 要素別ソーシャル・ネットワークの検討

留学生のソーシャル・ネットワークに影響する要素として、出身国や地域のみならず、来日期間や居住形態、留学生個人の主観的姿勢などによる違いについても先行研究で検討されてきた。

1-2-1 出身国

留学生の出身国・地域による研究は、木村・中込（2003）、村上（2005）、戦（2007）、Dewey（2011）などが挙げられる。木村・中込（2003）、戦（2007）は在日中国人留学生を対象に、村上（2005）、Dewey（2011）は在日アメリカ人留学生を対象に留学生のソーシャル・ネットワークについて検討した。

木村・中込（2003）は中国人留学生と日本人学生がどの程度まで交流しているかについて調べ、中国人留学生と日本人学生の交友関係について、中国人留学生から日本人学生に

対する「片方的な」交友関係のみが存在していたこと、相互交友関係が認められる場合、中国人留学生と日本人学生との関係が「多対一」になっていることを明らかにした。

戦（2007）は留学生と日本人学生の友人関係の特徴に着目し、大学における日本人学生と留学生が、自国の友人、異文化の友人に対して、それぞれどのような付き合い方をしているか、両方の間にどのような相違点があるかなどについて、中国人留学生 57 名、日本人学生 87 名に対して質問紙調査を行った結果、日本人学生と中国人留学生は共に自国の友人数が多く、自国の友人と交流する頻度も高く、より親しい関係を持っているが、相手国の友人と浅い関係にとどまっていると指摘した。

上記の中国人留学生を対象にした研究は、中国人留学生と日本人学生の「多対一」な関係や、中国人留学生が日本人学生と浅い関係にとどまっていることを明らかにしたが、アメリカ人留学生を対象にした村上（2005）、Dewey（2011）の研究では、これと異なる結果が示されている。

村上（2005）はアメリカ人の短期留学生を対象に日本人との親密化について調査した結果、留学生のソーシャル・ネットワーク構成は、日本人の割合が半数を占め、留学生はホストファミリーなど接触頻度の高い人との親密な関係を築いており、比較的難しいと言われてきた日本人との関係がある程度構築されていたと述べている。

Dewey（2011）は日本におけるアメリカ人留学生 204 名を対象に質問紙調査を行った結果、留学生の多くは大学のクラブやチームなどの活動に参加することで、日本人学生と友人となることを通してソーシャル・ネットワークを形成しているとしている。また、友人と一緒に過ごす時間が最も重要であり、それはソーシャル・ネットワーク形成の促進要因としても抑制要因としても働くということを明らかにした。

中国人留学生とアメリカ人留学生は文化圏が異なり、両国の在日留学生の数にも大きな差があり、それぞれの特徴を持っていると考えられる。このような要素によって留学生のソーシャル・ネットワークが異なることが上記の先行研究の結果から確認できる。横田・田中（1992）でも友人の選択において、欧米出身の留学生は圧倒的に日本人を友人に選び、同国人を選ぶ率が低いのに対して、中国人は同国人を選ぶ率が最も多いとの結果が報告されている。

1-2-2 居住形態

留学生会館、寮、アパートなど居住形態の違いによって、留学生のソーシャル・ネット

ワークにも大きな違いがあると予想される。居住形態による友人関係の違いについて横田・田中（1992）、田中・横田（1992）が挙げられる。

横田・田中（1992）では留学生会館、寮、アパートに住む留学生のソーシャル・ネットワークを調査した結果、寮に住む留学生のほうが日本人との交友が多く、留学生の友人構成はその居住形態に大きく影響されていることが示されている。

また、田中・横田（1992）では同調査結果を用いて居住形態別に留学生のストレスを分析し、寮に居住する留学生にとって「外国人への特別視」や「日本人の話題の理解」、「日本人による無視」のストレスが高いことを明らかにした。この結果は、寮生が日本人学生との共同生活でこうしたストレス場面に遭遇する頻度が高く、日本人との関係の難しさを感じていることを示唆している。これについて、田中・横田（1992）は留学生が日本人学生の文化にふれてストレスが起こるのは当然のことであり、これが学習プロセスの一端であると指摘し、また、日本人学生と一緒に住むことは、よりよく情報が得られるという利益もあるとも指摘している。

近年、「混住寮」が数多くの大学で設置されてきたことは、居住形態という留学生と日本人学生が交流する環境の重要性を反映している。江淵（1991）でも居住形態について、留学生と日本人学生とを分けるのではなく、留学生と日本人学生と一緒に住む、「統合主義」¹⁵を取り入れた居住形態が望まれると提言している。グローバル・キャンパスを実現するための一環として、混住寮の役割に対する期待はますます高まっているのであろう。

1-2-3 来日期間

古川他（1983）では大学新入生入学後安定したネットワークを形成するには数か月を要したという。留学生も同様に、新環境においては、自分のネットワークの構築には時間の経過が必要となる。田中他（1990b）、田中他（1991a）、高井（1994）では縦断的な研究を通して、来日期間による留学生のソーシャル・ネットワークの違いを検討した。

田中他（1990b）、田中他（1991a）は留学生のソーシャル・ネットワーク形成について18名の研究対象者に対して3か月時点と半年時点に調査を行った。その結果は1-1で述べたように、留学生のソーシャル・ネットワークの構成は2回とも日本人、同国人、他の外国人の順に多く、留学生のソーシャル・ネットワークが3か月時点から友人の文化圏ごとに分かれる傾向があったということを示唆している。

¹⁵ 外国人留学生と日本人学生と一緒に住む居住形態である。

高井（1994）では留学生の適応状況を時系列的に追うために、42人の留学生に対して、縦断的な調査を行った。留学生の最も重要なソーシャル・サポートの供給源を調べた結果、全体的に最も頼られるグループは、まず同国出身者、次に日本人、そして他国出身者の順となっている。「情緒的サポート」（相談、共感など）に関しては、一次調査では同国出身者、日本人、他国出身者の順の結果だったが、二次調査ではその順位が日本人、同国人、他国出身者になっている。また、「道具的サポート」（金銭、手伝いなど）に関しては、同国人出身者が一次調査では50%を占めたのに対して、二次調査では39%までに下がっている。一方、他国出身者の割合は一次調査より増加するという結果が得られた。

このように、留学生のソーシャル・サポート源は時間の経過につれて変化しており、それによってソーシャル・ネットワークの構成も静的なものではなく、動的であることがわかる。そのため、在学期間などを視野にいれて留学生のソーシャル・ネットワークを動的に捉える必要がある。

1-2-4 留学生の主観的姿勢

留学生の出身国、居住形態などの物理的な要素のほか、留学生個人の主観的姿勢¹⁶といった心理的な要素も留学生のソーシャル・ネットワーク構成に影響すると考えられる。これについて、貫田・ウリガ（2013）は日本の大学で学ぶ外国人留学生は、どのような友人関係を形成しながら日頃の学生生活を送っているかを明らかにするため、留学生たちを友達付き合いに対する熱心さに基づいて二つのグループに分け、アンケート調査を実施した。調査の結果、高社交群の留学生は、留学以前からもともと社交的なパーソナリティをもつ人物である傾向が強いと同時に、異文化交流に対する熱意も強く抱いており、外国人の友人を多く作りたいと考えているが、低社交群の留学生は、量的にも質的にも対照的な交友ネットワークを形成しているとしている。また、友達付き合いに特に熱心な層と、さほど熱心ではない層との間で、留学生の交友ネットワークの構成のされ方は決して一様ではなく、多国籍型と同国編重型という少なくとも二つの類型が存在することを明らかにした。貫田・ウリガ（2013）の研究では、機能モデルと異なる結果が見られた。すなわち、出身地の異なる複数の友人が別々の機能を担っているというよりは、むしろ特定の親しい友人が多重的な機能を担っているという結果である。

貫田・ウリガ（2013）は留学生の主観的姿勢から留学生のソーシャル・ネットワークに

¹⁶ 友人付き合いに対する熱心さなどのことである。

ついて検討を行ったが、高社交群と低社交群の分け方について説得力が弱く、分析では高社交群において、英語使用比率がいっそう高いと述べているが、英語使用比率から社交への影響については言及していないといった問題点が指摘できる。

1-2-5 ソーシャル・メディア¹⁷の利用

携帯電話というメディアの利用と留学生のソーシャル・ネットワークとの関係を見るため、金（2003）は首都圏 12 校に通っている留学生を対象に質問紙調査をした結果、携帯電話というメディアが、留学生においても利用頻度が高く、主に母語話者とのコミュニケーションに利用されていることがわかった。また、携帯電話の利用は、異文化にいる「同文化の留学生とのネットワーク」の形成、維持に一定の役割を果たしているが、反面、日本人との交流を妨げているという側面があることがわかった。この結果によって、金（2003）は携帯電話の高頻度利用は、留学生の一部の人々において、外国人としての孤立を促進する可能性があるとして指摘している。

金（2003）の携帯電話というメディアの利用による留学生のソーシャル・ネットワークへの影響の研究は、ソーシャル・メディアという手段の役割を示した。実際に、携帯電話のみならず、現在、人々に広く使われている Facebook、Line などのソーシャル・メディアの利用による留学生のソーシャル・ネットワークに与える影響についても検討すべきである。これを明らかにすることによって、ソーシャル・メディアの機能を十分に果たし、留学生のソーシャル・ネットワーク構築を促進させる可能性がある。

上記の要素別に留学生のソーシャル・ネットワークを検討した先行研究を考察したことによって、留学生のソーシャル・ネットワークが出身、居住形態、来日期間、個人の主観的姿勢、ソーシャル・メディアの利用など様々な要素に影響されていることが分かった。そのほかにも、留学生の在学身分や外国語能力、経済状況などの要素も留学生のソーシャル・ネットワークに影響を与える要素と考えられ、留学生のソーシャル・ネットワークを検討する際の避けられない課題として考慮されるべきである。

¹⁷ SNS、ブログ、簡易ブログなど、インターネットを利用して個人間のコミュニケーションを促進するサービスの総称である。『デジタル大辞泉』より

第四節 ソーシャル・ネットワーク構築の影響要因

前節では要素別に留学生のソーシャル・ネットワークを検討した。留学生のソーシャル・ネットワークは具体的にどのような要因に影響されているのかという点について、数多くの研究が行われており、また、影響要因を検討する際には、量的研究と質的研究の双方が研究手法として用いられてきた。本節では量的研究と質的研究に分けて、留学生のソーシャル・ネットワーク構築の影響要因に関する先行研究を考察する。

1-1 影響要因に関する量的研究

影響要因に関する量的研究の多くは、質問紙調査を実施し、因子分析による影響要因因子を抽出する手法が用いられている（横田 1991a、田中 1995、田中 2003、木村・中込 2003、湯 2004、石原 2011）。

横田（1991a）では留学生と日本人学生の友人関係の構築を妨げる要因について因子分析を行った結果、留学生側に五つの因子「日本の慣習」、「言葉の障壁」、「関係づくりへの抵抗感」、「興味なし余裕なし」、「希薄な主張」、日本人学生側に四つの因子「無力な暗黙のルール」、「漠然とした不安と遠慮」、「言葉の障壁」、「興味なし余裕なし」を抽出した。

横田（1991a）の結果では、留学生と日本人学生は言語面、個人の趣味や余裕といった要因で共通するが、それぞれ独自の要因も見られた。また、対人関係形成の困難さに関する原因認知について、田中（1995）、田中（2003）はそれぞれ留学生と日本人学生に対して調査を行った。

田中（1995）では留学生 268 人の回答を得て分析を行った。調査では、対人関係困難の原因認知を語学、ソーシャル・スキル、社会的知識、無関心、否定的感情、多忙、個人要因という 7 項目に分けて、自分側（7 項目）と日本人側（7 項目）から答えを求めた。14 項目に対して因子分析を行った結果、留学生側による「日本人批判」、「自分の知識」、「機械的理由」、「自分の態度」という四つの因子が抽出された。

田中（2003）では日本人学生 116 人の回答を用い、日本人学生と留学生の対人関係形成の困難に関する原因認知の比較分析を行った。14 項目に対して因子分析を行った結果、日本人学生側による「スキルと社会知識」、「日本人の消極性」、「留学生の消極性」、「双方の多忙」、「双方の語学力」という五つの因子が抽出された。

田中（1995）、田中（2003）の研究結果から、留学生、日本人学生両者とも自分側と相手

側の原因を認めているが、その原因に関する認知にずれがあることが窺える。また、両者で一致している認知は、両者ともに日本人側への原因帰属が高く、交流が進まない原因は、より大きく日本人にあるという現実認識である。その理由について、田中（2003）は異文化交流への日本人の苦手意識にあると解釈し、留学生と日本人学生の間で双方向的にソーシャル・スキル教育を行う必要性を指摘した。

上記の研究は留学生全体を一つのグループに取扱って分析を行った。しかし、すでに本稿で述べたように、留学生の出身国によってソーシャル・ネットワークの構成に大きな違いがあり、その影響要因についても留学生の出身国によって異なると考えられる。湯（2004）、石原（2011）は中国人留学生を取り上げて、その影響要因について追究した。

湯（2004）は在日中国人留学生の対人関係形成の困難の原因及びそれらと適応状況の因果関係を明らかにするために、中国人留学生 66 名に対して質問紙調査を行った結果、中国人留学生の対人関係形成の困難の原因は、「日本でのソーシャル・スキルの欠損」、「語学能力」、「対人志向性」、「異文化理解」、「アルバイト」と関わっていることを解明した。さらに、留学生が異文化環境での対人関係形成に抱えている困難を解決するためには、湯（2004：312）は、「語学力を高め、ホスト国の行動様式への認識を深めるほかに、とりわけホスト国の人々に対する対人志向性をポジティブ方向へ導くことが重要である」と指摘している。

石原（2011）は中国人留学生の日本人学生に対する友人関係に関する体験の否定的意識はどのようなものかを明らかにするために、119 名の留学生に対して質問紙調査を行った結果、友人関係に関する体験の否定的意識は「被差別感」、「対等な協働関係の不成立」、「関係形成の障害」、「交流不全」、「交流スタイルの相違による障害」の五因子から構成されることが示された。

湯（2004）、石原（2011）はそれぞれ中国人留学生の対人関係形成の困難の原因と日本人学生に対する友人関係に関する体験の否定的意識という視点からソーシャル・ネットワークの影響要因を分析した。しかし、2 件の研究とも中国人留学生だけを調査対象にして、日本人側から見る中国人留学生とのソーシャル・ネットワークが構築しにくい原因については追究しなかった。留学生側と日本人側からみる影響要因は完全に一様ではなく、留学生のソーシャル・ネットワークを議論する際に両者の要因を十分に検討する必要がある。

上記の先行研究で明らかにした影響要因をまとめると、表 2-1 になる。

表 2-1 に示す通り、留学生のソーシャル・ネットワーク構築の影響要因として、日本の

文化、言葉の障壁、個人の関心などが多くの研究で言及された。また、いずれの研究も阻害要因に注目しており、促進要因に関する研究は見当たらない。その理由は第一章第三節で述べたように、阻害要因を突き止めれば、留学生と日本人学生、または留学生同士の間にもたがる壁をなくすことができ、より有効な対応策が講じられるためである。さらに、ほとんどの研究は留学生と日本人学生のソーシャル・ネットワークに阻害する要因を検討するものであり、留学生同士の間でソーシャル・ネットワーク構築の阻害要因について言及されていない。近年の日本における留学生数の急増や留学生出身国の多様化に伴い、留学生同士のソーシャル・ネットワークについても注目すべきである。留学生の構成は多様化しており、留学生の出身国によってソーシャル・ネットワークは異なるため、留学生を一つのグループとして取り扱うのではなく、多様性を持つ数多くの留学生の特徴を重視し、国別、また留学生同士のソーシャル・ネットワークを考察する必要がある。

表 2-1 ソーシャル・ネットワークの影響要因

先行研究	留学生側	日本人側
横田 (1991a)	「日本の慣習」、「言葉の障壁」、「関係づくりへの抵抗感」、「興味なし 余裕なし」、「希薄な主張」	「無力な暗黙のルール」、「漠然とした不安と遠慮」、「言葉の障壁」、 「興味なし余裕なし」
田中 (1995)	「日本人批判」、「自分の知識」、「機械的理由」、「自分の態度」	
田中 (2003)		「スキルと社会知識」、「日本人の消極性」、「留学生の消極性」、「双方の多忙」、「双方の語学力」
湯 (2004)	「日本でのソーシャル・スキルの欠損」、「語学能力」、「対人志向性」、「異文化理解」、「アルバイト」	
石原 (2011)	「被差別感」、「対等な協働関係の不成立」、「関係形成の障害」、「交流不全」、「交流スタイルの相違」	

1-2 影響要因に関する質的研究

一方、質的手法を用いて留学生のソーシャル・ネットワークの影響要因を研究するものとして、山崎（1997）、小松（2013）が挙げられる。

山崎（1997）は留学生と日本人学生間の友人関係成立について考察した。日本に滞在している女子留学生3名に対して面接を行い、留学生が「日本人の友人ができない」という際、二つのケースがあると指摘した。一つ目は実際に友人関係が成立していない場合、二つ目は実際に成立しているが、留学生の考える「友人」には相当しない場合である。また、留学生と日本人学生との友人関係が成立しにくい理由として、「関心の相違」、「半強制的な場の共有時間の少なさ」、「留学生がグループの暗黙のルールについて知らされていない」という3点を挙げている。

小松（2013）では中国人女子留学生7名を対象に半構造化インタビュー調査を行い、その友人形成及び友人不形成過程について検討した。KJ法¹⁸を用いて分析した結果、友人形成に積極的な関心を持っていても制度的支援を得られない場合は友人形成に至らないこと、友人形成への関心が消極的であっても、制度的支援を得た場合は友人形成に至っていることが明らかになった。留学生と日本人学生との友人形成を活性化させるためには、留学生自身の積極的な姿勢と大学側の制度的支援体制の整備が不可欠であると指摘している。

以上の2件の研究を通して、留学生と日本人学生の「友人」に対する期待の違いによるギャップの存在、留学生の個人的な関心及び大学側の制度的な支援といった要素が留学生のソーシャル・ネットワークに影響する要因であることがわかる。調査対象者が少人数で一般化できないという限界があるが、個々人の見解まで示されたことは評価できる。留学生のソーシャル・ネットワークの影響要因を解明するためには、量的研究と質的研究の融合による混合研究方法を取り入れて検討する必要がある。

第五節 ソーシャル・ネットワークの構築過程

これまでの留学生のソーシャル・ネットワーク研究は、主にその構成やソーシャル・ネットワーク構築の影響要因に集中している。構築の過程に関する研究は少数であるが、佐々

¹⁸ 文化人類学者の川喜田二郎が考案した発想法。ブレインストーミングなどで思いついたことや調査で得られた情報などをカードに記すことから始め、類似のカードについてグループ分けとタイトルづけを行い、グループ間の論理的な関連性を見だし、発想や意見や情報の集約化・統合化を行う。『デジタル大辞泉』より

木他（2012）、山川（2013）などが挙げられる。

佐々木他(2012)は中国人留学生がいかに日本人と友人関係を構築しているかについて、来日1年以上の5名の中国人留学生を対象に、半構造化インタビューを行った。その結果、接触前の認識の存在、留学生側の一方向的な友人関係構築のための努力、知識としての日本の慣習に基づいた様々な工夫、比較対照される中国人との友人関係、留学生側から見た友人関係構築を促す日本人の行動、交流が進まない時の自分の日本人への接し方に関する反省、また友人関係が構築された場合の関係維持の心配などを組み込んだモデルを提示した。中国人留学生側の一方向的な努力について、佐々木他（2012）は対等的、協働的に参加できる教育活動が期待されると指摘している。

山川（2013）は留学生がどのようなソーシャル・ネットワークを形成しているか、またソーシャル・ネットワークを形成することは留学生にとってどのような意味があるかを明らかにするため、日本の大学で日本語を学習している留学生4名に対してインタビュー調査を行った。SCAT¹⁹を用いて一人ずつ分析を行った結果、留学生のソーシャル・ネットワークを形成していく過程が「コミュニティへの参加」、「相手との時間的・空間的共有」、「友人関係構築」、「コミュニティへの所属感」、「自分の居場所」という順になっているとまとめた。また、山川は日本の大学に所属する留学生のネットワーク形成は、受け入れ側大学の留学プログラムに依存している部分が大いだと指摘し、受け入れ側の大学は、提供するプログラムのシステムが留学生のソーシャル・ネットワーク形成に影響を与えているということ認識すべきであり、受け入れ側のシステム、具体的には寮やクラブ、イベントや授業などのあり方などを見直して行くべきであると提言した。

このように佐々木他（2012）、山川（2013）では、留学生のホストとソーシャル・ネットワークを構築するための努力、またソーシャル・ネットワーク構築の過程が示された。留学生のソーシャル・ネットワーク構築の過程を明らかにすることによって、留学生はどの段階でどのようなサポートが必要なのかということが明らかになった。しかし、留学生のソーシャル・ネットワーク構築の過程に関する研究はまだ少ないため、その全体像が捉えられていない。全体像を明らかにするためには、長期に渡った縦断的研究が必要であり、今後、留学生教育の現場の研究者からこれに関する研究が進められることが期待される。

¹⁹ SCAT (Steps for Coding and Theorization) : 大谷尚が提唱した質的データの分析手法である。

第六節 先行研究の考察

上記では、留学生の友人機能モデル、ソーシャル・ネットワークの構成、要素別による検討、ソーシャル・ネットワークの影響要因などの面から在日留学生のソーシャル・ネットワークに関する先行研究の総括を行い、日本における留学生のソーシャル・ネットワーク研究の現状を考察した。考察の結果、得られた問題点を以下にまとめた。

一つ目は、分析の枠組みについてである。これまでの日本における研究は対象を留学生と日本人学生とのソーシャル・ネットワークに限定している。日本では留学生の出身国が多様になっており、また今後は国際コースの設置などによって英語圏の留学生がさらに増加すると考えられ、留学生同士のソーシャル・ネットワークにも注目する必要がある。多様性を持つ留学生同士のソーシャル・ネットワークを明らかにすることにより、様々な支援策の開発が可能となり、それによって留学生同士のソーシャル・ネットワークの構築を促進させ、グローバル・キャンパスの実現に向けてさらに貢献できる。

二つ目は、要素別に検討する課題である。貫田・ウリガ（2013）の指摘通り、留学生の全体的傾向に注目するものが多く、留学生の専攻、経済状況、居住形態、外国語能力、在学期間といった要素を区別しながら留学生のソーシャル・ネットワークを分析した研究が少ない。これらの要素の違いによって、留学生のソーシャル・ネットワークの構築に影響する要因も異なると考えられ、要素別の検討は見逃せないものである。すでに本稿で述べたように、留学生のソーシャル・ネットワークは居住形態、来日期間、留学生個人の主観的姿勢など様々な要素に影響されていることが明らかになっているが、留学生の在学身分や外国語能力、経済状況などの要素についても検討する必要がある。

三つ目は、研究方法に関する問題で、つまり、友人の選出法の不足点である。Bochner et al. (1977)、Furnham et al. (1982)、Furnham et al. (1985)、田中他 (1990a)、田中他 (1990b)、田中他 (1991a) などの方法は、調査対象者に単にもっとも仲の良い友達を数名想定させ、質問項目によって想定した友人の中からもっとも該当すると思われる1名を記入させる手法が取られている。これにより、一つの項目に1名のみを記入させることになり、同項目において「同国人」、「ホスト国の者」、「他の外国人」という3グループの比較ができない。現状としては、同項目において1グループ1名の友人だけではなく、複数名の友人からの支援を求めている可能性があることから、「同国人」、「ホスト国の者」、「他の外国人」三グループの比較を行う必要があり、そのためには調査方法の改善が求められる。

四つ目は、留学生の出身国ごとに検討する必要があることである。先行研究の対象者を概観してみると、これまでの日本における留学生のソーシャル・ネットワークに関する研究は中国人留学生、アメリカ人留学生が対象とされてきたが、そのほかの国についての研究はまだ見られていない。これについて、村上（2005）でも留学生とホストとの関係は、留学生が居住する国や多様化した留学生の属性を無視して論じることが難しいと指摘している。

五つ目は、それぞれの特徴が異なる大学間の比較を行った研究が少ないことである。各大学において、学生数や留学生数の規模、または留学生の割合など多くの要因が異なり、それらが学生間のソーシャル・ネットワーク構築に影響すると考えられる。そのため、留学生のソーシャル・ネットワークを検討する際に、それぞれ特徴の異なる大学間の比較を行う必要がある。

留学生は母国を離れ、新しい環境で自分のソーシャル・ネットワークを再構築しなければならない。留学生に順調に自分のソーシャル・ネットワークを構築させるためには、大学からの有効な施策が求められる。留学生のソーシャル・ネットワーク及びその影響要因を明らかにすることによって、大学関係者に有益な示唆が与えられる。また、大学のグローバル化が求められている現在、留学生のソーシャル・ネットワークを検討することによって、留学生同士、留学生と日本人学生との壁をなくし、円滑に交流を行わせることは、グローバル・キャンパスの構築を促進することにもなるであろう。

第七節 本研究の理論的枠組み

本研究はソーシャル・サポート論の視点から、在日中国人留学生のソーシャル・ネットワーク及びその阻害要因を検討する実証的研究である。

ソーシャル・サポートは、コミュニティ心理学の研究者 Caplan（1971）によって提唱された概念であり、家族や友人、隣人など、ある個人を取り巻く様々な人々からの有形・無形の援助を指すものである（青野・森津 2007）。現在に至って、ソーシャル・サポートの概念は、疫学、社会学、心理学、社会福祉また保健医療を含む幅広い分野においてそれぞれ定義がされている（尾久 2009）。その定義は研究者によっては必ずしも一致しているわけではないが、小林（1997）では図 2-3 のように分類し、以下のように解釈している。

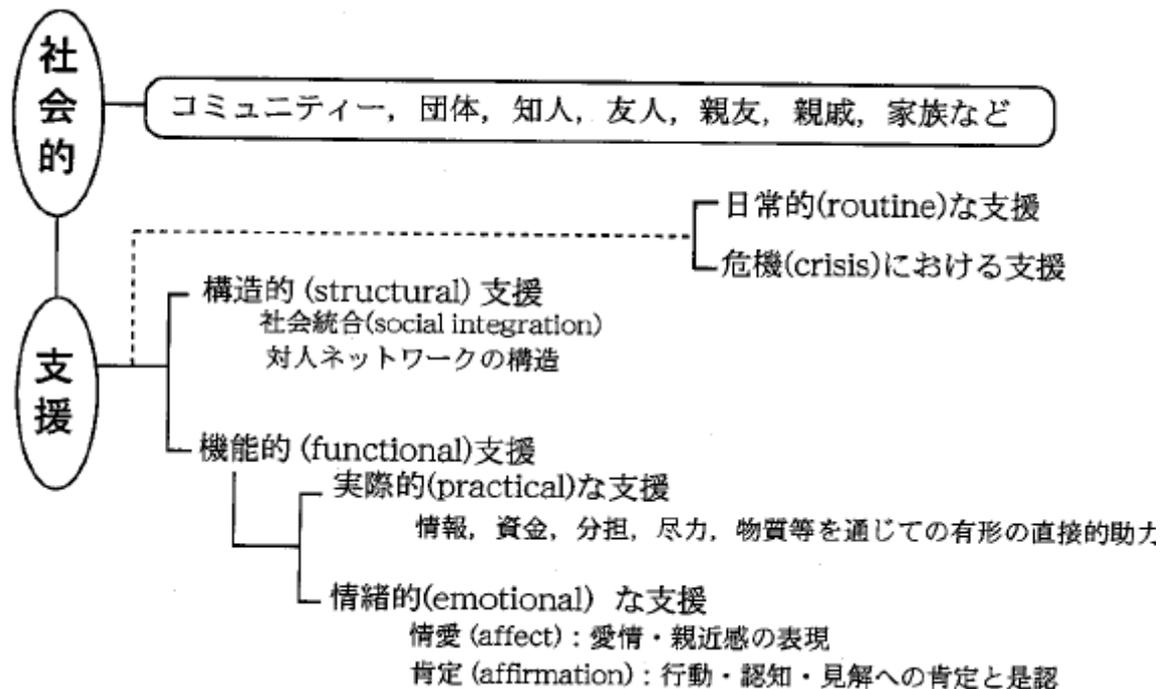


図 2-3 ソーシャル・サポートの分類（（小林 1997 : 2）より）

ソーシャル・サポート（社会的支援）という際の「社会」は、支援する側、すなわち支援源ともいえるが、配偶者や子どもなど親密度のきわめて高い家族から、親戚、親友、知人、隣人、所属団体や職場のメンバー、コミュニティー、専門家に至るまでの様々なレベルの「他者」を含んでいる。また、サポートについては、その内容により構造的なサポートにかかわる側面と、機能的な側面とに大別される。構造的なサポートとしては、個人が属するネットワークの大きさやネットワーク内での個人が果たす役割や活動、ネットワーク内での接触の頻度や人数、婚姻状況などが挙げられる。一方、機能的な支援は、受け手が実際に支援として認知し得るものとしての情報や資金、助言、その他の有形の直接的な助力、あるいは無形の情緒的な支援としての愛情や親近感の表現(affect)、行動、意見への肯定や是認 (affirmation) などからなる。(小林 1997 : 2)

ソーシャル・サポートの機能的支援を、小林（1997）は实际的な支援と情緒的な支援の二つに分けているが、さらに詳しく分類すると、「道具的サポート」、「情動的サポート」、「情緒的サポート」と「評価的サポート」の四つに分けられる (House 1981)。House (1981) はソーシャル・サポートを上記の四つのうちの一つあるいは二つ以上を含む個人間の相互交渉（行動）と定義している。この House (1981) の定義はソーシャル・サポートに関する

る有力な定義と高く評価されている（稲葉他 1987）。この四つのサポートについて、『ストレス百科事典』（2010：1819）では以下のような説明がなされている。

道具的サポート：日常生活でのサービスや仕事による援助

情動的サポート：問題解決の手助けと助言

情緒的サポート：共感、安心、愛着、尊重の提供

評価的サポート：自己評価に関連するフィードバック

また、Cohen（2000）では、ソーシャル・サポートをさらに細分化し、「交友的サポート」を加えて以下のような五つの種類に分けている。

手段的（道具的）サポート：物質的、手伝い

情緒的サポート：共感、認める、ケア、傾聴

情動的サポート：知識、情報、アドバイス

交友的サポート：遊びにいくなどで所属感

妥当性確認：行動の適切性、規範性の情報提供、フィードバック、社会的比較²⁰

上記のソーシャル・サポートに関する分類は共通するところが多くみられる。手段的（道具的）サポート、情動的サポートは情報、資金、分担、尽力、物資などを通じての有形の直接的助力であり、小林（1997）の構造的支援に相当する。また、情緒的サポートは愛情・親近感の表現であり、評価的サポート、妥当性の確認と交友的サポートは行動・認知・見解への肯定と是認であって、いずれも小林（1997）の情緒的支援に相当する。

ソーシャル・サポートの役割について、医療系、心理学研究においては、ソーシャル・サポートは健康行動の維持やストレスの解消において働きがあるとされている（小林 1997、長崎 2009 など）。留学生教育の分野においても、ソーシャル・サポートの概念を用いて、留学生の異文化適応を検討する研究が多くなされている（樋口 1997、田中 1998、水野・石隈 2001、譚他 2013 など）。また、留学生自身と留学生に対するソーシャル・サポートを提供するホスト国学生、留学生自身、すなわちソーシャル・サポート源とのソーシャル・ネットワーク構築についても多く検討されている（Bochner et al. 1977、Furnham et al. 1982、Furnham et al. 1985、田中他 1990a、田中他 1990b、田中他 1991a など）。本章の第二節で

²⁰ 自分と他者を比較することである（Festinger 1954）。

紹介した留学生の友人機能モデルもそれに該当する。すなわち、留学生は様々な友人ネットワークを構築することを通して、それぞれ異なるサポートを求めるようになる。

Bochner et al. (1977) で明らかにした同じ国から留学している者との間に形成され自文化の価値観を共有する機能を持つ単文化ネットワークは上記の情緒的サポートに該当しており、受け入れ国の者との間に形成され勉強や留学に必要な諸手続きをスムーズに遂行する機能を持つ二文化ネットワークは情動的サポートに該当している。また、他国からの留学生との間に形成されるものでレクリエーションの場を提供する機能を持つ多文化ネットワークは交友的サポートに該当している。これによって、Bochner et al. (1977) は留学生の友人からのサポート機能が友人の国籍によって分化されていると提唱している。

しかし、先行研究の考察で示したように、留学生の友人機能に関する先行研究には多くの問題点がある。それらの問題点を踏まえて、本研究では、中国人留学生を対象に、キャンパス内における学生全員を「中国人留学生」、「日本人学生」、「他国の留学生」という3グループに分けることにした。具体的には、一つの質問項目において、中国人留学生同士（「中・中」と略す、以下同）、中国人留学生と日本人学生（「中・日」と略す、以下同）、中国人留学生と他国の留学生（「中・他」と略す、以下同）という3グループについて調査を行った。具体的な研究方法については、第三章で紹介する。

また、本研究では、キャンパスのグローバル化の実現に向けて留学生のソーシャル・ネットワークを分析するため、留学生のパーソナルネットワークに注目するのではなく、研究の枠をキャンパス内に限定して、留学生のホールネットワークに注目する。図2-4に示しているように、本研究はホールネットワーク分析という方向性になると考えられる。

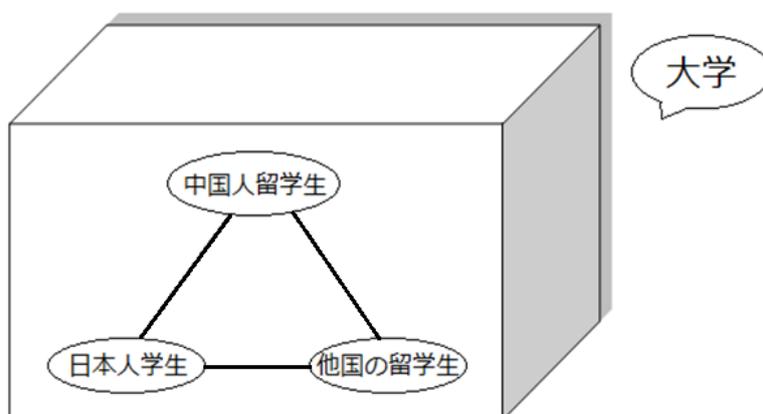


図2-4 ホールネットワーク研究の方向性

第三章 研究方法

本章では、第二章の先行研究の考察を通して明らかになった課題を踏まえ、本研究における研究課題を説明する。また、本研究で用いる用語の説明をしたうえで、本研究の研究方法を紹介する。

第一節 研究課題

本研究の目的は在日中国人留学生を対象に、キャンパス内において中国人留学生が同国人、日本人学生、他国の留学生とそれぞれどのようなソーシャル・ネットワークを構築しているか、ソーシャル・ネットワーク構築の阻害要因は何かを明らかにすることによって、日本におけるキャンパスのグローバル化のあり方について新たな提案を行うことを目的とする。

以上の目的を達成するため、本研究では以下の四つの研究課題を明らかにする。

課題 1：

「中・中」、「中・日」、「中・他」3 グループはそれぞれどのようなソーシャル・ネットワークを構築しているのか。

課題 2：

「中・中」、「中・日」、「中・他」3 グループのソーシャル・ネットワーク構築を妨げる要因は何か。

課題 3：

専攻、経済状況、居住形態、外国語能力、在学期間などの関連要因によるソーシャル・ネットワーク構築及びその阻害要因への影響は何か。

課題 4：

大学の規模と留学生の割合によってソーシャル・ネットワーク及びその阻害要因にどのような違いが見られるか。

課題 1 と課題 2 は在日中国人留学生のソーシャル・ネットワーク構築とその阻害要因の実態を把握するためである。課題 3 は属性が異なる中国人留学生に対して、属性の違いが

ソーシャル・ネットワーク構築と阻害要因へ与える影響を検討するために設定したものである。課題4はそれぞれの大学個別の差異を考慮し、学生と留学生の規模、留学生の割合が異なる大学においては、留学生のソーシャル・ネットワークにどのような違いが見られるかを検討するためである。これを明らかにすることによって、それぞれ特徴が異なる大学において、各自の現状に相応しい環境整備とサポートの仕方が検討できる。

上記の課題を解決するために、本研究では、2回の質問紙調査を実施した。1回目は本調査一、九州大学に在籍する中国人留学生に対して行った調査であり（第五章）、2回目は本調査二、福岡都市圏六大学に在籍する中国人留学生に対して行った調査（第六章）である。課題1～3は本調査一（第五章）と本調査二（第六章）で検討を行う。本調査一は学生数が20,000人近くにのぼり、且つ留学生数が2,000人以上の九州大学で実施し、本調査二は学生数が10,000人以下、且つ留学生数が500人以下の福岡都市圏六大学で実施する。一か所の大学に限定せず、学生総数と留学生数がそれぞれ異なる大学、また留学生の割合がそれぞれ異なる大学での調査を通して、より客観的に課題1～3を解決することができる。課題4の大学の規模と留学生の割合が異なる大学における中国人留学生のソーシャル・ネットワークとその阻害要因の相違点に関する分析結果は、第七章に示している。

以上の四つの課題を明らかにすることによって、在日中国人留学生を事例に留学生のソーシャル・ネットワーク及びその阻害要因を明らかにすることができ、キャンパスというコミュニティにおいて、学生間がどのようなつながりを形成しているか、そのつながりを形成させるためには、どのような障害を取り除く必要があるか、大学からどのような環境整備とサポートが必要なのかを検討することができるようになる。これらの課題の解決によって、キャンパスにおける学生間のコミュニケーションと異文化交流が活発になり、研究背景で述べた「内なる国際化」の実現へとつながる。さらに、グローバル・キャンパスの実現にも貢献できる。

第二節 用語の定義

本節では、本研究においてキーワードとなる「在日中国人留学生」、「ソーシャル・ネットワーク」、「グローバル・キャンパス」という三つの用語について定義する。

1-1 在日中国人留学生

2010年7月1日より、「就学」と「留学」は一体化し、日本語学校などの教育機関に在学している外国人学生が留学ビザを取得することが可能になった。日本学生支援機構は「外国人留学生」に対し、『出入国管理及び難民認定法』に定める『留学』の在留資格（いわゆる『留学ビザ』）により、我が国の大学（大学院を含む。）、短期大学、高等専門学校、専修学校（専門課程）、我が国の大学に入学するための準備教育課程を設置する教育施設及び日本語教育機関において教育を受ける外国人学生をいう」と定義している。日本学生支援機構の定義によると、大学以外に、専門学校や準備教育機関と位置付ける日本語教育機関に在籍する外国人学生もすべて留学生として取り扱われることがわかる。

しかし、本研究は、高等教育の国際化研究に注目し、大学におけるキャンパスのグローバル化のあり方について検討するため、本研究の用語である「在日中国人留学生」を大学教育機関に在学している中国人留学生と定義する。在学身分に関わらず、大学機関に在籍すれば本研究の対象となる。以上の定義によると、大学機関に在籍する大学院生、学部生、研究生、短期交換留学生が本研究の対象となる。

1-2 ソーシャル・ネットワーク

ソーシャル・ネットワークについて、先行研究では人間関係、対人関係、友人関係など多くの用語が使われてきた。ソーシャル・ネットワークの社会学定義については、すでに第二章で論じた。ここでは、人間関係、対人関係、友人関係を取り上げて、その定義と三者の関係について考察した上で、本研究で用いるソーシャル・ネットワークの定義について述べる。

大橋・長田（1987：6）によると、対人関係（interpersonal relations）とは、個人対個人の心理的な結びつきを意味する。対人関係と似た用語として人間関係（human relations）があるが、両者には用語上の差異がある。人間関係という用語は、狭義と広義の二つの用法がある。狭義の場合は、組織体における生産性やモラルを左右する一つの条件として、個人対個人の関係や集団に対する個人の感情・態度を重視する立場から用いられ、このような視点から人間関係という用語が用いられる時は、特に人間関係論（human relations approach）と呼ばれることがある。広義の人間関係は、対人関係と交換的に用いられることが多いが、しかしその場合もニュアンスに微妙な差異を認めることができる。まず、第一に、対人関係は個人対個人の関係に限定されるのに対して、人間関係は個人対

個人のほかに個人対集団、集団対集団までも含む人間対人間のあらゆる場合を包含する点で、より広い意味をもつ。第二に、組織体において個人対個人の関係は二重に構造化されている。その一つは、諸種の規定などによってあらかじめ成文化されたフォーマルな関係であり、もう一つは、自然発生的に形成されるインフォーマルな関係である。たとえば、会社や官庁の部課、あるいは学級集団なども、それ自体はフォーマルな組織であるが、やがてそのなかに友好的―敵対的などのインフォーマルな関係が形成されてくる。(大橋・長田 1987)

上記の解釈からわかるように、人間関係と対人関係は共通する部分があるが、対人関係より人間関係のほうが広い意味を持っていることがわかる。一方、対人関係の一つに友人関係がある(吉田 2003)。友人関係の「友人」に関して、どういう関係を「友人」とするかは色々と考えられるが、研究によって友人に対する定義が必要である(平松他 2010)。以上の人間関係、対人関係、友人関係の範囲と関係を整理し、図 3-1 に示した。

本研究で取扱う「ソーシャル・ネットワーク」は留学生という個人レベルのソーシャル・ネットワークであり、留学生の友人関係を指す。ここでの友人関係は、大学での留学生の同国人、ホスト国の学生、他国の留学生との「勉強」、「レクリエーション」、「自文化共有や異文化理解」などの面における友人付き合い全般を指す。すなわち、本研究では、ソーシャル・ネットワークは留学生の友人関係を指す。なお、第四章から第七章までの留学生のソーシャル・ネットワーク分析においては、「友人関係」という用語を用いる。

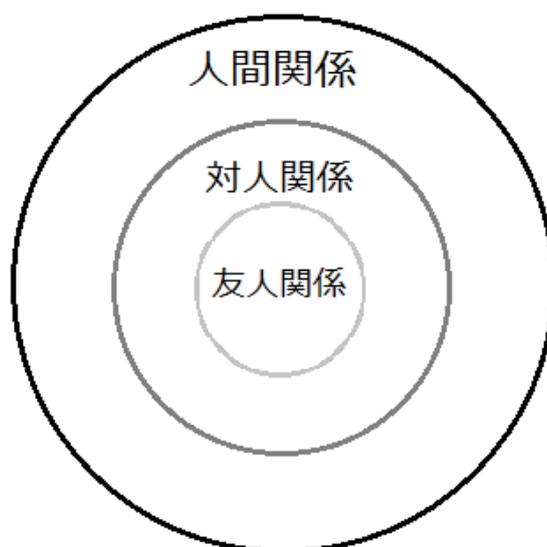


図 3-1 人間関係、対人関係と友人関係の包摂状況

1-3 グローバル・キャンパス

これまでグローバル・キャンパスに関する学術的定義はなされていない。Brustein (2017)では初めてグローバル・キャンパスを構築するための十要素を指摘している。その十要素は以下のとおりである（日本語：筆者訳）。

- (1) 戦略計画の国際化
(internationalizing strategic planning)
- (2) カリキュラムの国際化
(internationalizing the curriculum)
- (3) 海外教育障壁の排除
(eliminating barriers to education abroad)
- (4) 外国語能力の熟達
(requiring foreign language proficiency)
- (5) 教職員の国際化
(internationalizing faculty searches)
- (6) 国際貢献を教員奨励制度への取り入れ
(incorporating international contributions into the faculty reward system)
- (7) 高度なグローバル人材を大学の重要部門への設置
(upgrading senior international officers' reporting relationships and placing senior international officers on key university councils and committees)
- (8) 学生の留学体験に対する全面的なサポート
(embracing a holistic approach to the international student experience)
- (9) 地元の外国籍住民コミュニティの専門知識と経験の吸収
(drawing upon the experiences of and engaging fully local immigrant or diaspora communities)
- (10) 国際的なアカデミック協力を優先する制度の設定
(making global academic partnerships an institutional priority)

また、スーパーグローバル大学創成支援事業の採択校の一つである東京大学が打ち出した「東京大学グローバルキャンパスモデルの構築」の中で、東京大学はグローバル・キャ

ンパスのモデルの六つの特徴を示している²¹。

- (1) 学術各分野における世界最高・最先端の研究の推進・展開
- (2) グローバル化時代にふさわしい教育システム：流動性と多様性を向上させる学事暦、グローバルな視野を持つ知的リーダー育成カリキュラム
- (3) 英語で学位を取得できるコースや英語での体系的な授業カリキュラムの充実
- (4) 日本的な価値や見方を生み出す日本語による高度な教育や研究、多言語による授業
- (5) 多様な構成員からなる平等で多様性を活かした教育・研究・運営
- (6) グローバル・キャンパス構想を強力に推進する組織と高度な専門職員

上記の Brustein (2017) のグローバル・キャンパスの十要素と東京大学の六つのグローバル・キャンパスの特徴から見ると、教育システム・カリキュラムの国際化、多言語授業、高度な専門職員、教職員の国際化・多様化などが共通している。このように、大学の運営システム、カリキュラム、教職員の構成などの面から考えるグローバル・キャンパスの青写真は、マクロ的視点から見たグローバル・キャンパスであると言えよう。

一方、ミクロ的視点からグローバル・キャンパスを捉えるケースも少なくない。研究背景で述べた麗澤大学、長崎外国語大学、山梨大学などの事例は、グローバル・キャンパスを学生の交流と異文化理解を中心としたミクロ的意味で捉えている。本研究においても、大学における学生間のソーシャル・ネットワークに注目するため、グローバル・キャンパスをミクロ的な視点から捉える。「山梨大学におけるグローバル化に関する方針」では、山梨大学がキャンパスのグローバル化について以下のように定義している²²。

海外から多くの人材が集い、文化や言語、宗教の違いをこえて交流や協働ができ、国際的な体験ができるキャンパス、並びに地域社会の実現を目指す。

以上の山梨大学のキャンパスのグローバル化の定義に基づき、本研究では、グローバル・キャンパスを「海外から多くの人材が集い、文化や言語、宗教の違いをこえて留学生同士、または留学生と日本人学生の間で活発な交流や協働ができ、留学生にとっても日本人学生

²¹ 出自は「参考 URL」に参照されたい。

²² 出自は「参考 URL」に参照されたい。

にとっても国際的な体験ができるキャンパス」と定義する。ここでのグローバル・キャンパスはキャンパスのグローバル化と同義である。

第三節 調査概要

1-1 ソーシャル・ネットワーク調査法

パーソナルネットワークとホールネットワークにおいてそれぞれ異なる測定方法が用いられる。パーソナルネットワークの測定方法について、平松他（2010：25）は先行研究をまとめ、①調査票による方法（付き合いのある人、サポートを求める人などに関する質問を提示して回答を得る方法）、②観察による方法（調査者が対象者間の関係を観察・記録する方法）、③既存の記録・資料による方法（年賀状など個人のパーソナルネットワークが描き出されているような資料や記録を閲覧する方法）の三つがあると述べている。

ホールネットワークのデータを収集するためには、ネットワークの境界、対象となる単位、関係の種類（主観的 or 客観的）、関係の形式（関係のある、なしやポジティブ or ネガティブなど）、そして多重関係の扱いなどに加え、境界内のすべての単位間の関係が収集される必要があることを考慮に入れなければならない（平松他 2010）。個々のメンバーのデータを収集する方法について、パーソナルネットワークのデータ収集にみられる「調査票によるネットワーク調査」をはじめ、インタビューでその結果が補われることがある。また、データを収集する際の注意事項について、重要なのは、限定された集団内のすべての人の他の人との2者関係（多重な関係を含む）を収集する必要があるということである。もちろん、その調査から、何を明らかにしたいかによって、その調査の方法、収集する関係の種類などが異なってくることは当然である（平松他 2010）。

これまでの留学生のソーシャル・ネットワークに関する先行研究においては、ネットワーク論からのアプローチである「ネーム・ジェネレータ方式」(name generator) 調査、質問紙調査やインタビューなどの方法が用いられてきた。「ネーム・ジェネレータ方式」(name generator) 調査法は名前想起法²³とも言い、その例として、田中（1990a）、田中（1990b）、

²³ 質問内容につき個人5名程度を思い浮かべてもらい、調査を行う方法である。具体的に、「あなたにとって重要なことを相談する人を思い浮かべてください」といった質問文を掲げて、回答者にサポートメンバーを想起してもらう。次に、当該のサポートを提供してくれる人のうち上位5名などと人数を絞り、それぞれの人を具体的に思い浮かべてもらう。また、具体的に思い浮かべてもらう人数についてもとくに決まりはなく、分析目的に応じ

田中 (1991a) では留学生たちに自分にとって大切な関わりのある人を 5~10 人リストアップさせ、その人の名前、性別、年齢、国籍、その人から期待できる援助、その人との関係の満足度、依存度合い、接触頻度、話題などを調査対象者に尋ねるという手法である。佐々木他 (2012) は来日 1 年以上の 5 名の中国人留学生を対象にして、半構造化インタビューを行い、友達だと思ふ人の具体像を想起させた上で、どのように友達になったかを語ってもらった。また、質問紙調査の方法は、予備調査と本調査に分けて行う研究が多い。予備調査を通して質問項目を選定する、または先行研究の友人関係尺度項目を検討しながら本調査の質問項目を決めるといった方法をとった研究が多い。横田 (1991a)、戦 (2007)、石原 (2011) などの研究はその例である。

本研究は在日中国人留学生の同国人、日本人学生、他国の留学生とのソーシャル・ネットワーク及びその阻害要因について考察する材料として、より客観的なデータを取得するために、量的研究が必要であり、そのため、本研究では質問紙調査という方法を用いる。

1-2 質問紙の構成

本研究の質問紙調査は、主に三つの部分から構成される。一つ目は調査対象者の基本属性である。この部分では調査対象者の性別、年齢、居住形態、在学身分、専攻、在学期間、経済状況、外国語能力などを明らかにする。これらの要素は留学生のソーシャル・ネットワーク及びその阻害要因の関連要因として考えられる。二つ目は在日中国人留学生のソーシャル・ネットワークの実態を測定する項目である。三つ目は中国人留学生のソーシャル・ネットワーク構築の阻害要因に関する質問項目である。

1-2-1 調査対象者の基本属性

この部分では調査対象者の性別、年齢、専攻、在学期間、在学身分、経済状況、居住形態及び外国語能力といった調査対象者の属性を把握した。

また、外国語能力については、留学生の友人付き合いでは会話を中心に行うという状況から、本調査では米国外語教育協会 (ACTFL) によって開発された汎言語的に使える会話能力テスト²⁴の評価尺度を採用した。超級、上級、中級、初級の 4 尺度以外に、本研究では初級以下という尺度を追加した。具体的には、その会話能力テストのガイドラインに沿

て人数を設定する。石田 (2012) より

²⁴ 外国語の口頭運用能力を測定するためのインタビューテストである。

って、各尺度に関する具体的な説明文を提示し、調査対象者の日本語と英語能力について回答してもらった。

本調査二で使用する質問紙は一回目の調査の質問紙を基に、一部を改善した上で調査に用いた。具体的には、基本事項において、「寮の経験」、「部活・サークルの参加状況」、「中国学友会・留学生会の加入状況」について質問を設定し、その現状を把握した。一回目の調査では、調査対象者の居住形態について確認したが、回答時点で学生寮に未入居でも、寮に居住した経験を有していればその経験も調査対象者の友人関係に影響を及ぼすと考えられるため、二回目の調査では寮入居経験の有無についても確認した。また、「部活・サークルの参加状況」、「中国学友会・留学生会の加入状況」も留学生の友人関係に影響を及ぼす可能性があると考えられるため、基本事項ではこれについても確認した。

1-2-2 友人関係を測定する質問項目

友人関係を測定する質問項目については、先行研究の Bochner et al. (1977)、Furnham & Bochner (1982) と Furnham & Alibhai (1985) を参考にした。3件の先行研究の質問項目は添付資料1を参照されたい。

本研究では、「一緒に水泳に行く」、「一緒にコンサートに行く」、「一緒に図書館に行く」、「一緒に病院に行く」などの Bochner et al. (1977) で結果に影響を与えなかった項目を取り除き、それ以外の項目を参考にした上で、「言葉の添削」、「勉強面の相談」、「イベントへの参加」、「料理をする」など勉強、レクリエーション、自文化共有と異文化理解についての12の場面を作成した。この12項目は Bochner et al. (1977) で明らかにした留学生の友人機能モデルのあらゆる機能が含まれている。

- | | |
|------------|-------------|
| ①母国や故郷の話 | ⑦勉強情報の提供 |
| ②言葉の添削 | ⑧料理 |
| ③買い物 | ⑨イベントへの参加 |
| ④勉強面の相談 | ⑩浅い関係で立ち話程度 |
| ⑤落込み時の頼り | ⑪観光や見学旅行 |
| ⑥パーティーへの参加 | ⑫スポーツ |

12の項目について、調査対象者に中国人留学生、日本人学生、他国の留学生の中から、

それぞれもっとも仲の良い友達を1名ずつ想定させ、質問項目で設定された場面についての程度想定した友人と自身の現状とが一致するのかを、「非常に当てはまる」、「やや当てはまる」、「あまり当てはまらない」、「全く当てはまらない」という四つの選択肢から選択させた。

また、12項目を選択させる前に、調査対象者に自分の友人関係について自己評価させるために、「私は大学/大学院で（中国人留学生同士・日本人学生・他国の留学生）の友人を作ることができた」という質問を設定し、中国人留学生同士、日本人学生、他国の留学生との友人関係の構築状況をそれぞれ「非常に当てはまる」、「やや当てはまる」、「あまり当てはまらない」、「全く当てはまらない」四つの選択肢から選択させた。

本調査二では、友人関係を測定する項目を改善した。本調査一の質問項目はBochner et al. (1977)、Furnham & Bochner (1982) と Furnham & Alibhai (1985) を参考にして作成したが、30年前の項目だけでは現在の留学生の友人関係全般を反映できないと考えられるため、項目の再検討という課題が残された。そのため、一回目の調査の12項目に加え、さらに工藤(2003a)を参考にし、中国人留学生に対する半構造化インタビューで引き出した内容を基に、「ストレス解消」、「SNSによる交流」、「言語学習」の3項目を追加した。その理由について、一回目の調査の12項目では、情緒的サポートに関する項目は「落込み時の頼り」1項目のみであり、項目全体のバランスを取るため、「ストレス解消」を追加した。また、異文化理解に関する項目については、一回目の調査では「故郷の話」と「イベントへの参加」のみであったが、留学生とホスト側の学生、または留学生同士の間で外国語についての学び合いを通して異文化に対する理解を深めることができると考え、工藤(2003a)を参考にし「言語学習」項目を追加した。さらに、情報化時代の現代においては、SNSの使用が広まり、これも留学生が自分の友人ネットワークを広げる有効な道具であると考えられるため、半構造化インタビューの結果に基づいて「SNSによる交流」項目を追加した。以上、本調査二で設定した15項目は以下の通りである。

- | | | |
|----------|-----------|-----------|
| ①故郷の話 | ⑥パーティー | ⑪旅行 |
| ②言葉の添削 | ⑦勉強情報の提供 | ⑫スポーツ |
| ③買い物 | ⑧料理 | ⑬ストレス解消 |
| ④勉強面の相談 | ⑨イベントへの参加 | ⑭SNSによる交流 |
| ⑤落込み時の頼り | ⑩立ち話 | ⑮言語学習 |

1-2-3 阻害要因を測定する質問項目

友人関係構築の阻害要因を測定する質問項目について、本研究では三つのグループで友人関係構築の阻害要因を検討するため、先行研究の留学生と日本人学生という二者間の友人関係だけでは不十分と考え、項目を収集するために九州大学在校生 45 名に対して予備調査を実施した。予備調査で収集したデータを KJ 法を参考にして分類したものを基に、さらに横田 (1991a) からの知見と併せて本研究で用いる質問項目を作成した。具体的には、「中・中」、「中・日」、「中・他」3 グループ共通の阻害要因が 11 項目あり、「中・中」、「中・日」、「中・他」独自の阻害要因項目がそれぞれ 4 項目、10 項目、10 項目ある。共通の阻害要因項目と各グループの独自の阻害要因を合わせて、「中・中」15 項目、「中・日」21 項目、「中・他」21 項目となる。

各項目で設定した阻害要因では、「非常に当てはまる」、「やや当てはまる」、「あまり当てはまらない」、「全く当てはまらない」という四つの選択肢を設定し、その阻害要因がどの程度自分の現状に相応しいかを調査対象者に選択させた。

なお、阻害要因の質問項目に関する詳しい内容は第四章を参照されたい。

1-3 調査対象大学

大学の学生数及び留学生数、留学生の割合の違いによる在日中国人留学生のソーシャル・ネットワーク及びその阻害要因の相違点を検討することも本研究の課題の一つであるため、本研究は大規模大学である九州大学で一回目の調査、中小規模大学である福岡都市圏六大学で二回目の調査を実施した。本研究で言及する大規模大学とは、学生数が 10,000 人以上、且つ留学生数が 1,000 人以上の大学を指す。また、中小規模大学とは、学生数が 10,000 人以下、且つ留学生数が 1,000 人以下の大学を指す。

本調査一の調査対象大学の九州大学は 2017 年 5 月現在、学部生 11,746 人、大学院生 6,961 人、研究生などは 523 人で、合わせて 19,230 人で 20000 人近くとなる。また、留学生数は 2017 年 5 月現在、2,201 人であり、学生数から言っても留学生数から言っても大規模大学である。

本調査二の調査大学福岡都市圏六大学の状況は表 3-1 に示している。表 3-1 に示しているように、六大学の学生数はすべて 10,000 人以下であり、且つ留学生数はすべて 500 人以下であり、これは本研究で定めた中小規模大学の基準を満たしている。

また、上記の調査対象となる七大学における留学生の割合について、5%以下は3か所、10%～15%は2か所、30%以上は2か所であり、それぞれ留学生の割合が異なる大学のデータを取得することによって、留学生の割合によって留学生のソーシャル・ネットワークにどのような相違が見られるのかを検討することが可能になる。なお、七大学の具体的な留学生の割合とグループ分けについては、第七章で説明する。

表 3-1 調査対象大学の留学生数及び中国人留学生数

単位：人（国公立順）

大学名	学生総数	留学生数	留学生の比率	中国人留学生数	国公立
九州工業大学	5653 (H29. 5)	272	4. 8%	99	国立
北九州市立大学	6704 (H29. 5)	236	3. 5%	150	公立
福岡女子大学	1034 (H26. 5)	125	12. 1%	66	公立
早稲田（北九州）	469 (H29. 5)	408	87. 0%	364	私立
福岡大学	8367 (H29. 5)	168	2. 0%	109	私立
九州情報大学	435 (H29. 5)	172	39. 5%	79	私立

注：学生数は各大学のホームページより

留学生数は福岡地域留学生交流推進協議会より（2017年5月現在）

1-4 調査時期及び調査方法

本調査一は九州大学に在籍する中国人留学生を対象として、2016年1月から2月にかけて九州大学伊都キャンパス、箱崎キャンパス、病院キャンパス、大橋キャンパス四つのキャンパスにおいて中国語版の質問紙を用いて調査を行った。調査者本人または知り合いを通じて質問紙を配布・回収し、回答総数は96部であった。そのうち、有効回答は95部であった。本調査一で使用する質問紙は添付資料2と3を参照されたい。

本調査二の実施に当たっては、中国駐福岡総領事館教育室に依頼し、九州地区中国学友会各大学の責任者の名簿を入手した。各大学の責任者または知人に連絡し、最終的に協力可能な六大学を調査対象大学にした。調査可能大学の責任者または知人に質問紙と謝礼を郵送した後、各大学の責任者または知人によって質問紙の配布と回収を行った。2016年10月から12月までに、福岡都市圏六大学において190部の回答を得て、有効回答は154部であった。本調査二で使用する質問紙は添付資料4と5を参照されたい。各大学での回収数

及び有効数は表 3-2 に示している。

表 3-2 質問紙の回収数及び有効数

単位：部（有効率順）

大学名	回収数	有効数	有効率%
福岡女子大学	20	20	100
北九州市立大学	31	30	96.8
九州工業大学	29	26	89.7
福岡大学	48	38	79.2
早稲田（北九州）	20	15	75
九州情報大学	42	25	59.5
合計	190	154	81.1

第四章 在日中国人留学生のソーシャル・ネットワーク構築における影響要因

第一節 調査の目的及び内容

本章は中国人留学生同士（「中・中」）、中国人留学生と日本人学生（「中・日」）、中国人留学生と他国の留学生（「中・他」）との友人関係構築に影響する要因を明らかにすることを目的とする。また、3 グループの友人関係構築の影響要因を明らかにした上で、その結果に基づき、本調査の阻害要因の質問項目を検討する。

本調査は記述式の質問紙を用いて、2015年10月、12月の2回に分けて、九州大学の学部及び大学院に在籍中の中国人留学生45名に対して実施した。記入漏れがある質問紙を除き、有効回答は42部であった。本調査である量的調査の質問項目の選定がこの調査の目的であるため、学部から大学院、文科系から理科系までそれぞれ異なる属性を持つ中国人留学生を調査対象者にした。質問紙は日本語版と中国語版を用意し、調査対象者にどちらかを自由に選んでもらい、中国語または日本語で回答してもらった。

調査内容は、調査対象者の性別、居住形態や在学期間などの属性に関するもの、また、調査対象者が感じている自分の友人関係に影響する具体的な要因を引き出すために、横田（1991a）の質問を参考に、自由記述の形で以下の六つの質問を設定した。調査で使用した質問紙は添付資料6と7を参照されたい。

- ① 中国人留学生同士との友人付き合いで、友人関係を築きにくいことがあるとしたら、その要因と理由としてどのようなものが考えられますか。
- ② 中国人留学生同士との友人付き合いで、友人関係が築きやすいことがあるとしたら、その要因と理由としてどのようなものが考えられますか。
- ③ 日本人学生との友人付き合いで、友人関係を築きにくいことがあるとしたら、その要因と理由としてどのようなものが考えられますか。
- ④ 日本人学生との友人付き合いで、友人関係が築きやすいことがあるとしたら、その要因と理由としてどのようなものが考えられますか。
- ⑤ 中国以外の国からの留学生との友人付き合いで、友人関係を築きにくいことがあるとしたら、その要因と理由としてどのようなものが考えられますか。
- ⑥ 中国以外の国からの留学生との友人付き合いで、友人関係が築きやすいことがあるとしたら、その要因と理由としてどのようなものが考えられますか。

調査を実施し始めた直後に、調査対象者 2、3 人から「どう答えたらいいかわかりにくい」というコメントがあり、最初の二つの質問に対して、「時間がない」、「経済的に余裕がない」、「同じ寮に住むこと」、「共通の趣味を持つこと」などの具体的な事例を参考例として提示した。回収した質問紙について、回答内容をデータ化した後に EXCEL にまとめ、中国語での回答を日本語に統一した。その上で、KJ 法のグループ分けの方法を参考にして、各質問の回答内容をグループ分けして、分析を行った。

第二節 調査結果

調査対象者の属性については、回答者 42 名のうち、男性 14 名 (33.3%)、女性 28 名 (66.7%) で、理科系 20 名 (47.6%)、文科系 22 名 (52.4%) であった。在学期間、在学身分、居住形態の情報は表 4-1、表 4-2、表 4-3 に示す通りである。

在学期間について、半年以上在学している調査対象者が 90%以上を占めている。そのうち、半年～1 年は 16 人 (38.1%)、1 年～2 年は 11 人 (26.2%)、2 年以上は 14 人 (33.3%) である。在学身分については、学部、研究生、博士前期、博士後期課程にそれぞれ 10 人 (23.8%)、6 人 (14.3%)、14 人 (33.3%)、12 人 (28.6%) である。居住形態については、アパートに居住している者は 23 名 (54.7%) であったのに対し、留学生会館、寮、公営住宅の三つに居住している者は合わせて 19 名 (45.3%) と、ほぼ半数を占めている。この結果から、ある程度異なる属性の調査対象者を確保することができたと考えられる。

表 4-1 在学期間 単位：人

在学期間	人数	比率%
一ヵ月未満	1	2.4
半年～1 年	16	38.1
1 年～2 年	11	26.2
2 年以上	14	33.3
合 計	42	100

表 4-2 在学身分 単位：人

在学身分	人数	比率%
学部生	10	23.8
研究生	6	14.3
博士前期	14	33.3
博士後期	12	28.6
合計	42	100

表 4-3 居住形態 単位：人

居住形態	人数	比率%
アパート	23	54.7
留学生会館、寮	15	35.7
公営住宅	4	28.6
合計	42	100

自由記述の部分については、質問 1 から質問 6 まで、それぞれ 122 項目、131 項目、128 項目、113 項目、113 項目、106 項目の回答が得られた。各質問の回答内容について、同じあるいは似ているような回答内容をまとめ、グループ分けをした。グループ分けをした結果、添付資料 8 に示すように、質問 1 から質問 6 までの回答は、それぞれ 15 グループ、16 グループ、18 グループ、18 グループ、17 グループと 14 グループに分類された。各グループは回答人数の多い順に並べた。各質問における回答数上位五つの回答は、表 4-4、表 4-5、表 4-6 に示すとおりである。

表 4-4 は中国人留学生同士の友人関係構築における影響要因の上位項目であり、項目の後ろの数字は該当項目を記述した回答者の数である。そのうち、友人関係の築きにくい理由と築きやすい理由には「性格」、「共通の趣味、話題」、「住む場所」、「専攻や授業」という共通した要素が見られる。この結果から、中国人留学生同士の友人関係構築に影響する主な要因としては、性格が合うかどうか、共通の趣味、話題があるかどうか、一緒に授業を受けるかどうか、住む場所は近いかどうかということである。

表 4-4 中国人留学生同士の友人関係構築の影響要因

築きにくい理由 (人)	築きやすい理由 (人)
①性格が合わない (27)	①共通の趣味、話題がある (21)
②忙しくて、余裕がない (23)	②性格が合う (18)
③共通の趣味、話題が少ない (15)	③同じ専攻や研究室、一緒に授業に出る (14)
④専攻や受けている授業が異なる (6)	④住む場所が近い、或いは一緒である (12)
⑤住む場所が遠い (6)	⑤同じ出身地や同じ出身大学 (11)
(計 15 グループ、以下略)	(計 16 グループ、以下略)

表 4-5 は中国人留学生と日本人学生の友人関係構築における影響要因の上位項目であり、項目の後ろの数字は該当項目を記述した回答者の数である。築きにくい理由と築きやすい理由には、中国人留学生同士の影響要因でも見られた「共通の趣味、話題」、「性格」、「専攻や授業」のほか、「言葉」、「文化」といった項目も見られる。特に、築きにくい理由の中で、最も多くの回答者に記述された項目は「言葉」と「文化」という要因であった。この結果から、言葉の壁や文化の違いといった要因が中国人留学生の日本人学生との友人関係構築に最も影響を受けやすい要因であると予想される。

表 4-5 日本人学生との友人関係構築の影響要因

築きにくい理由 (人)	築きやすい理由 (人)
①言葉の壁 (24)	①共通の趣味、話題がある (15)
②文化や生活習慣の違い (23)	②異文化に興味を持っている (14)
③共通の趣味、話題が少ない (13)	③同じ専攻や研究室、一緒に授業に出る (12)
④性格が合わない (13)	④相手の性格が明るく、近づきやすい (8)
⑤余裕がない、時間が合わない (8)	⑤相手は親切で、礼儀正しい。(7)
(計 18 グループ、以下略)	(計 18 グループ、以下略)

表 4-6 は中国人留学生と他国の留学生との友人関係構築における影響要因の上位項目であり、項目の後の数字は該当の項目を記述した回答者の数である。築きにくい理由として、中国人留学生と日本人学生グループと「言葉の壁」、「文化や生活習慣の違い」、「共通の趣味、話題が少ない」、「性格が合わない」という四つの項目が共通している。また、築きや

すい理由としても、「相手の性格が明るく、近づきやすい」、「異文化に興味を持っている」、「共通の趣味、話題がある」という三つの項目が共通している。この結果から見ると、中国人留学生と日本人学生、中国人留学生と他国からの留学生という2グループの友人関係構築の影響要因には、わずかな違いはあるが、共通する部分が多いと言える。

表 4-6 他国の留学生との友人関係構築の影響要因

築きにくい理由 (人)	築きやすい理由 (人)
①言葉の壁 (29)	①相手の性格が明るく、近づきやすい (14)
②文化や生活習慣の違い (24)	②異文化に興味を持っている。(14)
③共通の生活圏がない (8)	③共通の趣味、話題がある (10)
④共通の趣味、話題が少ない (7)	④一緒にイベント、外国語教室への参加 (8)
⑤性格が合わない (6)	⑤性格が合う (8)
(計 17 グループ、以下略)	(計 14 グループ、以下略)

第三節 まとめ

上記のように自由記述の回答に対するグループ分け、分析を通して、中国人留学生が感じている友人関係構築に影響する要因を明らかにした。

友人関係を築きにくい理由について、「生活と勉強で精一杯であり、友人を作るといった余裕がない」、「互いに性格が合わない」、「専攻や研究室が異なり、学校で一緒に授業を受ける機会が少ない」、「共通の趣味、話題がない」などの項目が中国人留学生同士、中国人留学生と日本人学生、中国人留学生と他国の留学生3グループの共通項目として挙げられる。また、上位項目ではないが、添付資料8のグループ分けをした結果によると、「年齢差があり、溝を感じる」、「相手はマナーを守らない」、「一緒に参加できる国際交流パーティーが少ない」、「遊ぶときお金がかかるので、経済的に余裕がない」などの項目が3グループのうち、どちらかの2グループの共通項目として挙げられる。さらに、中国人留学生と日本人学生、中国人留学生と他国の留学生の2グループにおいては、「言葉の壁」、「文化や生活習慣の違い」という共通項目が見られた。

友人関係を築きやすい理由については、「共通の趣味、話題がある」、「性格が合う」、「同じ専攻や研究室、一緒に授業に出る」、「住む場所が近い、或いは一緒である」、「相手はバ

イト先の同僚である」、「一緒に国際交流パーティーに参加する」、「言葉が通じる」、「相手は親切で礼儀正しい」、「よく会える」などの項目が3グループの共通項目として挙げられる。また、「年が近い」という項目が中国人留学生同士、中国人留学生と日本人学生の2グループの共通項目として見られた。さらに、中国人留学生と日本人学生、中国人留学生と他国の留学生の2グループにおいては、「相手は異文化に興味を持っている」、「相手の性格が明るい」、「自分にとって外国語の勉強ができる」、「相手は中国人に対して友好である」という共通項目が見られた。

以上の分析から、中国人留学生は同国人留学生、日本人学生及び他国からの留学生との友人関係が「性格が合うかどうか」、「共通の趣味・話題があるかどうか」、「同専攻であるかどうか、一緒に授業に出るかどうか」などの要因に影響され、また、中国人留学生は日本人学生、他国の留学生との友人関係が「言葉」、「文化」、「慣習」などの要因に影響されている可能性があることがわかった。その他、添付資料8によると、「住む場所」、「国際交流の機会」、「相手のマナー」や「年齢」なども影響要因として考えられる。

本研究の結果は中国人留学生が感じている影響要因を自由記述させ、その内容を分析したものであるため、実際の影響要因とはずれがある可能性もある。そのため、次章以降では、中国人留学生の友人関係に影響する実際の要因は何か、これらの影響要因の背後に潜む根本的な要因は何かという点について、本調査の結果を踏まえてさらに量的調査を実施し、因子分析を通して検討していく。

第四節 阻害要因の質問項目検討

上記でまとめたように、同一の項目が促進要因にも阻害要因にもなり得ることがわかった。たとえば、性格という項目については、「性格が合わない」場合は阻害要因となり、「性格が合う」場合は促進要因となる。第一章第三節で述べたように、本研究は阻害要因に注目して検討するため、上記の友人関係構築の築きやすい理由を参考にしながら、築きにくい理由を主に利用して、本調査で用いる質問項目の検討を行った。

まず、「中・中」、「中・日」、「中・他」3グループの共通する阻害要因について、添付資料8によると、「バイトや研究などで忙しくて、時間がない」、「時間がない、時間が合わない」、「時間や経済的に余裕がない」といった項目は3グループにすべて表れていたため、横田（1991a）を参考にして、「生活と勉強だけで精一杯で、友人を作るといった余裕があ

まりないから」、「一緒に遊ぶときに、お金がかかるなど、経済的に余裕がないから」という二つの項目にした。

また、「性格」、「共通の趣味、話題」、「専攻が異なり、一緒に授業を受ける機会」、「友人付き合いの機会」、「イベント、国際交流」、「一緒に住む、近くに住んでいない」などの項目も3グループ共通の阻害要因、または促進要因になっていたため、「互いに性格が合わないから」、「相手と共通の趣味や話題がないから」、「専攻や研究室が異なり、学校で一緒に授業を受ける機会が少ないから」、「相手と接触する頻度が少ないから」、「一緒に参加できる国際交流パーティーやイベントが少ないから」、「居住地が遠いから」といった阻害要因の質問項目を作成した。

その他、すべてのグループには現れなかったが、阻害要因としていずれのグループにも影響を与えると考えられる「年齢」、「相手のマナー」、「無関心」に対しては、「年齢差があり、みぞを感じるから」、「相手がマナーを守らない・性格が悪いなどを感じるから」、「人付き合いにあまり興味がなく、面倒くさいと感じるから」という三つの質問項目を作成した。

上記した「中・中」、「中・日」、「中・他」3グループに共通する阻害要因の項目は以下の11項目となっている。

- ①生活と勉強だけで精一杯で、友人を作るといった余裕があまりないから。
- ②互いに性格が合わないから。
- ③専攻や研究室が異なり、学校で一緒に授業を受ける機会が少ないから。
- ④居住地が遠いから。
- ⑤年齢差があり、みぞを感じるから。
- ⑥相手がマナーを守らない・性格が悪いなどを感じるから。
- ⑦相手と共通の趣味や話題がないから。
- ⑧一緒に参加できる国際交流パーティーやイベントが少ないから。
- ⑨一緒に遊ぶときに、お金がかかるなど、経済的に余裕がないから。
- ⑩人付き合いにあまり興味がなく、面倒くさいと感じるから。
- ⑪相手と接触する頻度が少ないから。

また、「中・日」、「中・他」の2グループで見られた共通項目「言葉」、「文化」、「慣習」、

「ライフスタイル」、「価値観」に対しては、それぞれのグループに対応する阻害要因の質問項目を作成した。

「中・日」:

日本語がうまくできなくて、自分の意思をうまく伝えることができないから。

自分は日本の文化や習慣について十分に知らないから。

ライフスタイルに共通性がないから。

価値観が違い、互いになかなか理解できないから

「中・他」

ライフスタイルに共通性がないから。

彼らは日本語や中国語をうまく話せないから。

価値観が違い、互いになかなか理解できないから。

英語で自分の意思をうまく伝えることができないから。

彼らの文化や習慣について十分知らないから。

「中・中」、「中・日」、「中・他」それぞれ独自の項目については、調査結果に基づき、以下のように作成した。「中・中」グループについては、「中国における出身地域の差異」、「言葉を練習するなどの目的で、同国人より外国人と交流したい人がいる」、「周りに中国人留学生が多すぎる」といった回答が見られたため、これらの回答に基づき、「出身地が異なり、距離感を感じるから」、「自分にとって外国語の勉強にならないと考えるから」、「周りの中国人留学生が日本人や欧米人留学生を好んでいると感じるから」、「周りの中国人留学生が多すぎて、彼らとの交流に疲れるから」という四つの質問項目を作成した。

「中・日」グループについては、「中国人に対して偏見を持つこと」、「日本人は冷たくて、親しくなれない」、「周りに日本人学生が少ない、日本人より外国人のほうが多い」、「日本人学生は遠慮し過ぎる、心の底までさらけ出すことが難しい」、「日本人学生は友達作りに消極的である」といった回答に基づき、さらに横田 (1991a) の質問項目も参考にして、「日本人学生は遠慮し過ぎて、なかなか本当の気持ちを出さないから」、「日本人学生から留学生と友人になろうという気持ちが感じられないから」、「周りに日本人学生が少なく、外国人のほうが多いから」、「日本人学生が冷たいと感じるから」、「日本人学生の偏見を感じて

いるから」という項目を作成した。また、横田（1991a）の質問項目では、日本人学生の欧米志向という項目「日本人は欧米の留学生を好んでいると感じるから」があり、これは中国人留学生にも当てはまると考えられるため、「中・日」グループに追加することにした。

「中・他」グループについては、「他国の留学生に対して距離感がある」、「信仰、宗教の違い」、「中国人留学生より、相手は日本人学生ともっと友人関係を作りたい」、「相手は他人の気持ちを考えない」といった回答に基づき、「他国からの留学生に対して距離感を感じるから」、「中国人留学生より、彼らが日本人学生と友人関係を作りたいと感じるから」、「彼らに中国人留学生と友人になろうという気持ちが感じられないから」、「宗教や信仰などのことで、彼らとの友人付き合いで遠慮することが多いから」、「彼らが自分の意見や気持ちを率直に言ってくるから」という五つの質問項目を作成した。

上記のように、阻害要因の質問項目は、3グループに共通する11の質問項目のほか、「中・中」グループ4項目、「中・日」グループ10項目、「中・他」グループ10項目から構成される。具体的な内容は以下に示す通りである。

「中・中」4項目：

- ①出身地が異なり、距離感を感じるから。
- ②自分にとって外国語の勉強にならないと考えるから。
- ③周りの中国人留学生が日本人や欧米人留学生を好んでいると感じるから。
- ④周りの中国人留学生が多すぎて、彼らとの交流に疲れるから。

「中・日」10項目

- ①日本語がうまくできなくて、自分の意思をうまく伝えることができないから。
- ②自分は日本の文化や習慣について十分に知らないから。
- ③日本人学生は遠慮し過ぎて、なかなか本当の気持ちを出さないから。
- ④日本人学生が欧米の留学生を好んでいると感じるから。
- ⑤日本人学生から留学生と友人になろうという気持ちが感じられないから。
- ⑥周りに日本人学生が少なく、外国人のほうが多いから。
- ⑦日本人学生が冷たいと感じるから
- ⑧ライフスタイルに共通性がないから。
- ⑨価値観が違い、互いになかなか理解できないから。

⑩日本人学生の偏見を感じているから。

「中・他」10項目：

①他国からの留学生に対して距離感を感じるから。

②中国人留学生より、彼らが日本人学生と友人関係を作りたいと感じるから。

③ライフスタイルに共通性がないから。

④彼らは日本語や中国語をうまく話せないから。

⑤彼らに中国人留学生と友人になろうという気持ちが感じられないから。

⑥価値観が違い、互いになかなか理解できないから。

⑦宗教や信仰などのことで、彼らとの友人付き合いで遠慮することが多いから。

⑧彼らが自分の意見や気持ちを率直に言うから。

⑨英語で自分の意思をうまく伝えることができないから。

⑩彼らの文化や習慣について十分知らないから。

第五章 在日中国人留学生のソーシャル・ネットワークとその関連要因

本章の目的は大規模大学である九州大学を事例に、在日中国人留学生の友人関係構築の実態及びその阻害要因を明らかにすることである。具体的に、以下の二つの課題を解決することを目的とする。

課題 1 :

在日中国人留学生はどのような友人関係を構築しているのか、諸関連要因による影響は何か。

課題 2 :

在日中国人留学生の友人関係の構築を妨げる要因は何か、諸関連要因による影響は何か。

第一節 分析方法

友人関係の分析では、12 の場面に答える前提として、中国人留学生同士、日本人学生、他国の留学生の友人ができていなければならない。そのため、「中・中」、「中・日」、「中・他」のいずれのグループにおいても、自己評価の質問項目で「全く当てはまらない」と選択した調査対象者、また 12 の項目で逆転項目^⑩（他の質問項目とは測定の向きが逆になっていること）を除きすべて「全く当てはまらない」と選択した調査対象者については、該当のグループの友人がいないと判断し、分析対象から除外した。この基準で判断した結果、「中・中」、「中・日」グループは 95 人全員、「中・他」グループは 77 人を分析対象とした。

「中・中」、「中・日」、「中・他」はどのような友人関係を構築しているかを明らかにするために、各項目において、「非常に当てはまる」と「やや当てはまる」を選択した調査対象者の比率を算出した。この方法は多くの調査報告で用いられている（日本生活協同組合連合会『料理とお弁当に関する調査』、連合日本労働組合総連合会『理想の日本像に関する意識調査』など）。「非常に当てはまる」と「やや当てはまる」を選択した調査対象者の割合が高ければ、該当項目における友人付き合いのつながりが深いと考えられる。本研究では、50%という中央値を評価基準とし、「非常に当てはまる」と「やや当てはまる」を選択した人の割合が50%を超える場合、該当項目における友人付き合いのつながりが深いとする。

また、友人関係の関連要因を検討するために、まず、逆転項目⑩を処理した上で（他の質問項目と測定の向きを一致にすること）、各項目に対して点数を付け（「非常に当てはまる」4～「全く当てはまらない」1）、「中・中」、「中・日」、「中・他」グループの平均値を算出した。続いて、性別、専攻、経済状況、居住形態により、それぞれのグループの平均得点に差が見られるかを検討するため、「男・女」、「理系・文系」、「奨学金あり・奨学金なし」、「アパート・学生寮など」を独立変数、それぞれのグループの平均得点を従属変数としたt検定を行った。また、在学期間、外国語能力が友人関係にどのような影響を及ぼすかを検討するため、在学期間、外国語能力を独立変数、それぞれのグループの平均得点を従属変数とした相関分析を行った。さらに、諸関連要因が及ぼす様々な面における友人付き合いへの影響を見るため、「中・中」、「中・日」、「中・他」3グループに対して因子分析を行い、因子別に諸関連要因による影響を検討することにした。具体的には、「男・女」、「理系・文系」、「奨学金あり・奨学金なし」、「アパート・学生寮など」を独立変数、因子の平均値を従属変数としたt検定を行った。また、在学期間、日本語能力を独立変数、因子の平均値を従属変数とした相関分析を行った。

阻害要因の分析については、有効回答 95 部のうち、「中・他」の 3 人が記入の不備があり、「中・他」グループは 92 人の回答を用いた。まず、グループごとに因子分析を行い、各グループの阻害要因因子を抽出することにした。また、諸関連要因による影響を検討するために、まず、各グループの阻害要因項目に対して点数を付け（「非常に当てはまる」4～「全く当てはまらない」1）、「中・中」15 項目、「中・日」21 項目、「中・他」21 項目の平均値を算出した。それから、性別、専攻、経済状況、居住形態により、それぞれのグループの平均得点に差が見られるか検討するため、「男・女」、「理系・文系」、「奨学金あり・奨学金なし」、「アパート・学生寮など」を独立変数、それぞれのグループの平均得点を従属変数とした t 検定を行った。また、在学期間、外国語能力が阻害要因にどのような影響を及ぼすか検討するため、在学期間、外国語能力を独立変数、それぞれのグループの平均得点を従属変数とした相関分析を行った。

第二節 九州大学在学生の事例分析と結果

1-1 調査対象者の基本属性

調査対象者 95 名のうち、男性は 40 名 (42.1%)、女性は 55 名 (57.9%) である。専攻は、

理科系 39 名 (41.1%)、文科系 56 名 (58.9%) であり、それぞれ 4 割以上と 5 割以上を占めている。ここから、性別や専攻について、調査対象者のバランスがとれていることがわかる。調査対象者の年齢は 20 歳から 30 歳までである。在学期間については、95 人のうち、半年以内が 17 人 (18%)、半年～1 年が 15 人 (16%)、1 年以上～1 年間半が 15 人 (16%)、一年間半以上～2 年間で 16 人 (17%)、2 年以上が 32 人 (33%) である。在学身分については、博士課程が 28 人 (30%)、修士課程が 35 人 (37%)、研究生が 21 人 (22%)、学部生と交換留学生がそれぞれ 7 人 (8%)、3 人 (3%) である。経済状況について、自費で奨学金なしの学生が 62 人 (65%) であるのに対して、国費または自費で奨学金ありの学生が 33 人 (35%) である。居住方式について、アパートに住んでいる学生が 62 人 (65%) であるのに対して、留学生会館や学生寮、公営住宅に住んでいる学生は 33 人 (35%) である。また、外国語能力 (表 5-1) については、調査対象者の日本語能力は上級と中級に集中しているのに対して、英語能力は中級と初級に集中していることがわかった。全体を通して見ると、英語より日本語のほうがレベルが高い傾向である。

表 5-1 被調査者の外国語能力 単位：人

レベル	日本語能力		英語能力	
	人数	比率%	人数	比率%
超級	17	17.9	4	4.2
上級	32	33.7	19	20.0
中級	34	35.8	46	48.4
初級	8	8.4	26	27.4
初級以下	4	4.2	0	0

1-2 友人関係

1-2-1 中国人留学生の友人関係について

「中・中」、「中・日」、「中・他」の三つのグループにおける中国人留学生の友人関係の結果は図 5-1 に示している。図 5-1 から、同項目において、中国人留学生は同国人留学生、日本人学生、他国の留学生とそれぞれどのような友人関係を構築しているかが見えてくる。

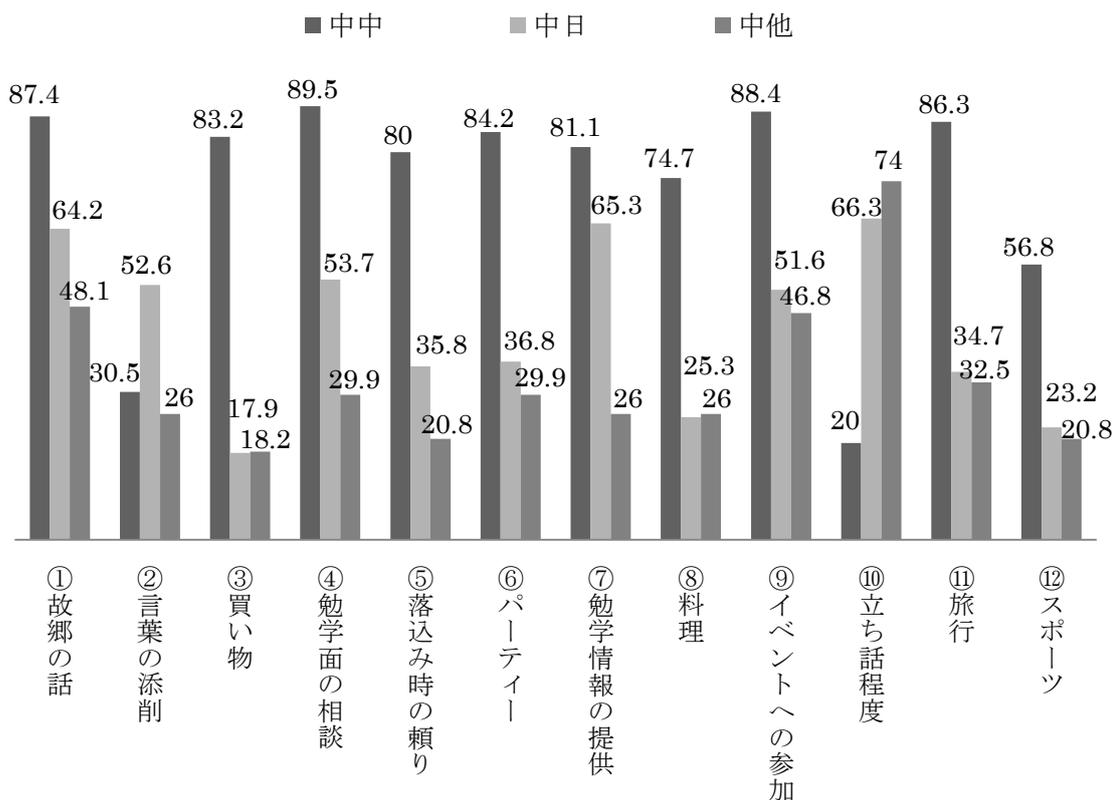


図5-1 在日中国人留学生の友人関係（九州大学）

単位：% 各項目において「非常に当てはまる」と「やや当てはまる」を選択した人の比率

図5-1の通り、中国人同士の友人付き合いは項目②「言葉の添削」と逆転項目⑩を除き、すべての項目において「非常に当てはまる」と「やや当てはまる」を選択した人が全体の50%を超えている。①「故郷の話」は自文化の共有に関するものであり、⑧「料理」については、一緒に自国の料理を作る場合は自文化の共有機能とともに、レクリエーション機能も有する。③「買い物」、⑥「パーティー」、⑨「イベントへの参加」、⑪「旅行」、⑫「スポーツ」は同国人の間ではレクリエーションの機能を果たしている。④「勉学面の相談」、⑦「勉学情報の提供」は勉学に関する項目であり、⑤「落込み時の頼り」は情緒的助けに関する項目である。このように、中国人留学生同士の間では、自文化の共有、勉学、レクリエーション、情緒的助けなどすべての面において深いつながりがあることが示されている。

日本人学生との場合、項目①、②、④、⑦、⑨、⑩において「非常に当てはまる」と「やや当てはまる」を選択した人が全体の50%を超えている。項目②、④、⑦は勉学に関するもので、項目①、⑨は普段の話やイベントへの参加を通して相互理解を深めるという異文

化理解に関する項目である。項目⑩は友人付き合いの深さを示している。上記の分析から、中国人留学生と日本人学生の友人付き合いは勉強サポートと異文化理解に集中しており、また、その関係は浅く、日常の立ち話程度にとどまっていると言えよう。

他国の留学生との場合、「非常に当てはまる」と「やや当てはまる」を選択した人が全体の50%を超える項目は⑩のみであり、項目①と⑨は45%を超えている。項目①、⑨は「中・日」と同じく異文化理解に関するものであるため、中国人留学生と他国からの留学生との友人付き合いは異文化理解という観点においては、ある程度のつながりがあるが、その関係は浅く、日常の立ち話程度にとどまっていると言える。つまり、友人の国籍によって中国人留学生の友人関係には違いが見られる。このように先行研究で見逃された3グループ間の比較考察という不足点に対して、本研究は検討を行い、それぞれのグループの友人関係を明らかにした。

1-2-2 関連要因の検討

関連要因について検討した結果、外国語能力と中国人留学生の友人関係について、日本語能力と日本人学生との友人関係の間に低い正の相関関係が認められ ($r=.371, p<.01$)、英語能力と他国からの留学生との友人関係の間に低い正の相関関係が認められ ($r=.302, p<.01$)、中国人留学生と日本人学生あるいは他国からの留学生との友人関係に外国語能力が影響を与える可能性があることがわかった (表 5-2、5-3)。すなわち、中国人留学生の日本語能力が高ければ高いほど、日本人学生との友人付き合いが深く、英語能力が高ければ高いほど、他国の留学生との友人付き合いが深いと言える。

その他、英語能力と中国人留学生同士の友人関係の間には低い正の相関関係が認められた ($r=.224, p<.05$)。中国人留学生同士の友人付き合いは言語による影響がほとんどないはずであるが、今回の調査の結果では国際コースに所属する留学生の回答からの影響が現れたと考えられる。国際コースに所属する留学生は英語の使用を中心にし、日本語の使用が少ないため、日本人学生との友人付き合いが少なく、代わりに同国人との友人付き合いが深くなる可能性がある。しかし、本研究では、国際コースと日本語コースの区別がなかった。この点については今後の課題としたい。その他、在学期間と友人関係の間には相関関係が見られなかった。

表 5-2 日本語能力と友人関係との相関関係

	M	SD	N	相関係数
中・中	3.23	.64	95	-.130
中・日	2.29	.60	95	.371*
中・他	1.93	.75	77	.025

* $p < .01$

表 5-3 英語能力と友人関係との相関関係

	M	SD	N	相関係数
中・中	3.23	.64	95	.224*
中・日	2.29	.60	95	.143
中・他	1.93	.75	77	.243*

* $p < .05$

1-2-3 因子別の検討

(1) 「中・中」グループ

友人関係を測定する 12 項目のうち、逆転項目⑩「日本人学生との友人付き合いでは、単に立ち話をする程度に留まっている」は友人関係の深さに関する項目で、具体的な友人付き合いの内容ではないため、因子分析の対象から除外した。「中・中」グループの 11 項目に対して因子分析を行った結果、二つの因子が抽出された（表 5-4）。第一因子は中国人留学生と一緒に食事、旅行、料理などのことを通して楽しむことや、母国、故郷のことを話し合うといった自文化共有などのことであり、「勉学外の友人付き合い」とした。第二の因子は学業の相談、勉学情報の提供や言葉の添削など勉学に関することで、「勉学面の友人付き合い」と名付けた。

また、因子別に分析した結果、いずれの関連要因による影響も見られなかった。

表 5-4 「中・中」友人関係因子分析結果

	因子 I	因子 II
因子 I 「勉学外の友人付き合い」		
⑥中国人留学生の友人と一緒にパーティーや食事会に行っている。	. 776	. 354
⑨イベントがあるとき、中国人留学生の友人を誘って一緒に参加している。	. 761	. 211
⑪観光や見学旅行に行くとき、中国人留学生の友人と一緒にいる。	. 719	. 373
①自分の母国や故郷のことを中国人留学生の友人とよく話している。	. 629	. 252
⑤落ち込んだ際、中国人留学生の友人に頼る。	. 627	. 379
⑧中国人留学生の友人と一緒に料理をして楽しんでいる。	. 603	. 295
③よく中国人留学生の友人と一緒に買い物に出かけている。	. 495	. 334
⑫よく中国人留学生の友人と一緒にスポーツをしている。	. 467	. 160
因子 II 「勉学面の友人付き合い」		
④学業に困ったことがあるとき、中国人留学生の友人に相談している。	. 348	. 825
⑦中国人留学生の友人から勉強や研究に必要な情報の提供がある。	. 249	. 774
②レポート提出や発表に際して、中国人留学生の友人は言葉遣いを添削してくれる。	. 207	. 399

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

(2) 「中・日」グループ

「中・日」グループにおいても、逆転項目⑩「日本人学生との友人付き合いでは、単に立ち話をする程度に留まっている」を除外した。また、複数の因子に高い寄与を示している項目⑤「落ち込んだ際、日本人学生の友人に頼る」を外し、10項目を対象として因子分析を行った結果、三つの因子が抽出された（表 5-5）。第一因子は、一緒にパーティーや食事会に参加することや、一緒に観光に行くこと、料理をすることなどであるため、「共同リラックス行動」と命名した。第二因子は日本人学生から勉学情報の提供、学業に関する相談や言葉の添削などに関するもので、「勉学サポート」と名付けた。第三因子は、一緒にイベントに参加し相互理解を促進することや、互いの国・故郷のことを話し合うことであるため、「異文化理解」因子とした。

表 5-6 は因子別に分析を行った結果である。日本語能力は 3 因子とも弱い正の相関関係が認められた。この結果から、日本人学生との「共同リラックス行動」、「勉学サポート」、

「異文化理解」のいずれの面の友人付き合いにおいても中国人留学生の日本語能力が関係していることが窺える。

表 5-5 「中・日」友人関係の因子分析結果

	因子 I	因子 II	因子 III
因子 I 「共同リラックス行動」			
①観光や見学旅行に行くとき、日本人学生の友人と一緒にいる。	.719	.301	.046
⑥日本人学生の友人と一緒にパーティーや食事会に行っている。	.712	.300	.330
⑧日本人学生の友人と一緒に料理をして楽しんでいる。	.599	.114	.203
⑫よく日本人学生の友人と一緒にスポーツをしている。	.484	.019	.258
③よく日本人学生の友人と一緒に買い物に出かけている。	.461	.367	.054
因子 II 「勉強サポート」			
⑦日本人学生の友人から勉強や研究に必要な情報の提供がある。	.105	.878	.254
④学業に困ったことがあるとき、日本人学生の友人に相談している。	.199	.634	.304
②レポート提出や発表に際して、日本人学生の友人は言葉遣いを添削してくれる。	.257	.567	.071
因子 III 「異文化理解」			
⑨イベントがあるとき、日本人学生の友人を誘って一緒に参加している。	.382	.174	.687
①自分の母国や故郷のことを日本人学生の友人とよく話している。	.131	.347	.557

因子抽出法: 主因子法

回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

表 5-6 日本語能力と因子別の相関関係 (「中・日」)

	M	SD	N	相関係数
共同リラックス行動	1.97	.63	95	.259*
勉強サポート	2.72	.88	95	.345**
異文化理解	2.58	.78	95	.335**

* $p < .05$ ** $p < .01$

(3) 「中・他」グループ

「中・他」グループにおいても、逆転項目⑩「日本人学生との友人付き合いでは、単に

立ち話をする程度に留まっている」を除外した。「中・他」グループの11項目に対して因子分析を行った結果、二つの因子が抽出された（表 5-7）。第一因子は一緒に食事、旅行、料理などを通して楽しむことや、イベントや互いの国・故郷の話を通して相互理解を深めることであるため、「レクリエーション・異文化理解」因子とした。第二因子は学業の相談、勉強情報の提供や言葉の添削など勉強に関することと悩みの相談といった情緒的な助けであるため、「勉強・情緒的サポート」と名付けた。

表 5-7 「中・他」友人関係の因子分析結果

	因子 I	因子 II
因子 I 「レクリエーション・異文化理解」		
⑥他国の留学生の友人と一緒にパーティーや食事会に行っている。	. 872	. 348
⑨イベントがあるとき、他国の留学生の友人を誘って一緒に参加している。	. 829	. 322
⑪観光や見学旅行に行くとき、他国の留学生の友人と一緒にいる。	. 713	. 414
⑫よく他国の留学生の友人と一緒にスポーツをしている。	. 654	. 210
⑧他国の留学生の友人と一緒に料理をして楽しんでいる。	. 643	. 392
①自分の母国や故郷のことを他国の留学生の友人とよく話している。	. 576	. 391
③よく他国の留学生の友人と一緒に買い物に出かけている。	. 508	. 379
因子 II 「勉強・情緒的サポート」		
④学業に困ったことがあるとき、他国の留学生の友人に相談している。	. 319	. 833
⑦他国の留学生の友人から勉強や研究に必要な情報の提供がある。	. 259	. 780
⑤落ち込んだ際、他国の留学生の友人に頼る。	. 526	. 654
②レポート提出や発表に際して、他国の留学生の友人は言葉遣いを添削してくれる。	. 331	. 501

因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

因子別に分析した結果、英語能力は「レクリエーション・異文化理解」因子との間で弱い正の相関関係 ($r=.234, p<.05$) が認められ、また「勉強・情緒的サポート」との間で相関係数は 10%水準で弱い正の相関関係 ($r=.209, p<.1$) の傾向が見られた（表 5-8）。この結果から、他国の留学生との「レクリエーション・異文化理解」、「勉学的・情緒的サポート」面の友人付き合いにおいて、中国人留学生の英語能力が高いほど、その友人付き合いが深

い傾向があることがわかる。

表 5-8 英語能力と因子別の相関関係（「中・他」）

	M	SD	N	相関係数
因子 I	1.98	.80	77	.234**
因子 II	1.85	.83	77	.209*

* $p < .1$ ** $p < .05$

1-3 友人関係構築の阻害要因

1-3-1 因子分析の結果

(1) 中国人留学生同士

中国人留学生同士のグループにおいて、複数の因子に同程度の負荷を示している項目⑧「一緒に参加できる国際交流パーティーやイベントが少ないから」を外し、14項目を対象として因子分析を行った結果、三つの因子が抽出された（表 5-9）。第一因子は、互いの性格や趣味、年齢の違い、時間的や経済的に余裕がないことによる友人関係の構築しにくさに関するもので、「性格や趣味の不一致・余裕なし」と命名した。第二因子は、大学で、或いは普段の生活で相手と接触する機会が少ないという要因に関するもので、これを「接触機会の少なさ」と名付けた。第三因子は、同国人との交流に興味がない、もしくは疲れていることに関するもので、「同国人交流への倦怠感」因子とした。

(2) 中国人留学生と日本人学生

中国人留学生と日本人学生のグループにおいて、複数の因子に同程度の負荷を示している項目⑩「日本人学生から留学生と友人になろうという気持ちが感じられないから」、⑪「日本人学生が冷たいと感じるから」を外し、19項目を対象として因子分析を行った結果、五つの因子が抽出された（表5-10）。第一因子は、「中・中」グループと同じく大学で、或いは普段の生活で相手と接触する機会が少ないといった要因に関するもので、「接触機会の少なさ」と命名した。第二因子も「中・中」グループと同じく、互いの性格や趣味、年齢の違い、時間的や経済的に余裕がないことによる友人関係の構築しにくさに関するもので、「性格や趣味の不一致・余裕なし」と名付けた。第三因子は、日本人学生の友人付き合いの好みや日本人学生からの偏見という中国人留学生の認知に関するもので、「日本

人学生の友人付き合い志向」と命名した。第四因子は、中国人留学生の自分の日本語能力や日本の文化、習慣への接触に対する不安といったもので、「言語不安、異文化接触不安」と命名した。第五因子は、価値観の違いによる相互理解の困難や共通の生活の場がないといった理由に関するもので、「文化間差異」因子とした。

(3) 中国人留学生と他国の留学生

中国人留学生と他国の留学生のグループにおいて、共通性が低い項目⑥「相手がマナーを守らないと感じるから」(.255)を外し、20項目を対象として因子分析を行った結果、四つの因子が抽出された(表5-11)。第一因子は、中国人留学生が認知している他国からの留学生の友人付き合いの好みのほか、互いの価値観や宗教、信仰による阻害要因であるため、「文化間差異・他国人留学生の友人付き合い志向」と名付けた。第二因子は、「中・日」グループと同じく、言語問題による障害や相手の文化習慣への接触に対する不安といった要因に関するもので、「言語不安、異文化接触不安」と命名した。第三因子は、「中・中」、「中・日」両グループと同じく、互いの性格や趣味、年齢の違い、時間的や経済的に余裕がないことによる友人関係の構築しにくさといった要因で、「性格や趣味の不一致・余裕なし」と命名した。最後に第四因子も、「中・中」、「中・日」両グループと同じく、大学で、或いは普段の生活で相手と接触する機会が少ないという要因に関するもので、「接触機会の少なさ」と呼ぶことにした。

表 5-9 「中・中」の阻害要因因子

	I	II	III
第 I 因子 「性格や趣味の不一致・余裕なし」			
②互いに性格が合わないから。	.732	.127	-.045
⑦相手と共通の趣味や話題がないから。	.703	.377	-.027
⑥相手がマナーを守らないと感じるから。	.611	.001	.106
①生活と勉強だけで精一杯で、友人を作る といった余裕があまりないから。	.567	.326	.125
⑤年齢差があり、みぞを感じるから。	.547	.414	.232
⑨一緒に遊ぶときに、お金がかかるなど、 経済的に余裕がないから。	.501	.246	.378
⑩人付き合いにあまり興味がなく、面倒く さいと感じるから。	.479	.400	.249
第 II 因子 「接触機会の少なさ」			
④居住地が遠いから。	.213	.829	.038
⑪相手と接触する頻度が少ないから。	.241	.670	.134
③専攻や研究室が異なり、一緒に授業を受 ける機会が少ないから。	.085	.605	.104
第 III 因子 「同国人交流への倦怠感」			
⑭周りの中国人留学生が日本人や欧米人留 学生を好んでいると感じるから。	.008	.024	.804
⑬自分にとって外国語の勉強にならないと 考えるから。	-.046	.098	.703
⑫出身地が異なり、距離感を感じるから。	.283	.152	.530
⑮周りの中国人留学生が多すぎて、彼らと の交流に疲れるから。	.432	.127	.496

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

表5-10 「中・日」の阻害要因因子

	I	II	III	IV	V
第I因子 「接触機会の少なさ」					
①相手と接触する頻度が少ないから。	.771	.095	.090	.049	.332
③専攻や研究室が異なり、一緒に授業を受ける機会が少ないから。	.645	-.038	.252	.014	-.066
④居住地が遠いから。	.596	.241	.109	.043	-.099
⑧一緒に参加できる国際交流パーティーやイベントが少ないから。	.540	.263	-.175	.199	.066
⑩周りに日本人学生が少なく、外国人のほうが多いから。	.464	.115	.280	-.185	.179
第II因子 「性格や趣味の不一致・余裕なし」					
②互いに性格が合わないから。	.051	.679	.017	.026	.033
⑦相手と共通の趣味や話題がないから。	.397	.603	-.168	-.008	.439
⑥相手がマナーを守らないと感じるから。	.032	.539	.166	.040	.050
⑩人付き合いにあまり興味がなく、面倒くさいと感じるから。	.236	.504	.113	.238	-.041
⑤年齢差があり、みぞを感じるから。	.349	.488	.354	.073	-.017
⑨一緒に遊ぶときに、お金がかかるなど、経済的に余裕がないから。	.083	.482	.358	.036	-.055
①生活と勉強だけで精一杯で、友人を作るといった余裕があまりないから。	.256	.386	.358	.247	.018
第III因子 「日本人学生の友人付き合い志向」					
⑮日本人学生が欧米の留学生を好んでいると感じるから。	.163	.211	.678	.162	-.019
⑳日本人学生の偏見を感じているから。	.155	.103	.581	-.126	.165
⑭日本人学生は遠慮し過ぎて、なかなか本当の気持ちを出さないから。	-.003	.047	.454	.335	.301
第IV因子 「言語不安、異文化接触不安」					
⑫日本語がうまくできなくて、自分の意思をうまく伝えることができないから。	.065	.052	-.075	.872	.070
⑬自分は日本の文化や習慣について十分に知らないから。	.010	.194	.190	.677	.161
第V因子 「文化間差異」					
⑩ライフスタイル（生活の場）に共通性がないから。	.127	-.118	.037	.225	.654
⑳価値観が違い、互いになかなか理解できないから。	-.052	.256	.422	.017	.611

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

表 5-11 「中・他」の阻害要因因子

項目	I	II	III	IV
第 I 因子				
「文化間差異・他国人留学生の友人付き合い志向」				
⑯彼らに中国人留学生と友人になろうという気持ちが感じられないから。	. 858	-. 044	. 125	. 318
⑰価値観が違い、互いになかなか理解できないから。	. 696	. 251	. 204	. 050
⑱宗教や信仰などのことで、彼らとの友人付き合いで遠慮することが多いから。	. 630	. 197	-. 034	-. 158
⑲彼らが自分の意見や気持ちを率直に言うから。	. 579	. 258	. 215	-. 121
⑬中国人留学生より、彼らが日本人学生と友人関係を作りたいと感じるから。	. 541	. 132	. 090	. 182
第 II 因子 「言語不安、異文化接触不安」				
⑳英語で自分の意思をうまく伝えることができないから。	. 010	. 751	-. 011	. 259
⑮彼らは日本語や中国語をうまく話せないから。	. 157	. 717	. 093	. 139
⑫他国からの留学生に対して距離感を感じるから。	. 398	. 607	. 194	. 138
⑭ライフスタイル（生活の場）に共通性がないから。	. 305	. 531	-. 114	. 267
㉑彼らの文化や習慣について十分知らないから。	. 394	. 525	. 180	-. 229
第 III 因子 「性格や趣味の不一致・余裕なし」				
⑨一緒に遊ぶときに、お金がかかるなど、経済的に余裕がないから。	. 136	-. 089	. 648	-. 076
④居住地が遠いから。	-. 163	. 077	. 596	. 289
⑤年齢差があり、みぞを感じるから。	. 042	. 044	. 587	. 110
①生活と勉強だけで精一杯で、友人を作るといった余裕があまりないから。	. 219	. 100	. 559	. 301
②互いに性格が合わないから。	. 231	. 003	. 522	-. 095
⑦相手と共通の趣味や話題がないから。	. 080	. 308	. 474	. 351
⑩人付き合いにあまり興味がなく、面倒くさいと感じるから。	. 202	. 230	. 469	. 207
第 IV 因子 「接触機会の少なさ」				
⑪相手と接触する頻度が少ないから。	. 127	. 380	. 080	. 596
⑧一緒に参加できる国際交流パーティーやイベントが少ないから。	. 126	. 224	. 179	. 574
③専攻や研究室が異なり、一緒に授業を受ける機会が少ないから。	-. 247	-. 009	. 380	. 467

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

(4) 3グループ間の検討

3グループに対して因子分析を行った結果、「性格や趣味の不一致・余裕なし」、「接触機会の少なさ」といった因子は「中・中」、「中・日」、「中・他」に共通する因子であることがわかった。また、「言語不安、異文化接触不安」、「相手の友人付き合い志向」、「文化間差異」因子は「中・日」、「中・他」に共通する因子であり、「中・中」独自の因子として、「同国人交流への倦怠感」が確認された。

「中・日」、「中・他」両グループに共通する因子が抽出されたが、その具体的な質問項目においては、両者に違いが見られる。「中・日」では日本人学生からの偏見を感じるという「日本人学生の友人付き合い志向」、「中・他」では宗教による「文化間差異」といった要因が、それぞれのグループ独自の阻害要因と考えられる。また、「相手が自分と友人になろうという気持ちが感じられないから」という項目について、「中・日」グループでは分析対象から外す前の結果では、第三因子「日本人学生の友人付き合い志向」と第四因子「言語不安、異文化接触不安」両方に高い寄与を示しているが、「中・他」グループでは第一因子「文化間差異・他国人留学生の友人付き合い志向」のみに高い寄与を示している。ここから、相手が自分と友人になろうという気持ちが感じられないということは、他国の留学生との間では、他国人留学生の友人付き合い志向に留まるが、日本人学生との間では、日本人学生の友人付き合い志向のみならず、中国人留学生から見る日本人学生との異文化接触不安にも関連していることが窺える。「中・日」、「中・他」両グループに共通する因子はあっても、具体的な内容については差異があることから、日本人学生や他国の留学生との友人付き合いにおいて、それぞれのグループに相応しいソーシャル・スキルを身につけた上で、友人関係を構築する必要があると考えられる。

1-3-2 関連要因の検討

t検定を行った結果、「中・日」グループにおける居住形態において10%水準で有意な傾向が認められた ($t=-1.870$, $df=91$, $p<.1$) (表5-12)。ここから、学生寮などに住んでいる中国人留学生より、アパートに住んでいる中国人留学生のほうが日本人学生とより容易に友人関係を構築できていることが窺える。田中・横田(1992)では居住形態別に留学生のストレスを分析し、寮生は日本人学生との共同生活でストレス場面に遭遇する頻度が高く、日本人との関係の難しさを感じていると指摘している。学生寮に住むことは留学生、日本人学生両方に対して異文化理解の促進に役立つが、一緒に寮に住むということだけで

はよりよい友人関係が構築できるとは言えない。いかにして留学生のストレスを解消し、両方の友人関係を促進させるかという点は今後も検討すべき課題であろう。

表 5-12 居住形態別 t 検定結果

	アパート			学生寮など			t 値
	M	SD	N	M	SD	N	
「中・中」	1.88	.56	62	1.95	.51	33	-.618
「中・日」	2.19	.51	61	2.38	.38	32	-1.870*
「中・他」	2.29	.52	58	2.33	.47	33	-.285

* $p < .1$ 「中・日」2人、「中・他」1人記入漏れあり。

相関分析を行った結果、英語能力と「中・他」の間に弱い負の相関関係 ($r = -.345, p < .001$) が認められた (表5-13)。ここから、中国人留学生の英語能力が低いほど、「中・他」間の友人関係構築はより難しくなると思われる。これは「中・他」グループの「言語不安」因子とも関連していると考えられる。留学生は日本にいながらも、大学というグローバル環境において英語の使用も避けられない。そのため、留学生同士の友人関係を促進させるには日本語のみならず、ある程度の英語能力を身につけることも必要である。

表5-13 英語能力と3グループ平均値の相関分析結果

英語能力	M	SD	N	相関係数
「中・中」	1.90	.54	95	-.152
「中・日」	2.26	.47	93	-.069
「中・他」	2.31	.50	91	-.345*

* $p < .01$ 「中・日」2人、「中・他」1人記入漏れあり。

1-3-3 因子別の検討

(1) 「中・中」グループ

性別、専攻、経済状況、居住形態により、「中・中」グループ3因子の平均値に差が見られるか検討するため、「男・女」、「理系・文系」、「奨学金あり・奨学金なし」、「アパート・

学生寮など」を独立変数、それぞれのグループの平均得点を従属変数としたt検定を行った。また、在学期間が3因子にどのような影響を及ぼすか検討するため、在学期間を独立変数、3因子の平均値を従属変数とした相関分析を行った。

その結果、いずれの因子においても上記の属性による統計的の有意な差が見られなかった。この結果から、中国人留学生同士の友人付き合いにおいて、性別、専攻、経済状況などの状況の違いによる阻害要因の差異はほとんどないと言える。

(2)「中・日」グループ

「中・日」グループの5因子別に検討した結果、居住形態(表5-14)、日本語能力(表5-15)、在学期間(表5-16)からの影響が見られた。

居住形態については、「接触機会の少なさ」因子に居住形態による統計的の有意な差が見られた($t=-3.497$, $df=85.797$, $p<.01$)。表5-14から、アパートに住んでいる中国人留学生より、学生寮などに住んでいる留学生のほうが日本人学生との接触機会が少ないと言える。通常、学生寮に住む場合、日本人学生との接触機会が多いはずだが、このような結果になった原因として、次の2点が考えられる。一つ目は、本研究の対象は大学院生に集中しており、学生寮に住んでいても、研究のせいでもほとんど日本人学生との交流がないことが予想される。二つ目は、アパートに住んでいる留学生より、学生寮に住んでいる留学生のほうが日本人学生との交流への期待が高いという可能性である。学生寮に住んでいる留学生は実際に交流することがあってもその期待が高すぎるために、質問項目に答える際はアパートに住んでいる学生よりも日本人学生との接触機会が少ないという回答結果となったと考えられる。実際の原因を明らかにするためには、調査対象大学や調査対象者を増やし、さらなる検討や調査対象者に対する質的調査を行う必要がある。

日本語能力と「中・日」阻害要因因子の相関分析の結果を通して、「言語不安・異文化接触不安」因子との間に負の相関関係($r=-.548$, $p<.01$)が見られた。この結果から、中国人留学生の日本語能力が高ければ高いほど、言語や異文化接触による不安が少なくなることがわかる。また、在学期間と阻害要因因子との相関分析の結果、「言語不安・異文化接触不安」因子との間に弱い負の相関関係($r=-.268$, $p<.01$)が見られた。この結果から、在学期間が長ければ長いほど、言語や異文化接触による不安が少なくなると言える。上記の分析により、日本語能力と在学期間から「言語不安・異文化接触不安」因子への影響が明らかになった。

表 5-14 居住形態別 t 検定結果（「中・日」因子別）

	アパート			学生寮など			t 値
	M	SD	N	M	SD	N	
因子 I	2.25	.78	62	2.73	.55	33	-3.150*
因子 II	1.91	.57	62	1.98	.60	33	-.543
因子 III	2.30	.66	61	2.45	.70	33	-1.056
因子 IV	2.37	.88	62	2.52	.76	33	-.796
因子 V	2.51	.73	62	2.53	.63	32	-.153

* $p < .01$ 2人記入漏れあり

表5-15 日本語能力別相関分析結果（「中・日」因子別）

	M	SD	N	相関係数
因子 I	2.42	.74	95	-.058
因子 II	1.94	.58	95	-.042
因子 III	2.35	.68	94	.005
因子 IV	2.42	.84	95	-.548*
因子 V	2.52	.69	94	-.088

* $p < .01$ 2人記入漏れあり

表5-16 在学期間別相関分析結果（「中・日」因子別）

	M	SD	N	相関係数
因子 I	2.42	.74	95	.027
因子 II	1.94	.58	95	.061
因子 III	2.35	.68	94	-.048
因子 IV	2.42	.84	95	-.268*
因子 V	2.52	.69	94	-.031

* $p < .01$ 2人記入漏れあり

(3) 「中・他」グループ

「中・他」グループの4因子別に検討した結果、英語能力(表5-17)、在学期間(表5-18)からの影響が見られた。

英語能力と「中・他」阻害要因因子との相関分析の結果、「言語不安・異文化接触不安」因子との間に負の相関関係($r = -.459, p < .01$)、「接触機会の少なさ」因子との間に弱い負の相関関係($r = -.340, p < .01$)が見られた。この結果から、中国人留学生の英語能力が高ければ高いほど、他国の留学生と友人として付き合う際に言語や異文化接触による不安が少なくなることがわかる。また、「接触機会の少なさ」因子との関係から、英語能力が高ければ、他国の留学生との接触機会が多くなる可能性があると言える。このように、英語能力が中国人留学生の他国の留学生との友人付き合いに果たす役割が示された。

在学期間と「中・他」阻害要因因子との相関分析の結果、「文化間差異・他国人留学生の友人付き合い志向」因子との間に弱い負の相関関係($r = -.260, p < .05$)が見られた。この結果から、在学期間が長ければ長いほど、文化間差異による影響、また、中国人留学生の先入観による他国人留学生の友人付き合い志向の影響が弱くなると言える。これは留学生の在学期間が長くなるにつれ、外国語能力が伸び、他国の留学生との交流を通して異文化に対する理解が深まっているためであると考えられる。

表5-17 英語能力別相関分析結果(「中・他」因子別)

	M	SD	N	相関係数
因子 I	2.15	.66	91	-.091
因子 II	2.66	.74	92	-.459*
因子 III	2.08	.67	92	.169
因子 IV	2.67	.86	92	-.340*

* $p < .01$ 1人記入漏れあり

表5-18 在学期間別相関分析結果（「中・他」因子別）

	M	SD	N	相関係数
因子Ⅰ	2.15	.66	91	-.260*
因子Ⅱ	2.66	.74	92	-.185
因子Ⅲ	2.08	.67	92	.048
因子Ⅳ	2.67	.86	92	-.111

* $p < .05$ 1人記入漏れあり

第三節 考察

1-1 友人関係に対する考察

在日中国人留学生の友人関係とその関連要因について分析した結果、友人の国籍によって在日中国人留学生の友人付き合いが異なることが分かった。また、外国語能力が中国人留学生の友人関係に影響を与えていることが明らかになった。

具体的には、中国人留学生同士の友人付き合いは自文化共有、勉学、レクリエーション、情緒的助けなどすべての面において深いつながりがあり、日本人学生との場合、勉学と異文化理解の面のみ深いつながりがあり、他国の留学生との場合は友人付き合いが浅く、ある程度異文化理解におけるつながりがあるが、日常の立ち話程度にとどまっていることが明らかになった。

まず、同国人との友人付き合いについて、Bochner et al. (1977) では同国人の友人との自文化共有機能を主張し、田中 (1990b, 1991a) では楽しみ、物、お金、相談では同国人との援助が多い傾向があると示されたが、本研究では上記の機能以外に、中国人留学生の同国人との勉学面の機能も明らかにした。勉学機能について、Bochner et al. (1977) ではホスト側が同国人の3倍或いはそれ以上であると指摘され、横田・田中 (1992) では同国人とホスト国の者はほぼ同数であると述べている。一方、本研究では、目標言語の添削機能は同国人より日本人学生のほうが多いが、勉学面の相談や勉学情報の提供においては同国人のほうが多いことが明らかになった。この結果から、中国以外の留学生の同国人との友人つながりの深さより、中国人留学生同士の友人付き合いは広く、つながりが深いと言える。その理由は、他国の留学生と比べ、在日中国人留学生の数は圧倒的に多く、小さなコミュニティがより形成しやすいためではないかと考えられる。

また、ホスト国の者との友人関係について、Bochner et al. (1977) ではホスト国の者との言語及び勉学の助けの機能が明らかにされ、田中他 (1990b、1991a) では日本語、日本文化、情報、勉強では日本人の援助が期待できると示されている。本研究では中国人留学生は勉学、異文化理解の面において日本人学生との友人付き合いが深いとの結果が得られ、上記の先行研究の結果を支持している。この結果から、留学生がホスト国の者に求めている援助は留学生の出身国または留学先と関係なく、言語、勉学及び異文化理解に集中していることがわかる。

他国の留学生との友人関係については、Bochner et al. (1977) では他国からの留学生との間にレクリエーションの場を提供する機能が明らかになったが、田中他 (1990b、1991a) では他国の留学生とレクリエーションの場を提供する機能が見られなかった。本研究の結果は同じく日本で行われた研究である田中他 (1990b、1991a) の結果を支持している。この違いは研究が行われる地域における留学生出身国の構成と関係していると考えられる。Bochner et al. (1977) が調査を行っている地域はハワイであるが、田中他 (1990b、1991a) と本研究は日本で行ったものである。留学生の出身国を見ると、日本における留学生出身国の90%以上はアジアである。それに対して、アメリカは1980年代からアジア出身の留学生が5割程度となり、2015-2016年現在でも66%であるため (Open Doors 2016, Institute of International Education)、留学生の出身国の構成は日本と大きく異なっている。このような留学生出身国構成の違いは、他国からの留学生との友人付き合いに大きく影響すると考えられる。

上述したように、在日中国人留学生の友人関係の結果は留学生全体を研究対象とする先行研究の結果と完全には一致しなかった。その原因は調査方法や調査時期と関係していると考えられるが、調査対象者の出身地域からの影響も大きいと考えられる。そのため、大学から何らかの支援策を検討する際は、留学生を一つのグループとみなすべきではなく、それぞれ異なる文化背景を持つ留学生の特徴を重視し、その特徴に相応しい施策を出す必要がある。特に留学生数が少ない出身国からの留学生にとっては、同国人の人数が少ないために、同国人とのコミュニティが形成されにくく、自文化の共有などの機能においては多くのサポートが必要であると考えられる。

さらに、本研究で明らかになった中国人留学生の友人関係は同国人とのものが一番深いという点については、留学生同士と比べて、日本人との友人関係が明らかに少ないという横田 (1991a) の結果や、「日本人学生と中国人留学生両方共に自国の友人の数が多く、交

流する頻度が高く、より親しい関係を持っているが、相手国の友人は少なく、浅い関係にとどまっている」という戦 (2007 : 100) の結果と一致している。この結果は中国人留学生の友人付き合いが同国人志向であることを反映している。

しかし、Bart and Eimear-Marie (2014) は同国人との友人付き合いに集中することは、留学初期においては留学生の異文化の適応に役に立つが、時間が経過しても同国人との友人付き合いに集中し過ぎると、留学生の異文化適応を阻害すると述べている。また、研究背景で言及していたようにホスト国の異文化環境にうまく適応すること、またホスト国の学生との間の友人関係を構築することは、留学生の学習成績や留学の満足度の向上、退学者数の減少など肯定的な効果と関連づけられている。Blake et al. (2011) では他国の留学生との友人付き合いは、世界への認知を深めること、ホスト国以外の文化を学ぶチャンスを増やすこと、孤独感をなくすことやプレゼンテーション能力の向上に役に立つと指摘している。本研究の結果から、在日中国人留学生の友人付き合いは同国人に集中し過ぎており、日本人学生や他国の留学生との友人付き合いは限られていることがわかる。いかに留学生の同国人との友人付き合いを維持しながら、ホスト国の学生や他国からの留学生との友人付き合いを広げていくかが学生だけではなく、大学関係者にとっても大きな課題と考えられる。これを解決することは、近年日本の高等教育機関が求めているキャンパスのグローバル化の実現にとっても重要である。

友人関係の関連要因について、中国人留学生の日本語能力が高ければ高いほど、日本人学生との友人付き合いが深く、英語能力が高ければ高いほど、他国の留学生との友人付き合いが深いことがわかった。居住形態については、中国人留学生と他国からの留学生の「レクリエーション・異文化理解」面の友人付き合いにおいて居住形態の差が見られた。

上記のように、日本語能力と英語能力が在日中国人留学生の友人関係に与える影響が明らかになった。日本留学というものの、他国からの留学生との友人付き合いを促進するためには、英語が必要であるといった見逃せない事実がある。これは中国人留学生だけではなく、日本人学生や非英語圏の学生にとっても重要である。従来、大学では留学生のみに日本語コースを押し付けるという一方通行的な手法を用いている。しかし、国籍が異なる留学生同士のコミュニケーションや相互理解を促進させるには、この手法よりも、日本人学生や非英語圏の留学生を合わせて実用英語コースを提供するといった双方向的な手法を用いるべきではないだろうか。

1-2 友人関係構築の阻害要因に対する考察

本研究は大学に在籍する中国人留学生を対象にした質問紙調査を通して、中国人留学生の中国人留学生同士、日本人学生、他国の留学生との友人関係構築における阻害要因を明らかにした。具体的には、「中・中」の友人関係構築の阻害要因として、「性格や趣味の不一致・余裕なし」、「同国人交流への倦怠感」、「接触機会の少なさ」という三つの因子が抽出され、「中・日」については、「接触機会の少なさ」、「性格や趣味の不一致・余裕なし」、「日本人学生の友人付き合い志向」、「言語不安、異文化接触不安」、「文化間差異」という五つの因子が抽出され、「中・他」については、「文化間差異・他国人留学生の友人付き合い志向」、「言語不安、異文化接触不安」、「性格や趣味の不一致・余裕なし」、「接触機会の少なさ」という四つの因子が抽出された。また、関連要因別と因子別の検討を通して、居住形態、外国語能力及び在学期間から阻害要因に対する影響を明らかにし、中国人留学生の友人付き合いにおける阻害要因が多く要素に影響されていることがわかった。

留学生と日本人学生の友人関係構築の阻害要因に関する先行研究と比較した結果、本研究で得られた知見は以下の4点である。1点目は、3グループの比較を通して、「性格や趣味の不一致・余裕なし」、「接触機会の少なさ」などの要因は「中・中」、「中・日」、「中・他」の共通要因であり、「言語不安、異文化接触不安」、「相手の友人付き合い志向」、「文化間差異」などの要因は「中・日」、「中・他」の共通要因であることを明らかにしたことである。2点目は、先行研究で取り上げられていない留学生同士の友人関係構築の阻害要因についても、本研究を通して、「中・中」、「中・他」の阻害要因をそれぞれ明らかにしたことである。3点目は、中国人留学生に関して、「中・日」の友人付き合いは、日本人学生からの偏見といった「日本人学生の友人付き合い志向」要因に影響されていることである。この結果は、日本人はヨーロッパ・アメリカ・カナダ・オーストラリア出身者に対して厚遇するが、それ以外の地域、特に東アジア出身者に対しては冷遇する傾向にあるという岩男・萩原（1988）の調査結果や、渡辺（1995）が指摘した留学生の出身国や外見などによって日本人は差別待遇をしがちであるという点を追認したと言える。中国人留学生に対する差別は、日中両国の歴史、また日本人学生、中国人留学生の先入観と関係していると考えられる。4点目は、在学期間や外国語能力から阻害要因への影響を明らかにしたことである。在学期間が長くなることや外国語能力の上達が、中国人留学生の言語及び異文化不安を弱め、英語能力の上達が他国の留学生との接触機会を増やすとい

う結果は、留学生の異文化適応を検討する際に参考になるデータであると考えられる。

本研究の結果に基づき、まず大学側に対して提案する。まず、学生へ「共に勉学の場」、「共に生活の場」、「共に遊びの場」という接触機会を増やす場の提供を行うべきであるとして提言したい。本研究の結果から、「中・中」、「中・日」、「中・他」3グループとも「接触機会の少なさ」という要因が確認された。大学は教育を提供する場所であるが、教育以外の時間で、いかに学生同士の接触機会を増やし、友人関係構築の機会を提供するかといったことが重要な課題だと考えられる。またその一方で、表5-12で示した学生寮とアパートの比較結果から、単に接触機会を増やすだけでは問題の解決にはなり得ないことが明らかになった。このことから、学生側のストレスや先入観などの主観的要因²⁵にも注目し、客観的要因と主観的要因両方の解決を図るべきである。研究背景で述べた近年話題になっている混住寮や、留学生と日本人学生の交流を促進させるためのイベント、合同授業などの取り組みでは、学生側の主観的要因に注目しながら、その効果に対する検証を行うべきであろう。

また、「言語不安、異文化不安」という要因は「中・日」、「中・他」の2グループの共通の阻害要因と認められた。そのため、留学生に対して日本語の授業を提供すると同時に、非英語圏の学生に対して英語の授業を提供することも必要である。これによって、学生の多言語を学ぶ機会や使う機会が増え、言語の阻害要因としての影響が弱くなる可能性がある。この点については、田中（2003）で明らかとなった日本人の語学力不足が日本人学生と留学生の対人関係形成における困難の原因の一つであるという調査結果や、日本人の英語という第2言語のパフォーマンスにおける心理要因の重要性への指摘と共通するであろう。その他、学生の友人付き合い不安を解消するために、大学が学生に対して異文化トレーニングやソーシャル・スキルトレーニング²⁶をすることも重要である。「性格や趣味の不一致」という要因は三つのグループの共通要因であり、共通の趣味や話題がないということはソーシャル・スキルが欠けていることと関連していると考えられる。ソーシャル・スキルについて、湯（2004）では日本でのソーシャル・スキルの欠損は留学生の対人関係形成の困難の原因であるという点に言及しており、田中（2003）でも対人関係形成の困難の原

²⁵ 加賀美（2001）では、異文化間交流を阻む壁として、物理的壁、スキルの壁、心理的な壁、文化的な壁の四つを挙げている。本研究では、留学生の個人の心理的要因を主観的要因とし、その他の物理的、文化的、スキルの要因を客観的要因として取り扱う。

²⁶ 「ソーシャルスキル」とは対人関係における、挨拶・依頼・交渉・自己主張などの技能、社会的スキルである（『大辞林』より）。「ソーシャルスキルトレーニング」とはソーシャルスキルを身につけるための訓練である（『デジタル大辞泉』より）。

困として留学生に関しても日本人に関してもスキルと社会知識の不足がその上位に上がっており、ソーシャル・スキルの重要性が示唆されている。

さらに、在学期間が長くなるにつれ、中国人留学生の日本人学生あるいは他国からの留学生との友人付き合いに対する言語や異文化不安、先入観が弱まっていくことから、特に留学生の在学初期段階において、大学はサポートを行う必要がある。初期段階に留学生に対して異文化理解の指導やサポートを行えば、初期段階から言語不安、異文化接触不安、先入観などによる学生の友人関係構築への影響が弱くなるため、他の時期にサポートを行うよりも効果は高いと予想される。

次に、学生側に対して提案する。本研究では「日本人学生の友人付き合い志向」という要因が確認された。従来の異文化適応は留学生にとっての日本での異文化適応であり、日本人学生はホスト国の学生として触れられていなかった。しかし、大学のグローバル化が進むにつれ、大学における留学生の数は増加し、また、近年大学においては日本人学生向けに「学内留学」というスローガンも出され、日本人学生は日本の大学に在学していながらも、実際にはグローバルな環境にいるということは否定できない事実である。そのため、日本人学生にとっての異文化適応を見逃してはならない。この点について、田中（2003：50）では、「留学生は文化要因、特に交流技能面に注目が高いのに、日本人学生に文化的な要因の重要性に対する認識が薄い」との指摘があり、留学生、日本人学生に対する「双方向性の文化学習」の必要性が示唆されている。また、「異文化接触不安」、「文化間差異」といった要因が確認された結果から、友人関係を構築する中で、いずれの国の学生であっても、先入観をなくし、自己開示することが重要であると指摘できる。先入観や、他国の学生との友人付き合いの消極性などが友人関係構築の阻害要因であり、新たな友人関係を構築するためにはこの点にも注目すべきである。それに加えて、相手の文化の違いにより、相手との友人付き合い方や自己開示の程度も異なると考えられる。したがって、それぞれ異なる文化背景を持つ相手と友人関係を構築する際には、その文化に相応しいソーシャル・スキルを身につけることも重要である。

本研究はケーススタディとして2,000人以上の留学生が在籍している九州大学において実施した調査である。この結果は留学生受入れ数で中小規模の大学にも当てはまるか、日本人学生または他国からの留学生からみた中国人留学生との友人関係はどのようなものであるか、という点について、さらなる調査を行う必要があると考えられる。

また、本研究において調査対象者のほとんどは大学院生であるため、学部留学生の友人

関係構築の現状はどうであるかという点についても検討する必要がある。さらに、専攻、経済状況などは留学生の友人関係と阻害要因に影響を与える要因と考えられるが、調査対象者の総数は95名と少なかったため、分析を行ったものの、その関係が見られなかった。今後、さらに調査対象者の人数を増やし、諸関連要因による影響を再分析する必要があると考えられる。以上を今後の課題としたい。

第六章 在日中国人留学生のソーシャル・ネットワーク再考

第五章では九州大学在学学生を対象に在日中国人留学生の友人関係及び友人関係構築の阻害要因について検討を行った。しかし、調査対象者は大学院生に集中しており、在学身分別の検討ができていないことや、専攻・経済状況などの要素と留学生の友人関係との関係について分析を行ったものの、双方の関係が確認できていないことなどの課題が残されている。また、調査対象大学は2,000人以上の留学生を有する九州大学1か所のみであり、中小規模の大学の現状が把握できていないことも課題である。そこで、本章では、福岡都市圏六大学で実施した質問紙調査の結果を基に、在日中国人留学生の友人関係及びその阻害要因について再考察し、以下の二つの課題を明らかにすることを目的とする。

課題1：

中小規模大学において在日中国人留学生の友人関係はどのようなものか、諸関連要因による影響は何か。

課題2：

中小規模大学において在日中国人留学生の友人関係構築を阻害する要因は何か。大学間の相違点は何か。

第一節 分析方法

1-1 友人関係の分析

友人関係の分析に当たって、第五章と同じく、回答者の友人関係を分析する前提として、回答者は中国人留学生同士、日本人学生、他国の留学生の友人ができていなければならない必要がある。そのため、「中・中」、「中・日」、「中・他」のいずれのグループにおいても、自己評価の質問項目で「全く当てはまらない」と選択した調査対象者、また15の項目で逆転項目⑩を除きすべて「全く当てはまらない」と選択した調査対象者については、該当のグループの友人がいないものであると判断し、分析対象から除外した。この基準で判断した結果、「中・日」グループは2名を、「中・他」グループは13名を除外し、分析に用いたデータは「中・中」グループ154人、「中・日」グループ152人、「中・他」グループ141人となった。

「中・中」、「中・日」、「中・他」がどのような友人関係を構築しているかを明らかにするために、各項目において、「非常に当てはまる」と「やや当てはまる」を選択した調査対象者の比率を算出した。同意率が 50%を超えた場合、すなわち半分以上となる場合、該当の項目において友人付き合いのつながりが深いと考えられる。

また、諸関連要因による影響を明らかにするために、逆転項目⑩を処理した上で、各項目に対して点数を付け（「非常に当てはまる」4～「全く当てはまらない」1）、「中・中」、「中・日」、「中・他」グループの平均値を算出した。性別、専攻、経済状況、部活・サークルの参加状況、中国学友会、留学生会の加入状況により、それぞれのグループの平均得点に差が見られるか検討するため、「男・女」、「理系・文系」、「奨学金あり・奨学金なし」、「参加・不参加」、「加入・未加入」を独立変数、それぞれのグループの平均得点を従属変数とした t 検定を行った。また、在学期間、外国語能力が友人関係にどのような影響を与えるか検討するため、在学期間、外国語能力を独立変数、それぞれのグループの平均得点を従属変数とした相関分析を行った。さらに、在学身分、居住形態における中国人留学生の友人関係への影響を分析するために分散分析を行った。

最後に、レクリエーション、勉強など様々な友人付き合いの方法において、関連要因による違いがあるかどうかを検討するために、関連要因からの影響がもっとも大きい「中・日」グループに対して因子分析を行い、諸関連要因による各因子への影響を分析した。具体的には、因子分析結果に基づき、各グループの因子の平均値を求め、上記のように t 検定、相関分析、分散分析を行った。

1-2 友人関係構築の阻害要因の分析

本調査一では、「中・中」、「中・日」、「中・他」3 グループに対して因子分析を行い、それぞれ 3、5、4 因子を抽出した。また、居住形態、外国語能力などの要因による阻害要因への影響を見るために、グループ全体と各因子別に t 検定、相関分析などを行った。本章では、六大学のデータを中心に、全体的にも大学別にも各グループの上位にある項目に注目し、阻害要因における大学間の異同を検討することにした。

具体的には、各項目において「非常に当てはまる」と「やや当てはまる」を選択した人数の割合を算出し、「中・中」、「中・日」、「中・他」3 グループごとに上位項目を抽出し、共通の阻害要因を見ることにした。また、六大学別に各グループの上位項目を抽出し、大学間の検討を行った。さらに、阻害要因と友人関係との関係を見るために、「中・中」、「中・

日]、「中・他」グループの平均値を算出し、友人関係において各グループの平均と相関分析を行った。

第二節 中小規模大学在学生の事例分析と結果

1-1 調査対象者の基本属性

調査対象者の基本属性における大学別の集計結果は添付資料9を参照されたい。調査対象者154名のうち、男性は87名(56.5%)、女性は67名(43.5%)である。専攻は、理科系83名(53.9%)、文科系60名(39%)、その他は8名(5.2%)、未記入3名(1.9%)である。在学身分については、博士課程が14名(9.1%)、修士課程が67名(43.5%)、学部生が50名(32.5%)、交換留學生が23名(14.9%)である。経済状況について、自費で奨学金なしの學生が100名(64.9%)であるのに対して、国費または自費で奨学金ありの學生が54名(35.1%)である。居住方式について、アパートに住んでいる學生が61名(39.6%)、留學生会館や留學生寮などの留學生専用宿舎に住んでいる學生が63名(40.9%)、留學生と日本人學生が共同生活をする混住寮に住んでいる學生が20名(13%)、公営住宅に住んでいる學生は8名(5.2%)である。寮の経験について、経験ありの學生が112名(72.7%)であるのに対して、経験なしの學生が42名(27.3%)である。部活・サークルの経験について、経験ありの學生が57名(37%)であるのに対して、経験なしの學生が97名(63%)である。学友会・留學生会の加入状況について、加入している學生が65名(42.2%)であるのに対して、加入していない學生が89名(57.8%)である。

以上の結果からみると、性別、専攻、経済状況、寮の経験、部活・サークルの経験、学友会・留學生会の加入状況について、いずれの項目においても調査対象者は35%~65%の間に分布していることがわかる。また、調査対象者の在学身分について、学部生と交換留學生はそれぞれ32.5%と14.9%を占め、一回目の調査対象者が大学院生に集中していたという問題点も、今回の調査では改善できている。居住形態については、一回目の調査では留學生専用宿舎と日本人學生と留學生の混住寮を分けることなく検討を行ったが、今回の調査では両者を分けてデータを取得している。

また、外国語能力については、本調査では一回目の調査と同じ基準を用い、超級、上級、中級、初級、初級以下の5尺度で調査対象者の外国語能力を把握した。英語能力については、3名の調査対象者に記入漏れがあったため、151名になっている。添付資料9によると、

超級と初級以下というレベルについては日英両言語に大きな差がなく、10%以下を占めていることがわかる。その一方、調査対象者の日本語能力は上級と中級に集中しているのに対して、英語能力は上級、中級、初級のそれぞれに分散していることがわかる。

1-2 友人関係

1-2-1 中国人留学生の友人関係について

「中・中」、「中・日」、「中・他」3グループにおける中国人留学生の友人関係の結果を図6-1に示した。そのうち、項目⑩「浅い関係で立ち話程度」は逆転項目である。

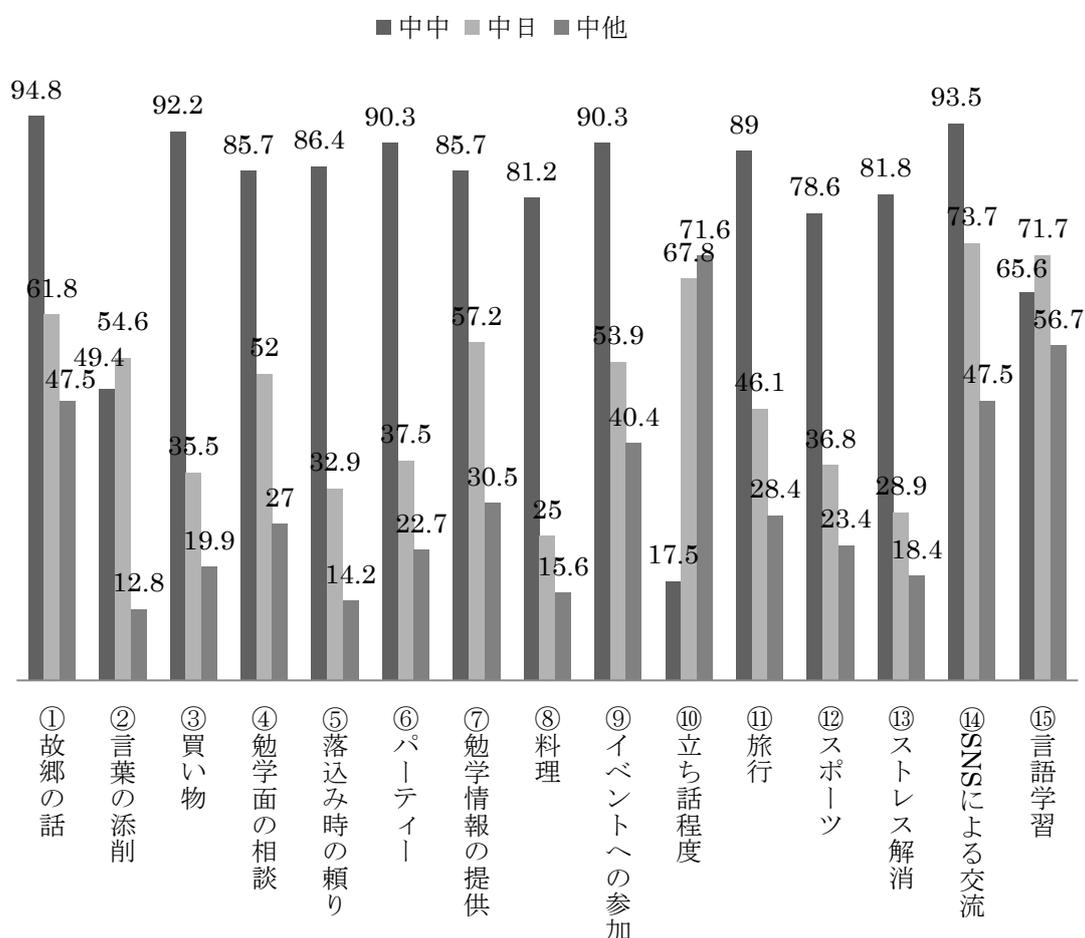


図6-1 在日中国人留学生の友人関係（六大学） 単位：%

単位：% 各項目において「非常に当てはまる」と「やや当てはまる」を選択した人の比率

グループ別を見てみると、「中・中」グループは逆転項目⑩「浅い関係で立ち話程度」と項目②「言葉の添削」を除き、すべての項目において「非常に当てはまる」と「やや当て

はまる」を選択した人が全体の 50%を超えている。①「故郷の話」は自文化の共有に関するものであり、⑧「料理をする」は自文化の共有機能があるとともに、レクリエーション機能も有する。③「買い物」、⑥「パーティー」、⑨「イベントへの参加」、⑪「旅行」、⑫「スポーツ」は同国人の間ではレクリエーションの機能を果たしている。④「勉学面の相談」、⑦「勉学情報の提供」、⑮「言語学習」は勉学に関する項目であり、⑤「落込み時の頼り」、⑬「ストレス解消」は情緒的助けに関する項目である。また、項目⑭「SNS による交流」は交流する内容によってそれぞれ異なる機能を果たしていることが考えられる。この結果から、中国人留学生同士の友人付き合いは自文化の共有、勉学、レクリエーション、情緒的サポートなどすべての面において深いつながりがあることがわかる。

「中・日」グループについて、50%を超えている項目は、①「故郷の話」、②「言葉の添削」、④「勉学面の相談」、⑦「勉学情報の提供」、⑨「イベントへの参加」、⑩「立ち話程度」、⑭「SNS による交流」、⑮「言語学習」となっている。②「言葉の添削」、④「勉学面の相談」、⑦「勉学情報の提供」は勉学面のつながりであり、①「故郷の話」、⑨「イベントへの参加」、⑮「言語学習」は異文化理解のつながりであり、⑩「浅い関係で立ち話程度」は互いのつながりの深さを示している。また、⑭「SNS による交流」は交流する内容によってそれぞれ異なる機能を果たしていることが考えられる。たとえば、SNS を通じて互いの文化に関する話をする、SNS は異文化理解の機能を果たし、また、勉学、研究に関する話になると、勉学サポート機能を果たすようになる。この結果から、中国人留学生と日本人学生の友人付き合いは勉学面と異文化理解に集中し、レクリエーション活動より深いつながりがあるが、浅い関係にとどまっていることがわかる。また、上記の項目のうち、②「言葉の添削」、⑮「言語学習」の言語に関する項目は、3 グループの中で「中・日」グループの得点が一番高く、言語を通じた「中・日」の友人付き合いは、関係を深めるための有効な切口なのではないかと考えられる。

一方、「中・他」グループにおいては、50%を超える項目また 50%に近い項目は①「故郷の話」、⑩「立ち話程度」、⑭「SNS による交流」、⑮「言語学習」となっている。①「故郷の話」、⑮「言語学習」は異文化理解に関する項目で、⑭「SNS による交流」は交流する内容によって異なる機能を果たしており、⑩「立ち話程度」は両者の友人付き合いの深さを示している。この結果から、中国人留学生と他国からの留学生は異文化理解においてある程度の友人付き合いがあるが、浅い関係にとどまっていることがわかる。

1-2-2 関連要因の検討

性別、専攻、経済状況、部活・サークルの参加状況、中国学友会・留学生会の加入状況と各グループの平均値を用いて t 検定を行った結果、専攻、部活・サークルの参加状況、中国学友会・留学生会の加入状況による中国人留学生の友人関係への影響が見られた。

専攻については、「中・日」グループに 1%水準で有意な差が認められた ($t=-3.141$, $df=139$, $p<.01$) (表 6-1)。ここから、日本人学生との友人付き合いについては、理系の学生より文系の学生のほうがより深い関係を築いていると言える。理系の学生は実験などが多いが、文系の学生は実験をする必要がなく、教室外や研究室外での活動が多いことから、日本人学生と接触する機会もより多くあるためではないかと考えられる。

表 6-1 専攻別友人関係 t 検定結果

	文系			理系			t 値
	M	SD	N	M	SD	N	
「中・中」	3.34	.56	60	3.43	.56	83	.945
「中・日」	2.62	.59	60	2.30	.60	81	-3.141*
「中・他」	2.05	.59	57	2.04	.59	73	-.094

* $p<.01$

また、部活・サークルの参加状況 ($t=2.767$, $df=150$, $p<.01$)、中国学友会・留学生会の加入状況 ($t=2.831$, $df=150$, $p<.01$) についても、「中・日」グループにおいてそれぞれ 1%水準で有意差が認められた (表 6-2、6-3)。この結果から、部活・サークルに参加している、または中国学友会・留学生会に加入している中国人留学生はより日本人学生と深い友人関係を築いているということが考えられる。

部活・サークルに参加すると、勉強外の時間に日本人学生との接触機会が多くなり、また中国学友会・留学生会に加入している学生は国際交流に対する意欲が高く、学友会・留学生会のイベント、活動を通してより多くの日本人学生と知り合う機会があるためであると推察される。上記の分析から、部活・サークルの参加、または学友会・留学生会の参加は「中・日」の友人関係を促進する一つの要因であろう。

表 6-2 部活・サークルの参加状況と友人関係の t 検定結果

	あり			なし			t 値
	M	SD	N	M	SD	N	
「中・中」	3.42	.57	57	3.39	.55	97	.339
「中・日」	2.59	.63	57	2.32	.59	95	2.767*
「中・他」	2.08	.54	55	2.03	.63	86	.487

* $p < .01$

表 6-3 中国学友会・留学生会の加入状況と友人関係の t 検定結果

	加入			未加入			t 値
	M	SD	N	M	SD	N	
「中・中」	3.44	.49	65	3.37	.59	89	.809
「中・日」	2.58	.62	65	2.30	.59	87	2.831*
「中・他」	2.08	.55	63	2.03	.63	18	.501

* $p < .01$

続いて、在学期間、外国語能力が中国人留学生の友人関係に与える影響について相関分析を行った結果、日本語能力と「中・日」の間に正の相関関係 ($r = .439, p < .01$) が認められ、英語能力と「中・他」の間に弱い正の相関関係 ($r = .230, p < .01$) が認められた (表 6-4、6-5)。この結果は本調査一の結果を支持した。この結果から大学の規模と関係なく、外国語能力が中国人留学生の日本人学生、他国の留学生との友人付き合いに影響を与えると言える。より高いレベルの外国語能力を身につけると、友人関係構築の促進要因となり、一方、外国語能力が低いと、外国語能力は友人関係構築の阻害要因になる可能性が高い。

表 6-4 日本語能力と友人関係の相関分析結果

日本語能力	M	SD	N	相関係数
「中・中」	3.40	.55	154	-.109
「中・日」	2.42	.62	152	.439*
「中・他」	2.05	.59	141	.041

* $p < .01$

表 6-5 英語能力と友人関係の相関分析結果

日本語能力	M	SD	N	相関係数
「中・中」	3.40	.55	154	.007
「中・日」	2.42	.62	152	.021
「中・他」	2.05	.59	141	.230*

* $p < .01$

在学身分による中国人留学生の友人関係への影響を検討するために分散分析を行った結果、「中・日」グループにおいて在学身分は有意であった ($F(3, 148)=3.570, p<0.05$)。Turkeyを用いた多重比較によれば、交換留学生と博士の間に有意な差があり、学部生と博士の間に10%水準で有意な傾向が見られた(表6-6)。この結果から、在学身分の違いによって、中国人留学生の日本人学生との友人関係も異なることがわかった。交換留学生、学部生、修士、博士4グループの平均値を見てみると、交換留学生(2.64)、学部生(2.53)、修士(2.33)、博士(2.07)の順となっている。交換留学生の平均値が一番高い理由として、交換留学生は短期間来日し、日本社会、文化などを理解するために好奇心を持って積極的に日本人学生と付き合うためではないかと推察される。その次は学部生であり、日本人学生と一緒に授業を受ける機会が多く、友人関係を構築するチャンスも増えてくるためと考えられる。大学院になると、授業の形が変わり、一人で研究する時間が増え、周りの学生と友人付き合いをする時間も少なくなる可能性があるため、交換留学生、学部生に比べると円滑に友人関係を構築できていないと考えられる。

表6-6 在学身分多重比較結果（「中・日」）

グループ (平均)	比較された グループ	平均差	有意確率
学部生 (2.53)	修士課程学生	.203	.275
	博士課程学生	.452*	.077
	交換留学生	-.114	.874
修士課程学生 (2.33)	学部生	-.203	.275
	博士課程学生	.249	.521
	交換留学生	-.317	.133
博士課程学生 (2.07)	学部生	-.452*	.077
	修士課程学生	-.249	.521
	交換留学生	-.566**	.036
交換留学生 (2.64)	学部生	.114	.874
	修士課程学生	.317	.133
	博士課程学生	.566**	.036

** $p < .05$ * $p < .1$

また、居住形態による中国人留学生の友人関係への影響を検討するために分散分析を行った結果、「中・日」グループにおいて居住形態の効果は有意であった ($F(3, 146)=2.741$, $p < 0.05$)。Turkey を用いた多重比較によれば、留学生専用寮と日本人との学生混住寮との間に有意な差があることが明らかになった (表 6-7)。この結果から、日本人学生との友人付き合いについて、留学生専用寮に住む中国人留学生より、留学生日本人学生混住寮に住む学生のほうが日本人学生とよりよい友人関係を構築していると言える。「中・日」グループについて留学生専用寮、アパート、混住寮の平均値を見てみると、それぞれ 2.31、2.42、2.76 であり、留学生専用寮とアパートを比較して、混住寮の平均値が明らかに高いことがわかる。そのため、日本人学生との友人付き合いについては、留学生専用寮に住むことは日本人学生との友人関係構築の阻害要因となる可能性がある。

しかしその一方で、留学生専用寮に住むことによって、他国からの留学生と友人付き合いの機会は多くなるはずであるが、「中・他」グループにおいて分散分析を行った結果、有意な差はなかった。この結果から、留学生専用寮に住んでいても、他国からの留学生とよりよい友人関係を構築できるとは言えない。「中・他」グループにおいて留学生専用寮、アパート、混住寮の平均値を見てみると、2.02、1.97、2.18 となっており、ほとんど差がなか

った。「中・他」の友人関係構築は居住形態と関係がなく、別の要因にある可能性が高い。

表6-7 居住形態多重比較結果（「中・日」）

グループ (平均)	比較された グループ	平均差	有意確率
アパート (2.42)	留学生専用	.113	.731
	公営住宅	.004	1.000
	混住寮	-.335	.145
留学生専用 (2.31)	アパート	-.113	.731
	公営住宅	-.109	.964
	混住寮	-.449*	.024
公営住宅 (2.42)	アパート	-.004	1.000
	留学生専用	.109	.964
	混住寮	-.340	.542
混住寮 (2.76)	アパート	.335	.145
	留学生専用	.449*	.024
	公営住宅	.340	.542

* $p < .05$

1-2-3 因子別友人関係の検討

上記の関連要因による検討を通して、中国人留学生の専攻、部活・サークルの参加状況、中国学友会・留学生会の加入状況、外国語能力、在学身分、居住形態による友人関係への影響を明らかにした。また、英語能力を除き、上記の属性の違いによる影響は「中・日」グループのみに与えられていることが明らかになった。

続いて、中国人留学生と日本人学生の様々な面の友人付き合いにおいて、上記の関連要因の違いは具体的にどの面に影響を与えるか、または、友人機能の区別がなく、すべての面に影響を与えるかを検討するために、「中・日」グループに対して因子分析を行い、因子別に関連要因の影響を検討した。

「中・日」グループにおいて、友人関係の深さを測定する項目⑩「日本人学生との友人付き合いでは、単に立ち話をする程度に留まっている」と複数の因子に同程度の負荷値を示している項目⑥「日本人学生の友人と一緒にパーティーや食事会に行っている」を外し、13項目を対象として因子分析を行った結果、三つの因子が抽出された(表6-8)。第一因子は、ストレス解消や悩みの相談といった情緒的サポートと一緒に料理、スポーツ、観光な

どをするといったレクリエーションに関するもので、「共同リラックス行動」と命名した。第二因子は日本人学生から勉学情報の提供、学業に関する相談や言葉の添削などに関するもので、「勉学サポート」と名付けた。第三因子は、SNS を通しての交流、一緒にイベント参加、言葉の教え合い、国・故郷のことを話し合うことを通した相互理解の促進に関するものであるため、「異文化理解」因子とした。

表 6-8 「中・日」友人関係因子分析結果

	I	II	III
第 I 因子 「共同リラックス行動」			
⑬ ストレスを感じたとき、よく日本人学生の友人と一緒に居て、ストレスを発散する。	.786	.181	.154
⑤ 落ち込んだ際、よく日本人学生の友人に頼る。	.764	.377	.232
⑧ よく日本人学生の友人と一緒に料理をして楽しんでいる。	.593	.322	.203
⑫ よく日本人学生の友人と一緒にスポーツをしている。	.577	.028	.360
③ よく日本人学生の友人と一緒に買い物に出かけている。	.462	.321	.369
⑪ 観光や見学旅行に行くとき、よく日本人学生の友人と一緒にいる。	.404	.179	.371
第 II 因子 「勉学サポート」			
④ 学業に困ったことがあるとき、よく日本人学生の友人に相談している。	.338	.732	.245
② レポート提出や発表に際して、よく日本人学生の友人は言葉遣いを添削してくれる。	.150	.660	.209
⑦ よく日本人学生の友人から勉強や研究に必要な情報の提供がある。	.177	.631	.343
第 III 因子 「異文化理解」			
⑮ よく we chat、Line や Facebook などの SNS を通して日本人学生の友人と話し、情報を共有する。	.160	.283	.669
⑭ よく日本人学生の友人とお互いに言葉を教え合う。	.273	.234	.605
⑨ イベントがあるとき、よく日本人学生の友人を誘って一緒に参加している。	.355	.400	.508
① 母国や故郷のことをよく日本人学生の友人と話し合っている。	.288	.324	.456

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

関連要因による各因子への影響を検討するために、各因子の平均値を算出し、以下の分析を行った。専攻、経済状況、部活・サークルの参加状況、中国学友会・留学生会の加入状況により、それぞれの面の友人付き合いに差が見られるかどうか検討するため、「理系・文系」、「奨学金あり・奨学金なし」、「参加・未参加」、「加入・未加入」を独立変数、それぞれの因子の平均値を従属変数とした t 検定を行った。また、日本語能力が各因子にどのような影響を及ぼすか検討するため、日本語能力を独立変数、それぞれの因子の平均値を従属変数とした相関分析を行った。さらに、在学身分、居住形態における各因子への影響を分析するために分散分析を行った。

t 検定を行った結果、因子 I 「共同リラックス行動」 ($t=-2.835$, $df=139$, $p<.01$)、因子 III 「異文化理解」 ($t=-3.374$, $df=139$, $p<.01$) において専攻による有意な差が認められた (表 6-9)。因子 II 「勉学的サポート」 ($t=-1.913$, $df=139$, $p<.1$) は 10%水準で有意な傾向が認められた。この結果から、情緒的助け、レクリエーション、異文化理解の面の友人付き合いにおいて、文系と理系学生の間には違いがあり、勉学面の友人付き合いにおいては、文系と理系学生との間に違いがある可能性が示された。言い換えると、在日中国人留学生の日本人学生との友人付き合いは、ほとんどの面において、理系学生より、文系学生のほうがよりよい友人関係を構築していることが窺える。

表 6-9 専攻別 t 検定結果 (因子別)

	文系			理系			t 値
	M	SD	N	M	SD	N	
因子 I	2.34	.65	60	2.03	.65	81	-2.835**
因子 II	2.79	.83	60	2.51	.85	81	-1.913*
因子 III	3.03	.67	60	2.65	.65	81	-3.374**

** $p<.01$ * $p<.1$

また、因子 I 「共同リラックス行動」 ($t=-2.111$, $df=150$, $p<.05$) と因子 III 「異文化理解」 ($t=-2.677$, $df=150$, $p<.01$) において部活・サークルの参加状況による有意な差が認められたとともに、因子 I 「共同リラックス行動」 ($t=-2.094$, $df=150$, $p<.05$) と因子 III 「異文化理解」 ($t=-3.357$, $df=150$, $p<.01$) において中国学友会・留学生会の加入状況による有意な差も認められた (表 6-10、6-11)。この結果から、勉学面を除き、情緒的助け、

レクリエーション、異文化理解の面においては、部活・サークルに参加している学生または中国学友会・留学生会に加入している学生のほうがよりよい友人関係を構築していることが明らかになった。この結果は部活・サークル、または留学生会の活動がレクリエーションや異文化理解といった面の友人付き合いに正の効果があることを示唆しており、勉学以外の友人付き合いにおいて、部活・サークル、または留学生会の参加に正の効果があることが認められた。

表 6-10 部活・サークルの参加状況 t 検定結果 (因子別)

	あり			なし			t 値
	M	SD	N	M	SD	N	
因子 I	2.30	.72	57	2.06	.62	95	2.111*
因子 II	2.77	.85	57	2.54	.84	95	1.640
因子 III	2.99	.63	57	2.68	.71	95	2.677**

* $p < .05$ ** $p < .01$

表 6-11 中国学友会・留学生会の加入状況 t 検定結果

	あり			なし			t 値
	M	SD	N	M	SD	N	
因子 I	2.28	.70	65	2.06	.62	87	2.094*
因子 II	2.75	.92	65	2.53	.78	87	1.601
因子 III	3.01	.60	65	2.64	.72	87	3.357**

* $p < .05$ ** $p < .01$

続いて、相関分析を行った結果、日本語能力と因子 I ($r = .346$, $p < .01$)、因子 II との間に弱い正の相関関係 ($r = .368$, $p < .01$)、因子 III との間に正の相関関係 ($r = .409$, $p < .01$) が認められた (表 6-12)。この結果から、中国人留学生と日本人学生の友人付き合いは、どのような方式の友人付き合いかという点とは関係なく、すべて日本語能力と関係していることが明らかになった。すなわち、中国人留学生の日本語能力が高いほど、すべての面において日本人学生との友人付き合いが深いことが言える。この結果によって改めて日本語

能力の重要さが確認できた。

表 6-12 日本語能力と友人関係の相関係数（因子別）

日本語能力	M	SD	N	相関係数
因子 I	2.15	.67	152	.346**
因子 II	2.63	.85	152	.368**
因子 III	2.80	.69	152	.409**

* $p < .01$

在学身分による各因子への影響を検討するために分散分析を行った結果、因子 I ($F(3, 148)=2.675, p<0.05$)、因子 III ($F(3, 148)=3.477, p<0.05$) において在学身分の効果は有意であり、因子 II ($F(3, 148)=2.431, p<0.1$) において有意な傾向があった。Turkey を用いた多重比較によれば、因子 I 「共同リラックス行動」において、交換留学生と修士の間に 10%水準で有意な傾向があり、因子 III 「異文化理解」において、交換留学生と博士の間に有意な差があり、学部生と博士の間に 10%水準で有意な傾向があることが明らかになった（表 6-13、6-14）。この結果から、中国人留学生と日本人学生との友人付き合いについて、勉学面においては在学身分による違いがあまりなく、情緒的助けやレクリエーションにおいては在学身分による違いがある可能性があり、異文化理解においては在学身分による違いがあることが示された。

表6-13 在学身分多重比較結果（因子 I）

グループ (平均)	比較された グループ	平均差	有意確率
学部生 (2.24)	修士課程学生	.199	.369
	博士課程学生	.316	.410
	交換留学生	-.173	.722
修士課程学生 (2.04)	学部生	-.199	.369
	博士課程学生	.117	.935
	交換留学生	-.372*	.093

博士課程学生 (1.92)	学部生	-.316	.410
	修士課程学生	-.117	.935
	交換留学生	-.489	.142
交換留学生 (2.41)	学部生	.173	.722
	修士課程学生	.372*	.093
	博士課程学生	.489	.142

* $p < .1$

表6-14 在学身分多重比較結果（因子Ⅲ）

グループ (平均)	比較された グループ	平均差	有意確率
学部生 (2.89)	修士課程学生	.162	.577
	博士課程学生	.543*	.053
	交換留学生	-.153	.806
修士課程学生 (2.73)	学部生	-.162	.577
	博士課程学生	.381	.253
	交換留学生	-.316	.221
博士課程学生 (2.35)	学部生	-.543*	.053
	修士課程学生	-.381	.253
	交換留学生	-.697**	.018
交換留学生 (3.04)	学部生	.153	.806
	修士課程学生	.316	.221
	博士課程学生	.697**	.018

* $p < .1$ ** $p < .05$

また、居住形態による各因子への影響について、因子Ⅱ ($F(3, 146)=3.835, p<0.05$) において居住形態の効果が有意であった。Turkey を用いた多重比較によれば、因子Ⅱ「勉学サポート」において留学生専用寮と日本人学生との混住寮の間に有意な差があり、留学生専用寮に住む中国人留学生より、日本人学生との混住寮に住む中国人留学生のほうが勉学

面において日本人学生との友人付き合いが深いことが示された（表 6-15）。本調査で、日本人学生と留学生の混住寮に住む中国人留学生は、福岡女子大学 1 か所に集まっているが、該当の大学は日本人も留学生も全寮制となっている。勉学面において日本人学生との友人付き合いが深い理由について、全寮制の実施によってすべての学生の生活の場は同じ場所になり、学生にとって互いに交流する機会が増え、勉学内容に関する相談も多くなると考えられる。

表6-15 居住形態多重比較結果（因子Ⅱ）

グループ (平均)	比較された グループ	平均差	有意確率
アパート (2.66)	留学生専用	.251	.341
	公営住宅	-.213	.902
	混住寮	-.438	.174
留学生専用 (2.41)	アパート	-.251	.341
	公営住宅	-.465	.445
	混住寮	-.690*	.008
公営住宅 (2.88)	アパート	.213	.902
	留学生専用	.465	.445
	混住寮	-.225	.916
混住寮 (3.10)	アパート	.438	.174
	留学生専用	.690*	.008
	公営住宅	.225	.916

* $p < .01$

1-3 友人関係構築の阻害要因

1-3-1 六大学全体の検討

「中・中」、「中・日」、「中・他」グループごとの阻害要因を検討するために、項目において「非常に当てはまる」と「やや当てはまる」を選択した人数の割合を算出し、各グループの上位項目を抽出した。

「中・中」グループの上位 5 項目は表 6-16 に示している。表 6-16 によると、「中・中」

グループにおいて、「非常に当てはまる」と「やや当てはまる」を選択した人数の割合はいずれも 50%以下であり、各項目の阻害要因としての影響が「中・中」に対しては弱いことがわかる。また、「中・中」の阻害要因と友人関係の間で相関分析を行った結果、弱い負の相関関係 ($r = -.323, p < .01$) が認められた。この結果から、「中・中」の友人つながりが強ければ、阻害要因としての影響が弱いということが示される。

表 6-16 「中・中」上位 5 項目 (阻害要因)

項目	割合%
③専攻や研究室が異なり、学校で一緒に授業を受ける機会が少ないから	33.1
⑧一緒に参加できる国際交流パーティーやイベントが少ないから	23.4
⑥相手がマナーを守らない・性格が悪いなどと感じるから	21.4
⑦相手と共通の趣味や話題がないから	20.8
⑬自分にとって外国語の勉強にならないと考えるから	20.8

「中・日」グループの阻害要因について、「非常に当てはまる」と「やや当てはまる」を選択した人数の割合が 50%を超える項目を表 6-17 に示している。表 6-17 から、ライフスタイルに共通性がない、価値観の違いといった文化間差異に関する項目、日本人学生の友人付き合い志向、一緒に授業を受ける機会の少なさ、日本語の壁などの要因は上位項目となっている。これらの要因の中で、一緒に授業を受ける機会の少なさ、日本語の壁という客観的要因を除けば、ほかの項目はすべて主観的要因である。このことから、「中・日」の友人関係の阻害要因は、主に留学生や日本人学生の主観的要因にある可能性が高い。また、「中・日」の阻害要因と友人関係の間で相関分析を行った結果、弱い負の相関関係 ($r = -.388, p < .01$) が認められた。この結果から、「中・日」グループは「中・中」グループと同じく、友人つながりが強ければ、阻害要因としての影響が弱いということが言えよう。

表 6-17 「中・日」上位項目（阻害要因）

項目	割合%
⑬ライフスタイルに共通性がないから	76
⑭日本人学生は遠慮し過ぎて、なかなか本当の気持ちを出さないから	70.1
⑫日本語がうまくできなくて、自分の意思をうまく伝えることができないから	63.6
⑳価値観が違い、互いになかなか理解できないから	52.6
⑦相手と共通の趣味や話題がないから	51.9
③専攻や研究室が異なり、学校で一緒に授業を受ける機会が少ないから	50

注：太文字の項目は「中・日」、「中・他」の共通上位項目

「中・他」グループの阻害要因について、「非常に当てはまる」と「やや当てはまる」を選択した人数の割合が50%を超える項目を表6-18に示している。表6-18によると、「ライフスタイルに共通性がないから」は75%であり、ほかの上位項目より遥かに高く、「中・他」の友人関係構築の阻害要因として大きく影響することが考えられる。ほかの項目について、言語や文化の壁、一緒に授業を受ける機会の少なさ、接触頻度の少なさ、距離感といった要因が上位項目となっている。ライフスタイルの違い、距離感といった主観的要因とともに、一緒に授業を受ける機会の少なさ、接触頻度の少なさ、言語や文化の壁といった客観的要因もある。また、「中・他」の阻害要因と友人関係の間で相関分析を行った結果、相関関係は見られなかった。

表 6-18 「中・他」上位項目（阻害要因）

項目	割合%
⑭ライフスタイルに共通性がないから	75
②彼らの文化や習慣について十分知らないから	58.6
②英語で自分の意思をうまく伝えることができないから	55.9
③専攻や研究室が異なり、学校で一緒に授業を受ける機会が少ないから	53.3
⑫他国からの留学生に対して距離感を感じるから	53.3
⑪相手と接触する頻度が少ないから	52.6

表 6-16～表 6-18 によると、「専攻や研究室が異なり、学校で一緒に授業を受ける機会が

少ないから」は3グループの共通上位項目となっている。また、「中・日」、「中・他」の共通上位項目として、ライフスタイルに共通性がない、言語の壁といった項目が挙げられる。一緒に授業を受ける機会の少なさは3グループの共通上位項目、また文化や言語の壁は「中・日」、「中・他」の共通上位項目となっている。

1-3-2 大学間の検討

阻害要因における大学間の異同を検討するため、大学別に阻害要因の上位項目を用いて、大学間の比較を行った。

中国人留学生同士の友人関係構築の阻害要因について、50%を超える項目が一大学一項目のみであるため、各大学の上位3項目を取り上げてみることにした。その結果は表6-19に示している。表6-19によると、項目③「専攻や研究室が異なり、学校で一緒に授業を受ける機会が少ないから」の出現回数はもっとも多く、4回となっている。この結果から、中国人留学生同士の間でも共同授業を通して友人関係を構築することが多いと予想される。

表 6-19 大学別阻害要因の上位項目（「中・中」） 単位：%

福岡大	早稲田	北九州市立	九州情報	九州工業	福岡女子
③ (36.8)	⑥ (33.3)	③ (26.7)	① (40)	③ (53.8)	⑧⑩ (60)
⑥ (34.2)	⑮ (33.3)	⑬ (26.7)	⑤⑧⑨ (28)	⑦ (26.9)	③ (35)
④⑦ (28.9)	⑬ (33.3)	⑥ (20)		⑨⑩ (19.2)	

注：（ ）「非常に当てはまる」と「やや当てはまる」を選択した人の割合

中国人留学生と日本人学生の友人関係構築の阻害要因について、「非常に当てはまる」と「やや当てはまる」を選択した人数の割合が50%を超える項目を大学別にまとめた。その結果は表6-20に示している。また、2回以上上位項目となっている項目の出現回数を表6-21に示している。表6-21の通り、項目⑭「日本人学生は遠慮し過ぎて、なかなか本当の気持ちを出さないから」と項目⑰「ライフスタイルに共通性がないから」は項目⑫「日本語がうまくできなくて、自分の意思をうまく伝えることができないから」と同じくいずれも6回となっている。この2項目は留学生の主観的要因に関する項目であり、六大学の共通上位項目となっている。この結果から、留学生の主観的要因は言語と同じく留学生の友人関係を影響する主な要因であることが示された。一緒に授業を受ける機会の少なさや居住地

の遠さといった客観的要因より、主観的要因が共通の上位項目となっていることから、留学生の友人関係を検討する際に、客観的要因より先に主観的要因に注目することが重要であると考えられる。

表 6-20 大学別阻害要因の上位項目（「中・日」） 単位：%

福岡大	早稲田	北九州市立	九州情報	九州工業	福岡女子
⑱ (73.7)	⑰ (93.3)	⑱ (83.3)	⑭ (84)	⑭⑱ (73.1)	⑭ (80)
⑭ (65.8)	⑱ (80)	⑫ (80)	⑳ (80)	⑳ (57.7)	⑱ (75)
⑫ (63.2)	⑭⑮ (73.3)	⑬ (56.7)	⑫⑱ (72)	⑦⑩⑫⑬ (50)	⑧ (65)
③ (60.5)	⑯ (66.7)	⑭ (53.3)	①⑦ (64)		③ (60)
⑮ (57.9)	④⑪ (60)	④⑦⑯ (50)	④⑤ (60)		⑫⑳ (55)
⑦ (50)	③⑦⑫ (53.3)		⑮⑯ (56)		⑬⑱ (50)

注：（ ）「非常に当てはまる」と「やや当てはまる」を選択した人の割合

表 6-21 「中・日」大学別上位項目の出現回数

項目	回数
⑫日本語がうまくできなくて、自分の意思をうまく伝えることができないから	6
⑭日本人学生は遠慮し過ぎて、なかなか本当の気持ちを出さないから	6
⑱ライフスタイルに共通性がないから	6
⑦相手と共通の趣味や話題がないから	5
③専攻や研究室が異なり、学校で一緒に授業を受ける機会が少ないから	3
④居住地が遠いから	3
⑬自分は日本の文化や習慣について十分に知らないから	3
⑮日本人学生が欧米の留学生を好んでいると感じるから	3
⑯日本人学生から留学生と友人になろうという気持ちが感じられないから	3
⑳価値観が違い、互いになかなか理解できないから	3

中国人留学生と他国からの留学生の友人関係構築の阻害要因について、「非常に当てはまる」と「やや当てはまる」を選択した人の割合が 50%を超える項目を大学別にまとめた。

その結果は表 6-22 に示している。また、2 回以上上位項目となっている項目の出現回数を表 6-23 に示している。表 6-23 によると、項目⑭「ライフスタイルに共通性がないから」は 6 回、項目③「専攻や研究室が異なり、学校で一緒に授業を受ける機会が少ないから」は 5 回、項目⑪「相手と接触する頻度が少ないから」、項目⑫「他国からの留学生に対して距離感を感じるから」、項目⑳「彼らの文化や習慣について十分知らないから」と項目㉑「英語で自分の意思をうまく伝えることができないから」は 4 回となっている。そのうち、項目⑫と項目⑭は主観的要因であり、そのほかの項目は客観的要因である。この結果から、「中・他」の友人関係構築に阻害する主な要因は主観的と客観的両方にあると推察できる。

上記の大学間の比較を通して、「中・日」の友人関係構築の阻害要因は主に学生側の主観的要因に集中しているのに対して、「中・他」では主観的要因と客観的要因の両方にあることが明らかになった。友人の国籍によってその友人関係構築の阻害要因にも違いがあり、いかにこれらの壁をなくし、学生間の友人関係構築を促進させるかを検討するには、それぞれ異なる阻害要因に注目する必要がある。また、様々な阻害要因がある中で、学生の友人関係構築に影響が強い要因から着手し、解決策を講じることへの重要性が示唆された。

表 6-22 大学別阻害要因の上位 4 項目（「中・他」） 単位：%

福岡大	早稲田	北九州市立	九州情報	九州工業	福岡女子
⑭ (66.7)	③ (73.3)	⑭ (73.3)	⑭ (84)	⑭ (76.9)	⑭⑳ (85)
③ (52.8)	④⑭ (66.7)	⑱㉑ (63.3)	㉑ (72)	⑮ (65.4)	㉑ (75)
㉑ (52.8)	⑪ (60)	⑫ (56.7)	①⑭⑰ (64)	⑪ ⑫ ⑯ ㉑	⑫ (65)
		③⑮ (53.3)	⑱ (60)	(61.5)	③⑧⑪ (60)
			⑦⑪ (56)	⑦㉑ (57.7)	
			⑫㉑ (52)	③⑩ (53.8)	

注：() 「非常に当てはまる」と「やや当てはまる」を選択した人の割合

表 6-23 「中・他」大学別上位項目の出現回数

項目	回数
⑭ライフスタイルに共通性がないから	6
③専攻や研究室が異なり、学校で一緒に授業を受ける機会が少ないから。	5
⑪相手と接触する頻度が少ないから	4
⑫他国からの留学生に対して距離感を感じるから。	4
⑳英語で自分の意思をうまく伝えることができないから	4
㉑彼らの文化や習慣について十分知らないから。	4
⑦相手と共通の趣味や話題がないから	2
⑮彼らは日本語や中国語をうまく話せないから	2
⑱宗教や信仰などのことで、彼らとの友人付き合いで遠慮することが多いから	2

第三節 考察

本研究は福岡都市圏六大学において調査を実施し、中小規模大学において在日中国人留学生の友人関係、及び在学身分、専攻、外国語能力など諸関連要因による友人関係構築への影響を明らかにした。また、六大学全体の考察及び大学間の比較を通して中小規模大学に在籍する中国人留学生の友人関係構築の阻害要因を明らかにした。以下では、友人関係と阻害要因に分けて、まとめと考察を行う。

1-1 友人関係に対する考察

在日中国人留学生の友人関係については、中国人留学生同士の友人つながりがもっとも強く、また、言語面を除きすべての面において深いつながりがある。また、中国人留学生と日本人学生は勉学面と異文化理解においてより深いつながりがあるが、中国人留学生と他国の留学生との友人関係は異文化理解においてのみ、ある程度の友人付き合いがあることがわかった。この結果は、九州大学で実施した中国人留学生の友人関係に関する調査と同様であり、大学の規模と関係なく、中国人留学生の友人関係は同国人、日本人学生、他国からの留学生とそれぞれ異なる機能に集中していることが検証された。先行研究との相違点などについては、第五章の考察を参照されたい。なお、中国人留学生の友人関係における大学間の差異については、次章で両調査の結果に基づき分析を行う。

続いて、関連要因による友人関係への影響を検討した結果、専攻、部活・サークルの参加状況、中国学友会・留学生会の加入状況、日本語能力、在学身分、居住形態は「中・日」グループの友人付き合いに影響を与え、英語能力は「中・他」グループの友人付き合いに影響を与えることが明らかになった。

さらに、上記の関連要因の違いは具体的に「中・日」友人関係のどの面に影響を与えているかを検討するために、「中・日」グループに対して因子分析を行った結果、Ⅰ「共同リラックス行動」、Ⅱ「勉強サポート」、Ⅲ「異文化理解」という3因子が抽出された。因子別に属性の影響を検討した結果、日本語能力はすべての因子に影響を与え、部活・サークルの参加状況、中国学友会・留学生会の加入状況は因子Ⅰと因子Ⅲに影響を与えていることが明らかになった。また、専攻、在学身分は因子Ⅰと因子Ⅲに影響を与え、因子Ⅱに影響を与える可能性があることが明らかになった。居住形態については、因子Ⅱに留学生専用寮と混住寮の違いが見られた。

上記のように、本研究を通して諸関連要因による在日中国人留学生の友人関係への影響を明らかにした。そのうち、専攻、部活・サークルの参加状況、中国学友会・留学生会の加入状況、在学身分、外国語能力などの関連要因による影響は第二章第三節 1-2 に示す先行研究では見られなかった。

専攻の違いが留学生の友人関係に影響を与える理由について、文系学生と理系学生の学習環境が関係していると推察される。文系学生は実験をする必要がなく、時間的には理系学生よりも自由であるため、社会参加や研究室外活動への参加が多く、日本人学生と接触する機会が増えると予想されるため、日本人学生との友人関係を深めることができたのではないかと考えられる。一方、理系学生は、実験などで研究室にいる時間が多く、研究室外の学生との交流が少ないため、友人ネットワークは研究室内に限定していることが多いと思われる。

また、部活・サークルの参加を通して、日本人学生と一緒に活動する機会が多くなり、部活活動などを通して双方の友人関係を深めることができると考えられる。留学生会への参加も同じく、様々な交流活動やイベントを通して、友人ネットワークを広げることが可能となるため、参加している学生のほうが日本人学生とより深いつながりを持っている。

在学身分による違いについては、交換留学生と学部生は大学院生より日本人学生と深い関係を持っていることが明らかになった。その理由は、交換留学生は短期間のみ来日し、言語や日本文化に興味を持っている人が多く、積極的に日本人学生と友人関係を築くこと

が多いためであると推察される。また、学部生は日本人学生と一緒に授業を受ける機会が多く、より友人関係を築きやすい環境にいるのに対して、大学院生、特に博士学生は研究室にいる時間が多く、日本人学生と一緒に授業を受ける機会が少ないため、学部生と博士との間に違いが見られたのではないかと考えられる。

第五章では、日本語、英語という外国語能力による留学生の友人関係に与える影響を検討したが、今回の調査結果においても外国語能力の役割が認められた。この結果から、出身国が異なる学生の間では、友人関係を構築するために共通語もしくは相手の言葉を習得することが重要だと言える。

本調査の分析結果を通して、キャンパスのグローバル化を求めるために何が必要かを考えてみた。

本研究では、留学生の友人機能は友人の国籍によって分化されていることが明らかになった。そこで、大学は異なる国籍を持つ学生から構成される留学生のサポーター陣を構築すべきである。これまでに各大学で実施されていた留学生サポート制度やチューター制度はサポーターとサポートを受ける側の国籍を考慮することがなかった。留学生の友人機能は友人の国籍によって分化されているという結果を受け、自文化、多文化、ホスト国文化を有する複数のサポーターからの支援を受けたほうがより効率化だと考えられる。本研究における中国人留学生の事例から見ると、自文化の共有、レクリエーションなどの支援は同国人から、勉学の支援は日本人学生から、異文化理解の支援は日本人学生と他国の留学生からとすれば、留学生の異文化適応の促進や幅広い友人関係の構築ができるようになると思われる。

また、中国人留学生と日本人学生、他国からの留学生の間で異文化理解のつながりが深いことから、異文化理解の友人付き合いを切口にほかの面のつながりを広げることが有効な手段であると思われる。留学生と日本人学生、または留学生同士の相互理解を深めるイベントや交流活動を積極的に実施し、このような機会をきっかけに留学生と日本人学生、または留学生同士の間が異文化理解の線につながり、さらに異文化理解という線につながりから、勉学、レクリエーションなど様々な面でのつながりに広がり、最終的には深い友人付き合いができるようになる可能性が高い。

イベント、交流活動といった異文化理解活動のほか、本研究では部活・サークルの参加が中国人留学生の日本人学生との友人関係を促進する役割を果たしていることが明らかになった。特に部活・サークルの参加は勉学との関係がなく、レクリエーションや異文化理

解のつながりと関連しているという結果から、留学生が部活、サークルへ自主参加するような工夫をする、または日本人学生が留学生を積極的に部活・サークルに勧誘することにより、学生同士のつながりが深まり、キャンパスのグローバル化に拍車をかけることになるのではないかと考えられる。留学生の部活・サークルへの参加が、留学生の友人ネットワークに与える影響については、これまでの研究では言及されていなかった。混住寮での留学生と日本人学生の友人関係については多くの研究がなされてきたが（山川 2013, 吉田 2015）、部活・サークル、学友会・留学生会というコミュニティにおける留学生の友人関係を検討することも意義深いことである。

さらに、本研究では中国人留学生の在学身分によって日本人学生との友人関係が異なることが明らかになった。交換留学生、学部生は日本人学生との友人関係のつながりが強く、博士課程の学生は日本人学生との友人関係のつながりがもっとも弱いことから、留学生と日本人学生の友人関係を積極的に構築させるためには、大学院生、特に博士学生への特別な支援が必要である。交換留学生は短期間のみ日本へ留学し、好奇心が強いため日本人学生との友人付き合いをしようと積極的に努力すると思われる。また、学部生は日本人学生と一緒に授業を受ける機会が大学院生より多く、一緒に居る時間が長いため、日本人学生と友人関係を構築することも比較的容易であるが、大学院生、特に博士学生は授業の時間が短く、日本人学生と接触機会も少なくなると考えられる。そのため、大学院生に対して、日本人学生と接触する機会を増やすため、国際交流活動への参加を促したり、研究交流会を開催するなどの特別な支援策が必要である。

近年、日本において、多くの大学で留学生に対するサポーター制度、チューター制度、国際交流イベントなどが活発に行われている。しかし、日本においてこれらの活動をインフォーマルなカリキュラムとしてシステム化する研究が見当たらない。Leask (2009) は正課外の活動をシステム化し、インフォーマルなカリキュラムの構築が必要であると指摘している。日本においても、これまで実施してきたすべての国際交流活動を整理した上でカテゴリ化して、最終的にインフォーマルなカリキュラムとしてシステム化する必要がある。これらを正課のカリキュラムと併せて日本人学生、留学生に応用すると、キャンパス内の国際交流がさらに活発になるのではなかろうか。

1-2 友人関係構築の阻害要因に対する考察

在日中国人留学生の友人関係構築の阻害要因を検討した結果、阻害要因が中国人留学生

の友人関係構築に与える影響は同国人よりも、日本人学生または他国からの留学生のほうが強いことが明らかになった。また、一緒に授業を受ける機会の少なさは3グループの共通上位項目となっており、ライフスタイルに共通性がない、言語の壁といった項目が「中・日」、「中・他」の共通上位項目となっていることが明らかとなった。さらに、大学別に検討した結果、「中・日」の阻害要因は学生側の主観的要因に集中しているのに対して、「中・他」のほうは主観的要因と客観的要因両方にあることが明らかになり、国籍が異なる学生との友人関係構築はそれぞれ異なる阻害要因から影響を受けていることが示唆された。

阻害要因の中国人留学生同士への影響が弱い原因については、言葉と文化の壁がなく、共通のアイデンティティを持っているため、様々な阻害要因があっても簡単に乗り越えられるためであると推察される。しかし、日本人学生と他国からの留学生の場合は、言語と文化の壁があり、特に言語問題は友人関係を構築するために乗り越えなければならない壁となる。

日本人学生との友人関係構築の阻害要因について、横田(1991a)は留学生側の「日本の慣習」、「言葉の障壁」、「関係づくりへの抵抗感」、「興味なし余裕なし」、「希薄な主張」という五つの因子、田中(1995)は留学生側の「日本人批判」、「自分の知識」、「機械的理由」、「自分の態度」という四つの因子、湯(2014)は「日本でのソーシャル・ネットワーク欠損」、「語学能力」、「対人志向性」、「異文化理解」、「アルバイト」という五つの因子、石原(2011)は「被差別感」、「対等な協働関係の不成立」、「関係形成の障害」、「交流不全」、「交流スタイルの相違」という五つの因子を抽出した。本研究の一回目の調査でも中国人留学生と日本人学生との「接触機会の少なさ」、「性格や趣味の不一致・余裕なし」、「日本人学生の友人付き合い志向」、「言語不安・異文化接触不安」、「文化間差異」という五つの因子を抽出している。上記の因子を主観的要因と客観的要因に分け、表6-24に示した。表6-24によると、客観的な要因は文化慣習、言葉の壁、接触機会などにとどまっているが、主観的要因は「関係づくりへの抵抗感」、「興味なし」、「希薄な主張」、「日本人批判」、「自分の態度」、「対人志向性」、「異文化理解」、「被差別感」、「対等な協働関係の不成立」、「関係形成の障害」、「交流スタイルの相違」、「日本人学生の友人付き合い志向」、「文化間差異」など多数挙げられる。

中国人留学生と日本人学生の友人関係を構築するための阻害要因が主観的要因に集中する原因は、留学前の日本または日本人に対するイメージ、留学後の日本社会での実際の体験などが挙げられ、特に先入観の影響が強いと考えられる。一方、他国からの留学生との

間では、先入観の影響が弱く、また、留学生同士の間では英語での交流が多いが、日本では英語を使用する環境が少なく、英語能力の上達は日本語より遅くなるため、接触機会の少なさや外国語能力などの影響が強くなると考えられる。そのため、客観的要因と主観的要因両方からの影響が主要な阻害要因となっていると予想される。

表 6-24 「中・日」友人関係構築の阻害要因因子

主観的要因	客観的要因
被差別感	
希薄な主張	
日本人批判	
自分の態度	
対人志向性	交流不全
異文化理解	日本の慣習
文化間差異	アルバイト
異文化接触不安	自分の知識
関係形成の障害	機械的理由
興味なし余裕なし	接触機会の少なさ
交流スタイルの相違	言語の障壁/語学能力
性格や趣味の不一致	
関係づくりへの抵抗感	
対等な協働関係の不成立	
日本人学生の友人付き合い志向	

阻害要因が中国人留学生の友人関係構築に与える影響は同国人より、日本人学生または他国からの留学生のほうが強いことから、中国人留学生と日本人学生、または中国人留学生と他国からの留学生の間に教育的介入をする必要があると思われる。教育的介入については、様々な定義がなされているが、Prizant & Wetherby (1998) は医療系における教育的介入として行動的介入²⁷、発達の介入²⁸、療育的介入、複合的介入、家族支援などを

²⁷ 行動的介入はオペラント行動に対する行動変容法の技術が介入アプローチの主要な特徴をなすものである。行動的介入は、学習理論に深く立脚しており、ほとんどの人間行動

挙げており、行動的介入には早期行動介入（EIBI）や集中行動介入（IBI）などがあり、発達の介入には発達の対人関係・語用論モデル（DSP）、関係発達の介入などがあると解釈し、教育的諸介入には、厳格な伝統的行動介入と発達の対人関係・語用論アプローチを両極とする連続体上に占める位置によって整理することができる指摘している。この中の発達の介入は留学生の友人関係にも応用できる。留学生の友人関係構築の促進、及び阻害要因の減少についても、ソーシャル・スキル・トレーニングといった留学生の行動に対する介入や、異文化理解の講義の導入による主観的意識に対する発達の介入が有効であると思われる。

また、中国人留学生と日本人学生の友人関係構築の阻害要因は学生側の主観的要因に集中していることから、大学では混住寮、共同授業などの客観的要因を改善する前に、学生側の主観的要因に注目する必要がある。学生側の主観的意識が変わらなければ、偏見や相互不理解を持ったまま、一緒に行動することが多くなっても、学生の友人関係構築に果たす役割は弱くなる可能性がある。中国人留学生と他国からの留学生の間では、学生の主観的要因も他の客観的要因も上位阻害要因となることから、学生側の主観的意識に注目するとともに、接触機会を増やし、外国語能力を高めさせるなどの支援が必要である。

1-3 今後の課題

本研究では中国人留学生を対象に検討してきたが、留学生の出身国の違いによって留学生の友人関係及びその阻害要因は様々である。そのため、留学生の友人関係及びその阻害要因の課題をさらに検討するには、日本人学生またはほかの国からの留学生を研究対象として、さらに追究することが必要である。また、本研究では、量的研究を中心に中国人留学生の友人関係を検討してきたが、来日してどのような場面で、どのように日本人学生の友人、また他国の留学生と友人関係を構築したか、その友人とのつながりがいかに広がり、いかに消えていったか、部活・サークルに参加することによって日本人学生とどのような友人関係を構築したのか、友人関係の構築が自分の異文化適応、または留学満足度とどの

は個人とその環境の相互作用を通じて学習されるという前提に立っている。

<http://www.tsumiki.org/koudou.pdf>（2017年12月19日最終アクセス）

²⁸ 発達の介入は子どもが他者と積極的で有意義な関係を形成する能力に焦点を当てている。一般的に、これらのプログラムの狙いは、子どもたちが「注意を向け、関係を作り、やりとりを行い、色々な感情を経験し、最終的には系統だって理にかなったやり方で考え、関係作りをする」ことを手助けすることである。<http://www.tsumiki.org/hattatu.pdf>（2017年12月19日最終アクセス）

ように関連しているかなどの課題について、個々人に対して質的研究を行い、さらに検討する必要がある。

第七章 在日中国人留学生のソーシャル・ネットワークの大学間比較検討

ネットワークのサイズはコミュニティにおける人間関係に大きく影響している。五十嵐(2015: 36)は、「人間が維持できるつながりの数には限度があると仮定すると、サイズの小さいネットワークの密度は高くなる。すなわち、大きなコミュニティに比べ、小さい集団では容易にすべての人々と知り合うことができる」と述べている。これを本研究に反映すると、留学生数2,000人以上の九州大学は大きなコミュニティであり、留学生数500人以下の大学は小さい集団である。日本人学生を含めて学生数を見ても、九州大学は2017年5月現在で19,230人である一方、六大学の中で学生数が一番多い大学は8,000人台で、九州大学の在籍学生数は六大学を遥かに多く上回っている。この数字から見ると、留学生の数でも、日本人学生の数でも、九州大学という大きなコミュニティと比べ、六大学は小さい集団と見なされる。上記の「大きなコミュニティに比べ、小さい集団では容易にすべての人々と知り合うことができる」という考えに基づけば、九州大学に在籍する中国人留学生より、六大学に在籍する中国人留学生のほうが容易にすべての学生と知り合うことができると言えよう。さらには、大きなコミュニティより小さい集団のほうが人々との友人つながりが深いのではないかと考えられる。

また、留学生30万人計画、スーパーグローバル大学創成事業などの政策の実施により、多くの大学においては数多くの留学生を受け入れて、キャンパスをより高度にグローバル化しようとしている。しかし、大学の留学生の割合を上げることによって、実際に学生同士のコミュニケーションや友人関係が深まるのかどうかという点に関する検討はなされていない。

第五章と第六章ではそれぞれ大規模大学の九州大学と中小規模大学の福岡都市圏六大学での調査に対して考察を行った。しかし、上記のように、大学の規模、また留学生の受け入れ数や留学生の割合の違いによって留学生の友人関係及びその阻害要因に違いが生じるかどうかという点については疑問が残っている。そのため、本章では、九州大学と福岡都市圏六大学のデータを用い、大学の規模、留学生の割合によって中国人留学生の友人関係、またはその阻害要因にどのような違いがあるかを明らかにすることを目的とする。上記の目的に沿って、以下の二つの仮説を立てた。

仮説 1 :

「中・中」、「中・日」、「中・他」の友人付き合いにおいて、大きなコミュニティである九州大学より、小さい集団である六大学のほうが友人つながりが深い。また、友人関係構築の阻害要因が中国人留学生に与える影響については、小さい集団である六大学より、大きなコミュニティである九州大学のほうが大きい。

仮説 2 :

大学における留学生の割合が高ければ、「中・中」、「中・日」、「中・他」の友人つながりが深く、友人関係構築の阻害要因が中国人留学生に与える影響が少なくなる。

第一節 分析方法

1-1 大学規模による分析

友人関係を測定する質問項目について、一回目の調査では 12 項目を設定し、二回目の調査ではさらに 3 項目を追加し調査を行った。本章では、一回目の調査と二回目の調査において共通する 12 項目のデータを用い、比較を行う。具体的には、九州大学と福岡都市圏六大学の間の平均得点に差が見られるか検討するため、「九州大学・福岡都市圏六大学」を独立変数、「中・中」、「中・日」、「中・他」それぞれのグループの平均得点を従属変数とした t 検定を行った。さらに、二回の調査で共通する 12 質問項目別に九州大学と福岡都市圏六大学の間に平均得点に差が見られるかどうかを検討するため、「九州大学・福岡都市圏六大学」を独立変数、「中・中」、「中・日」、「中・他」の 12 項目の平均得点を従属変数とした t 検定を行った。

また、「中・中」、「中・日」、「中・他」3 グループにおいて、九州大学、福岡都市圏六大学の中国人留学生の友人つながりはそれぞれどのようなことに集中しているか、相違点は何かを見るために、各項目において、「非常に当てはまる」と「やや当てはまる」を選択した人数の割合を用いて、九州大学、福岡都市圏六大学両グループの比較を行った。

阻害要因の測定は一回目の調査と二回目の調査は同項目を用いている。九州大学と福岡都市圏六大学の結果の相違点を見るために、「中・中」15 項目、「中・日」21 項目、「中・他」21 項目において、「九州大学・福岡都市圏六大学」を独立変数、「中・中」、「中・日」、「中・他」それぞれのグループの平均得点を従属変数とした t 検定を行った。さらに、項目別に九州大学と福岡都市圏六大学の間に平均得点に差が見られるかどうかを検討するた

め、「九州大学・福岡都市圏六大学」を独立変数、「中・中」15項目、「中・日」21項目、「中・他」21項目の平均得点を従属変数としたt検定を行った。

1-2 留学生の割合による分析

本研究は福岡都市圏における合わせて7大学で調査を行った。7大学を表3-1のデータを参考にし、留学生の割合によって表7-1に示す3グループに分けた。グループ1は留学生の割合が5%以下の大学で、グループ2は留学生の割合が10%~15%の大学で、グループ3は留学生の割合が30%以上の大学である。また、3グループの有効回答数は、グループ1(94部)、グループ2(115部)、グループ3(40部)である。

表7-1 留学生の割合によるグループ分け

単位：人

グループ	大学	学生数	留学生数	留学生の割合
1	福岡大学	8,367	168	2.0%
	北九州市立大学	6,704	236	3.5%
	九州工業大学	5,653	272	4.8%
2	九州大学	19,230	2,201	11.4%
	福岡女子大学	1,034	125	12.1%
3	九州情報大学	435	172	39.5%
	早稲田(北九州)	469	408	87.0%

留学生の割合別の分析についても、一回目の調査と二回目の調査において共通する12質問項目のデータを用い、比較を行う。留学生の割合による3グループの友人関係への影響を検討するために、各グループの平均得点を求めた上で、友人関係の分散分析を行った。また、項目別に3グループの違いを検討するため、項目別に分散分析を行った。阻害要因の分析も同じく、各グループの平均得点を求めた上で、阻害要因の分散分析を行った。

第二節 分析結果

1-1 大学規模による分析結果

1-1-1 友人関係

「中・中」、「中・日」、「中・他」3グループに対してt検定を行った結果、「中・中」グループにおいて九州大学と六大学の間に有意な差が見られた ($t=-2.879$, $df=247$, $p<.01$) (表7-2)。この結果から、九州大学に在籍する中国人留学生より、六大学に在籍する中国人留学生のほうが同国人との友人つながりが深いと言える。これは大学の中国人留学生数と関連していると考えられる。すなわち、同国人が少ないほど中国人留学生は同国人との友人つながりが深いということである。また、「中・日」、「中・他」グループにおいては九州大学と六大学の間には差が見られなかったため、大学の留学生受入れ数は中国人留学生と日本人学生、他国からの留学生との友人関係に与える影響が弱いと考えられる。

表 7-2 大学規模別 t 検定結果 (友人関係)

	九州大学			六大学			t 値
	M	SD	N	M	SD	N	
「中・中」	3.11	.57	95	3.31	.49	154	-2.879*
「中・日」	2.35	.55	95	2.42	.55	152	-.982
「中・他」	2.03	.65	77	2.08	.54	141	-.504

* $p<.01$

二回の調査で共通する12質問項目のうち、具体的にどの項目において差があるかを検討するため、12項目別に分析した結果、「中・中」グループは項目2 ($t=-4.196$, $df=209.332$, $p<.01$)、項目12 ($t=-3.809$, $df=180.078$, $p<.01$)、「中・日」グループは項目3 ($t=-3.728$, $df=245$, $p<.01$)、項目7 ($t=2.129$, $df=245$, $p<.05$)、項目12 ($t=-3.482$, $df=245$, $p<.01$)において、九州大学と六大学の間には有意な差が見られた。「中・中」グループの結果は表7-3、「中・日」グループの結果は表7-4に示している。

表7-3によると、項目2「言葉の添削」と項目12「スポーツ」は、いずれも九州大学より六大学のほうが平均値が高いことがわかる。この結果から、言葉の添削といった勉学に関すること、またはスポーツといったレクリエーションに関することは、大規模大学の九

州大学より中小規模大学の六大学のほうが同国人とのつながりが深いと言える。この結果は上記の表 7-1 を支持している。すなわち、中国人留学生の同国人との友人付き合いは在籍大学の留学生数と関係しており、留学生数が少ないほど同国人とのつながりが深い。

表 7-4 は「中・日」グループの結果を示している。有意差が認められている項目 3「買い物」、項目 12「スポーツ」はレクリエーションに関することで、九州大学より六大学の中国人留学生のほうが平均値が高いが、勉学に関する項目 7「勉学情報の提供」については、六大学より九州大学の中国人留学生のほうが平均値が高い。

表 7-3 友人関係項目別 t 検定結果（「中・中」）

	九州大学			六大学			t 値
	M	SD	N	M	SD	N	
①母国や故郷の話	3.57	.794	95	3.75	.543	154	-1.928
②言葉の添削	1.99	1.047	95	2.58	1.119	154	-4.196*
③買い物	3.48	.944	95	3.68	.656	154	-1.733
④勉学面の相談	3.48	.874	95	3.48	.769	154	.035
⑤落込み時の頼り	3.42	.952	95	3.50	.826	154	-.691
⑥パーティーへの参加	3.41	.905	95	3.56	.704	154	-1.419
⑦勉学情報の提供	3.26	.936	95	3.45	.833	154	-1.679
⑧料理	3.20	1.068	95	3.35	.946	154	-1.161
⑨イベントへの参加	3.51	.836	95	3.58	.738	154	-.781
⑩浅い関係で立ち話程度	1.82	.945	95	1.83	.823	154	-.089
⑪観光や見学旅行	3.44	.931	95	3.63	.749	154	-1.662
⑫スポーツ	2.77	1.143	95	3.31	1.007	154	-3.809*

* $p < .01$

表 7-4 友人関係項目別 t 検定結果 (「中・日」)

	九州大学			六大学			t 値
	M	SD	N	M	SD	N	
①母国や故郷の話	2.72	.808	95	2.64	.785	152	.748
②言葉の添削	2.61	1.160	95	2.63	1.059	152	-.146
③買い物	1.76	.821	95	2.16	.841	152	-3.728*
④勉学面の相談	2.62	1.064	95	2.58	1.000	152	.314
⑤落込み時の頼り	2.17	.996	95	2.13	.926	152	.295
⑥パーティーへの参加	2.22	.925	95	2.24	.876	152	-.191
⑦勉学情報の提供	2.94	.965	95	2.67	.947	152	2.129*
⑧料理	1.87	.890	95	1.95	.856	152	-.706
⑨イベントへの参加	2.44	.997	95	2.53	.989	152	-.700
⑩浅い関係で立ち話程度	2.89	.881	95	2.93	.900	152	-.282
⑪観光や見学旅行	2.17	.846	95	2.39	.869	152	-1.953
⑫スポーツ	1.84	.829	95	2.24	.890	152	-3.482*

* $p < .01$

九州大学、福岡都市圏六大学両グループの結果の相違点を見るために、各グループの項目において、「非常に当てはまる」と「やや当てはまる」を選択した人の割合を求め、順位付けを以下の図に示した。

図 7-1 と図 7-2 は「中・中」グループにおける九州大学と六大学の結果である。下位項目を見ると、両グループの下位 5 項目は共通していることがわかる。5 項目のうち、勉学に関する項目は②「言葉の添削」、⑦「勉学情報の提供」という 2 項目であり、この結果から、「中・中」グループの友人付き合いについては、勉学以外のことが中心であると考えられる。また、両グループの上位項目を見ると、上位 5 項目のうち、共通項目は①「故郷の話」、⑨「イベントへの参加」、③「買い物」、⑪「旅行」という 4 項目であり、勉学外の友人つながりが中心であることがわかる。

上記の結果から、「中・中」の友人つながりの強さは大学の留学生受入れ規模と関係しているが、友人付き合いの内容については大学の留学生受入れ規模と関係なく、勉学外のことに集中していることがわかった。

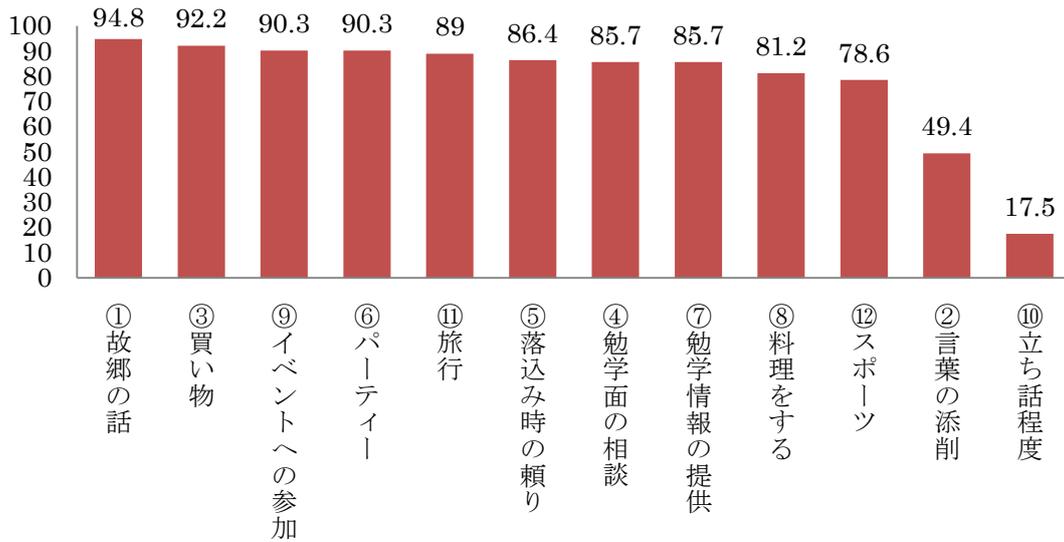


図 7-1 「中・中」友人関係（九州大学）²⁹

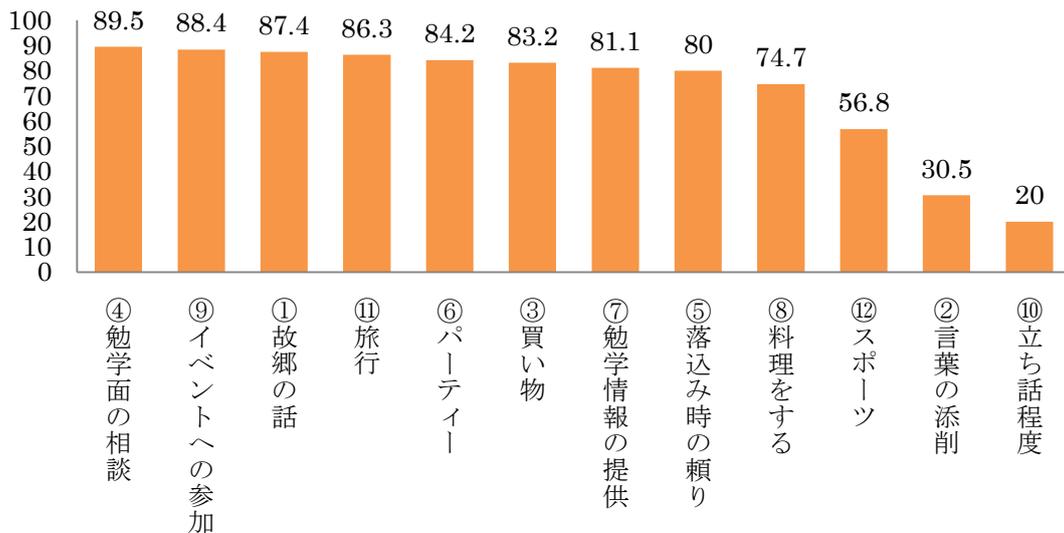


図 7-2 「中・中」友人関係（六大学）

図 7-3 と図 7-4 は「中・日」グループにおける九州大学と六大学の結果である。両グループの上位 6 項目を見ると、両グループは同項目となっている。すなわち、勉学に関する 3 項目（⑦、④、②）、異文化理解に関する 2 項目（①、⑨）、友人関係の深さを示す項目⑩である。この結果から、「中・日」の友人付き合いは大学の留学生受入れ規模と関係なく、勉学面と異文化理解に集中していることがわかる。この結果は第五章と第六章で分析した

²⁹ 各項目において「非常に当てはまる」「やや当てはまる」を選択した人の比率（以下同）

「中・日」の友人付き合いと同様である。

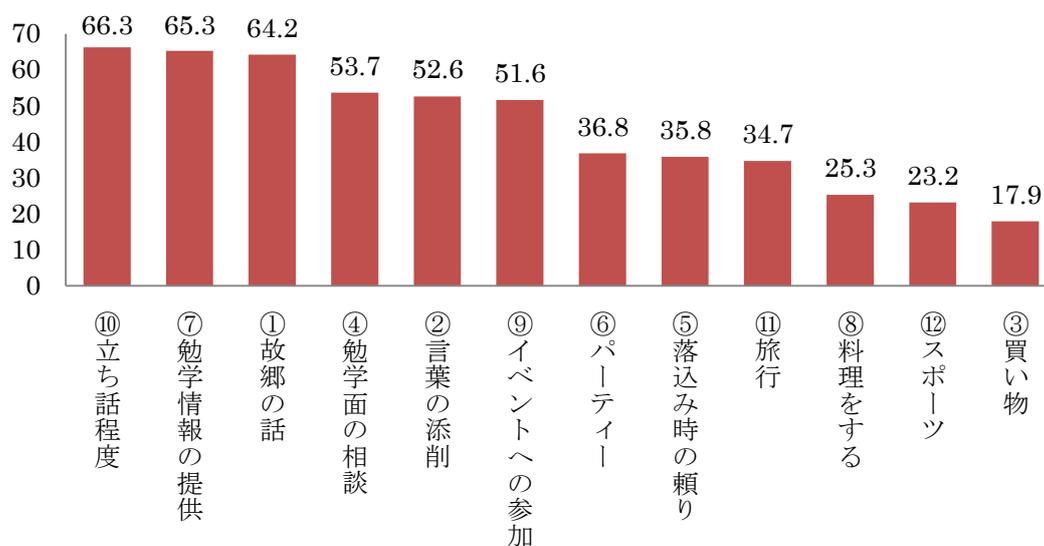


図 7-3 「中・日」友人関係（九州大学）

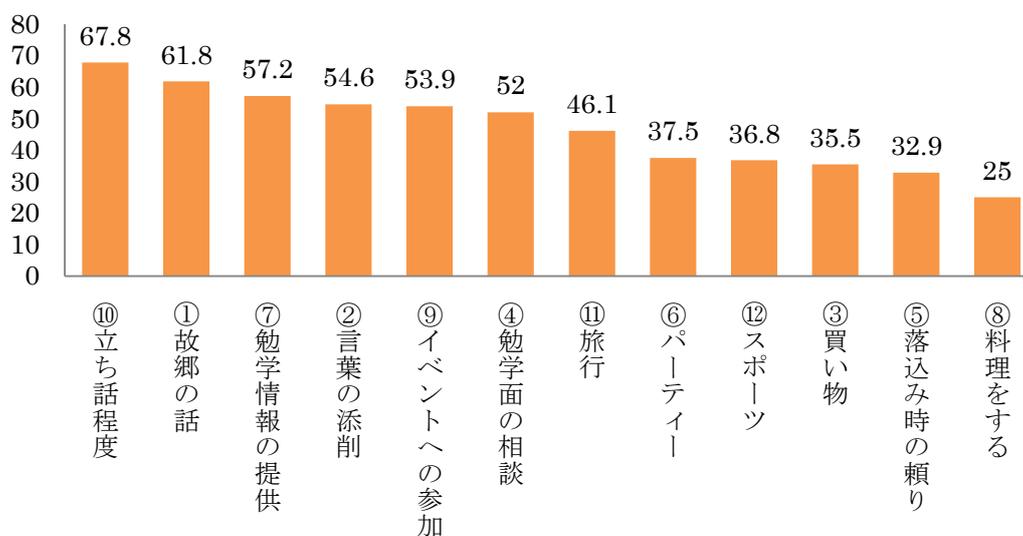


図 7-4 「中・日」友人関係（六大学）

図 7-5 と図 7-6 は「中・他」グループにおける九州大学と六大学の結果である。図 7-5 と図 7-6 によると、上位 1 位の項目は両グループで同様であり、また 1 番目の項目と 2 番目の項目の間には大きな差があることがわかる。上位 1 位の項目は項目⑩「立ち話程度」であり、「中・他」の友人関係の深さを示している。上位 2 位と 3 位の項目は両グループにおいて共通しており、「故郷の話」や「イベントへの参加」といった異文化理解に関する項

目である。この結果から、「中・他」の友人付き合いは主に異文化理解の活動を中心に行っていることと、「中・他」の友人関係は浅い関係にとどまっていることが大学の規模と関係なく共通していると言える。

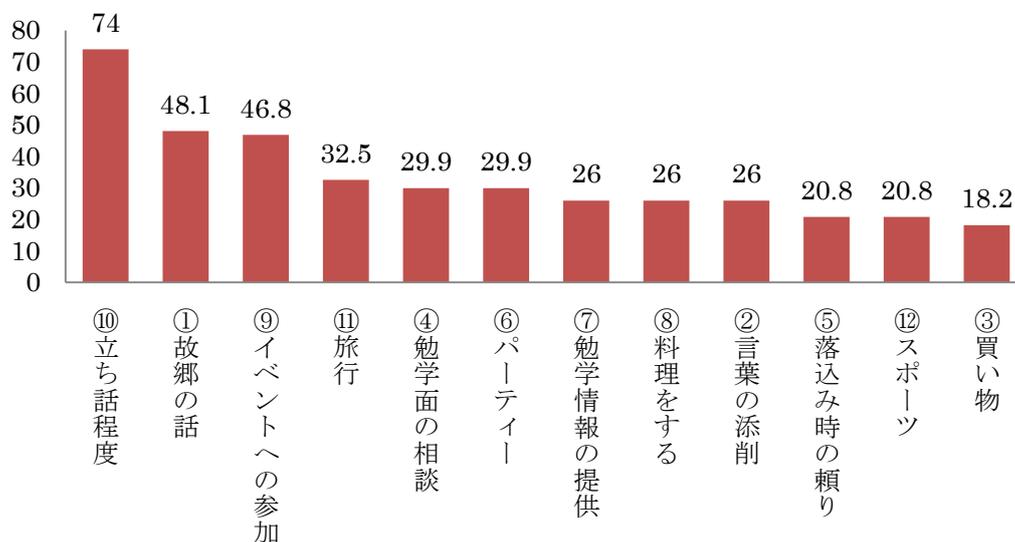


図 7-5 「中・他」友人関係（九州大学）

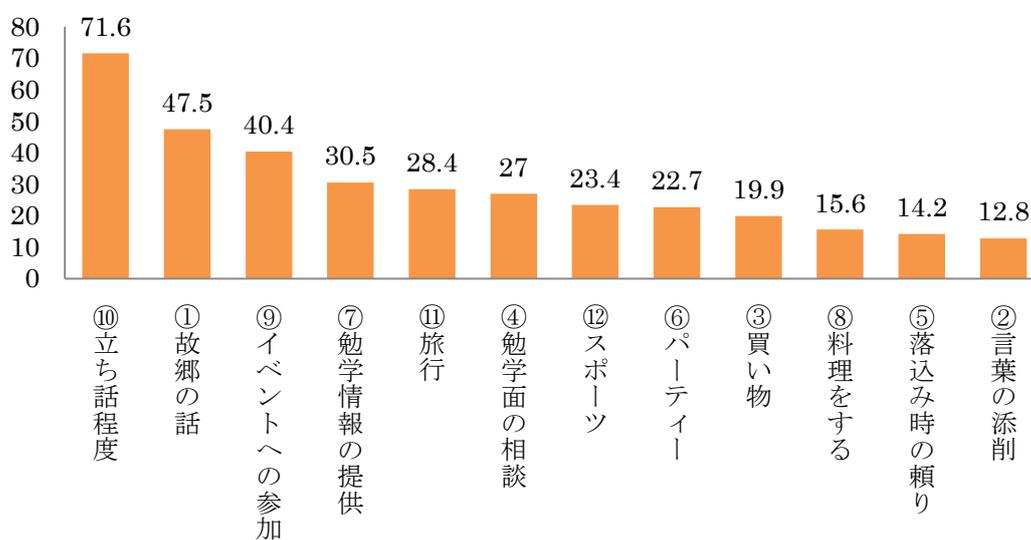


図 7-6 「中・他」友人関係（六大学）

1-1-2 友人関係構築の阻害要因

「中・中」、「中・日」、「中・他」3 グループに対して t 検定を行った結果、「中・中」($t=1.916$, $df=247$, $p<.1$)、「中・日」($t=-1.793$, $df=247$, $p<.1$) グループにおいて、九州大学と六大

学中国人留学生の間で 10%水準で有意な傾向が見られた (表 7-5)。t 検定の結果から、中国人留学生同士の間での友人関係構築の阻害要因は、六大学より九州大学のほうがその影響が強いことがわかる。一方、中国人留学生と日本人学生の間での友人関係構築の阻害要因については、九州大学より六大学のほうがその影響が強い傾向がある。つまり、「中・中」グループと「中・日」グループには異なる傾向が表れた。上記の「中・中」グループの友人関係の分析結果を踏まえると、大学の規模が大きいほど中国人留学生の同国人との友人つながりは弱くなるとともに、阻害要因の影響が強くなると考えられる。「中・日」グループの友人関係は大学の規模と関係ないが、阻害要因の影響については大学間の差異が見られた。

表 7-5 留学生規模別 t 検定結果 (阻害要因)

	九州大学			六大学			t 値
	M	SD	N	M	SD	N	
「中・中」	1.90	.54	95	1.77	.50	154	1.916*
「中・日」	2.26	.47	95	2.37	.47	154	-1.793*
「中・他」	2.31	.50	91	2.34	.51	152	-.487

* $p < .1$

各グループの阻害要因質問項目において、具体的にどの項目において差があるかを検討するため、「中・中」グループ 15 項目、「中・日」グループ 21 項目、「中・他」グループ 21 項目に対して項目別に検討した結果、「中・中」グループは項目 2 ($t=2.596$, $df=161.978$, $p < .05$)、項目 3 ($t=2.510$, $df=183.317$, $p < .05$)、項目 4 ($t=3.048$, $df=170.496$, $p < .01$)、項目 11 ($t=2.489$, $df=153.361$, $p < .05$)、「中・日」グループは項目 5 ($t=-2.455$, $df=247$, $p < .05$)、項目 10 ($t=-2.487$, $df=247$, $p < .05$)、項目 20 ($t=-4.575$, $df=221.177$, $p < .01$)、「中・他」グループは項目 5 ($t=-2.132$, $df=242$, $p < .05$)において、九州大学と六大学の間に有意な差が見られた。「中・中」グループの結果は表 7-6、「中・日」グループの結果は表 7-7、「中・他」グループの結果は表 7-8 に示している。なお、各質問項目の具体的な内容は添付資料 10 を参照されたい。

表 7-6 は「中・中」グループの結果を示している。表 7-6 によると、項目 2「互いに性格が合わないから」、項目 3「専攻や研究室が異なり、学校で一緒に授業を受ける機会が少

ないから」、項目 4「居住地が遠いから」、項目 11「相手と接触する頻度が少ないから」といういずれの項目も六大学より、九州大学の平均値が高いことがわかる。項目 2 は主観的要因であり、項目 3、4、11 は客観的要因である。この結果は表 7-5 に示している九州大学と六大学の結果を支持している。すなわち、中国人留学生の同国人と友人関係を構築する阻害要因については、同国人の留学生数が少ないほど阻害要因の影響は弱いと言える。

表 7-7 は「中・日」グループの結果を示している。表 7-7 によると、項目 5「年齢差があり、みぞを感じるから」、項目 10「人付き合いにあまり興味がなく、面倒くさいと感じるから」、項目 20「価値観が違い、互いになかなか理解できないから」といういずれの項目も九州大学より、六大学の平均値が高いことがわかる。年齢差でみぞを感じることや、日本人学生との友人付き合いに対する興味の薄さ、または価値観の差異に対する抵抗はすべて中国人留学生側の主観的要因である。これらの主観的要因からの影響については、六大学のほうが強い。

表 7-8 は「中・他」グループの結果を示している。九州大学と六大学の間に有意な差が見られた項目は項目 5「年齢差があり、みぞを感じるから」のみである。この項目においては、九州大学より六大学のほうが平均値が高い。「中・日」グループと同じく、年齢差でみぞを感じることの阻害要因としての影響は、九州大学より六大学のほうが強い。

上記のグループ別、項目別に行った t 検定結果から見ると、有意差が見られた項目について、「中・中」においては六大学より九州大学のほうが平均値が高く、「中・日」、「中・他」グループにおいては九州大学より六大学のほうが平均値が高いことがわかる。

表 7-6 阻害要因項目別 t 検定結果 (「中・中」)

	九州大学			六大学			t 値
	M	SD	N	M	SD	N	
項目 1	1.80	.807	95	1.82	.801	154	-.235
項目 2	1.98	.934	95	1.69	.719	154	2.596**
項目 3	2.46	1.119	95	2.11	1.007	154	2.510*
項目 4	2.15	1.041	95	1.76	.856	154	3.048**
項目 5	1.73	.831	95	1.73	.825	154	-.069
項目 6	1.95	.949	95	1.86	.889	154	.758
項目 7	2.04	1.020	95	1.87	.891	154	1.399
項目 8	1.98	.989	95	1.92	.928	154	.510
項目 9	1.82	.887	95	1.77	.805	154	.443
項目 10	1.74	.878	95	1.69	.787	154	.392
項目 11	1.79	.988	95	1.50	.707	154	2.489*
項目 12	1.77	.805	95	1.71	.830	154	.506
項目 13	1.86	.952	95	1.75	.919	154	.958
項目 14	1.64	.683	95	1.64	.773	154	-.008
項目 15	1.80	.820	95	1.74	.862	154	.541

* $p < .05$ ** $p < .01$

表 7-7 阻害要因項目別 t 検定結果 (「中・日」)

	九州大学			六大学			t 値
	M	SD	N	M	SD	N	
項目 1	2.12	.909	95	2.19	.915	154	-.663
項目 2	2.05	.927	95	2.22	.850	154	-1.465
項目 3	2.48	1.100	95	2.56	.990	154	-.599
項目 4	2.49	1.071	95	2.48	1.049	154	.103
項目 5	1.73	.831	95	2.03	1.025	154	-2.455*
項目 6	1.72	.846	95	1.74	.799	154	-.230
項目 7	2.36	.898	95	2.52	.965	154	-1.318
項目 8	2.34	.974	95	2.34	.998	154	-.006
項目 9	1.84	.915	95	1.86	.843	154	-.132
項目 10	1.76	.821	95	2.06	.985	154	-2.487*
項目 11	2.40	1.046	95	2.31	1.070	154	.638
項目 12	2.56	1.018	95	2.77	.941	154	-1.644
項目 13	2.28	.846	95	2.44	.871	154	-1.400
項目 14	2.91	.923	95	2.99	.897	154	-.746
項目 15	2.23	.909	95	2.47	1.011	154	-1.932
項目 16	2.36	.874	95	2.47	.909	154	-.994
項目 17	2.38	1.074	95	2.27	1.029	154	.826
項目 18	2.36	.862	95	2.34	.909	154	.174
項目 19	2.82	.892	95	3.04	.942	154	-1.819
項目 20	2.21	.742	95	2.68	.861	154	-4.575**
項目 21	1.91	.813	95	1.96	.740	154	-.556

* $p < .05$ ** $p < .01$

表 7-8 阻害要因項目別 t 検定結果 (「中・他」)

	九州大学			六大学			t 値
	M	SD	N	M	SD	N	
項目 5	1.71	.846	92	1.96	.934	152	-2.132*

* $p < .05$

1-2 留学生の割合による分析結果

1-2-1 友人関係

大学における留学生の割合が及ぼす中国人留学生の友人関係への影響を検討するために分散分析を行った結果、「中・中」グループにおいて有意であり ($F(2, 246)=3.348, p < .05$)、「中・日」グループにおいても有意な傾向が示された ($F(2, 244)=2.405, p < .1$)。また、Turkey を用いた多重比較によれば、「中・中」グループの友人付き合いにおいても、グループ 2 (留学生割合 10%~15%) とグループ 3 (留学生割合 30%以上) の間に有意な差があることが明らかになった。また、「中・日」グループの友人付き合いにおいて、グループ 2 とグループ 3 の間に有意な傾向が示された (表 7-9)。

表7-9 留学生割合多重比較結果 (友人関係)

従属変数	グループ (平均)	比較された グループ	平均差	有意確率
「中・中」	1 (3.38)	2	.101	.417
		3	-.169	.269
	2 (3.27)	1	-.101	.417
		3	-.271**	.030
	3 (3.55)	1	.169	.269
		2	.271**	.030
「中・日」	1 (2.43)	2	-.019	.970
		3	.216	.139
	2 (2.45)	1	.019	.970
		3	.235*	.085
	3 (2.22)	1	-.216	.139
		2	-.235*	.085

** $p < .05$ * $p < .1$

上記の結果から、留学生の割合の違いによって、中国人留学生の同国人との友人関係には違いが現れ、日本人学生との友人関係においても違いがある可能性が示された。グループの平均を見ると、「中・中」の友人付き合いにおいて、グループ2の平均は3.27であり、グループ3の平均は3.55となっている。また、「中・日」の友人付き合いにおいて、グループ2の平均は2.45であり、グループ3の平均は2.22となっている。すなわち、中国人留学生同士の友人付き合いは留学生率の高いグループのほうが深く、その一方で、中国人留学生と日本人学生の友人付き合いは留学生率の低いグループ2のほうが深いと考えられる。

表7-1に示したように、グループ2の大学は九州大学と福岡女子大学であり、2大学とも学生数が1,000人を超えている。また、グループ3の福岡情報大学と早稲田大学北九州キャンパスは学生数がいずれも500人以下である。ここから見ると、両グループは留学生率の違いがあるのみならず、学生総数の面から見ても違いがある。今回、大学規模の分析を行ったことで、小規模大学のほうが中国人留学生同士の友人付き合いが深いことが明らかになった。そのため、「中・中」の分析の結果は、大学の規模という要素が影響している可能性が高い。これをさらに追究するためには、留学生率、大学規模がそれぞれ異なる大学において調査をする必要がある。

「中・日」グループにおいては、留学生率の高いグループ3より、留学生率の低いグループ2の大学に在籍する中国人留学生のほうが日本人学生との友人付き合いが深いという結果が示された。この結果は大学の日本人学生率と関連していると考えられる。グループ3の九州情報大学と早稲田大学北九州キャンパスにおいて、日本人学生率はそれぞれ60.5%、13%である。一方、グループ2の九州大学と福岡女子大学において、日本人学生率はそれぞれ88.6%、87.9%であり、グループ3の大学を遥かに多く上回っている。日本人学生の割合が高いと、留学生は日本人学生と接触する機会が増え、友人となる可能性も高くなる。このため、両グループにおける差異が現れたと推測できる。

1-2-2 友人関係構築の阻害要因

大学における留学生の割合による中国人留学生の友人関係構築の阻害要因への影響を検討するために分散分析を行った結果、「中・日」グループにおいて有意な結果が示された ($F(2, 244)=4.216, p<.05$)。Turkeyを用いた多重比較によれば、「中・日」グループの友人関係構築の阻害要因において、グループ2(留学生割合10%~15%)とグループ3(留学

生割合 30%以上) の間に有意な差があり、グループ 1 (留学生割合 5%以下) とグループ 3 (留学生割合 30%以上) の間に有意な傾向が示された (表 7-10)。

表7-10 留学生割合多重比較結果 (「中・日」阻害要因)

グループ (平均)	比較されたグループ	平均差	有意確率
1 (2.31)	2	.040	.814
	3	-.208*	.051
2 (2.27)	1	-.040	.814
	3	-.248**	.012
3 (2.52)	1	.208*	.051
	2	.248**	.012

** $p < .05$ * $p < .1$

上記の結果から、大学における留学生の割合によって、中国人留学生の日本人学生との友人関係構築の阻害要因に違いが現れることが明らかになった。グループの平均を見ると、グループ 1 の平均は 2.31 であり、グループ 2 の平均は 2.27 であり、グループ 3 の平均は 2.51 である。留学生率が 15%以下のグループ 1 とグループ 2 の阻害要因平均得点は大きな差がなく、また、両方ともグループ 3 の阻害要因の平均得点より低くなっている。このような結果が得られた原因も、日本人学生の割合と関連していると思われる。友人関係の分析で述べたように、グループ 3 の 2 大学の日本人学生の割合は最も低く、留学生は日本人学生との接触機会が少なくなるため、グループ 1 とグループ 2 の大学に在籍する中国人留学生より、日本人学生と友人関係を構築しにくく、阻害要因の影響も強くなると予想される。

第三節 考察

大規模大学の九州大学と中小規模大学の福岡都市圏六大学に在籍する中国人留学生の友人関係及び友人関係構築の阻害要因を比較した結果、以下の相違点が明らかになった。

中国人留学生同士の間では、九州大学に在籍する中国人留学生より、六大学に在籍する中国人留学生の同国人との友人つながりが深いことが明らかになった。一方、阻害要因について比較した結果、六大学に在籍する中国人留学生より、九州大学に在籍する中国人留

学生のほうが阻害要因の影響が強いことがわかった。この結果から、同国人の数が少ないほど、同国人との友人つながりは強くなって、様々な阻害要因の影響は弱くなる。その一方、同国人の数が多いほど、同国人との友人つながりは弱くなり、様々な阻害要因の影響は強くなると考えられる。第五章では中国人留学生同士の友人関係構築の阻害要因について因子分析を行った結果、「同国人交流への倦怠感」という因子が抽出された。周りの同国人留学生の数が多くなると、同国人の人数の多さに倦怠感が生じ、同国人との友人つながりが弱くなったのではないかと考えられる。上記のように、中国人留学生同士の友人関係及びその阻害要因の比較結果によって、最初の仮説を検証した。また、九州大学と六大学の共通点として、「中・中」友人付き合いの内容は勉学外のことに集中していることが明らかになった。

一方、「中・日」、「中・他」グループは最初の仮説と異なる結果となっている。

「中・日」グループの友人付き合いにおいて、全体的には九州大学と六大学の違いは見られなかったが、いくつかの項目においては両者の間に違いが見られた。「買い物」、「スポーツ」といったレクリエーションに関する項目において、九州大学より六大学のほうが平均値が高かったが、勉学に関する「勉学情報の提供」については、六大学より九州大学の中国人留学生のほうが平均値が高かった。この結果から、「中・日」の友人付き合いは大学の留学生数と日本人学生数と関係なく、場合によっては少人数である小さい集団のほうが「中・日」の友人つながりが強く、また場合によっては大きなコミュニティのほうが「中・日」の友人つながりが強くなる。「勉学情報の提供」といった勉学に関することにおいて、九州大学のほうが「中・日」のつながりが深いという結果は、大学の教育レベルと在学生の質と関連していると考えられる。また、「中・日」における阻害要因の比較結果から、九州大学より六大学のほうが阻害要因の影響が強い傾向があることが明らかになった。この結果は最初の仮説と相反する結果となっている。項目別に検討した結果、いくつかの留学生の主観的要因に関する項目において、九州大学と六大学の間に有意な差が見られ、これらに関しても、六大学のほうが阻害要因の影響が強かった。この結果から、「中・日」の友人付き合いは大学の学生数との関連は弱い、様々な阻害要因からの影響については、少人数である小さい集団のほうが強いと言える。このような結果になった理由として、以下のように考えられる。「中・中」グループの結果で示しているように、同国人の数が少ないほど、同国人との友人つながりが強くなる傾向がある。日本人学生にとっても同じく、少人数の大学では、日本人学生の数が少ないため、日本人同士のつながりが大規模大学の日

本人学生より深い可能性がある。日本人同士のつながりが強くなると、外国人である留学生は日本人グループに入り込むことが難しくなり、様々な阻害要因としての影響が強くなるのではないかと推察される。その他、「中・日」の友人付き合いは勉学と異文化理解活動を中心に行われていることが九州大学と六大学の共通点であることが明らかになった。

「中・他」グループについては、「中・中」とも「中・日」グループとも異なる結果となっている。友人付き合いの比較でも阻害要因の比較でも、九州大学と六大学の間に有意な差は見られなかった。この結果から、「中・他」グループにとっては友人関係の構築及びその阻害要因は大学の規模と関係ないと言える。また、「中・他」の友人付き合いは主に異文化理解の活動を中心に行っていることが九州大学と六大学の共通点であることが明らかになった。

また、留学生の割合によって分けられた3グループの大学に在籍する中国人留学生の友人関係と友人関係構築の阻害要因について分散分析を行った結果、「中・中」グループは仮説2を支持する結果となっており、「中・日」グループは仮説2とは相反する結果となっている。すなわち、中国人留学生同士の友人付き合いについては、大学の留学生率が高ければその友人付き合いが深い。しかし、中国人留学生と日本人学生の友人付き合いにおいては、大学の留学生率が低ければ、その友人付き合いが深く、阻害要因としての影響は弱くなることが明らかになった。

上記の結果から、留学生の割合が高い大学においては、中国人留学生同士の友人付き合いが深い反面、日本人学生との友人付き合いが浅くなっていることが窺える。そのため、大学はキャンパスのグローバル化を追究していく中で、留学生と日本人学生のバランスをどのように取るかという課題について検討すべきである。また、日本人学生が留学生の割合が高い大学で勉強することで他大学の学生と比べてより高度な国際体験ができるとは一概には言えないと思われる。留学生の数が多いため、より容易に国際交流ができる可能性があるが、本研究の留学生の割合が高い大学では、留学生の友人付き合いは同国人を中心に展開しており、日本人学生との友人付き合いは浅かった。この結果から、留学生の割合が高い大学では、日本人学生が逆に国際体験がしにくい環境となっている可能性も示唆された。

上記で考察したように、コミュニティのサイズ、すなわち大学の規模と留学生の割合による中国人留学生の友人関係構築とその阻害要因の違いが明らかになった。コミュニティのサイズと大学における留学生の割合から留学生の友人関係構築への影響を明らかにする

ことによって、大学担当者が大学の現状を踏まえた上で効率的な施策、ソーシャル・サポートを検討することが可能になる。

本章で比較した結果から、グローバル・キャンパスの構築に与える示唆について述べる。現状としては、キャンパスのグローバル化を求めるために、留学生の数の増加、留学生の割合の上昇を追求する大学は少なくない。日本政府も2014年に日本の高等教育の国際競争力の向上を目的にスーパーグローバル大学創成事業が創設された。事業の中で、採択大学が設定している主な成果指標があり、そのうち、国際化関連の指標は以下に引用した10点である。②に示したように外国人留学生の割合が重要な指標となっている。しかし、単に留学生数や留学生の割合を増やすことだけが大学のグローバル化を促進できるとは言えない。本研究の結果で示したように、中国人留学生の同国人との友人付き合いは、少人数の大学のほうがつながりが強く、日本人学生との友人付き合いは留学生の割合が少ない大学のほうが日本人との友人付き合いが深い。Jones (2017)でも単なる異なる国々からの人を集めることだけでは学生の異文化能力の向上には役に立たないと述べられており、留学生数や留学生の割合のみを重視することへの批判が見られる。そのため、留学生数の増加だけではキャンパスのグローバル化の実現とはならない。

また、⑨混住型学生宿舎に入居する日本人学生の割合という指標があり、この指標は日本人学生の国際経験を増やし、学内留学を体験させる目的で設定したものであるように窺える。しかし、第六章で論じたように、留学生と日本人学生の友人付き合いは客観的要因より、主観的要因に注目する必要がある。多くの日本人学生を混住型学生宿舎に入居させても、学生の主観的意識に変化がないと、日本人学生にとっても留学生にとっても国際経験になるとは言えない。留学生同士、留学生と日本人学生のコミュニケーションを活発化させるためには、前章で議論したように大学の意図的な努力や、留学生側の主観的要因の改善が必要である。

スーパーグローバル大学創成事業の採択大学が設定している主な成果指標（国際化関連）：

- ①外国人及び外国の大学で学位を取得した専任教員等の割合
- ②全学生に占める外国人留学生の割合
- ③日本人学生に占める単位取得を伴う留学経験者の割合
- ④大学間協定に基づく派遣日本人学生数の割合
- ⑤外国語による授業科目割合

- ⑥外国語のみで卒業できるコースの在籍者割合
- ⑦外国語基準を満たす学生数の割合
- ⑧シラバスの英語化割合
- ⑨混住型学生宿舎に入居する日本人学生の割合
- ⑩柔軟な学事歴の設定

その他、留学生のサポート事業を検討する際に、留学生の出身国に注目する必要がある。同国人が多い留学生と少ない留学生が求めているサポートは異なっていると考えられるためである。本研究の対象となる中国人留学生にとっては、大学の留学生数と関係なく、同国人に求めている援助は勉学外のことに集中している。同国人とのつながりが深いため、日本人学生との間では勉学と異文化理解のつながり、他国の留学生とはわずかな異文化理解のつながりにとどまっている。これに対して、同国人が少ない留学生については、勉学外のサポートをどこから求めているのか、日本人学生と他国の留学生と友人関係を構築する際にどのようなサポートが必要かなど、これらについてはさらなる検討が必要である。

本章は学生数が 10,000 人以下、留学生数が 500 人以下の六大学を一つのグループとして九州大学との比較検討を行った。実際には、各大学の現状は異なり、本研究で調査した六大学間でも様々な違いが見られる。たとえば、本研究の対象大学となる福岡女子大学は全寮制を実施しており、また女子学生中心の大学として、独特の特徴を持っていると考えられる。今後、個々の大学の現状、特徴に注目しながら、さらなる検討を行うことを今後の課題とする。また、同国人が少ない留学生の友人付き合いはどのような現状か、日本人学生や他国からの留学生と友人関係を構築する際にどのようなサポートが必要なのかという点についても、今後の課題としてここに記したい。

第八章 結論

第一節 本研究のまとめ

本研究は、予備調査を実施した上で、福岡都市圏7大学に在籍する中国人留学生に対する2回の質問紙調査（本調査一、本調査二）を通して、在日中国人留学生のソーシャル・ネットワーク及びその阻害要因を明らかにし、ソーシャル・サポート論と留学生の友人機能モデルに基づき、留学生のソーシャル・ネットワーク構築という視点から、グローバル・キャンパスを構築するためには留学生自身にどのような気づきと改善が必要なのか、大学からはどのような環境整備とサポートが必要なのかについて議論を行った。

本研究では四つの課題を設定し、分析を行った。以下ではそれぞれの課題について述べる。

1-1 課題I

本研究の一つ目の課題は、中国人留学生同士（「中・中」）、中国人留学生と日本人学生（「中・日」）、中国人留学生と他国からの留学生（「中・他」）とそれぞれどのようなソーシャル・ネットワークを構築しているのかであった。本調査一、本調査二の分析の結果、友人の国籍によって在日中国人留学生の友人付き合いが異なることが明らかになった。中国人留学生同士の友人付き合いは自文化共有、勉学、レクリエーション、情緒的助けなどすべての面において深いつながりがあり、日本人学生との場合には、勉学と異文化理解の面のみ深いつながりがあり、他国の留学生との場合には友人付き合いが浅く、ある程度異文化理解においてのつながりがあるが、日常の立ち話程度にとどまっていることが明らかになった。

上記の友人付き合い機能をCohen et al. (2000) のソーシャル・サポートの分類に当てはめると、中国人留学生同士からの自文化の共有機能は共感を生じる情緒的サポートであり、勉学機能は知識、情報を提供する情動的サポートである。また、レクリエーション機能は交友的サポートであり、悩みの相談などの情緒的助け機能はケア、傾聴を提供する情緒的サポートである。すなわち、中国人留学生は同国人から情緒的サポート、情動的サポート、交友的サポートを求めている。

日本人学生との場合、言葉の添削、勉学情報の提供などは知識、情報を提供する情動的

サポートである。言葉の学び合い、故郷の話という異文化理解機能は互いの社会、文化を知り合うためのサポートであると考え、社会的比較の妥当性確認であると考えられる。Festinger (1954) でも「自分と他者を比較すること」を総称して「社会的比較」と定義している。そのため、中国人留学生は日本人学生から情動的サポートと妥当性確認を求めていることが明らかになった。他国からの留学生との場合、自分と日本以外の文化との比較という異文化理解機能があるため、社会的比較の妥当性確認であると考えられる。

以上の「中・中」、「中・日」、「中・他」3 グループの友人付き合い機能とソーシャル・サポートの関係を図式化にすると、図 8-1 のようになる。

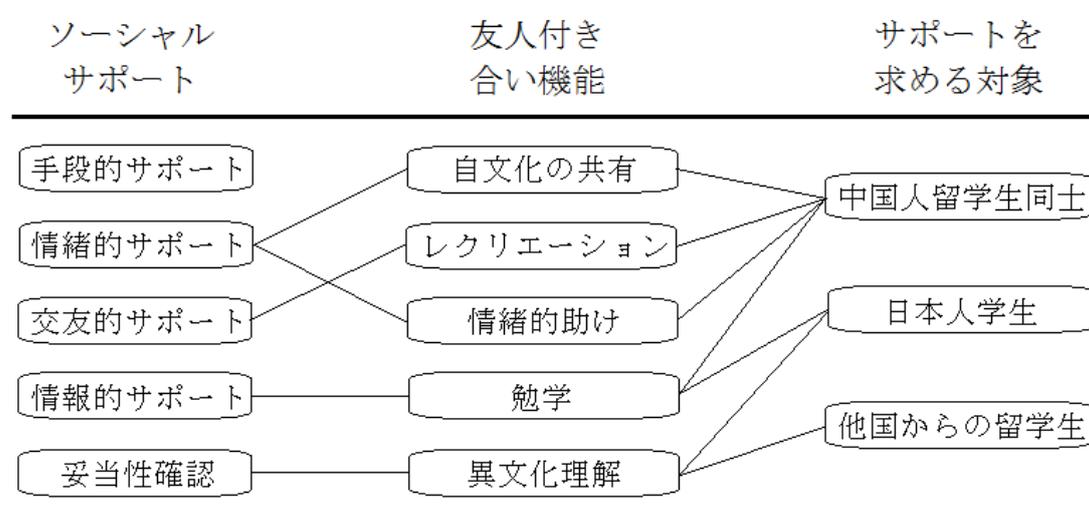


図 8-1 ソーシャル・サポート、友人付き合い機能及びその対象

図 8-1 が示すように、中国人留学生が友人から求めているサポートは友人の出身国によって分化しているものもあるが、複数の出身国の友人から同様のサポートを求めていることがわかる。たとえば、勉強サポートに関しては、中国人留学生と日本人の両方から求めている。また、異文化理解機能に関しては、日本人学生と他国からの留学生の両方から求めている。Bochner et al. (1977) は留学生の友人からのサポート機能は友人の国籍によって分化されていると提唱しているが、上記のように、本研究の結果は機能モデルと異なる部分が現れた。さらに、交友的サポートに関しても、Bochner et al. (1977) ではレクリエーションの場を提供する機能は他国からの留学生との間に形成されていたが、中国人留学生の場合は同国人から求めていることが明らかになった。そのため、留学生の出身国、留学先など様々な条件の違いによって、留学生が友人から求める機能は異なっている

ということ、大学はキャンパスの環境整備や留学生に対するサポートを提供する際に念頭においておく必要がある。

また、上記のように在日中国人留学生の友人付き合い機能とソーシャル・サポートにおいて求められる対象を明らかにすることは、留学生と日本人学生、留学生同士のコミュニケーションを深めるためには、大学関係者がどのようなところをサポートすべきか、その切り口は何かといった課題の解決に大いに貢献できる。

1-2 課題Ⅱ

本研究の二つ目の課題は「中・中」、「中・日」、「中・他」のソーシャル・ネットワークの構築を妨げる要因は何かであった。この課題に対して、本調査一では因子分析を用いて阻害要因について分析した結果、それぞれのグループの阻害要因因子を抽出した。また、本調査二では、福岡都市圏六大学のデータを中心に、中国人留学生同士、中国人留学生と日本人学生、中国人留学生と他国からの留学生という3グループの上位項目及び大学別の上位項目に注目し、大学間の異同における阻害要因の検討を行った。その結果は表 8-1 に示している。

表 8-1 友人関係構築における阻害要因の分析結果

グループ	阻害要因	主な要因
「中・中」	「接触機会の少なさ」 「同国人交流への倦怠感」 「性格や趣味の不一致・余裕なし」	
「中・日」	「文化間差異」 「接触機会の少なさ」 「言語不安、異文化接触不安」 「日本人学生の友人付き合い志向」 「性格や趣味の不一致・余裕なし」	主観的要因
「中・他」	「接触機会の少なさ」 「言語不安、異文化接触不安」 「性格や趣味の不一致・余裕なし」 「文化間差異・他国人留学生の友人付き合い志向」	主観的要因 客観的要因

表 8-1 に示しているように、「中・中」の友人関係構築の阻害要因として、「接触機会の少なさ」、「同国人交流への倦怠感」、「性格や趣味の不一致・余裕なし」という三つの因子を抽出した。「中・日」については、「文化間差異」、「接触機会の少なさ」、「言語不安、異文化接触不安」、「日本人学生の友人付き合い志向」、「性格や趣味の不一致・余裕なし」という五つの因子を抽出し、「中・他」については、「接触機会の少なさ」、「言語不安、異文化接触不安」、「性格や趣味の不一致・余裕なし」、「文化間差異・他国人留学生の友人付き合い志向」という四つの因子を抽出した。

先行研究では留学生と日本人学生の友人関係構築の阻害要因のみに注目しており、留学生同士の友人関係構築の阻害要因については言及されていなかった。本研究の結果は、留学生と日本人学生のみならず、留学生間の友人関係構築の阻害要因をも明らかにしており、大学における多国籍学生の異文化交流促進のための施策の改善に際しては参考にできる点が多いだろう。

さらに、大学別に検討した結果、「中・日」の阻害要因は学生側の主観的要因に集中しているのに対して、「中・他」は主観的要因と客観的要因の両方にあることが明らかになった。上記の結果を踏まえて、「中・日」、「中・他」の友人付き合いへの教育的介入の必要性や「中・日」グループの友人付き合いに対する学生側の主観的意識に注目する必要性を指摘した。

1-3 課題Ⅲ

三つ目の課題は、専攻、経済状況、居住形態、外国語能力、在学期間などの関連要因による友人関係構築及びその阻害要因への影響は何かであった。その結果は図 8-2 に示している。

図 8-2 によると、「中・中」の友人関係及びその阻害要因は関連要因による影響がなく、「中・日」の友人関係及びその阻害要因は留学生の在学身分、専攻、日本語能力など多くの関連要因に影響されていることがわかる。また、「中・他」の友人関係及びその阻害要因は在学期間、英語能力による影響が見られる。

上記のように、先行研究ではあまり言及されていなかった諸関連要因による在日中国人留学生の友人関係及びその阻害要因への影響を明らかにした。この結果を踏まえて、学生の間でより円滑な友人関係を構築するためには、多言語環境や居住形態といった客観的要因と学生側の主観的要因の両方を重視する必要があること、部活・サークルや学生会・留学生会などの学生組織の役割を重視すること、大学院生への特別な支援が必要であること

の必要性を示した。

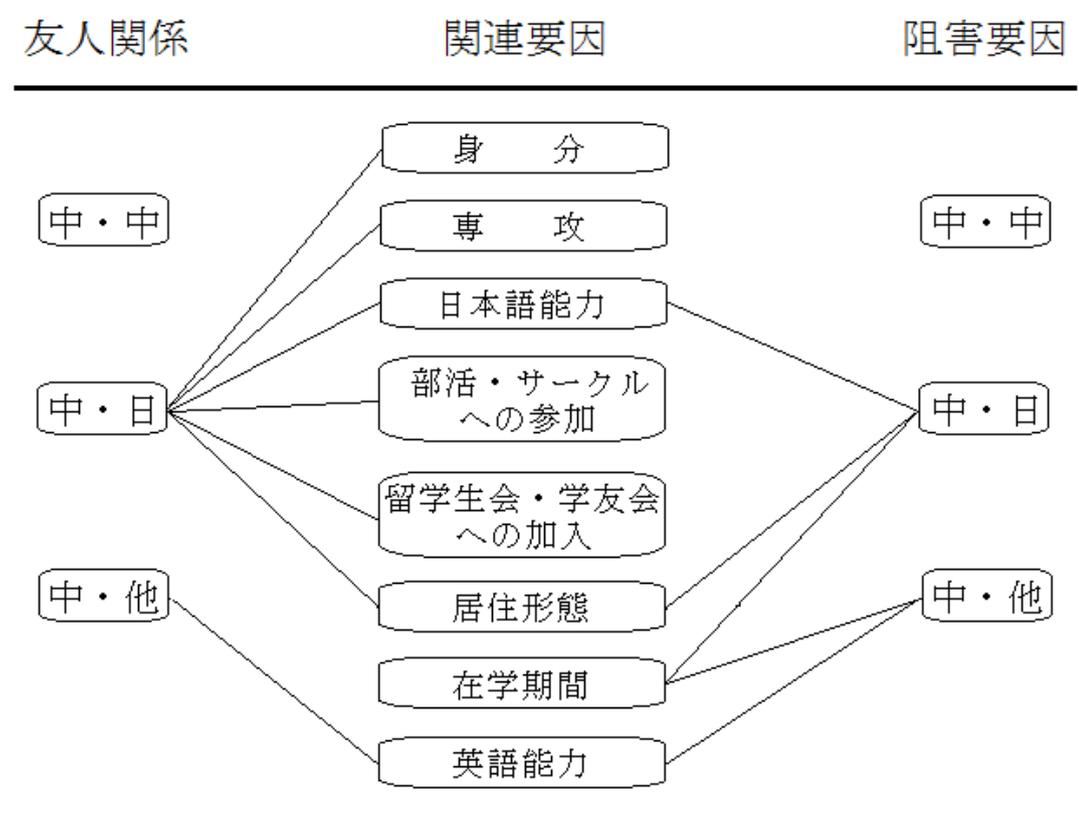


図 8-2 友人関係及びその阻害要因に影響する関連要因

1-4 課題IV

四つ目の課題は、大学の規模と留学生の割合によって在日中国人留学生のソーシャル・ネットワーク及びその阻害要因にどのような違いが見られるかであった。大規模大学を対象に調査を行った本調査一と中小規模大学を対象に調査を行った本調査二の結果を踏まえ、比較検討を行った結果、中国人留学生同士の間では、大規模大学に在籍する中国人留学生より、中小規模大学に在籍する中国人留学生のほうがつながりが深いことが明らかになった。一方、阻害要因について比較した結果、中小大学に在籍する中国人留学生より、大規模大学に在籍する中国人留学生のほうが阻害要因の影響が強いことが示された。「中・日」グループの友人付き合いにおいては、全体的には大規模大学と中小規模大学の違いは見られなかったが、いくつかの項目においてのみ両者の間に違いが見られた。「中・他」グループにおいては、友人付き合いの比較でも阻害要因の比較でも、大規模大学と中小規模大学の間に差異が見られなかった。また、留学生の割合別に分散分析を行った結果、中国人留学生同士の友人付き合いについては、大学の留学生率が高ければその友人付き合いは深い。

その反対に、中国人留学生と日本人学生の友人付き合いにおいては、大学の留学生率が低ければ、その友人付き合いが深く、阻害要因としての影響は弱くなることが明らかになった。留学生の割合が高いことは必ずしも留学生と日本人学生との友人付き合いを深めることはできるとは言えないという結果から、キャンパスのグローバル化を求めるためには、留学生と日本人学生のバランスを重視した上で、大学の内部の改善が必要であるという結論を導き出した。

上記の本研究の調査結果をふまえ、留学生のソーシャル・ネットワーク構築という視点から、今後の日本におけるグローバル・キャンパスを構築するためには、どのような環境整備とサポートが必要なのかについて新たな提案を行う。

第二節 グローバル・キャンパスのあり方

De Wit & Hunter (2015) は欧州の高等教育国際化研究「Internationalisation of Higher Education」において「国際化」を以下のように定義している。

The **intentional** process of integrating an international, intercultural or global dimension into the purpose, functions and delivery of post-secondary education, in order to enhance the quality of education and research for all students and staff, and to make a meaningful contribution to society. (De Wit & Hunter 2015)

高等教育の国際化とは、中等後教育の目的、機能及びその提供において、国際的、多文化的、グローバルな次元を統合し、あらゆる学生と教職員の教育・研究水準を高め、社会に有益な貢献をしていく**意図的**なプロセスである。(筆者訳)

この定義は多くの高等教育国際化研究に引用され、特に「意図的」というキーワードが注目を浴びている。すなわち、高等教育の国際化は自発的なプロセスではなく、「意図的」なプロセスであるということである。高等教育の国際化という背景の中、キャンパスのグローバル化を実現するためにも大学側と学生側両方の「意図的」な取り組みが必要である。大西(2017)でも多数派学生、すなわちホスト国学生の動機づけの問題について言及がある。それによれば、教育的介入を通じた異文化間の交流促進の有効性が主張される一方で、授業や課外活動などの場を用いる介入の限界を指摘する研究が見られるが、その中で多数派

の動機付けは多くの研究において指摘される問題点であるということである。そのため、学生に異文化交流の重要性に気づかせるべく、大学は異文化交流を促進するための環境整備とサポートを行う必要がある。

本研究ではキャンパスのグローバル化を「海外から多くの人材が集い、文化や言語、宗教の違いをこえて留学生同士、または留学生と日本人学生の間で活発な交流や協働ができ、留学生にとっても日本人学生にとっても国際的な体験ができるキャンパス」と定義している。キャンパスのグローバル化を実現するためには何が必要か、本節では在日中国人留学生のソーシャル・ネットワークに対して検討した結果に基づき、日本におけるグローバル・キャンパスのあり方について議論を行う。

まず、本研究の結果から、留学生の外国語能力、居住形態、専攻、在学身分、在学期間などの関連要因から留学生の友人関係構築及びその阻害要因への影響が見られたことから、属性が異なる留学生の多様性に注目する必要があると述べたい。研究背景で述べたように、留学生はそれぞれ異なる課題を抱えており、友人関係構築に向けてもそれぞれ異なるサポートが求められる。今後、大学における留学生の支援策を検討する際に、上記の関連要因を念頭に置くべきではないだろうか。

また、上記の国際化の定義で述べたように、大学において留学生同士、留学生と日本人学生の活発な交流を実現させるためには、大学からの意図的な取り組みが必要である。これまで、大学では混住寮の提供、合同授業など様々な促進策が行われてきたが、第六章で考察したように、これらの促進策を関連づけ、システム化する段階までには至っていないのが現状である。Leask (2009) は正課外の活動をシステム化し、インフォーマルなカリキュラムを構築する有効性を論じたが、現在に至っても日本においてインフォーマルなカリキュラムについては検討がされていない。キャンパスのグローバル化を実現するためには、フォーマルなカリキュラムとインフォーマルなカリキュラム両方を有効に組み合わせ、意図的に学生同士の交流を促進することが必要である。Brustein (2017) が指摘したように、グローバル・キャンパスを構築するためには大学におけるカリキュラムの国際化という要素も不可欠である。カリキュラムの国際化は英語をはじめとする多言語講義の実施などが要求されるが、個々のカリキュラムの内容についても学生の実際のニーズと現状に合わせて改革する必要がある。

本研究では、多国籍から構成されるサポーター陣の構築、部活・サークルや留学生会・学友会といった学生組織、混住寮への入居などが留学生の友人関係構築にとって重要な役

割を果たすことが明らかになった。これらの単位の履修を目的としない正課外の活動はすべてインフォーマルなカリキュラムとして考えられる。そのほかにも、地域や大学にある国際広場や、地元の文化を体験できる祭りやイベント、日本、または外国の食事を体験できる食事交流会などが考えられる。大学側はこれらの活動をカリキュラム化した上で、日本人学生と留学生との共同参加を促進させる。これによってグローバル・キャンパスの構築を促進することになるであろう。

インフォーマルなカリキュラムを構築するとともに、学生の参加の必須が要求されるフォーマルなカリキュラムの改善も求められる。本研究では、日本語能力、英語能力が留学生の友人関係構築において重要な役割を果たしていることを示した。このことから、大学において留学生と日本人学生の双方向的な文化交流を実現するためには、留学生に日本語と英語、日本人学生に英語の実践コースを課する必要がある。また、本研究では、留学生が友人関係構築に当たり、異文化接触不安や先入観など学生側の主観的意識から影響を受けていることが明らかになった。これは日本人学生にとっても同様であろう。そのため、日本人学生、留学生両方に異文化理解に関する講義とソーシャル・スキル・トレーニング両方を合わせて実施し、学生の異文化能力を高めることが重要である。特に本研究では在学期間が長くなるにつれ、中国人留学生の言語不安、異文化接触不安、先入観などが弱まっていくことが明らかになっており、留学生の在学初期段階からの異文化理解のサポートとソーシャル・スキル・トレーニングが重要であろう。これによって、入学直後の時期から学生の主観的意識が変化し、学生同士の友人関係構築がより円滑に進められていく。そのほかにも、多くの大学で実施している留学生と日本人学生の合同授業などもフォーマルなカリキュラムとして考えられる。

上記のインフォーマルなカリキュラムとフォーマルなカリキュラムの組み合わせを図式化にすると、図 8-3 のようになる。上はインフォーマルなカリキュラムの構成内容であり、下はフォーマルなカリキュラムの構成内容である。また、カリキュラムの実施対象について、左側は日本人学生向けの実施内容であり、右側は留学生向けの実施内容となる。インフォーマルなカリキュラムの内容については、学生組織としての部活・サークル、留学生会・学生会があり、これらの役割は本研究の関連要因の分析を通して明らかになった。また、混住寮の役割についても検証を行った。大学内外の国際広場、地元イベント・祭りなどの活動による学生間の異文化交流に果たす役割については、本研究では検証されていなかったが、Jones (2017) ではインフォーマルなカリキュラムとして取り扱っている。また、

フォーマルなカリキュラムとして挙げられている外国語の実践、異文化理解の講義、ソーシャル・スキル・トレーニングなどについては、本研究で議論を行った。今後、より充実したカリキュラムを構築するためには、多様化する学生のニーズと現状を踏まえて、さらなる有効なインフォーマルなカリキュラムとフォーマルなカリキュラムをそれぞれ開発していく必要がある。

このように正課外の活動をインフォーマルなカリキュラムとしてシステム化にし、正課講義としてのフォーマルなカリキュラムを組み合わせ、留学生と日本人学生に課することによって、学生間のつながりは深まり、日本におけるキャンパスのグローバル化の実現に新たな道が開かれるであろう。

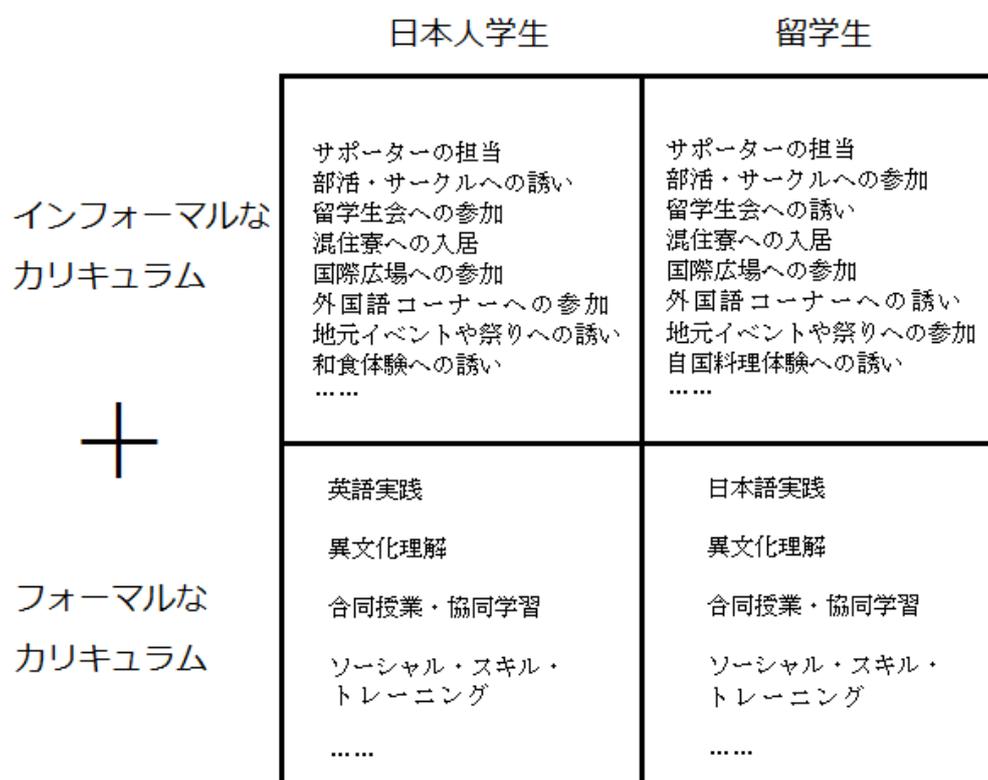


図 8-3 インフォーマルなカリキュラムとフォーマルなカリキュラム

第三節 今後の課題

本研究は従来の留学生のパーソナル・ネットワーク研究とは異なり、ホールネットワークの枠組みを参考にして、キャンパスというコミュニティで展開される留学生のソーシャル・ネットワークについて検討しており、これは留学生のソーシャル・ネットワーク研究

に新たな方向性を示した。同時に、従来の留学生と日本人学生の間にとどまらず、留学生同士の関係にも注目した点、留学生のソーシャル・ネットワーク研究をグローバル・キャンパスの構築という教育環境づくりに還元する点において新規性がある。

しかし、以下の2点においては限界があり、今後の課題としてさらなる検討が必要である。

一つ目は、中国人留学生の視点のみから検討したことである。留学生の出身国の違いによって留学生の友人関係及びその阻害要因は異なっていると考えられる。そのため、留学生の友人関係及びその阻害要因の課題をさらに検討するには、日本人学生または他国の留学生を研究対象として、さらに追究することが必要である。特に同国人が少ない留学生にとっては、勉学外のサポートをどこから求めているか、日本人学生と他国の留学生と友人関係を構築する際にどのようなサポートが必要か、これらについてさらなる検討が必要である。

二つ目は、本研究では、量的研究を中心に中国人留学生のソーシャル・ネットワークを検討してきたが、来日してどのような場面で、どのように日本人学生の友人、また他国の留学生と友人関係を構築したか、その友人とのつながりがいかに広がり、いかに消えていったか、部活・サークルに参加することによって日本人学生とどのような友人関係を構築したか、友人関係の構築が自分の異文化適応、または留学満足度とどのように関連しているかなどの課題について、個々人に対して質的研究を行い、さらに検討する必要がある。

グローバル・キャンパスの構築は、留学生にとっても日本人学生にとっても自分の視野を広げ、より充実した大学生活を送るために必要不可欠である。今後も、学生のソーシャル・ネットワークに注目しながら、グローバル・キャンパスのあり方を考え続けたい。

参考文献

- Bart.R., YingFei.H., & Divya.Jindal-Snape. (2013) Understanding Social Learning Relations of International Students in a Large Classroom Using Social Network Analysis. *Higher Education*, 66(4), pp.489–504.
- Bart.R., & Eimear-Marie.N. (2014) Understanding Friendship and Learning Networks of International and Host Students Using Longitudinal Social Network Analysis. *International Journal of Intercultural Relations* 4, pp.165-180.
- Blake, H., Devan, R., & R. Kelly Aune. (2011) An Analysis of Friendship Networks, Social Connectedness, Homesickness, and Satisfaction Levels of International Students. *International Journal of Intercultural Relations*, 35(3), pp.281-295.
- Bochner, S., Mcleod, B., & Lin, A. (1977) Friendship Patterns of Overseas Students: A Functional Model. *International Journal of Psychology*, 12(4), pp.277-294.
- Bochner, S., Hutnik, N. & Furnham, A. (1985) The Friendship Patterns of Overseas and Host Students in an Oxford Student Residence. *The Journal of Social Psychology*, 125(6), pp.689-694.
- Brustein, W.I. (2017) A Road Map to the Global University. *PHI KAPPA PHI FORUM*, Vol.97 No.2, pp.16-19.
- Caplan, G. (1974) *Support System and Community Mental Health*. New York: Behavioral Publications. (近藤喬一訳 1979 『地域ぐるみの精神衛生』 星和書店)
- Chohen, S., Underwood, L.G. & Gottlieb, B.H. (2000) *Social Support Management and Intervention: A guide for Health and Social Scientists*. Oxford University Press. (小杉正太郎、島津美由紀他監訳：ソーシャルサポートの測定と介入 川島書店 2005)
- Cohen, S., Underwood, L.G. & Gottlieb, B.H. (2000) *Social Support Measurement and Intervention: A guide for health and social scientists*. Oxford University Press
- Dewey, D., & Ring., S. (2011) Social Network Development During Study Abroad in Japan. Presented paper at The Association of Teachers of Japanese annual conference. Hawaii.
- De Wit, H., & Hunter, F. (2015) *European Parliament Study - Internationalisation of Higher Education*
- Festinger, L. (1954) A Theory of Social Comparison Processes. *Human Relations*, 7,

pp.117-140.

Furnham, A. & Bochner, S. (1982) Social Difficulty in a Foreign Culture: An Empirical Analysis of Culture Shock. In: Bochner, S, (eds.) Culture in Contact: Studies in cross cultural interaction. pp.161-198.

Furnham, A. & Alibhai, N. (1985) The Friendship Networks of Foreign Students: A Replication and Extension of the Functional Model. *International Journal of Psychology*, 20(3-4), pp.709-722.

Jones, E. (2017) The Context of Internationalization at Home. Keynote speech and panel at symposium on Intercultural Co-Learning, Tohoku University, Sendai, Japan

Leask, B. (2009) Using Formal and Informal Curricula to Improve Interactions Between Home and International Students. *Journal of Studies in International Education*, Volume 13 Number 2, pp.205-221.

Prizant, B.M., & Wetherby, A.M. (1998) Understanding the Continuum of Discrete-trial Traditional Behavioral to Social-pragmatic, Developmental Approaches in Communication Enhancement for Young Children with ASD. *Seminars in Speech and Language*, 19, pp.329-353.

青野明子・森津誠 (2007) 「学生における達成動機と抑うつおよびソーシャル・サポートとの関連」『国際研究論叢』20 (2) 大阪国際大学編 pp. 87-97.

飯塚往子 (2005) 「日本語学校に通う留学生の動機づけの要因—半年間のネットワークの変化から—」『小出記念日本語教育研究会論文集』(13) pp. 39-56.

五十嵐祐監訳・C・カドゥシン著 (2015) 『社会的ネットワークを理解する』北大路書房

石田光規 (2012) 「社会的サポート・ネットワークの測定法とその課題」『季刊社会保障研究』48 (3) pp. 266-278.

石原翠 (2011) 「留学生の友人関係における期待と体験の否定的認識との関連—中国人留学生の場合」『異文化間教育』34号 異文化間教育学会 pp. 136-150.

稲葉昭英・浦光博・南隆男 (1987) 「ソーシャル・サポート」研究の現状と課題」『哲学』85 慶応義塾大学 pp. 109-149.

井上孝代・伊藤武彦 (1995) 「来日一年目の留学生の異文化適応と健康—質問紙調査と異文化間カウンセリングの事例から—」『異文化間教育』9号 異文化間教育学会

- pp. 128-1141.
- 岩男寿美子・萩原滋（1988）『日本で学ぶ留学生—社会心理学的分析』勁草書房
- 上原麻子・鄭加禎・坪井健（2011）「日台中における大学生の友情観比較—「間主観性」概念の検討をもとに一」『異文化間教育』34号 異文化間教育学会 pp. 120-135.
- 江淵一公（1991）「在日留学生と異文化間教育」『異文化間教育』5号 異文化間教育学会 pp. 4-20.
- 江淵一公（1997）『大学国際化の研究』玉川大学出版部
- 太田浩（2014）「日本人学生の内向き志向に関する一考察—既存のデータにより国際志向性再考—」『留学交流』2014年7月号 Vol. 40 pp. 1-19.
- 大西晶子（2017）「多様化する学生を支える大学コミュニティの形成—留学生相談の実践を踏まえた検討と今後の展望—」『教育心理学年報』56（0） pp. 165-185.
- 大橋・長田（1987）『対人関係の心理学』有斐閣
- 岡田努（1993）「現代青年の友人関係に関する考察」『青年心理学研究』519号 pp. 43-55.
- 岡田努（1995）「現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察」『教育心理学研究』第43巻（4） pp. 354-363.
- 岡田努（2002）「友人関係の現代的特徴と適応感及び自己像・友人像の関連についての発達的研究」『金沢大学文学部論集 行動科学・哲学編』22号 pp. 1-38.
- 岡田努（2003）「現代青年の対人関係」『思春期学』21（1） pp. 16-20.
- 岡田努（2005）「現代青年の友人関係・ライフイベントと自己の発達に関する研究」『金沢大学文学部論集 行動科学・哲学篇』25号 pp. 15-32.
- 岡田努（2007）「大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について」『パーソナリティ研究』第15巻 第2号 日本パーソナリティ心理学会 pp. 135-148.
- 岡田努（2011）「現代青年の友人関係と自尊感情の関連について」『パーソナリティ研究』第20巻 第1号 日本パーソナリティ心理学会 pp. 11-20.
- 岡田努（2012）「現代青年の友人関係に関する新たな尺度の作成：傷つけ合うことを回避する傾向を中心として」『金沢大学人間科学系研究紀要』4号 pp. 19-34.
- 大橋正夫・長田雅喜（1987）『対人関係の心理学』有斐閣
- 加賀美常美代（1994）「異文化接触における不満の決定因—中国人の就学生の場合—」『異文化間教育』8号 異文化間教育学会 pp. 117-136.

- 加賀美常美代 (2001) 「留学生と日本人のための異文化間交流の教育的介入の意義」『三重大学留学生センター紀要』3号 pp. 41-53.
- 木村玉己・中込美賀子 (2003) 「中国人留学生と日本人留学生にみる行動認知差分析」『千葉大学教育学部研究紀要』第51巻 pp. 285-288.
- 金相美 (2003) 「携帯電話利用とソーシャル・ネットワークとの関係—在日留学生対象の調査結果を中心に—」『東京大学社会情報研究所紀要』65号 東京大学社会情報研究所編 pp. 363-394.
- 工藤和宏 (2003a) 「友人ネットワークの機能モデル再考—在豪日本人留学生の事例研究から—」『異文化間教育』18号 異文化間教育学会 pp. 95-108.
- 工藤和宏 (2013b) 「異文化友情形成におけるコミュニケーション能力—留学生の知覚に基づくモデル化の試み—」『Human Communication Studies』Vol.31 日本コミュニケーション学会 pp. 15-34.
- 久野弓枝 (2011) 「留学生が抱える不安や問題とそのサポートについて—札幌大学の留学生に対する質問紙調査とインタビュー報告—」『札幌大学総合論叢』第31号 pp. 55-74.
- 小林章雄 (1998) 「ソーシャルサポート研究における今日の諸問題」『行動医学研究』Vol.4 No.1 pp. 1-8.
- 小松翠 (2013) 「中国人女子留学生の友人形成及び友人不形成に至る過程に関する研究」『群馬大学国際教育・研究センター論集』第12号 pp. 71-86.
- 佐々木泰子・張瑜珊・鄭士玲 (2012) 「中国人留学生は日本人との友人関係をいかに構築しているか: 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく視点提示型研究」『異文化間教育』35号 異文化間教育学会 pp. 104-117.
- 佐藤由利子 (2009) 「日本留学成果の促進・阻害要因に関する考察—インドネシアとタイの元日本留学生の質問紙回答分析から—」『留学生教育』14号 留学生教育学会 pp. 1-11.
- 塩入すみ (2008) 「短期留学生による実践のコミュニティの組織化」『京都橘大学研究紀要』34号 pp. 61-78.
- 周玉慧・深田博己 (2002) 「在日中国系留学生に対するソーシャル・サポートに関する研究」『社会心理学研究』第17巻第3号 pp. 150-184.
- 白土悟・田中共子 (2016) 「外国人留学生の教育」『異文化間に学ぶ「ひと」の教育』第三章 異文化間教育学会企画 明石書店
- 末松和子 (2017) 「「内なる国際化」でグローバル人材を育てる—国際共修を通じたカリキ

- ユラムの国際化」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第3号 pp. 41-51.
- 杉野欽吾・亀島信也・安藤明人・小牧一裕・川端啓之 (2010) 『人間関係を学ぶ心理学』 福村出版
- ストレス百科事典翻訳刊行委員会編 『ストレス百科事典』 (2010) 「ソーシャルサポート(社会的支援)」pp. 1819-1822. (『Encyclopedia of STRESS, Second Edition』Elsevier 刊 George Fink 編集 2007年4月)
- 戦旭風 (2007) 「友人との付き合い方から見る中国人留学生と日本人学生の友人関係」『留学生教育』12号 留学生教育学会 pp. 95-105.
- 園田智子 (2009) 「大学院留学生の研究生活における困難度とその関連要因—理系と文系の差異に着目して—」『異文化間教育』29号 異文化間教育学会 pp. 64-76.
- 高井次郎 (1989) 「在日外国人留学生の適応研究の総括」『名古屋大学教育学部紀要』教育心理学科 36 pp. 139-147.
- 高井次郎 (1994) 「日本人との交流と在日留学生の異文化適応」『異文化間教育』8号 異文化間教育学会 pp. 106-116.
- 田中共子・高井次郎・神山貴弥・村中千穂・藤原武弘 (1990a) 「在日外国人留学生の適応に関する研究 (1) —異文化適応尺度の因子構造の検討—」『広島大学総合科学部紀要』III 第14巻 pp. 77-94.
- 田中共子・高井次郎・南博文・藤原武弘 (1990b) 「在日外国人留学生の適応に関する研究 (2) —新渡日留学生の一学期間におけるソーシャル・ネットワークの形成と適応—」『広島大学総合科学部紀要』III 第14巻 pp. 95-113.
- 田中共子・高井次郎・南博文・藤原武弘 (1991a) 「在日外国人留学生の適応に関する研究 (3) —新渡日留学生の半年間におけるソーシャル・ネットワーク形成と適応—」『広島大学留学生センター紀要』(1) pp. 77-95.
- 田中共子 (1991) 「在日留学生の文化的適応とソーシャル・スキル」『異文化間教育』5号 異文化間教育学会 pp. 98-110.
- 田中共子・横田雅弘 (1992) 「在日留学生の居住形態とストレス」『学生相談研究』13(2) pp. 51-59.
- 田中共子 (1995) 「在日外国人留学生による日本人との対人関係の困難に関する原因認知」『学生相談研究』16(1) pp. 23-31.
- 田中共子 (1998) 「在日留学生の異文化適応：ソーシャル・サポート・ネットワーク研究の

- 視点から」『教育心理学年報』Vol. 37 pp. 143-152.
- 田中共子 (2000) 『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』ナカニシヤ出版
- 田中共子 (2003) 「日本人学生と留学生の対人関係形成の困難に関する原因認知の比較」『学生相談研究』24 pp. 41-51.
- 田中共子・高濱愛 (2012) 「在米日本人留学生のソーシャル・サポート・ネットワーク—ソーシャルスキル自然学習者における検討—」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』33号 pp. 37-47.
- 譚紅艷・渡邊勉・今野裕之 (2013) 「留学生におけるソーシャル・サポート、対人信頼感および心理的適応の関連」『心理学研究』第9号 目白大学 pp. 53-63.
- 湯玉梅 (2004) 「在日中国人留学生の異文化適応過程に関する研究—対人行動上の困難の観点から—」『国際文化研究紀要』10 横浜市立大学 pp. 293-328.
- 長崎和則 (2009) 「精神障害者がソーシャルサポート利用を拡大するプロセスに関する研究：精神障害者のソーシャルサポート利用を促進するソーシャルワークのために」『川崎医療福祉学会誌』Vol. 18 No. 2 pp. 373-382.
- 中山亜紀子 (2002) 「大学コミュニティにおける異文化間トレランス」『異文化間教育』16号 異文化間教育学会 pp. 15-31.
- 中山亜紀子 (2007) 「韓国人留学生のライフストーリーから見た日本人学生との社会的ネットワークの特徴：「自分らしさ」という視点から」『阪大日本語研究』19号 pp. 97-127.
- 新倉涼子 (2000) 「チューターと留学生の友人関係の形成と性格の特性や行動に関する相互認知」『異文化間教育』14号 異文化間教育学会 pp. 99-116.
- 日本学生支援機構『平成25年度私費外国人留學生生活実態調査 概要』平成26年7月
- 日本学生支援機構『平成28年度外国人留學生在籍状況調査結果』平成29年3月
- 貫田優子・ウリガ (2013) 「在日外国人留學生の社交性と交友ネットワーク：大阪大学・京都大学の外国人留學生を対象としたアンケート調査から」『日本語・日本文化』39号 pp. 1-23. 大阪大学日本語日本文化教育センター
- 根本直弥・竹田稔史・山崎瑞紀 (2013) 「留學生と日本人學生の交流促進のための教育プログラムの設計」『東京都市大学横浜キャンパス情報メディアジャーナル』第14号 pp. 1-4.
- 朴金秋 (2004) 「状況的学習論から見る東アジア留學生のネットワークの構築—短期留學生

- 3名に対する縦断的調査をもとに」『留学生教育』9号 留学生教育学会 pp. 127-140.
- 原沢伊都夫(2012)「合同授業を通じた留学生と日本人学生の異文化交流」『留学交流』Vol. 13 pp. 1-5.
- 本田周二 (2009)「日本における友人関係に関する研究の動向」『東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報』6号 pp. 73-80.
- 平松闊・鶴飼孝造・宮垣元・星敦士 (2010)『社会ネットワークのリサーチメソッド—「つながり」を調査する—』ミネルヴァ書房
- 福岡市『平成 26 年度福岡都市圏における留学生実態調査 報告書』平成 27 年 3 月
- 古川雅文・藤原武弘・井上弥・石井真治・福田広 (1983)「新環境移行に伴う対人関係の認知についての微視発達的研究」『心理学研究』53 pp. 330-336.
- 樋口康彦 (1997)「留学生のパーソナリティ特性が在日適応感に与える影響について—達成志向性・調和志向性の観点から—」『実験社会心理学研究』37 pp. 150-164.
- 松下達彦 (1999)「留学生のためのソーシャル・サポートと日本語教育—教室外環境と教室内環境の融合を目指して—」『留学交流』1999 年 12 月号 pp. 16-19.
- 水野治久 (1997)「留学生の援助モデルに関する研究」『留学生教育』2号 留学生教育学会 pp. 11-19.
- 水野治久・石隈利紀 (2001)「留学生のソーシャル・サポートと適応に関する研究の動向と課題」『コミュニティ心理学研究』4 pp. 132-143.
- 村上律子 (2005)「アメリカ人留学生のソーシャル・ネットワークとホストとの親密化—支援制度による接触を中心に」報告書『外語大における多文化共生：留学生支援の実践研究』
- モイヤー康子 (1987)「心理的ストレスの要因と対処の仕方—在日留学生の場合—」『異文化間教育』1号 異文化間教育学会 pp. 81-97.
- 朴容九 (2016)「データから見る日本人若者の内向き志向性—韓中との比較を中心に」『Journal of East Asian Studies』No. 14 pp. 251-260.
- 山川史 (2011)「「自分の居場所探し」としてのソーシャルネットワーク形成」『ICU 日本語教育研究』8号 国際基督教大学日本語教育研究センター pp. 49-63.
- 山川史 (2013)「寮に住む留学生と日本人学生の友人関係構築に関する事例研究」『異文化間教育』38号 異文化間教育学会 pp. 100-115.
- 山川史 (2014)「短期留学生のソーシャル・ネットワーク形成と日本語教育—寮という実践

コミュニティの参加分析」博士論文

- 山川史 (2016) 「短期留学生の大学寮におけるソーシャル・ネットワーク形成—教育資源としての寮の活用—」『留学交流』Vol. 66 2016年9月号 pp. 5-20.
- 山崎瑞紀 (1997) 「留学生と日本人学生間の友人関係成立に関する一考察」『学術研究. (教育心理学編)』早稲田大学教育学部 pp. 37-42.
- 横田雅弘 (1991a) 「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』5号 pp. 81-97.
- 横田雅弘 (1991b) 「自己開示からみた留学生と日本人学生の友人関係」『一橋論叢』105(5) pp. 629-647.
- 横田雅弘・田中共子 (1992) 「在日留学生のフレンドシップ・ネットワーク：居住形態（留学生会館・寮・アパート）による比較」『学生相談研究』13(1) pp. 1-8.
- 吉田浩子 (2003) 「大学生の友人関係—5つの大学におけるグループの特徴に関する調査から—」『川崎医療福祉学会誌』Vol. 13 No. 1 pp. 173-186.
- 吉田千春 (2015) 「留学生宿舎から混住型学生宿舎へ—教育寮への転換に向けて—」『留学交流』Vol. 54 2015年9月 pp. 9-23.
- 渡辺文夫 (1995) 『異文化接触の心理学』川島書店

参考 URL

European Parliament Study, Internationalisation of Higher Education

[www.europarl.europa.eu/RegData/etudes/STUD/2015/540370/IPOL_STU\(2015\)540370_EN.pdf](http://www.europarl.europa.eu/RegData/etudes/STUD/2015/540370/IPOL_STU(2015)540370_EN.pdf) (2017 年 9 月 19 日最終アクセス)

Open Doors 2016, Institute of International Education

<https://www.iie.org/Research-and-Insights/Open-Doors/Open-Doors-2016-Media-Information> (2017 年 9 月 19 日最終アクセス)

北九州市立大学>北九州市立大学について>教員数・学生数 (平成 29 年 5 月 1 日現在)

<https://www.kitakyu-u.ac.jp/outline/gakuseikyoin.html> (2017 年 9 月 19 日最終アクセス)

九州工業大学>大学案内>学生数 (平成 29 年 5 月 1 日現在)

<http://www.kyutech.ac.jp/information/number-student.html> (2017 年 9 月 19 日最終アクセス)

九州情報大学>九州情報大学について>認証評価・教育研究活動等の情報公開>収容定員及び在学者 (年次別) 数 (平成 29 年 5 月 1 日現在)

<https://www.kiis.ac.jp/general/pdf/29zaisekisu.pdf> (2017 年 9 月 19 日最終アクセス)

九州大学>九州大学について>公表事項>在籍学生数

<https://www.kyushu-u.ac.jp/ja/university/publication/number> (2017 年 9 月 19 日最終アクセス)

九州大学外国人留学生数一覧表 (平成 29 年 5 月 1 日)

<http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/intlweb/cmndata/pdf/international.pdf> (2017 年 9 月 19 日最終アクセス)

東京大学>国際交流>スーパーグローバル大学創成支援

<http://www.u-tokyo.ac.jp/res02/sgu.html> (2017 年 9 月 19 日最終アクセス)

長崎外国語大学>大学案内>大学の取り組み>外大ビジョン 21>15. キャンパスのグローバル化推進 http://www.nagasaki-gaigo.ac.jp/about/effort/vision21/vision21_15/ (2017 年 12 月 20 日最終アクセス)

日本学生支援機構>JASSO について>学生支援に関する各種調査>私費外国人留学生生活実態調査>平成 27 年度私費外国人留学生生活実態調査概要

http://www.jasso.go.jp/about/statistics/ryuj_chosa/h27.html (2017年9月19日最終アクセス)

日本学生支援機構>JASSO について>学生支援に関する各種調査>私費外国人留学生生活実態調査>平成25年度私費外国人留学生生活実態調査概要

http://www.jasso.go.jp/about/statistics/ryuj_chosa/h25.html (2017年9月19日最終アクセス)

日本学生支援機構>JASSO について>学生支援に関する各種調査>外国人留学生在籍状況調査

http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/index.html (2017年9月19日最終アクセス)

福岡市>市政全般>国際交流・国際貢献>福岡都市圏における留学生実態調査の結果報告について

<http://www.city.fukuoka.lg.jp/soki/kokusai/shisei/fukuokatoshikenniokeruryugakuseijittaityousa.html> (2017年9月19日最終アクセス)

福岡地域留学生交流推進協議会>データ集>福岡地域の大学等の留学生受入れ状況 (平成29年5月1日現在)

<http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/suishinkyoo/data> (2017年9月19日最終アクセス)

福岡女子大学>教育情報の公表>在学生数 (平成26年5月1日現在)

<http://www.fwu.ac.jp/publish/pdf/students.pdf> (2017年9月19日最終アクセス)

福岡大学>情報公表>学生数等

<http://www.fukuoka-u.ac.jp/disclosure/number/> (2017年9月19日最終アクセス)

文部科学省>教育>大学・大学院、専門教育>国公立大学を通じた大学教育再生の戦略的推進>スーパーグローバル大学創成支援事業>スーパーグローバル大学創成支援

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1360288.htm

(2017年9月19日最終アクセス)

山梨大学>大学案内>グローバル化に関する方針

<http://www.yamanashi.ac.jp/about/129> (2017年9月19日最終アクセス)

麗澤大学>麗澤大学について>麗澤大学グローバル化ビジョンについて

<http://www.reitaku-u.ac.jp/about/vision.html> (2017年12月20日最終アクセス)

早稲田大学について>情報公開>学生に関する情報>2017年度学生・生徒数

<https://www.waseda.jp/top/assets/uploads/2014/02/students2017.pdf> (2017年9月19日最終アクセス)

図表一覧

- 図 2-1 エゴセントリック・ネットワーク
- 図 2-2 ソシオセントリック・ネットワーク
- 図 2-3 ソーシャル・サポートの分類
- 図 2-4 ホールネットワーク研究の方向性
- 図 3-1 人間関係、対人関係と友人関係の包摂状況
- 図 5-1 在日中国人留学生の友人関係（九州大学）
- 図 6-1 在日中国人留学生の友人関係（六大学）
- 図 7-1 「中・中」友人関係（九州大学）
- 図 7-2 「中・中」友人関係（六大学）
- 図 7-3 「中・日」友人関係（九州大学）
- 図 7-4 「中・日」友人関係（六大学）
- 図 7-5 「中・他」友人関係（九州大学）
- 図 7-6 「中・他」友人関係（六大学）
- 図 8-1 ソーシャル・サポート、友人付き合い機能及びその対象
- 図 8-2 友人関係及びその阻害要因に影響する関連要因
- 図 8-3 インフォーマルなカリキュラムとフォーマルなカリキュラム
-
- 表 2-1 ソーシャル・ネットワークの影響要因
- 表 3-1 調査対象大学の留学生数及び中国人留学生数
- 表 3-2 質問紙の回収数及び有効数
- 表 4-1 在学期間
- 表 4-2 在学身分
- 表 4-3 居住形態
- 表 4-4 中国人留学生同士の友人関係構築の影響要因
- 表 4-5 日本人学生との友人関係構築の影響要因
- 表 4-6 他国の留学生との友人関係構築の影響要因
- 表 5-1 被調査者の外国語能力
- 表 5-2 日本語能力と友人関係との相関関係

- 表 5-3 英語能力と友人関係との相関関係
- 表 5-4 「中・中」友人関係因子分析結果
- 表 5-5 「中・日」友人関係の因子分析結果
- 表 5-6 日本語能力と因子別の相関関係（「中・日」）
- 表 5-7 「中・他」友人関係の因子分析結果
- 表 5-8 英語能力と因子別の相関関係（「中・他」）
- 表 5-9 「中・中」の阻害要因因子
- 表5-10 「中・日」の阻害要因因子
- 表 5-11 「中・他」の阻害要因因子
- 表 5-12 居住形態別 t 検定結果
- 表5-13 英語能力と3グループ平均値の相関分析結果
- 表 5-14 居住形態別 t 検定結果（「中・日」因子別）
- 表5-15 日本語能力別相関分析結果（「中・日」因子別）
- 表5-16 在学期間別相関分析結果（「中・日」因子別）
- 表5-17 英語能力別相関分析結果（「中・他」因子別）
- 表5-18 在学期間別相関分析結果（「中・他」因子別）
- 表 6-1 専攻別友人関係 t 検定結果
- 表 6-2 部活・サークルの参加状況と友人関係の t 検定結果
- 表 6-3 中国学友会・留学生会の加入状況と友人関係の t 検定結果
- 表 6-4 日本語能力と友人関係の相関分析結果
- 表 6-5 英語能力と友人関係の相関分析結果
- 表6-6 在学身分多重比較結果（「中・日」）
- 表 6-7 居住形態多重比較結果（「中・日」）
- 表 6-8 「中・日」友人関係因子分析結果
- 表 6-9 専攻別 t 検定結果（因子別）
- 表 6-10 部活・サークルの参加状況 t 検定結果（因子別）
- 表 6-11 中国学友会・留学生会の加入状況 t 検定結果
- 表 6-12 日本語能力と友人関係の相関係数（因子別）
- 表6-13 在学身分多重比較結果（因子Ⅰ）
- 表6-14 在学身分多重比較結果（因子Ⅲ）

- 表6-15 居住形態多重比較結果（因子Ⅱ）
- 表 6-16 「中・中」上位 5 項目（阻害要因）
- 表 6-17 「中・日」上位項目（阻害要因）
- 表 6-18 「中・他」上位項目（阻害要因）
- 表 6-19 大学別阻害要因の上位項目（「中・中」）
- 表 6-20 大学別阻害要因の上位項目（「中・日」）
- 表 6-21 「中・日」大学別上位項目の出現回数
- 表 6-22 大学別阻害要因の上位 4 項目（「中・他」）
- 表 6-23 「中・他」大学別上位項目の出現回数
- 表 6-24 「中・日」友人関係構築の阻害要因因子
- 表 7-1 留学生の割合によるグループ分け
- 表 7-2 大学規模別 t 検定結果（友人関係）
- 表 7-3 友人関係項目別 t 検定結果（「中・中」）
- 表 7-4 友人関係項目別 t 検定結果（「中・日」）
- 表 7-5 留学生規模別 t 検定結果（阻害要因）
- 表 7-6 阻害要因項目別 t 検定結果（「中・中」）
- 表 7-7 阻害要因項目別 t 検定結果（「中・日」）
- 表 7-8 阻害要因項目別 t 検定結果（「中・他」）
- 表7-9 留学生割合多重比較結果（友人関係）
- 表7-10 留学生割合多重比較結果（「中・日」阻害要因）
- 表 8-1 友人関係構築における阻害要因の分析結果

添付資料

資料 1：先行研究の友人関係を測定する質問項目

資料 2：在日中国人留学生の友人関係に関する質問紙調査（本調査一日本語版）

資料 3：关于在日中国留学生人际关系的问卷调查（本調査一中国語版）

資料 4：在日中国人留学生の友人関係に関する質問紙調査（本調査二日本語版）

資料 5：关于在日中国留学生人际关系的问卷调查（本調査二中国語版）

資料 6：中国人留学生の友人関係に影響する要因に関する調査（予備調査日本語版）

資料 7：关于中国留学生交友关系的调查问卷（予備調査中国語版）

資料 8：自由記述の回答リスト

資料 9：六大学調査協力者の基本事項

資料 10：第七章障害要因質問項目参照データ

資料 11：項目別結果

資料 1 : 先行研究の友人関係を測定する質問項目

Bochner et al. (1977)

1. Conational orientation: Cooking, Shopping, Emotional help, Sports
2. Host national orientation:
Language help, Academic help, Just talking, Interpersonal help
3. Other national orientation: Just being with
4. Nonspecific national orientation:
Swimming, Drinking, Concerts, Library, Late evening snack, Picnic

Furnham and Bochner (1982)

1. Co-national Co-language:
2. Host: Help with language problem, Help with academic problem
3. Other:
Visit a doctor, Help with a personal problem, Going to movies, Going to pubs,
Sightseeing, Opposite-sex outing, Going to discotheques, Shopping, Worship

Furnham and Alibhai (1985)

1. Co-national:
Seek help for a personal problem, Go shopping, Go to the movies, Go to a disco or party
2. Host-national
Seek help for an academic problem, Seek help for a language problem, Go out with person of opposite sex
3. Other-national
Sightseeing
4. Don't care/ alone
Attend a place of worship, Go into a pub, Visit the doctor

在日中国人留学生の友人関係に関する質問紙調査

質問紙調査にご協力いただき、まことにありがとうございます。本調査は日本の大学に在籍している中国人留学生を対象に、中国人留学生の友人関係及びその関係に影響する要因を明らかにするものです。皆さんがお答えいただく内容は本研究だけに使います。また、全ての回答は匿名で扱うこととお約束いたしますので、ご協力お願いいたします。

皆さんにお答えいただく質問票は、本研究にとって非常に貴重なデータとなります。質問をよく読み、回答漏れのないようお願いいたします。記入にあたっては、回答現在の状況でご記入ください。

九州大学大学院地球社会統合科学府
博士後期課程 吳 暁良
連絡先：wuxl515@hotmail.com

1. 基本事項について

性別：①男性 ②女性 年齢：_____歳
在籍大学：_____大学 在学期間：_____年_____ヵ月
身分：①学部生 ②博士前期課程 ③博士後期課程 ④研究生 ⑤その他（ ）
専攻：①理科系 ②文科系
経済状況：①国費（日本・自国） ②私費留学生（奨学金あり） ③私費留学生（奨学金なし）
居住形態：①アパート ②留学生会館／寮 ③公営住宅 ④その他（ ）
婚姻状況：①未婚 ②既婚（家族同居） ③既婚（家族別居）

以下はあなたの英語力、日本語能力についてお尋ねします。①～⑤の中で、自分の言語能力に一番ふさわしい選択肢をお選びください。

日本語：① ② ③ ④ ⑤

英語：① ② ③ ④ ⑤

- ①超級：意見の裏付けができ、仮説が立てられる。具体的な話題も抽象的な話題も議論できる。
②上級：主な時制を使って叙述、描写できる。複雑な状況に対応できる。
③中級：自分なりに言語が使える、よく知っている話題について簡単な質問や答えができる。単純な状況や、やりとりに対処できる。
④初級：決まり文句、暗記した語句、単語の羅列、簡単な熟語でのみコミュニケーションができる。
⑤初級以下：簡単な挨拶ができる。または何もできない。

2. あなたの友人関係について

以下はあなたの大学/大学院での友人関係についてお尋ねします。中国人留学生、日本人学生、ほかの国からの留学生との友人関係の状況について、それがどの程度自分に「あてはまるか」あるいは「当てはまらないか」を、A～Dの中から一つをお選びください。

A. 非常に当てはまる B. やや当てはまる C. あまり当てはまらない D. 全く当てはまらない

①私は大学/大学院で_____の友人を作ることができた。

中国人留学生（ A B C D ） 日本人学生（ A B C D ） ほかの国からの留学生（ A B C D ）

あなたが普段付き合っている仲間の中で、最も仲の良い中国人留学生の友達、日本人学生の友達、ほかの国からの留学生の友達をそれぞれ一人想定してください。以下の項目内容が、どの程度実際の状況にあてはまるかを、A～Dの中から一つを選んで括弧にご記入ください。

項目に出てくるような場面を見たことがない、或いはわからないという場合でも、「その人ならどうするだろう」という推測で回答してください。

A. 非常に当てはまる B. やや当てはまる C. あまり当てはまらない D. 全く当てはまらない

①自分の母国や故郷のことを____の友人とよく話している。	中国人留学生 () 日本人学生 () ほかの国からの留学生 ()
②レポート提出や発表に際して、____の友人は言葉遣いを添削してくれる。	中国人留学生 () 日本人学生 () ほかの国からの留学生 ()
③よく____の友人と一緒に買い物に出かけている。	中国人留学生 () 日本人学生 () ほかの国からの留学生 ()
④学業に困ったことがあるとき、____の友人に相談している。	中国人留学生 () 日本人学生 () ほかの国からの留学生 ()
⑤落ち込んだ際、____の友人に頼る。	中国人留学生 () 日本人学生 () ほかの国からの留学生 ()
⑥週末に____の友人と一緒にパーティーや食事会に行っている。	中国人留学生 () 日本人学生 () ほかの国からの留学生 ()
⑦____の友人から勉強や研究に必要な情報の提供がある。	中国人留学生 () 日本人学生 () ほかの国からの留学生 ()
⑧____の友人と一緒に料理をして楽しんでいる。	中国人留学生 () 日本人学生 () ほかの国からの留学生 ()
⑨イベントがあるとき、____の友人を誘って一緒に参加している。	中国人留学生 () 日本人学生 () ほかの国からの留学生 ()
⑩____との友人付き合いでは、単に立ち話をする程度に留まっている。	中国人留学生 () 日本人学生 () ほかの国からの留学生 ()
⑪観光や見学旅行に行くとき、____の友人と一緒にいる。	中国人留学生 () 日本人学生 () ほかの国からの留学生 ()
⑫よく____の友人と一緒にスポーツをしている。	中国人留学生 () 日本人学生 () ほかの国からの留学生 ()

3. あなたの友人関係に影響する要因について

次はあなたの友人関係に影響する要因についてお尋ねします。普段、我々は誰かと友人関係を築きたいと望んでいるが、何らかの理由でその人物との友人関係を築きにくいと感じることがあります。以下の中国人留学生、日本人学生とほかの国からの留学生との友人関係を築きにくい理由の中で、それがどの程度自分に「あてはまるか」あるいは「当てはまらないか」を、A～Dの中から一つを選んで括弧にご記入ください。

A. 非常に当てはまる		B. やや当てはまる		C. あまり当てはまらない		D. 全く当てはまらない	
①生活と勉強だけで精一杯で、友人を作るといった余裕がありませんから。	中国人留学生 ()	日本人学生 ()	ほかの国からの留学生 ()				
②互いに性格が合わないから。	中国人留学生 ()	日本人学生 ()	ほかの国からの留学生 ()				
③専攻や研究室が異なり、学校で一緒に授業を受ける機会が少ないから。	中国人留学生 ()	日本人学生 ()	ほかの国からの留学生 ()				
④居住地が遠いから。	中国人留学生 ()	日本人学生 ()	ほかの国からの留学生 ()				
⑤年齢差があり、みぞを感じるから。	中国人留学生 ()	日本人学生 ()	ほかの国からの留学生 ()				
⑥相手がマナーを守らない・性格が悪いなどを感じるから。	中国人留学生 ()	日本人学生 ()	ほかの国からの留学生 ()				
⑦相手と共通の趣味や話題がないから。	中国人留学生 ()	日本人学生 ()	ほかの国からの留学生 ()				
⑧一緒に参加できる国際交流パーティーやイベントが少ないから。	中国人留学生 ()	日本人学生 ()	ほかの国からの留学生 ()				
⑨一緒に遊ぶときに、お金がかかるなど、経済的に余裕がないから。	中国人留学生 ()	日本人学生 ()	ほかの国からの留学生 ()				
⑩人付き合いにあまり興味がなく、面倒くさいと感じるから。	中国人留学生 ()	日本人学生 ()	ほかの国からの留学生 ()				
⑪相手と接触する頻度が少ないから。	中国人留学生 ()	日本人学生 ()	ほかの国からの留学生 ()				

次は中国人留学生との友人関係が築きにくい理由について、お尋ねします。以下の項目の中で、それがどの程度自分に「あてはまるか」あるいは「当てはまらないか」を、A～Dの中から一つをお選びください。

A. 非常に当てはまる B. やや当てはまる C. あまり当てはまらない D. 全く当てはまらない

①出身地が異なり、距離感を感じるから。	A B C D
②自分にとって外国語の勉強にならないと考えるから。	A B C D
③周りの中国人留学生が日本人や欧米人留学生を好んでいると感じるから。	A B C D
④周りの中国人留学生が多すぎて、彼らとの交流に疲れるから。	A B C D

次は日本人学生との友人関係が築きにくい理由について、お尋ねします。以下の項目の中で、それがどの程度自分に「あてはまるか」あるいは「当てはまらないか」を、A～Dの中から一つをお選びください。

A. 非常に当てはまる B. やや当てはまる C. あまり当てはまらない D. 全く当てはまらない

①日本語がうまくできなくて、自分の意思をうまく伝えることができないから。	A B C D
②自分は日本の文化や習慣について十分に知らないから。	A B C D
③日本人学生は遠慮し過ぎて、なかなか本当の気持ちを出さないから。	A B C D
④日本人学生が欧米の留学生を好んでいると感じるから。	A B C D
⑤日本人学生から留学生と友人になろうという気持ちが感じられないから。	A B C D
⑥周りに日本人学生が少なく、外国人のほうが多いから。	A B C D
⑦日本人学生が冷たいと感じるから	A B C D
⑧生活の場（生活圏）に共通するものがないから。	A B C D
⑨価値観が違い、互いになかなか理解できないから。	A B C D
⑩日本人学生の偏見を感じているから。	A B C D

次はほかの国からの留学生との友人関係が築きにくい理由について、お尋ねします。以下の項目の中で、それがどの程度自分に「あてはまるか」あるいは「当てはまらないか」を、A～Dの中から一つをお選びください。

A. 非常に当てはまる B. やや当てはまる C. あまり当てはまらない D. 全く当てはまらない

①他国からの留学生に対して距離感を感じるから。	A B C D
②中国人留学生より、彼らが日本人学生と友人関係を作りたいと感じるから。	A B C D
③生活の場（生活圏）に共通するものがないから。	A B C D
④彼らは日本語や中国語をうまく話せないから。	A B C D
⑤彼らに中国人留学生と友人になろうという気持ちが感じられないから。	A B C D
⑥価値観が違い、互いになかなか理解できないから。	A B C D
⑦宗教や信仰などのことで、彼らとの友人付き合いで遠慮することが多いから。	A B C D
⑧彼らが自分の意見や気持ちを率直に言ってくるから。	A B C D
⑨英語で自分の意思をうまく伝えることができないから。	A B C D
⑩彼らの文化や習慣について十分知らないから。	A B C D

ご協力ありがとうございました！

資料3：关于在日中国留学生人际关系的问卷调查（本調査一中国語版）

关于在日中国留学生人际关系的问卷调查

感谢您对本次问卷调查的合作！该问卷调查是为了了解在日中国留学生的人际关系以及影响其人际关系的各种因素而实施。您所作答的内容只用于本研究，并且所有的回答都采用匿名方式，不会对您个人信息造成任何影响，请您协助完成本次调查。

您所回答的内容，是本研究极为重要和不可缺少的数据，所以请您认真阅读各个项目，避免漏答，所有的问题请都以您当前的实际状况为准作答。

九州大学大学院地球社会统合科学府
博士后期课程 吴晓良
邮箱：wuxl515@hotmail.com

1. 基本事项

性别：①男 <input type="checkbox"/> ②女 <input type="checkbox"/>	年龄：_____岁
现在在籍大学：_____大学	合计在学时间：_____年_____个月
身份：①本科生 ②硕士研究生 ③博士研究生 ④旁听生（研究生） ⑤其他（_____）	
专业：①理科 <input type="checkbox"/> ②文科 <input type="checkbox"/>	
经济状况：①国费（日本・中国） ②自费（有奖学金） ③自费（无奖学金）	
居住方式：①公寓（アパート） ②留学生会馆、宿舍 ③公营住宅 ④其他（_____）	
婚姻状况：①未婚 ②已婚（家人同住） ③已婚（家人分居）	

关于您的日语，英语能力：

请从下面①~⑤五个选项中，选择与自己语言能力最符合的一项。

日语：① ② ③ ④ ⑤

英语：① ② ③ ④ ⑤

- ①超级：能反驳对方意见。无论具体的还是抽象的话题，都能讨论。
- ②上级：可以运用主要的时态进行叙述和描写，能应对复杂的状况。
- ③中级：对于自己比较了解的话题，能简单地提问和作答。能应对简单的状况。
- ④初级：只能通过运用固定的句子，熟记的词句，以及罗列单词来进行交流。
- ⑤零级：只会基本的打招呼，或者什么都不会。

2. 关于您的人际关系

您在校园里的人际关系：

在校园里，您与中国留学生、日本学生以及其他国家留学生的人际关系如何？请从以下A~D四个选项中，选出最符合您实际情况的一项。

A.非常符合 **B.略微符合** **C.不怎么符合** **D.完全不符合**

①我在学校里交到了____的朋友。

中国留学生（A B C D） 日本学生（A B C D） 其他国家留学生（A B C D）

您和您的朋友之间的交往方式：

首先，请从您平时交往关系较好的中国留学生，日本学生以及其他国家留学生中，各设想一个人。以下场景，有多大程度和您与您朋友的实际状况相符合，请从A~D中选择一项，填入后面的括弧里。如果您没有遇到过下面的场景，那么请设想一下，如果是您和您那位朋友会怎么样，然后作答。

	A.非常符合	B.略微符合	C.不怎么符合	D.完全不符合
①经常跟____的朋友谈论祖国和家乡的事情。				中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()
②在提交报告或准备发表时，经常让____的朋友帮忙修改语法错误。				中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()
③经常和____的朋友一起去购物。				中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()
④在学习遇到困难的时候，经常和____的朋友商量。				中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()
⑤在遇到挫折感到失落的时候，经常依靠____的朋友。				中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()
⑥周末经常与____的朋友一起聚会、出去吃饭。				中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()
⑦____的朋友经常为我提供学习和研究上的信息。				中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()
⑧经常与____的朋友一起做饭。				中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()
⑨在有活动的时候，经常邀请____的朋友一起参加。				中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()
⑩与____朋友的交往不深，仅仅停留在闲聊的层次。				中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()
⑪观光旅行时，经常和____的朋友一起去。				中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()
⑫经常和____的朋友一起进行体育运动。				中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()

3. 关于影响您人际关系的要素

影响您人际关系的要素：

日常生活中，我们常期望和某些人建立朋友关系，可是总有一些理由让我们感到和他们难以接近，难以建立朋友关系。

下面①~⑪是一些与中国留学生、日本学生以及其他国家留学生难以建立或难以维持朋友关系的理由，这些理由有多大程度和自己的情况相符合，请从A~D四个选项中选择一项，填入后面的括弧里。

A.非常符合 B.略微符合 C.不怎么符合 D.完全不符合

①仅生活和学习就已经感到很吃力，没有余力和时间交____朋友。	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()
②感觉与____朋友性格不合。	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()
③与____朋友专业和研究室不同，在学校一起上课的机会也很少。	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()
④与____朋友相互住的比较远，难以维持朋友关系。	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()
⑤有年龄差的话，会感到与____朋友有隔阂。	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()
⑥有的____朋友不懂礼貌，人品不好。	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()
⑦与____朋友很少有共同的话题和兴趣。	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()
⑧很少有能与____朋友一起参加的国际交流活动。	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()
⑨与____朋友一起玩的时候太花钱，没有那样的经济余力。	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()
⑩对与____朋友的人际交往不感兴趣，感到很麻烦。	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()
⑪与____朋友接触的频率很低。	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()

您和中国留学生难以建立朋友关系的理由：

以下选项有多大程度和自己的情况相符，请从 A~D 四个选项中选择一项。

A.非常符合 **B.略微符合** **C.不怎么符合** **D.完全不符合**

①出身地不同，有距离感。	A	B	C	D
②觉得和同国人交往对自己学习外语没有帮助。	A	B	C	D
③感觉周围的中国人更喜欢和日本人、其他外国人留学生交流。	A	B	C	D
④周围的中国留学生太多了，和他们交流感到疲乏。	A	B	C	D

您和日本学生难以建立朋友关系的理由：

以下选项有多大程度和自己的情况相符，请从 A~D 四个选项中选择一项。

A.非常符合 **B.略微符合** **C.不怎么符合** **D.完全不符合**

①日语说不好，很难准确表达自己的想法。	A	B	C	D
②自己对日本的文化以及他们的生活习惯不是很了解。	A	B	C	D
③日本学生顾虑太多，很难了解他们的真实想法。	A	B	C	D
④感觉日本学生更喜欢和欧美留学生交流。	A	B	C	D
⑤感觉不到日本学生想和我交朋友的意愿。	A	B	C	D
⑥周围日本人比较少，外国人反而更多。	A	B	C	D
⑦感觉日本学生比较冷淡。	A	B	C	D
⑧和他们没有共同的生活圈。	A	B	C	D
⑨和他们的价值观不同，有时候难以理解。	A	B	C	D
⑩感到日本学生对中国人有偏见。	A	B	C	D

您和其他国家留学生难以建立朋友关系的理由：

以下选项有多大程度和自己相符，请从 A~D 四个选项中选择一项。

A.非常符合 **B.略微符合** **C.不怎么符合** **D.完全不符合**

①感到与其他国家的留学生有距离感。	A	B	C	D
②与中国留学生相比，感觉其他国家的留学生更喜欢和日本人交流。	A	B	C	D
③和其他国家的留学生没有共同生活圈。	A	B	C	D
④其他国家的留学生不怎么会说日语和汉语，难以交流。	A	B	C	D
⑤感觉不到其他国家的留学生想和我交朋友的意愿。	A	B	C	D
⑥和其他国家的留学生价值观不同，有时候难以理解。	A	B	C	D
⑦宗教和信仰不同，和其他国家的留学生交往时有太多顾虑。	A	B	C	D
⑧其他国家的留学生总是太过直接地表达自己的想法和意见。	A	B	C	D
⑨自己的英语说不好，很难正确表达自己的想法。	A	B	C	D
⑩自己对其他国家的留学生的祖国文化以及生活习惯不是很了解。	A	B	C	D

感谢您的宝贵时间和合作！

在日中国人留学生の友人関係に関する質問紙調査

質問紙調査にご協力いただき、まことにありがとうございます。本調査は日本の大学に在籍している中国人留学生を対象に、中国人留学生の友人関係及びその関係に影響する要因を明らかにするものです。皆さんがお答えいただく内容は本研究だけに使います。また、全ての回答は匿名で扱うことをお約束いたしますので、ご協力お願いいたします。

皆さんにお答えいただく質問票は、本研究にとって非常に貴重なデータとなります。質問をよく読み、回答漏れのないようお願いいたします。記入にあたっては、回答現在の状況でご記入ください。

九州大学大学院地球社会統合科学府
 博士後期課程 呉 暁良
 連絡先：wuxl515@hotmail.com

1. 基本事項について

性別：①男性 <input type="checkbox"/> ②女性 <input type="checkbox"/>	年齢：_____歳
在籍大学：_____大学	在学期間：_____年_____ヵ月
身分：①学部生 ②博士前期課程 ③博士後期課程 ④研究生 ⑤その他（_____）	
専攻：①理科系 <input type="checkbox"/> ②文科系 <input type="checkbox"/> ③その他 <input type="checkbox"/>	
経済状況：①国費（日本・自国） ②私費留学生（奨学金あり） ③私費留学生（奨学金なし）	
居住形態：①アパート ②留学生専用会館／寮 ③混住寮 ④公営住宅 ⑤その他（_____）	
現大学での学生寮経験：①有 ②無	
現大学の部活／サークルへの参加経験：①有 ②無	
現大学の中国人学友会や留学生会への入会：①入会している ②入会していない	
婚姻状況：①未婚 ②既婚（家族同居） ③既婚（家族別居）	

以下はあなたの英語力、日本語能力についてお尋ねします。①～⑤の中で、自分の言語能力に一番ふさわしい選択肢をお選びください。

日本語：① ② ③ ④ ⑤

英語：① ② ③ ④ ⑤

- ①超級：意見の裏付けができ、仮説が立てられる。具体的な話題も抽象的な話題も議論できる。
- ②上級：主な時制を使って叙述、描写できる。複雑な状況に対応できる。
- ③中級：自分なりに言語が使える、よく知っている話題について簡単な質問や答えができる。単純な状況や、やりとりに対処できる。
- ④初級：決まり文句、暗記した語句、単語の羅列、簡単な熟語でのみコミュニケーションができる。
- ⑤初級以下：簡単な挨拶ができる。または何もできない。

2. あなたの友人関係について

以下はあなたの大学/大学院での友人関係についてお尋ねします。中国人留学生、日本人学生、ほかの国からの留学生との友人関係の状況について、それがどの程度自分に「あてはまるか」あるいは「当てはまらないか」を、A～Dの中から一つをお選びください。

A. 非常に当てはまる **B. やや当てはまる** **C. あまり当てはまらない** **D. 全く当てはまらない**

①私は大学/大学院で

中国人留学生（_____）
日本人学生（_____）
ほかの国からの留学生（_____）

 の友人を作ることができた。

以下はあなたのお友達との付き合い方についてお尋ねします。

あなたが普段付き合っている仲間の中で、最も仲の良い中国人留学生の友達、日本人学生の友達、ほかの国からの留学生の友達をそれぞれ一人想定してください。以下の項目内容が、どの程度実際の状況にあてはまるかを、A～Dの中から一つを選んで括弧にご記入ください。

A. 非常に当てはまる B. やや当てはまる C. あまり当てはまらない D. 全く当てはまらない

①母国や故郷のことをよく	<table border="1"> <tr><td>中国人留学生 ()</td></tr> <tr><td>日本人学生 ()</td></tr> <tr><td>ほかの国からの留学生 ()</td></tr> </table>	中国人留学生 ()	日本人学生 ()	ほかの国からの留学生 ()	の友人と話し合っている。
中国人留学生 ()					
日本人学生 ()					
ほかの国からの留学生 ()					
②レポート提出や発表に際して、よく	<table border="1"> <tr><td>中 ()</td></tr> <tr><td>日 ()</td></tr> <tr><td>他 ()</td></tr> </table>	中 ()	日 ()	他 ()	の友人は言葉遣いを添削してくれる。
中 ()					
日 ()					
他 ()					
③よく	<table border="1"> <tr><td>中 ()</td></tr> <tr><td>日 ()</td></tr> <tr><td>他 ()</td></tr> </table>	中 ()	日 ()	他 ()	の友人と一緒に買い物に出かけている。
中 ()					
日 ()					
他 ()					
④学業に困ったことがあるとき、よく	<table border="1"> <tr><td>中 ()</td></tr> <tr><td>日 ()</td></tr> <tr><td>他 ()</td></tr> </table>	中 ()	日 ()	他 ()	の友人に相談している。
中 ()					
日 ()					
他 ()					
⑤落ち込んだ際、よく	<table border="1"> <tr><td>中 ()</td></tr> <tr><td>日 ()</td></tr> <tr><td>他 ()</td></tr> </table>	中 ()	日 ()	他 ()	の友人に頼る。
中 ()					
日 ()					
他 ()					
⑥週末によく	<table border="1"> <tr><td>中 ()</td></tr> <tr><td>日 ()</td></tr> <tr><td>他 ()</td></tr> </table>	中 ()	日 ()	他 ()	の友人と一緒にパーティーや食事会に行っている。
中 ()					
日 ()					
他 ()					
⑦よく	<table border="1"> <tr><td>中 ()</td></tr> <tr><td>日 ()</td></tr> <tr><td>他 ()</td></tr> </table>	中 ()	日 ()	他 ()	の友人から勉強や研究に必要な情報の提供がある。
中 ()					
日 ()					
他 ()					
⑧よく	<table border="1"> <tr><td>中 ()</td></tr> <tr><td>日 ()</td></tr> <tr><td>他 ()</td></tr> </table>	中 ()	日 ()	他 ()	の友人と一緒に料理をして楽しんでいる。
中 ()					
日 ()					
他 ()					
⑨イベントがあるとき、よく	<table border="1"> <tr><td>中 ()</td></tr> <tr><td>日 ()</td></tr> <tr><td>他 ()</td></tr> </table>	中 ()	日 ()	他 ()	の友人を誘って一緒に参加している。
中 ()					
日 ()					
他 ()					
⑩	<table border="1"> <tr><td>中 ()</td></tr> <tr><td>日 ()</td></tr> <tr><td>他 ()</td></tr> </table>	中 ()	日 ()	他 ()	との友人付き合いでは、単に立ち話をする程度に留まっている。
中 ()					
日 ()					
他 ()					
⑪観光や見学旅行に行くとき、よく	<table border="1"> <tr><td>中 ()</td></tr> <tr><td>日 ()</td></tr> <tr><td>他 ()</td></tr> </table>	中 ()	日 ()	他 ()	の友人と一緒にいる。
中 ()					
日 ()					
他 ()					
⑫よく	<table border="1"> <tr><td>中 ()</td></tr> <tr><td>日 ()</td></tr> <tr><td>他 ()</td></tr> </table>	中 ()	日 ()	他 ()	の友人と一緒にスポーツをしている。
中 ()					
日 ()					
他 ()					
⑬ストレスを感じたとき、よく	<table border="1"> <tr><td>中 ()</td></tr> <tr><td>日 ()</td></tr> <tr><td>他 ()</td></tr> </table>	中 ()	日 ()	他 ()	の友人と一緒に居て、ストレスを発散する。
中 ()					
日 ()					
他 ()					
⑭よく	<table border="1"> <tr><td>中 ()</td></tr> <tr><td>日 ()</td></tr> <tr><td>他 ()</td></tr> </table>	中 ()	日 ()	他 ()	の友人とお互いに言葉を教え合う。
中 ()					
日 ()					
他 ()					
⑮よく we chat、Line や Facebook などの SNS を通して	<table border="1"> <tr><td>中 ()</td></tr> <tr><td>日 ()</td></tr> <tr><td>他 ()</td></tr> </table>	中 ()	日 ()	他 ()	の友人と話し、情報を共有する。
中 ()					
日 ()					
他 ()					

3. あなたの友人関係に影響する要因について

次はあなたの友人関係に影響する要因についてお尋ねします。普段、我々は誰かと友人関係を築きたいと望んでいるが、何らかの理由でその人物との友人関係を築きにくいと感じることがあります。以下の中国人留学生、日本人学生とほかの国からの留学生との友人関係を築きにくい理由の中で、それがどの程度自分に「あてはまるか」あるいは「当てはまらないか」を、A～Dの中から一つを選んで括弧にご記入ください。

A. 非常に当てはまる	B. やや当てはまる	C. あまり当てはまらない	D. 全く当てはまらない
①生活と勉強だけで精一杯で、友人を作るといった余裕があまりないから。	中国人留学生 () 日本人学生 () ほかの国からの留学生 ()		
②互いに性格が合わないから。	中国人留学生 () 日本人学生 () ほかの国からの留学生 ()		
③専攻や研究室が異なり、学校で一緒に授業を受ける機会が少ないから。	中国人留学生 () 日本人学生 () ほかの国からの留学生 ()		
④居住地が遠いから。	中国人留学生 () 日本人学生 () ほかの国からの留学生 ()		
⑤年齢差があり、みぞを感じるから。	中国人留学生 () 日本人学生 () ほかの国からの留学生 ()		
⑥相手がマナーを守らない・性格が悪いなどと感じるから。	中国人留学生 () 日本人学生 () ほかの国からの留学生 ()		
⑦相手と共通の趣味や話題がないから。	中国人留学生 () 日本人学生 () ほかの国からの留学生 ()		
⑧一緒に参加できる国際交流パーティーやイベントが少ないから。	中国人留学生 () 日本人学生 () ほかの国からの留学生 ()		
⑨一緒に遊ぶときに、お金がかかるなど、経済的に余裕がないから。	中国人留学生 () 日本人学生 () ほかの国からの留学生 ()		
⑩人付き合いにあまり興味がなく、面倒くさいと感じるから。	中国人留学生 () 日本人学生 () ほかの国からの留学生 ()		
⑪相手と接触する頻度が少ないから。	中国人留学生 () 日本人学生 () ほかの国からの留学生 ()		

次は中国人留学生との友人関係が築きにくい理由について、お尋ねします。以下の項目の中で、それがどの程度自分に「あてはまるか」あるいは「当てはまらないか」を、A～Dの中から一つをお選びください。

A. 非常に当てはまる B. やや当てはまる C. あまり当てはまらない D. 全く当てはまらない

①出身地が異なり、距離感を感じるから。	A B C D
②自分にとって外国語の勉強にならないと考えるから。	A B C D
③周りの中国人留学生が日本人や欧米人留学生を好んでいると感じるから。	A B C D
④周りの中国人留学生が多すぎて、彼らとの交流に疲れるから。	A B C D

次は日本人学生との友人関係が築きにくい理由について、お尋ねします。以下の項目の中で、それがどの程度自分に「あてはまるか」あるいは「当てはまらないか」を、A～Dの中から一つをお選びください。

A. 非常に当てはまる B. やや当てはまる C. あまり当てはまらない D. 全く当てはまらない

①日本語がうまくできなくて、自分の意思をうまく伝えることができないから。	A B C D
②自分は日本の文化や習慣について十分に知らないから。	A B C D
③日本人学生は遠慮し過ぎて、なかなか本当の気持ちを出さないから。	A B C D
④日本人学生が欧米の留学生を好んでいると感じるから。	A B C D
⑤日本人学生から留学生と友人になろうという気持ちが感じられないから。	A B C D
⑥周りに日本人学生が少なく、外国人のほうが多いから。	A B C D
⑦日本人学生が冷たいと感じるから	A B C D
⑧ライフスタイルに共通性がないから。	A B C D
⑨価値観が違い、互いになかなか理解できないから。	A B C D
⑩日本人学生の偏見を感じているから。	A B C D

次はほかの国からの留学生との友人関係が築きにくい理由について、お尋ねします。以下の項目の中で、それがどの程度自分に「あてはまるか」あるいは「当てはまらないか」を、A～Dの中から一つをお選びください。

A. 非常に当てはまる B. やや当てはまる C. あまり当てはまらない D. 全く当てはまらない

①他国からの留学生に対して距離感を感じるから。	A B C D
②中国人留学生より、彼らが日本人学生と友人関係を作りたいと感じるから。	A B C D
③ライフスタイルに共通性がないから。	A B C D
④彼らは日本語や中国語をうまく話せないから。	A B C D
⑤彼らに中国人留学生と友人になろうという気持ちが感じられないから。	A B C D
⑥価値観が違い、互いになかなか理解できないから。	A B C D
⑦宗教や信仰などのことで、彼らとの友人付き合いで遠慮することが多いから。	A B C D
⑧彼らが自分の意見や気持ちを率直に言ってくるから。	A B C D
⑨英語で自分の意思をうまく伝えることができないから。	A B C D
⑩彼らの文化や習慣について十分知らないから。	A B C D

ご協力ありがとうございました！

資料 5：关于在日中国留学生人际关系的问卷调查（本調査二中国語版）

关于在日中国留学生人际关系的问卷调查

感谢您对本次问卷调查的合作！该问卷调查是为了了解在日中国留学生的人际关系以及影响其人际关系的各种因素而实施。您所作答的内容只用于本研究，并且所有的回答都采用匿名方式，不会对您个人信息造成任何影响，请您协助完成本次调查。

您所回答的内容，是本研究极为重要和不可缺少的数据，所以请您认真阅读各个项目，避免漏答，所有的问题请都以您当前的实际状况为准作答。

九州大学大学院地球社会统合科学府
博士后期课程 吴晓良
邮箱：wuxl515@hotmail.com

1. 基本事项

性别：①男 ②女 年龄：_____岁
当前在籍大学：_____大学 当前学校在学时间：_____年_____个月
身份：①本科生 ②硕士研究生 ③博士研究生 ④旁听生（研究生） ⑤其他（ ）
专业：①理科 ②文科 ③其他
经济状况：①国费（日本・中国） ②自费（有奖学金） ③自费（无奖学金）
现居住方式：①公寓（アパート） ②留学生专用宿舍 ③共同宿舍 ④公营住宅 ⑤其他（ ）
入学后有无居住学生宿舍经历：①有 ②无
有无参加现大学部活/社团经历：①有 ②无
是否加入现大学的中国学友会或者留学生会：①加入 ②未加入
婚姻状况：①未婚 ②已婚（家人同住） ③已婚（家人分居）

关于您的日语，英语能力：

请从下面①~⑤五个选项中，选择与自己语言能力最符合的一项，在方框里打钩。

日语：① ② ③ ④ ⑤

英语：① ② ③ ④ ⑤

- ①超级：能反驳对方意见。无论具体的还是抽象的话题，都能讨论。
- ②上级：可以运用主要的时态进行叙述和描写，能应对复杂的状况。
- ③中级：对于自己比较了解的话题，能简单地提问和作答。能应对简单的状况。
- ④初级：只能通过运用固定的句子，熟记的词句，以及罗列单词来进行交流。
- ⑤零级：只会基本的打招呼，或者什么都不会。

2. 关于您的人际关系

您在校园里的人际关系：

在校园里，您与中国留学生、日本学生以及其他国家留学生的人际关系如何？请从以下 A~D 四个选项中，选出最符合您实际情况的一项。

A.非常符合 **B.略微符合** **C.不怎么符合** **D.完全不符合**

①我在学校里交到了
 中国留学生（ ）
 日本学生（ ）
 其他国家留学生（ ）
 的朋友。

您和您的朋友之间的交往方式：

首先，请从您平时在学校里交往关系较好的中国留学生，日本学生以及其他国家留学生中，各设想一个人。以下场景，有多大程度和您与您朋友的实际状况相符合，请从A~D中选择一项，填入后面的括弧里。您选择的其他国家留学生朋友的国籍是：_____

A.非常符合 **B.略微符合** **C.不怎么符合** **D.完全不符合**

①经常和	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()	谈论祖国和家乡的事情。
②在提交报告或准备发表时，经常让	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()	帮忙修改语法错误。
③经常和	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()	一起去购物。
④在学习遇到困难的时候，经常和	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()	商量。
⑤在遇到挫折感到失落的时候，经常依靠	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()	朋友。
⑥周末经常与	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()	一起聚会、出去吃饭。
⑦	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()	经常为我提供学习和研究上的信息。
⑧经常与	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()	一起做饭。
⑨在有交流活动的时候，经常邀请	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()	一起参加。
⑩与	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()	的交往不深，仅仅停留在闲聊的层次。
⑪观光旅行时，经常和	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()	一起去。
⑫经常和	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()	一起运动。
⑬感到压力大时，经常找	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()	来缓解压力。
⑭经常通过微信、Line、Facebook 等社交软件和	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()	聊天，共享信息。
⑮经常和	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()	互相学习语言。

3. 关于影响您人际关系的要素

日常生活中，我们常期望和某些人建立朋友关系，可是总有一些理由让我们感到和他们难以亲近，难以建立朋友关系。

下面①~⑪是一些与中国留学生、日本学生以及其他国家留学生难以建立或难以维持朋友关系的理由，这些理由有多大程度和自己的情况相符，请从A~D四个选项中选择一项，填入后面的括弧里。

A.非常符合 B.略微符合 C.不怎么符合 D.完全不符合

①仅生活和学习就已经感到很吃力，没有精力和时间与	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()	交朋友。
②因性格不合，很难与	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()	建立朋友关系。
③因为与	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()	的专业和研究室不同，在学校一起上课的机会也很少。
④因为与	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()	居住距离较远，难以建立和维持朋友关系。
⑤因为年龄差距，感到与	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()	有代沟。
⑥因为有的	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()	没有礼貌，缺乏教养。
⑦因为与	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()	很少有共同的话题和兴趣。
⑧因为很少有能与	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()	一起参加的国际交流活动。
⑨因为与	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()	一起玩的时候花费过高，没有那样的经济余力。
⑩因为对与	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()	的人际交往不感兴趣，感到很麻烦。
⑪因为与	中国留学生 () 日本学生 () 其他国家留学生 ()	接触的频率很低。

您和中国留学生难以建立朋友关系的理由：

以下选项有多大程度和自己的情况相符，请从 A~D 四个选项中选择一项。

A.非常符合 B.略微符合 C.不怎么符合 D.完全不符合

①出身地不同，有距离感。	A B C D
②觉得和同国人交往对自己学习外语没有帮助。	A B C D
③感觉周围的中国人更喜欢和日本人、其他外国人留学生交流。	A B C D
④周围的中国留学生太多了，和他们交流感到疲乏。	A B C D

您和日本学生难以建立朋友关系的理由：

以下选项有多大程度和自己的情况相符，请从 A~D 四个选项中选择一项。

A.非常符合 B.略微符合 C.不怎么符合 D.完全不符合

①日语说不好，很难准确表达自己的想法。	A B C D
②自己对日本的文化以及他们的生活习惯不是很了解。	A B C D
③日本学生顾虑太多，很难了解他们的真实想法。	A B C D
④感觉日本学生更喜欢和欧美留学生交流。	A B C D
⑤感觉不到日本学生想和我交朋友的意愿。	A B C D
⑥周围日本人比较少，外国人反而更多。	A B C D
⑦感觉日本学生比较冷漠，很难亲近。	A B C D
⑧和他们没有共同的生活圈。	A B C D
⑨和他们的价值观不同，有时候难以理解。	A B C D
⑩感到日本学生对中国人有偏见。	A B C D
⑪受某些历史或政治问题影响，感觉内心有抵触。	A B C D

您和其他国家留学生难以建立朋友关系的理由：

以下选项有多大程度和自己的情况相符，请从 A~D 四个选项中选择一项。

A.非常符合 B.略微符合 C.不怎么符合 D.完全不符合

①感到与其他国家的留学生有距离感。	A B C D
②与中国留学生相比，感觉其他国家的留学生更喜欢和日本人交流。	A B C D
③和其他国家的留学生没有共同生活圈。	A B C D
④其他国家的留学生不怎么会说日语和汉语，难以交流。	A B C D
⑤感觉不到其他国家的留学生想和我交朋友的意愿。	A B C D
⑥和其他国家的留学生价值观不同，有时候难以理解。	A B C D
⑦宗教和信仰不同，和其他国家的留学生交往时有太多顾虑。	A B C D
⑧其他国家的留学生总是太过直接地表达自己的想法和意见。	A B C D
⑨自己的英语说不好，很难正确表达自己的想法。	A B C D
⑩自己对其他国家的留学生的祖国文化以及生活习惯不是很了解。	A B C D
⑪受某些历史或政治问题影响，感觉内心有抵触。	A B C D

感谢您的宝贵时间和合作！

中国人留学生の友人関係に影響する要因に関する調査

アンケート調査にご協力いただき、まことにありがとうございます。本アンケート調査は日本の大学に在籍している中国人留学生を対象に、中国人留学生の友人関係に影響する要因について何う目的で実施するものです。皆さんが答えた内容は本人の研究だけに使います。また、全ての回答は匿名で扱うこととお約束いたしますので、ご協力お願いいたします。

九州大学大学院地球社会統合科学府 吳曉良

以下の質問についてあてはまるところで「○」をおつけください。

性別：①男性 ②女性

来日期間：①一ヶ月未満 ②一ヶ月～三ヶ月 ③三ヶ月～半年 ④半年～一年
⑤一年～二年 ⑥一年以上

居住形態：①アパート ②留学生会館／寮 ③公営住宅 ④ホームステイ

在学身分：①研究生 ②学部生 ③博士前期課程 ④博士後期課程

在学期間：①一ヶ月未満 ②一ヶ月～三ヶ月 ③三ヶ月～半年 ④半年～一年
⑤一年～二年 ⑥一年以上

専攻：①理系 ②文系

以下の質問について自由にご記入ください。(中国語可、3点以上)

1. 回国からの留学生と付き合う時、友人関係を築きにくいことがあるとしたら、その要因と理由としてどのようなものが考えられますか。

(参考例：性格が合わない、時間がない、経済的に余裕がないなど)

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

2. 回国からの留学生と付き合う時、友人関係を築きやすいことがあるとしたら、その要因と理由としてどのようなものが考えられますか。

(参考例：同じ寮に住むこと、出身地が同じであること、共通の趣味を持つことなど)

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

(裏面もご覧ください)

3. 日本人学生と付き合う時に、友人関係を築きにくいことがあるとしたら、その要因と理由としてどのようなものが考えられますか。

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

4. 日本人学生と付き合う時に、友人関係を築きやすいことがあるとしたら、その要因と理由としてどのようなものが考えられますか。

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

5. 中国以外の国からの留学生と付き合う時に、友人関係を築きにくいことがあるとしたら、その要因と理由としてどのようなものが考えられますか。

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

6. 中国以外の国からの留学生と付き合う時に、友人関係を築きやすいことがあるとしたら、その要因と理由としてどのようなものが考えられますか。

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

ご協力ありがとうございました。

資料 7：关于中国留学生交友关系的调查问卷（予備調査中国語版）

关于中国留学生交友关系的调查问卷

亲爱的同学，感谢您协助本次问卷调查！本次问卷的目的是为了了解影响中国留学生交友关系的各种因素。大家的回答只用于本人研究，并且所有的回答都会采取匿名的方式，希望能得到您真实的想法，谢谢！

九州大学大学院地球社会统合科学府 吴晓良

请回答下列问题，并在恰当的选项上打钩。

性别：①男性 ②女性

来日年数：①不到一个月 ②一个月到三个月 ③三个月到半年 ④半年到一年
⑤一年到两年 ⑥两年以上

居住场所：①公寓 ②留学生会馆；宿舍 ③公营住宅 ④寄宿民居

在学身份：①旁听生 ②本科生 ③硕士研究生 ④博士研究生

在学年数：①不到一个月 ②一个月到三个月 ③三个月到半年 ④半年到一年
⑤一年到两年 ⑥两年以上

专业：①理科 ②工科 ③文科

请自由回答下列问题。每一问题请列举三项以上，例子仅供参考。

1. 和中国留学生交往时，如果有什么因素让您觉得和他难以建立朋友关系，那么您认为是什么原因或者什么因素？

（参考例：性格不合、没有时间、经济条件不允许）

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

2. 和中国留学生交往时，如果有什么因素让您觉得和他容易建立朋友关系，那么您认为是什么原因或者什么因素？

（参考例：住在同一个宿舍、同乡、有共同的兴趣爱好）

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

（反面继续）

3. 和日本学生交往时，如果有什么因素让您觉得和他难以建立朋友关系，那么您认为会是什么原因或者什么因素？

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

4. 和日本学生交往时，如果有什么因素让您觉得和他容易建立朋友关系，那么您认为会是什么原因或者什么因素？

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

5. 和来自其他国家的留学生交往时，如果有什么因素让您觉得和他难以建立朋友关系，那么您认为会是什么原因或者什么因素？

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

6. 和来自其他国家的留学生交往时，如果有什么因素让您觉得和他容易建立朋友关系，那么您认为会是什么原因或者什么因素？

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

感谢您的合作！

資料 8 : 自由記述の回答リスト

質問 1 (122 項目)

- ①性格が合わない、相性が良くない (27 人)
- ②バイトや研究などで忙しくて、時間がない (23 人)
- ③共通の趣味、話題がない (15 人)
- ④専攻、コースや選択した授業が違うから、会う機会が少ない (6 人)
- ⑤住む場所が遠くて、会う機会が少ない (6 人)
- ⑥中国における出身地域の差異 (6 人)
- ⑦人柄がよくない、マナーが悪い (6 人)
- ⑧年齢の差で、みぞがある (4 人)
- ⑨友人付き合いは面倒くさい (3 人)
- ⑩言葉を練習するなどの目的で、同国人より外国人と交流したい人がいる (2 人)
- ⑪周りに中国人留学生が多すぎる (2 人)
- ⑫イベントや活動が少ない (2 人)
- ⑬経済的に余裕がない (2 人)
- ⑭共同の生活圏がない (2 人)
- ⑮その他
(友人付き合いをする機会が少ない、好奇心がない人、自分の活動の範囲が小さい、一人っ子は他人の意見を受入れない、ユーモアがない、方言でわからない、相手はうるさい、宿舎はシングル部屋である、友人付き合いをする必要がない)

質問2 (131 項目)

- ①共通の趣味、話題がある (21 人)
- ②性格が合う (18 人)
- ③同じ指導教官、同じ専攻 (学科) や研究室、一緒に授業に出る (14 人)
- ④一緒に住む、同じ寮に住む、近くに住む (12 人)
- ⑤同じ出身地や同じ出身大学、事前に知り合った (11 人)
- ⑥言葉が通じる (9 人)
- ⑦同国人なので、文化や生活習慣などが似ている (8 人)
- ⑧相手はバイト先の同僚である (5 人)
- ⑨勉強上や生活上で助け合うことができる (4 人)
- ⑩似た目標を持っている (2 人)
- ⑪よく学校へ来るので、よく会える (2 人)
- ⑫人柄がいい、信頼できる (2 人)
- ⑬一緒に留学生イベントへの参加 (2 人)
- ⑭共通の友達がいる (2 人)
- ⑮相手は優しい、話しやすい (2 人)
- ⑯その他
(料理が上手、見た目がよい、卒業後も付き合う可能性がある、スケジュールが似ている、似た経験がある、年齢が近い、日本や新しいことに好奇心を持つ)

質問3 (128 項目)

- ①言葉の壁、言葉が通じない (24 人)
- ②文化や生活習慣の差異 (23 人)
- ③共通の趣味、話題が少ない (13 人)
- ④相手の性格は内向的である、性格が合わない (13 人)
- ⑤時間がない、時間が合わない (8 人)
- ⑥中国人に対して偏見を持つ (5 人)
- ⑦物事に対する考え方や価値観が違う (5 人)
- ⑧日本人は冷たくて、親しくなれない (3 人)
- ⑨年齢の差 (3 人)
- ⑩学校で会う機会が少ない (2 人)
- ⑪周りに日本人学生が少ない、日本人より外国人のほうが多い (2 人)
- ⑫相手は堅苦しく、融通性がない (2 人)
- ⑬日本人学生は遠慮し過ぎる、心の底までさらけ出すことが難しい (3 人)
- ⑭日本人学生は友達作りに消極的である (2 人)
- ⑮遊び方が違う、一緒に遊ぶ機会がない (2 人)
- ⑯人との付き合いは面倒くさい (2 人)
- ⑰同じ研究室ではない、同級生ではない (2 人)
- ⑱その他

(相手は中国のことがよくわからない、集団意識が強い、男女差の意識が強い、変な人がある、政治のこと、生活圏が違う、経済的な余裕がない、日本人学生はあまりグループ活動に参加しない、同じ研究室にいても話し合うチャンスがない、交流不足、相手は他人の意見を聞かない)

質問 4 (113 項目)

- ①共通の趣味、話題がある (15 人)
- ②相手は中国の文化や言葉に興味がある、異文化に興味を持つ (14 人)
- ③同じ指導教官、同じ専攻や研究室、一緒に授業に出る (12 人)
- ④相手の性格が明るく、近づきやすい (8 人)
- ⑤相手は親切 (情熱、辛抱強い) で、礼儀正しい。(7 人)
- ⑥性格が合う (6 人)
- ⑦相手は留学生との交流が好きで、活動やイベントに誘ってくれる (5 人)
- ⑧一緒にパーティーやイベントに参加する (4 人)
- ⑨相手は中国人に対して友好である、偏見を持っていない (4 人)
- ⑩バイト先の同僚である (3 人)
- ⑪日本語の勉強ができる (3 人)
- ⑫付き合うチャンスが多い、一緒に過ごす時間が長い。(3 人)
- ⑬相手は留学の経験がある、中国へ行った経験がある (3 人)
- ⑭日本でスムーズに生活していきたいので、積極的に助けてくれる人 (3 人)
- ⑮自分は日本語ができるから、言葉が通じる (2 人)
- ⑯年が近い (2 人)
- ⑰よく会える (2 人)
- ⑱その他

(相手はよくご飯や遊びなどに誘ってくれる、同じ寮に住む、自分は日本文化や日本人が好き、学部の活動が多い、友達の紹介、相手は他人の意見を尊重する、お互いに理解し合う、相手は時間を守る、相手は信頼できる、相手は誠実である)

質問 5 (113 項目)

- ①言葉の壁、言葉が通じない (29 人)
- ②文化や生活習慣の差異 (24 人)
- ③共通の生活圏がなく、会う機会が少ない (8 人)
- ④共通の趣味、話題がない (7 人)
- ⑤性格が合わない (6 人)
- ⑥価値観が違う、互いに理解できない (5 人)
- ⑦相手の国のことがよくわからない (4 人)
- ⑧体臭があり、近づきにくい (3 人)
- ⑨ほかの国からの留学生に対して距離感がある (3 人)
- ⑩信仰、宗教 (3 人)
- ⑪人柄がよくない (2 人)
- ⑫専攻が違って、学校で一緒に授業を受ける機会が少ない、交流が少ない (2 人)
- ⑬自分の性格は内向的で、積極的に話しかけるのが恥ずかしい (2 人)
- ⑭中国人留学生より、相手は日本人学生と もっと友人関係を作りたい (2 人)
- ⑮時間や経済的に余裕がない (1 人)
- ⑯一緒に参加できるイベントや活動がない (1 人)
- ⑰その他
(近くに住んでいない、歴史問題、、日本語や中国語に興味がない、中国人に対する偏見を持つ、遊び方が違う、相手は内向的である、相手は頑固である、相手は他人の気持ちを考えない)

質問 6 (106 項目)

- ①相手は朗らかで、相手のグループに入り込みやすい (付き合い易い) (14 人)
- ②互いの国の文化や言葉に興味がある。異文化に興味がある。(14 人)
- ③共通の話題、興味がある (10 人)
- ④性格が合う (8 人)
- ⑤一緒にイベント、外国語教室などの活動に参加する (8 人)
- ⑥相手は日本語や中国語が話せ、あるいは自分は英語が話せる。言葉が通じる (7 人)
- ⑦同じ専攻や研究室、同じ指導教官である、同じ授業に出る (6 人)
- ⑧外国語の勉強ができる、英語の練習をしたい (4 人)
- ⑨同じく留学生として、親しみを感じる。互いに理解しやすい (4 人)
- ⑩同じ寮に住む、住む場所が近い (3 人)
- ⑪自分は他の国からの留学生と友人付き合いに興味がある (2 人)
- ⑫互いに相手の気持ちを考える人 (2 人)
- ⑬一緒にいる機会が多い (2 人)
- ⑭その他

(一緒に食事や遊びなどをする、礼儀正しい、バイト先の同僚、衛生習慣がいい、中国人留学生が好き、尊重し合う、顔が優しそうに見える、一人の友達ができたらたくさん友達を紹介してくれる、寛容、細かいことにはこだわらない、親切、誠意がある、信頼できる、誠実である)

資料 9 : 六大学調査協力者の基本事項

性 別

単位：人 比率：%

大学名	男性	比率	女性	比率
福岡女子大学	-	-	20	100
北九州市立大学	21	70	9	30
九州工業大学	23	88.5	3	11.5
福岡大学	16	42.1	22	57.9
早稲田（北九州）	9	60	6	40
九州情報大学	18	72	7	28
合計	87	56.5	67	43.5

専 攻

単位：人 比率：%

大学名	理系	比率	文系	比率	その他	比率	未記入	比率
福岡女子大学	4	20	14	70	1	5	1	5
北九州市立大学	27	90	1	3.3	1	3.3	1	3.3
九州工業大学	25	96.2	-	-	1	3.8	-	-
福岡大学	4	10.5	30	78.9	4	10.5	-	-
早稲田（北九州）	15	100	-	-	-	-	-	-
九州情報大学	8	32	15	60	1	4	1	4
合計	83	53.9	60	39	8	5.2	3	1.9

在学身分

単位：人 比率：%

大学名	学部生	比率	修士	比率	博士	比率	交換留学生	比率
福岡女子大学	17	85	-	-	-	-	3	15
北九州市立大学	2	6.7	23	76.7	5	16.7	-	-
九州工業大学	2	7.7	17	65.4	7	26.9	-	-
福岡大学	4	10.5	14	36.8	-	-	20	52.6
早稲田(北九州)	-	-	13	86.7	2	13.3	-	-
九州情報大学	25	100	-	-	-	-	-	-
合計	50	32.5	67	43.5	14	9.1	23	14.9

経済状況

単位：人 比率：%

大学名	国費	比率	自費奨あり	比率	自費奨なし	比率
福岡女子大学	1	5	5	25	14	70
北九州市立大学	2	6.7	13	43.3	15	50
九州工業大学	1	3.8	7	26.9	18	69.2
福岡大学	-	-	11	28.9	27	71.1
早稲田(北九州)	1	6.7	10	66.7	4	26.7
九州情報大学	1	4	2	8	22	88
合計	6	3.9	48	31.2	100	64.9

自費奨あり：国費、または中国政府の公費以外の奨学金を取得している人を指す。

居住形態

単位：人 比率：%

大学名	アパート	比率	留学生 会館・寮	比率	混住 寮	比率	公営 住宅	比率	その 他	比率
福岡女子大学	-	-	-	-	20	100	-	-	-	-
北九州市立大学	4	13.3	22	73.3	-	-	3	10	1	3.3
九州工業大学	15	57.7	11	42.3	-	-	-	-	-	-
福岡大学	18	47.4	17	44.7	-	-	2	5.3	1	2.6
早稲田（北九州）	2	13.3	13	86.7	-	-	-	-	-	-
九州情報大学	22	88	-	-	-	-	3	12	-	-
合計	61	39.6	63	40.9	20	13.0	8	5.2	2	1.3

寮の居住経験

単位：人 比率：%

大学名	あり	比率	なし	比率
福岡女子大学	20	100	-	-
北九州市立大学	23	76.7	7	23.3
九州工業大学	17	65.4	9	34.6
福岡大学	24	63.2	14	36.8
早稲田（北九州）	15	100	-	-
九州情報大学	13	52	12	48
合計	112	72.7	42	27.3

部活・サークルの参加経験

単位：人 比率：%

大学名	あり	比率	なし	比率
福岡女子大学	5	25	15	75
北九州市立大学	9	30	21	70
九州工業大学	8	30.8	18	69.2
福岡大学	17	44.7	21	55.3
早稲田（北九州）	6	40	9	60
九州情報大学	12	48	13	52
合計	57	37	97	63

学生会・留学生の加入

単位：人 比率：%

大学名	加入	比率	未加入	比率
福岡女子大学	1	5	19	95
北九州市立大学	20	66.7	10	33.3
九州工業大学	15	57.7	11	42.3
福岡大学	20	52.6	18	47.4
早稲田（北九州）	4	26.7	11	73.3
九州情報大学	5	20	20	80
合計	65	42.2	89	57.8

日本語能力

単位：人 比率：%

大学名	超級	比率	上級	比率	中級	比率	初級	比率	初級 以下	比率
福岡女子大学	0	0	9	45	10	50	1	5	0	0
北九州市立大学	1	3.3	6	20	4	13.3	10	33.3	9	30
九州工業大学	4	15.4	9	34.6	10	38.5	2	7.7	1	3.8
福岡大学	4	10.5	15	39.5	16	42.1	2	5.3	1	2.6
早稲田（北九州）	1	6.7	4	26.7	5	33.3	4	26.7	1	6.7
九州情報大学	2	8	5	20	16	64	2	8	0	0
合計	12	7.8	48	31.2	61	39.6	21	13.6	12	7.8

英語能力

単位：人 比率：%

大学名	超級	比率	上級	比率	中級	比率	初級	比率	初級 以下	比率
福岡女子大学	0	0	3	15	4	20	10	50	3	15
北九州市立大学	2	6.9	10	34.5	15	51.7	2	6.9	0	0
九州工業大学	1	4	8	32	12	48	3	12	1	4
福岡大学	3	7.9	9	23.7	10	26.3	13	34.2	3	7.9
早稲田（北九州）	3	20	3	20	6	40	3	20	0	0
九州情報大学	0	0	3	12.5	6	25	9	37.5	6	25
合計	9	6	36	23.8	53	35.1	40	26.5	13	8.6

資料 10：第七章阻害要因項目参照データ

「中・中」阻害要因項目：

- ①生活と勉強だけで精一杯で、友人を作るといった余裕があまりないから。
- ②互いに性格が合わないから。
- ③専攻や研究室が異なり、学校で一緒に授業を受ける機会が少ないから。
- ④居住地が遠いから。
- ⑤年齢差があり、みぞを感じるから。
- ⑥相手がマナーを守らない・性格が悪いなどと感じるから。
- ⑦相手と共通の趣味や話題がないから。
- ⑧一緒に参加できる国際交流パーティーやイベントが少ないから。
- ⑨一緒に遊ぶときに、お金がかかるなど、経済的に余裕がないから。
- ⑩人付き合いにあまり興味がなく、面倒くさいと感じるから。
- ⑪相手と接触する頻度が少ないから。
- ⑫12 出身地が異なり、距離感を感じるから。
- ⑬自分にとって外国語の勉強にならないと考えるから。
- ⑭周りの中国人留学生が日本人や欧米人留学生を好んでいると感じるから。
- ⑮周りの中国人留学生が多すぎて、彼らとの交流に疲れるから。

「中・日」阻害要因項目：

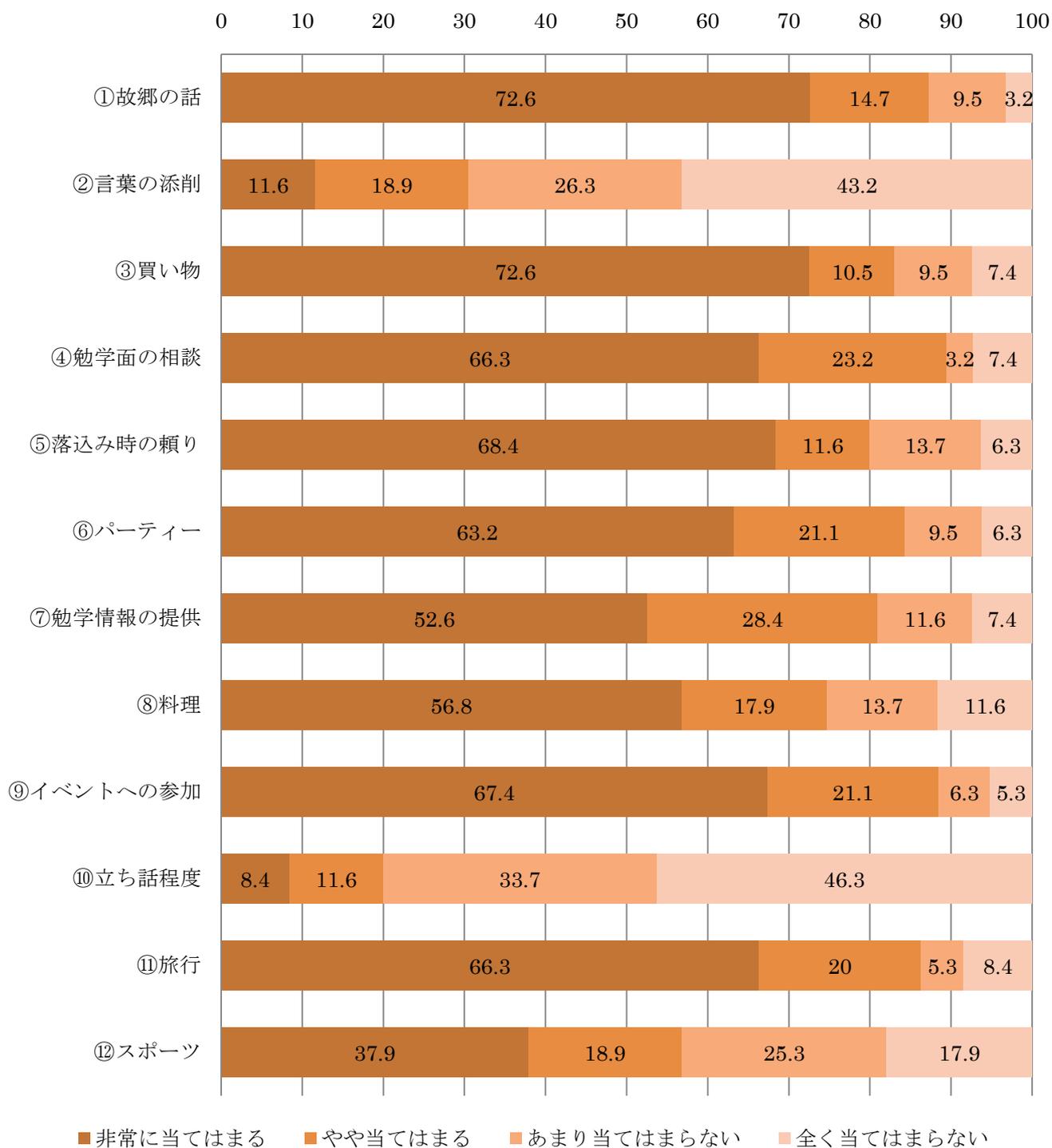
- ①生活と勉強だけで精一杯で、友人を作るといった余裕があまりないから。
- ②互いに性格が合わないから。
- ③専攻や研究室が異なり、学校で一緒に授業を受ける機会が少ないから。
- ④居住地が遠いから。
- ⑤年齢差があり、みぞを感じるから。
- ⑥相手がマナーを守らない・性格が悪いなどと感じるから。
- ⑦相手と共通の趣味や話題がないから。
- ⑧一緒に参加できる国際交流パーティーやイベントが少ないから。
- ⑨一緒に遊ぶときに、お金がかかるなど、経済的に余裕がないから。
- ⑩人付き合いにあまり興味がなく、面倒くさいと感じるから。
- ⑪相手と接触する頻度が少ないから。
- ⑫12 日本語がうまくできなくて、自分の意思をうまく伝えることができないから。
- ⑬自分は日本の文化や習慣について十分に知らないから。
- ⑭日本人学生は遠慮し過ぎて、なかなか本当の気持ちを出さないから。
- ⑮日本人学生が欧米の留学生を好んでいると感じるから。
- ⑯日本人学生から留学生と友人になろうという気持ちが感じられないから。
- ⑰周りに日本人学生が少なく、外国人のほうが多いから。
- ⑱日本人学生が冷たいと感じるから
- ⑲ライフスタイルに共通性がないから。
- ⑳価値観が違い、互いになかなか理解できないから。
- ㉑日本人学生の偏見を感じているから。

「中・他」阻害要因項目

- ①生活と勉強だけで精一杯で、友人を作るといった余裕があまりないから。
- ②互いに性格が合わないから。
- ③専攻や研究室が異なり、学校で一緒に授業を受ける機会が少ないから。
- ④居住地が遠いから。
- ⑤年齢差があり、みぞを感じるから。
- ⑥相手がマナーを守らない・性格が悪いなどを感じるから。
- ⑦相手と共通の趣味や話題がないから。
- ⑧一緒に参加できる国際交流パーティーやイベントが少ないから。
- ⑨一緒に遊ぶときに、お金がかかるなど、経済的に余裕がないから。
- ⑩人付き合いにあまり興味がなく、面倒くさいと感じるから。
- ⑪相手と接触する頻度が少ないから。
- ⑫他国からの留学生に対して距離感を感じるから。
- ⑬中国人留学生より、彼らが日本人学生と友人関係を作りたいと感じるから。
- ⑭ライフスタイルに共通性がないから。
- ⑮彼らは日本語や中国語をうまく話せないから。
- ⑯彼らに中国人留学生と友人になろうという気持ちが感じられないから。
- ⑰価値観が違い、互いになかなか理解できないから。
- ⑱宗教や信仰などのことで、彼らとの友人付き合いで遠慮することが多いから。
- ⑲彼らが自分の意見や気持ちを率直に言うから。
- ⑳英語で自分の意思をうまく伝えることができないから。
- ㉑彼らの文化や習慣について十分知らないから。

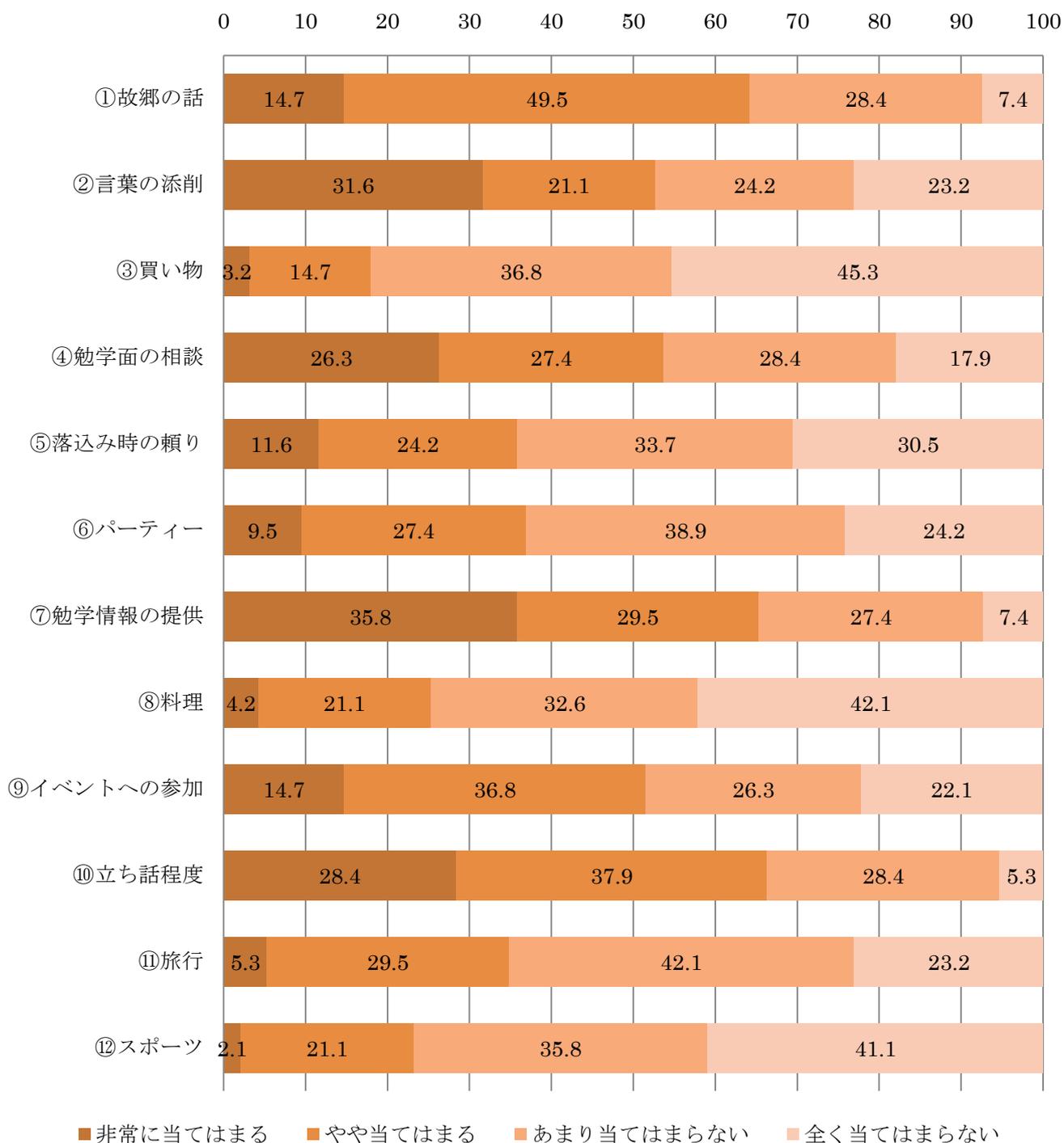
資料 11 : 項目別結果

「中・中」友人関係 (九州大学)

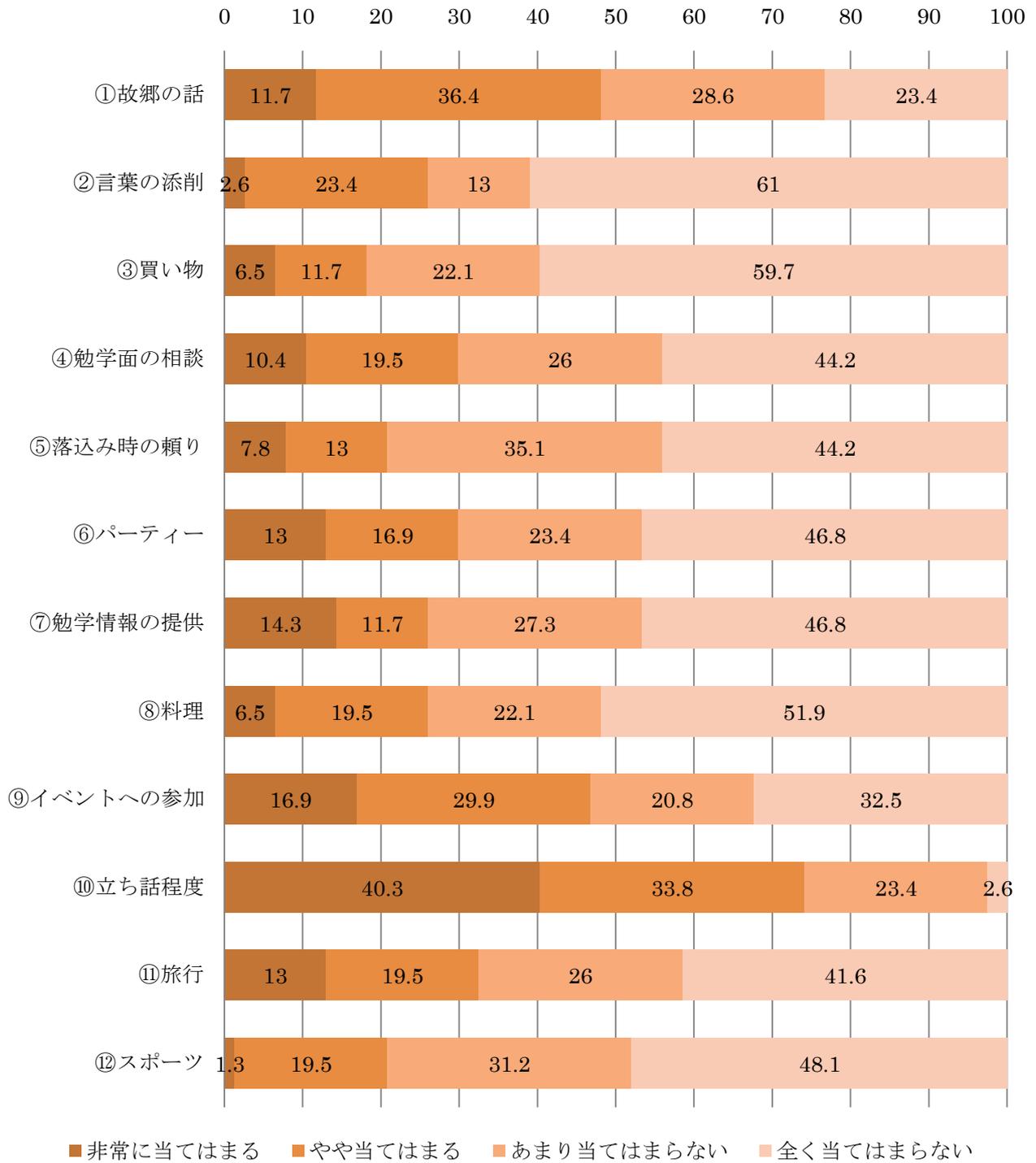


単位：% (以下同)

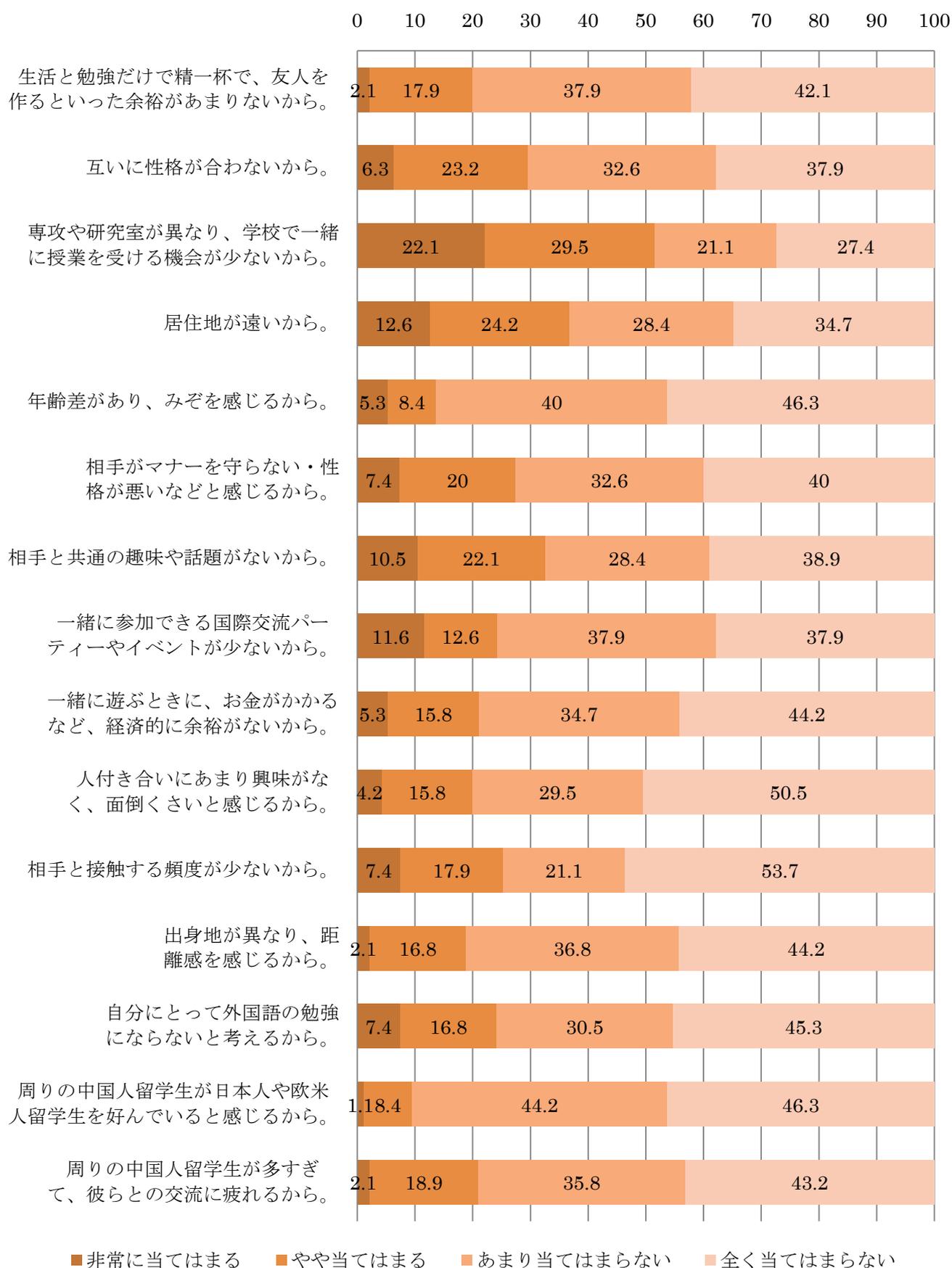
「中・日」友人関係（九州大学）



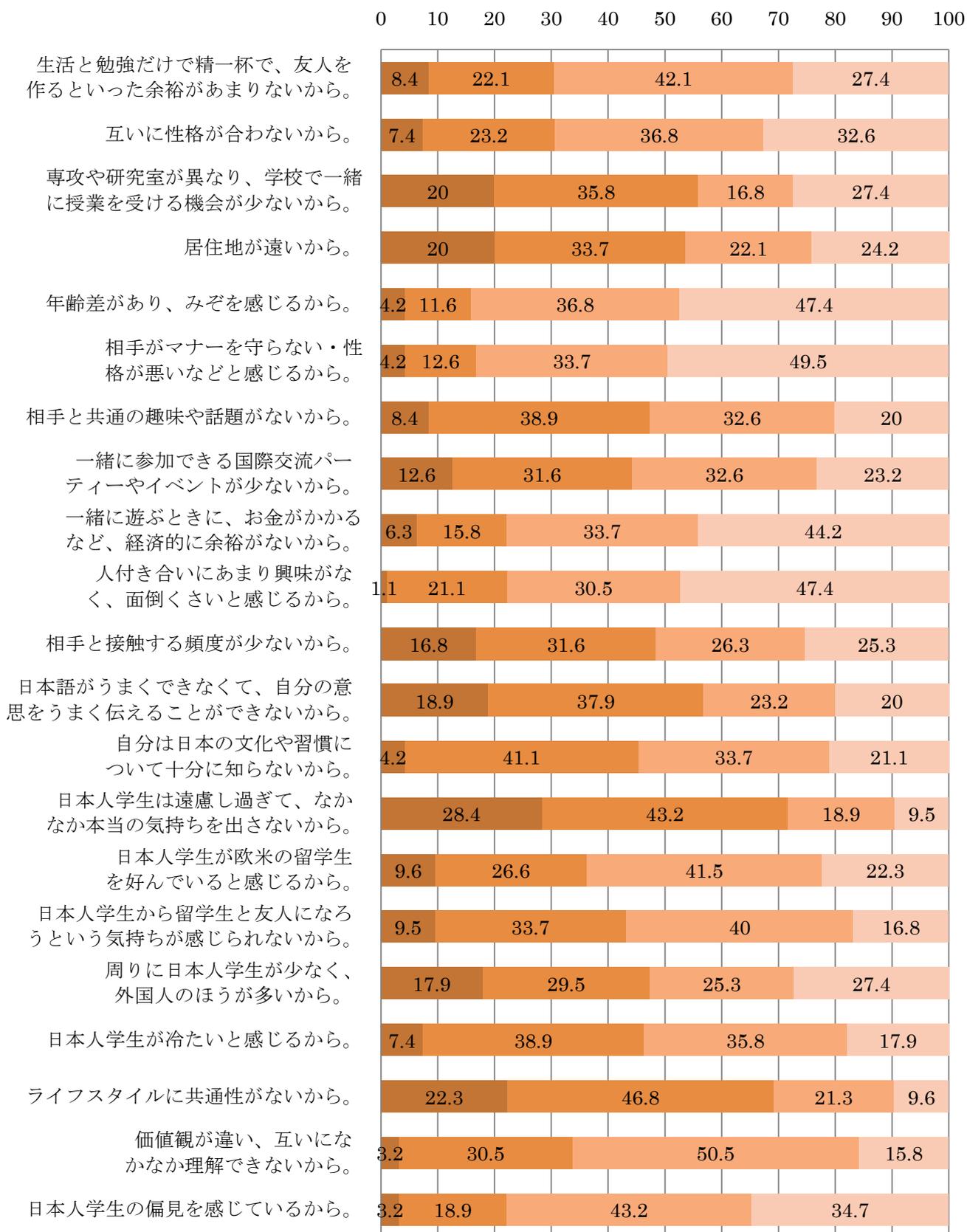
「中・他」友人関係（九州大学）



「中・中」阻害要因（九州大学）

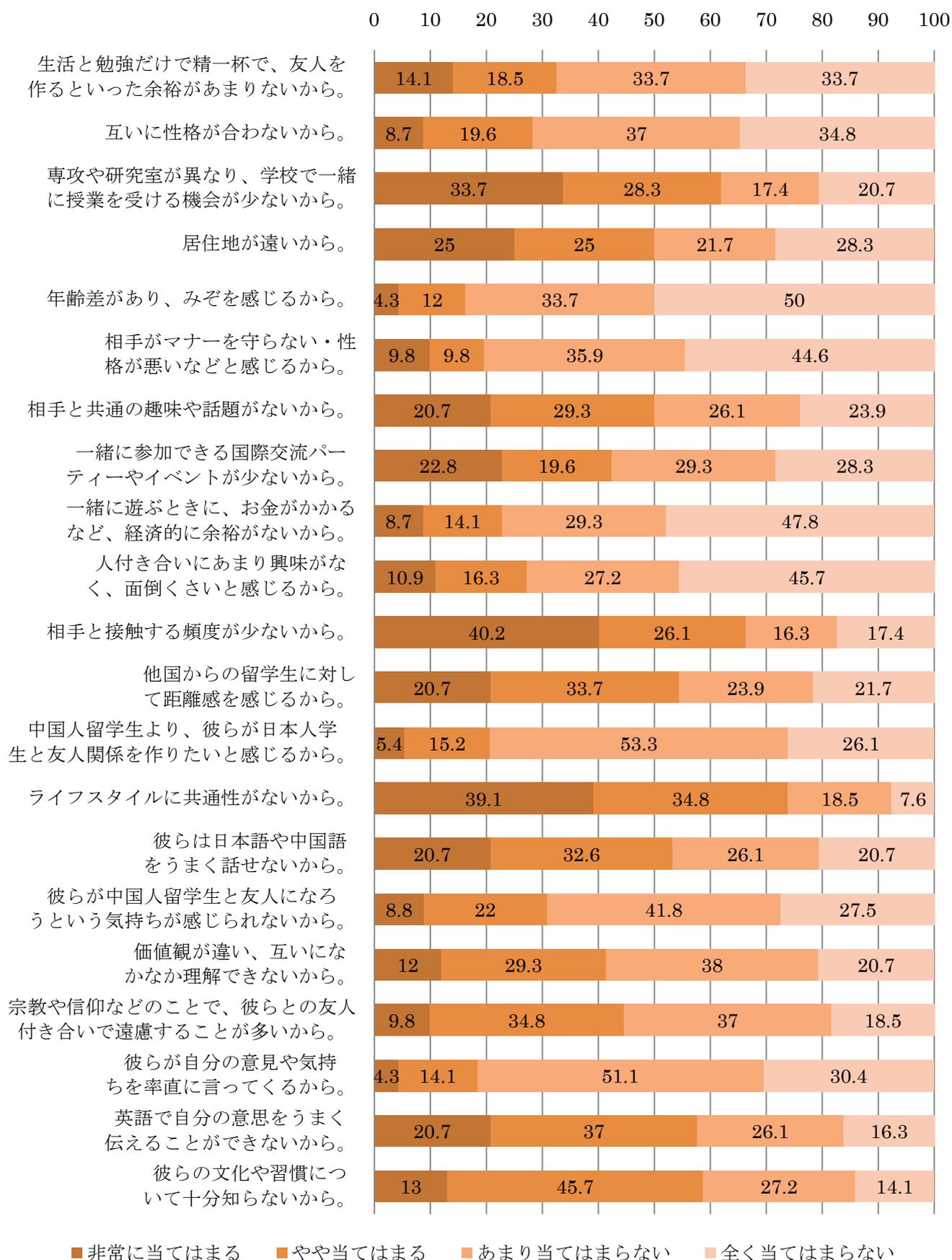


「中・日」阻害要因（九州大学）

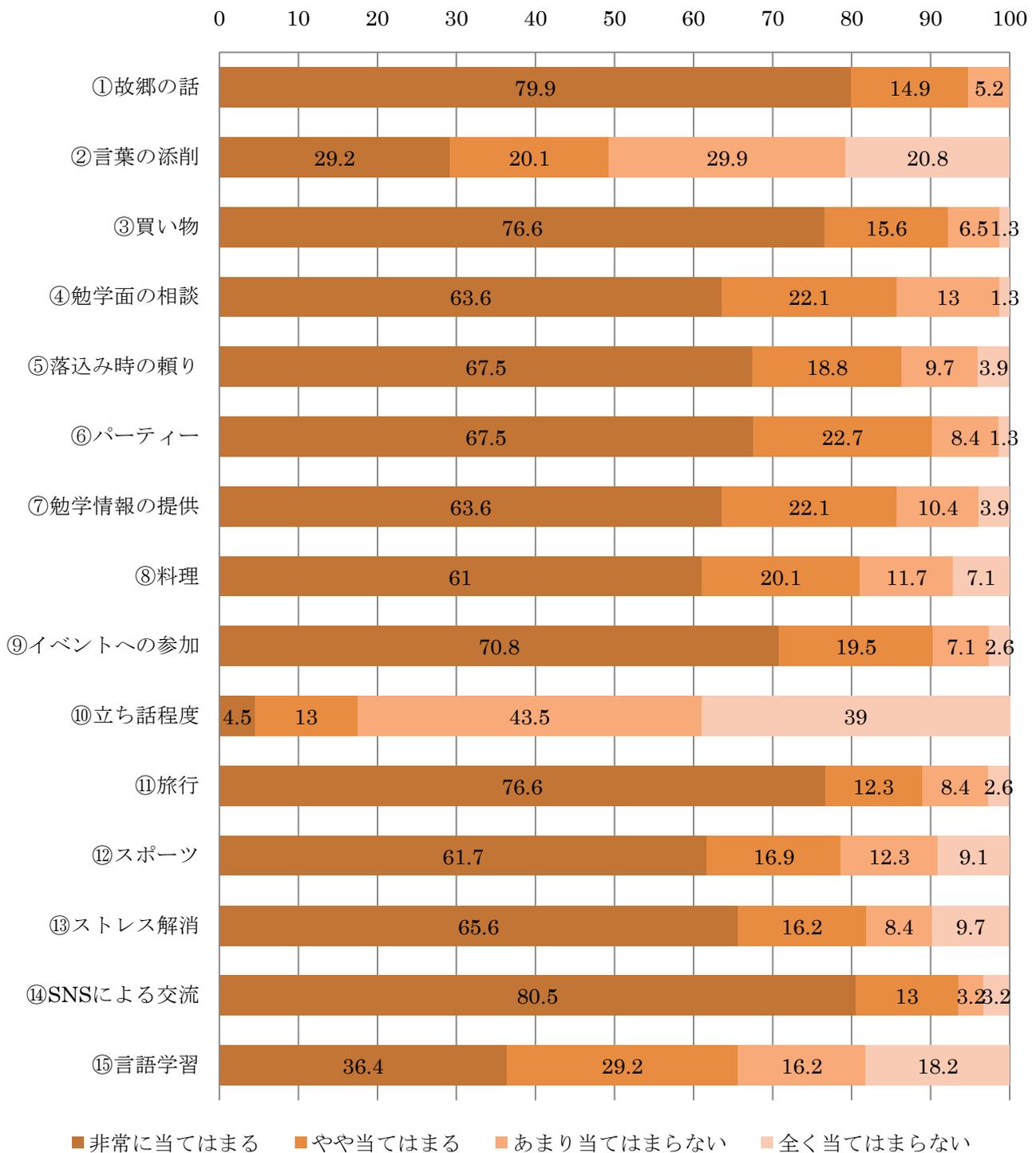


■非常に当てはまる ■やや当てはまる ■あまり当てはまらない ■全く当てはまらない

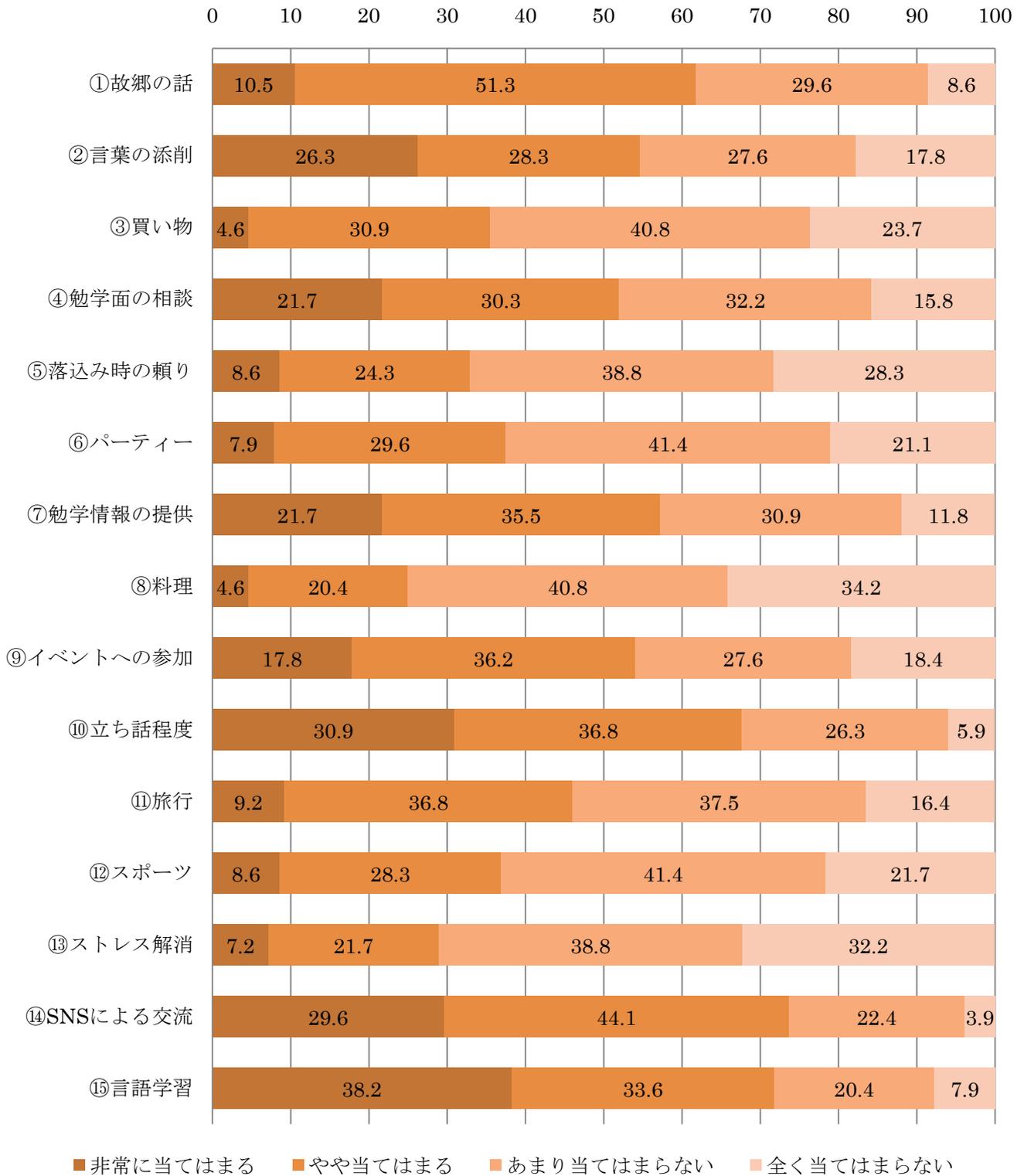
「中・他」阻害要因（九州大学）



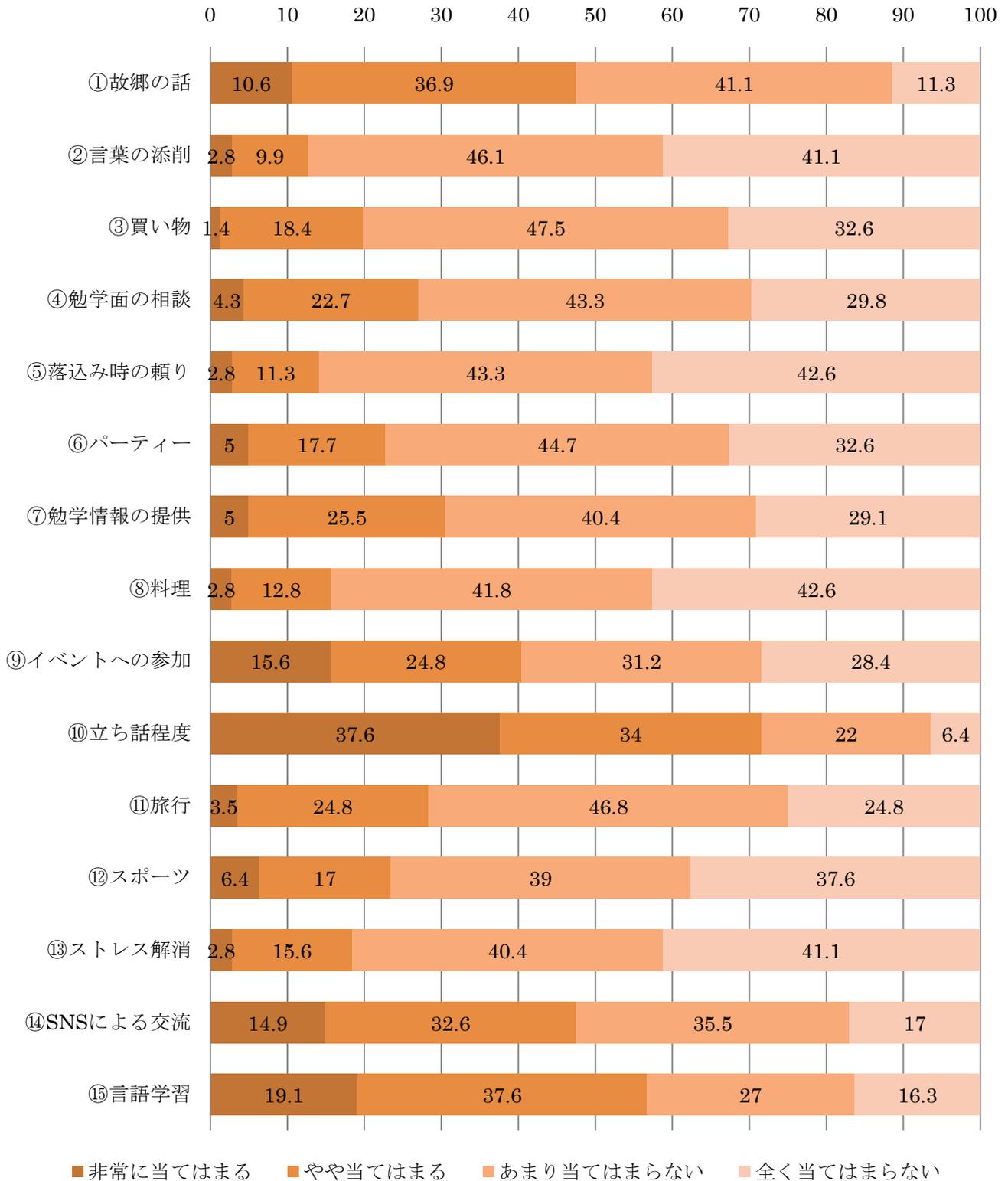
「中・中」友人関係（六大学）



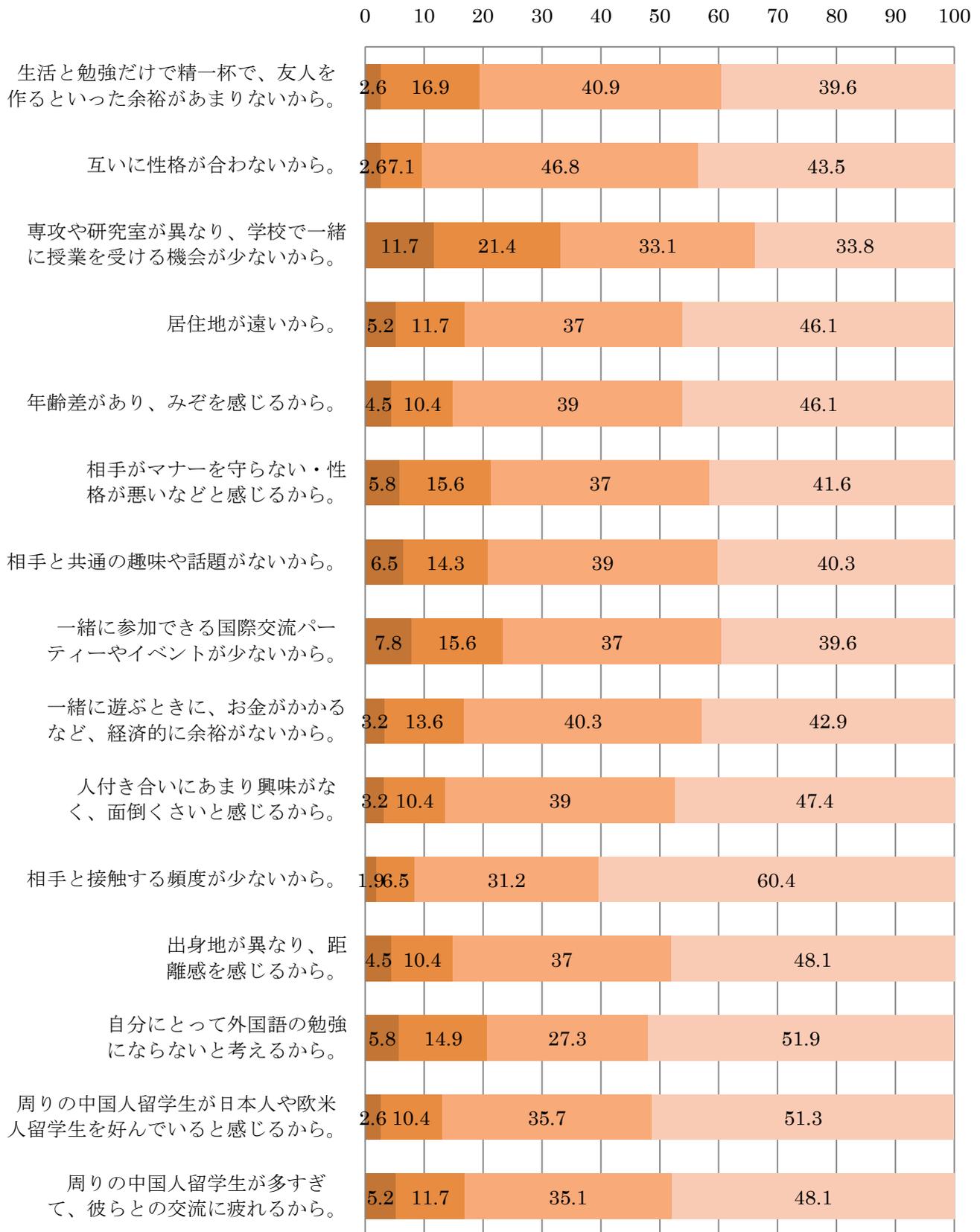
「中・日」友人関係（六大学）



「中・他」友人関係（六大学）

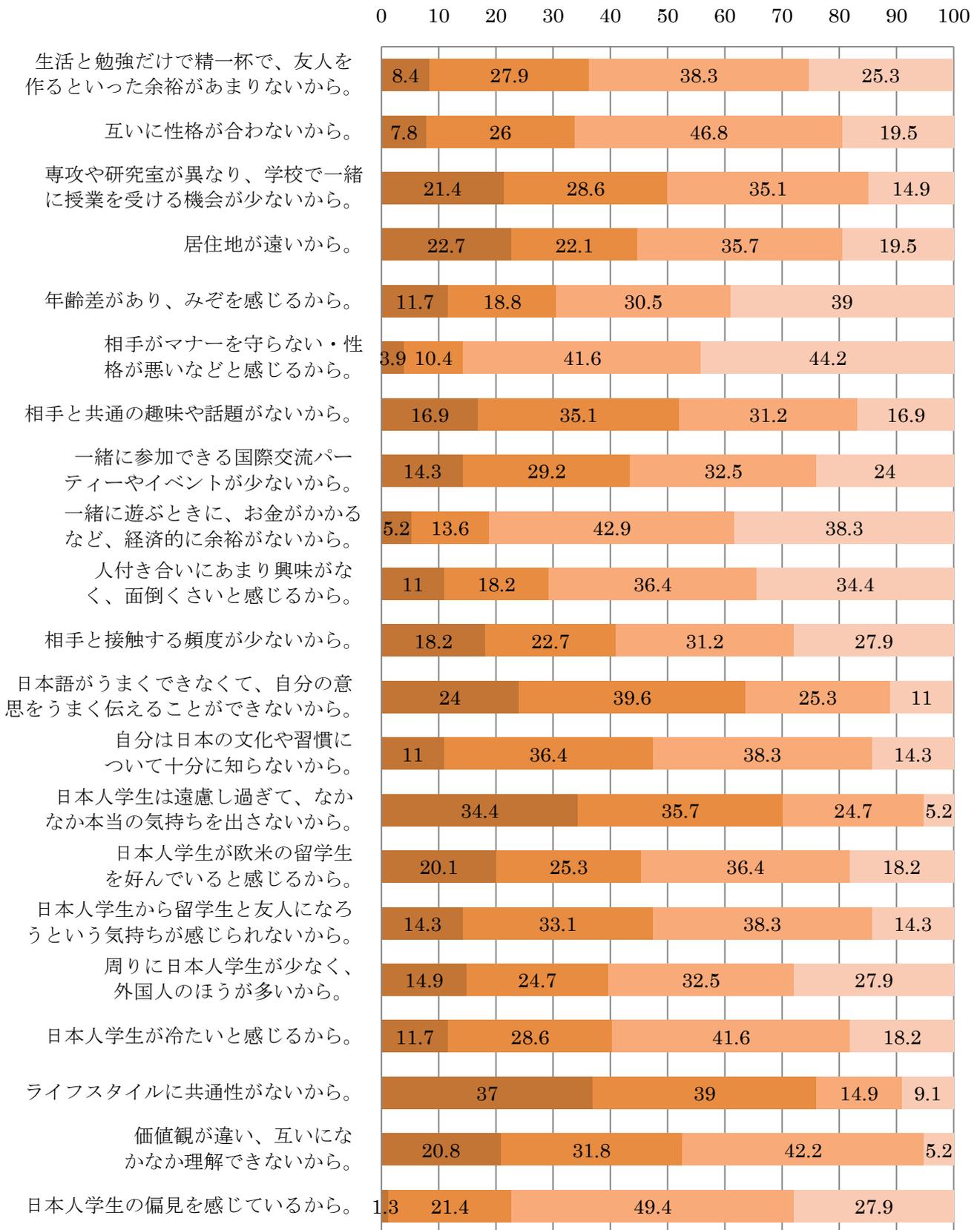


「中・中」阻害要因（六大学）



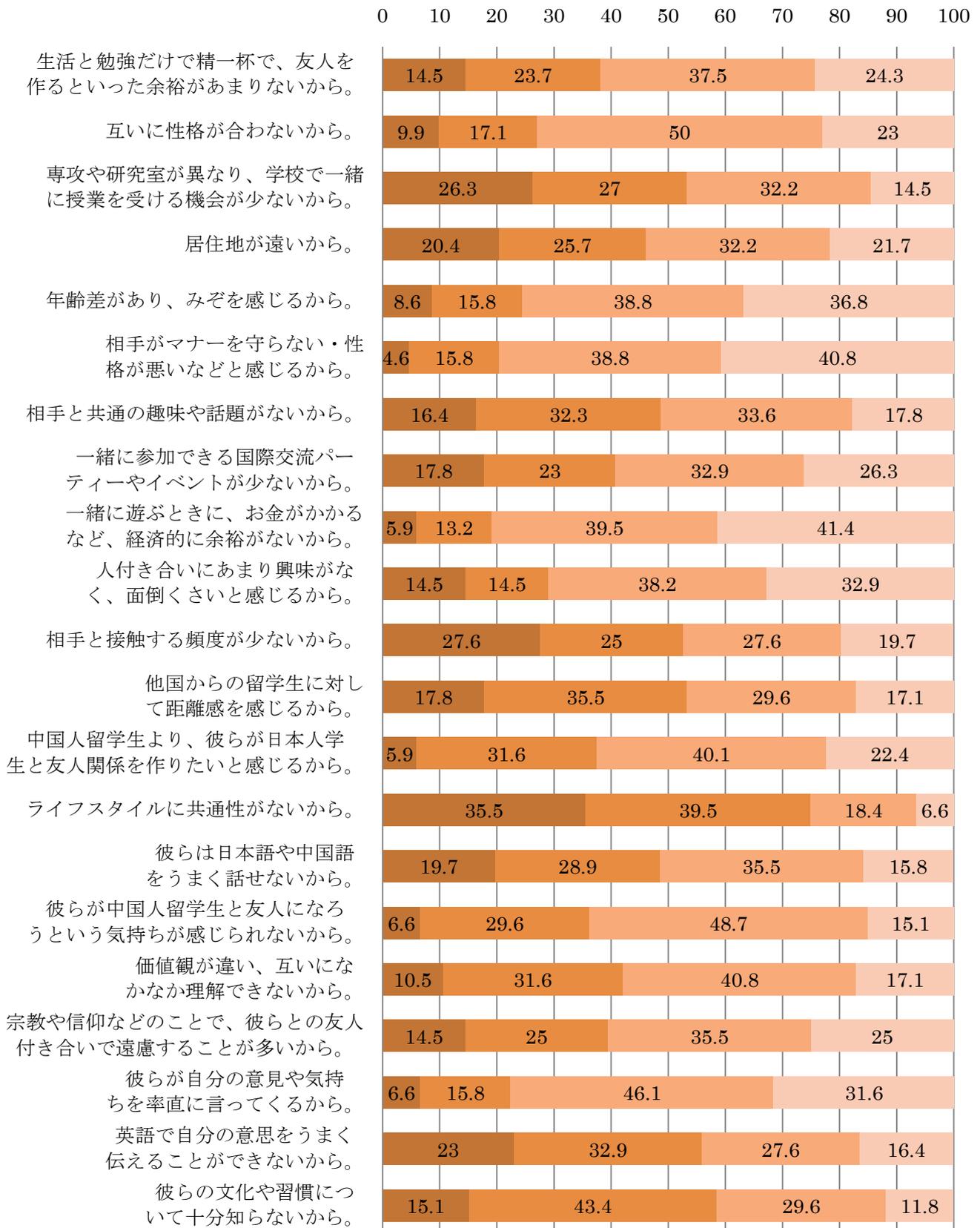
■非常に当てはまる ■やや当てはまる ■あまり当てはまらない ■全く当てはまらない

「中・日」阻害要因（六大学）



■非常に当てはまる ■やや当てはまる ■あまり当てはまらない ■全く当てはまらない

「中・他」阻害要因（六大学）



■非常に当てはまる ■やや当てはまる ■あまり当てはまらない ■全く当てはまらない

謝 辞

博士学位論文を執筆するにあたり、多くの方々のご指導とご協力をいただきました。

まず、本研究を進めていくにあたり、研究課題の設定、研究の方向性、分析方法など終始にわたりご指導いただいた指導教員の郭俊海先生に心から感謝申し上げます。また、松永典子先生、三隅一百先生、阿部康久先生、白土悟先生には副査として貴重なご助言をいただきました。松永典子先生には研究の進捗に伴い、総合演習の時間に貴重なご助言をいただき、また、論文の全体性、前後の関連性、さらに細部までご指摘をいただきました。三隅一百先生は、社会学の視点から本研究の理論的枠組み、データの分析方法などについてご助言をくださいました。阿部康久先生からは、調査方法及びデータ分析の視点について貴重なコメントをいただきました。さらに、白土悟先生には留学生教育の視点から研究面の指導だけでなく、学会発表や研究活動の展開など多岐にわたって大変お世話になりました。

また、本研究は、富士ゼロックス小林基金の研究助成金の交付により、質問紙調査を円滑に進めることができました。この場を借りて、研究助成をくださった富士ゼロックス小林基金にも感謝の意を申し上げます。

研究を通じて活発な議論にお付き合いくださった先輩、後輩、友人の皆様、また学会で懇意にくださった研究者の方々に感謝いたします。また、調査の実施にあたっては、多くの方々のご協力をいただきました。ここで、質問紙の配布と回収をしてくださった方々、調査にご協力くださった方々に心よりお礼を申し上げます。最後に、お忙しい中、論文全体のチェックをしてくださった天野裕子さんに深く感謝申し上げます。

呉 暁良